Beauty And The Beast

木野目理兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｅａｕｔｙ Ａｎｄ Ｔｈｅ Ｂｅａｓｔ

【Ｎコード】
Ｎ７５４７Ｆ

【作者名】
木野目理兵衛

【あらすじ】
その奇怪さから幼い頃より疎まれ、やがて本当に忌むべき西部の伝説となった賞金稼ぎ、ケイン・ザ・ネバーモア＝大鴉は、その日々を憂いながらも変わる事の無い闘争を続けていた。そんなある日出逢った一体の少女人形アリス。追われる身である”彼女”を匿い、始まった逃亡劇の中、ケインは次第に、忘れていた本当の己を取り戻し、やがて二人は互いに想いを募らせて……

1. ネバーモア

砲声と聞き間違う程の銃声が轟いた。
続くのは野太い男の悲鳴。
甲高い馬の嘶き。
大地を貫く衝撃。
何かが落下し、砂地を滑る音。
駆けて行く馬の上、己の後ろより届くそれらを耳と肌で感じるサイモンはしかし、振り返り、目で見ようとは決してしなかった。
既に何が起きているかは良く知っている所であるし、またそんな暇も無かったからだ。
四人居た仲間も全て消え、彼だけとなった今、サイモンがするべき事は、ただただ手綱を握り締め、荒野を走り去る事のみである。
それも全力でだ。
実際には力も出し切り、最早余す所など無い訳だが、だと言って少しでも手を抜けばそれでもうおしまいである。死神の手は長く確かで、仲間達の様に簡単に捉えられてしまうだろう。
油断は出来ない。今だってもう直ぐ傍まで来ている。
足並み揃えた獣の群れが押し寄せてくる様な、騒々しい蹄の音を背中に受けつつ、サイモンは、馬の茶毛に覆われた肌へ輪拍を転がす。異様な気配を馬も感じていたのだろう、拍車を掛けられたそれは、乗り手の予想以上の速度を持って走った。
サイモンは、振り落とされぬ様しっかりと手綱を握りながら、僅かに顔を後ろに向ける。
解っていながらもつい見てしまったその先で、右手に超大な拳銃を、左手に手綱を握った黒尽くめの騎手が、八本脚の怪馬に跨り、こちらに向けて猛然と詰め寄っていた。
恐怖によって脂汗を滲み出させると共にぶるりと震えると、サイモンは直ぐに前へ向いた。

そもそもあれが現れたのは何時だったろう。過ぎては現れる土褐色の岩山、砂丘、枯れ草の群生、仙人掌を見つつ、彼は思い返す。

そうだ。それは僅かに一時間程前の事だった。

サイモン、コリン、キム、ヤン、ラルフ。

一攫千金を求めて西部に来るも、結局夢破れて無法者（アウトロー）に落ちぶれた五人は、結構な月日の間、徒党を組んでは道行く旅人や馬車を襲っていたが、かつて抱いた望みよもう一度あれ、とばかりに、ここに来て初めて銀行へと攻め入った。

襲撃は、予想と計画以上に上手くいった。

大都会という訳では無かった事もあるだろうが、結局、普段とやる事は大差無かったのだ。必要なのは銃と拳、即ち暴力に気の利いた台詞が少々であり、それは言葉こそ違うが何時も言っている意味合いのものだった。要するに、「命が惜しけりゃ金を出せ」である。

そうして、金庫の中身を空にした彼らは、さっさとその場を後にした。ドルもセントも一切問わず、金という金をたっぷり詰め込んだ麻袋と共に、哀れな銀行員を一人、一緒に引き連れて。こういう時にもモノを言うのが腕っ節の力と、それに添えられる「追って来たらこいつを殺す」という文句だった。

かくして、まんまと街から逃げおおせた彼らは、ここまでくれば大丈夫という辺りで邪魔な荷物を一人、乾いた砂と草以外何も無い大地にほっぽり出すと、この大いなる収穫を何に使おうかと語りながら、自分達のアジトに向けて、和気藹々と戻っていた。乗り手が陽気ならば、馬の足取りも軽く穏やかであったのだが、暫く後の疑心によってそれは滞った。

「おい、ありゃ何だ。」

最初にそれに気付いたのはコリンだった。言葉と共に向けられた指の方角、相当な距離を隔てた向こうへ、一同は馬を止めると視線を注ぎ込む。

五人の後方に、一頭の馬が走っていた。
　混種なのかは解らないが、労働用の重種並みの屈強な体格に、軽種の如くすらり長い脚を持つ馬だ。毛色は珍しい青で、その頭部には白斑が、三日月の形をくっきり浮かべている。
　だが何よりも奇異なのは脚の数だった。どう見ても、一頭分のそれでは無い。前脚を上げても、その向こうには更に脚が、それを上げても尚まだ脚が見え、向こう側が見えないのだ。
　そしてその怪馬は、野生の馬では無かった。逞しく伸びる背には鞍が付けられ、そこには騎手が跨り、手綱を握って、一味の方へと歩かせている。
　騎手は頭に黒いカウボーイハット、肩には黒い外套（マント）が掛けていた。帽子の中から無造作に伸ばされた髪もインクを零した様な色合いであり、外套から突き出た両脚を覆う皮ズボンもまた、同じ様に黒で染められている。
　午後の強烈な太陽の下、奇形馬の上で影の如くあるその姿は異様且つ不気味であり、生者を求める亡霊の様だった。存在そのものが生きる者を不安がらせる存在である。特に、死んだ後で天に召されるとはとても言えぬ所業を犯して来た者達を。
　だが、この世に亡霊など居る訳が無い。
　もし仮に居たとしても、こんな真っ昼間に現れるとは到底考えられぬ訳であり、
「……俺達を追って来たのか。」
　キムの言う通り、追っ手と考えるのが妥当な所だろう。
　事実怪馬は、脇にもそれずこちらへとまっすぐにやって来ているのだから。
「どうかな。俺たちはずっと、人質抱えて走ってたんだぜ？　臆病者（チキン）どもが、そいつを無視して追って来るとは思えねぇし、実際追って来てなかったのは、ちゃんと何度も確認したろ。」
「あぁその通り。それに、馬鹿が来ない様、俺達が散々連中を痛め付けたのを忘れたか。」

そのキムの言葉を、ヤンとラルフが否定する。

確かに、彼らが居る所から街まではずっと平地であるから、付いて来ようものならたちどころに解ってしまう。また五人の中でも荒事が得意なラルフにより、果敢に立ち上がった正義漢気取り達は、怯える衆人の前で、一生義体が必要な体にされてしまっていたのだ。

まだ息が残っていたのは、時間が差し迫っていたという至極単純な理由である。

「だが、それじゃあいつは何なんだ。暑苦しい格好をした、唯の酔っ払いだって言うのか？　一体どんな節穴で見てるんだい、そりゃ。」

第一発見者であるコリンは語気強く二人に反論を述べた。

何だと、と、ヤンとラルフが意きり立つのを、サイモンが引き止める。

「落ち着けよ。言いたい事はあるだろうが、妙な輩が、どうにもきな臭い感じでこっちに来てるのは事実だろうに……でだ。」

一党の代表格たる彼は、己の中で四人の意見を纏めると、一つの結論を示した。

「俺達が出てから人質が居る間、あいつは影も形も無かった。それも事実なら、あいつは解放された人質が無事に街に付いてから、俺達を追って来た、賞金稼ぎに違いない。保安官（シェリフ）なんかには見えないし、俺達だって怖気がする、ラルフの仕事を見た街の奴らがここまで追って来る訳が無いからな。尤も、」

そこで一拍置いた後にサイモンは、

「時間からするとちょっと考え難いぜ。とんでも無い血統書付きの名馬か、機関車にでも乗って行かないと無理な芸当だな。」

それも土壱製（ドイツ）の凄ぇ奴な、と付け加え、騎手の方を睨みつける。

こうして話している間にも、ゆっくりとだが彼我の距離は縮まっていた。凡そ百ヤード程だろうか。近い訳では決して無いが遠過ぎるとも言えない微妙な位置に、サイモンは、何とも嫌な予感をふつふつと感じている。

そして彼の懸念は現実のものとなった。騎手は右手を手綱から離し、後ろ腰に向けると、外套の中に手を入れ、一丁の拳銃を取り出し、サイモン達の方に向けたのである。
一味はぎょっとし、己の得物を構えた。
それは、射手との対比が明らかにおかしい回転式拳銃だった。あの特徴的な、マカロニを纏めた形をしている弾倉が無ければ、短散弾銃（ホグズレッグ）や騎兵銃（カービン）と見間違えてもおかしく無いサイズをしている。形状自体も、そう誤解しかねない特異なもので、異様に銃身が大きい。一般に流通している拳銃の類とは、かなり、いや全く似ていなかった。
ついでに言っておくとその色は、聊か食傷気味ではあるが、案の定の黒である。
その、まるで装甲を纏っているかの様に分厚い銃口を向けながら、ゆっくりと近付いてくる騎手を目の前にし、一同に緊張が走った。これで最早議論の余地無く、敵と決まったのである。
そんな中、不意にラルフが乾いた笑いを上げると、肩の力を抜いてこう言った。
「お前ら何びびってんだ。あんな所から拳銃を撃ったって、まともに当たりゃしねぇよ。」
その言葉は、半ば自分の為に発せられたものであったが、しかし事実その通りだった。
拳銃の弾丸が、その威力を保ったまま、まともに当たる射程などたかが知れており、精々五十ヤード程である。その距離であっても命中させるには相当な腕とそれ以上に運が必要であり、確実に相手へ鉛弾をぶち込めるのは、一段位が下がって数ヤード程だ。だが仮に、その距離から撃ったとしても、実戦では当たらない事の方が多い。相手と自分の状態に周囲の状況が伴って、親指大程度の弾丸など簡単に意図せぬ方向へと飛んでいってしまうものなのだ。
騎手は今、百ヤードを切った所に居るが、ここは荒野の風吹く屋外であり、また彼が居るのは揺れ動く馬上である。まず当たる訳が

無い。
「あ、あぁ、ラルフの言う通りだ。」
「あんな所からじゃ届く訳が無ぇ。」
仲間の言動に励まされ、彼らは笑い合った。
あんなものは唯の脅しに過ぎないのだから、今はまだ、恐れる必要など微塵も無いのだ、と。
ラルフ以外の四人は互いを見合い、安堵した。
次の瞬間、彼らの視界の隅に閃光が煌いた。
少し送れて銃声が鼓膜を震わせ、そしてそれとほぼ同時にラルフの胴が反れた。床に落ちた卵の様に、血と骨と肉の欠片が一緒くたになって四散して、笑みを浮かべたままの男達の顔や体に容赦無く降り掛かった。
何が起きたのか、肌に感じるこの熱さが何なのかを彼らが理解したのは、胸に大きな穴をぽっかりと開けた同胞の体がぐらりと揺れて地面に落ち、真っ赤に染まった馬が慄き叫びながら何処へと走り去って行った、その数秒後の事である。
四人の視線は、一気に一点へと集中した。あの距離から撃っても所詮無駄だと語った、その人間を嘲笑うが如くに弾丸を放ち、もう二度と語れぬ命にした、黒尽くめの騎手の方へ。
彼は、男達の元からでは小さな線にしか見えない白煙を上げている拳銃を下げると、それを握ったまま手綱を取って、横合いに走り出した。
「あの野郎よくもラルフをっ。」
その光景に、仲間の死の衝撃からいち早く立ち直ったヤンが叫ぶと、無数の脚……前面からでは確認出来なかったが、側面から見るとそれは八本ある……を動かして疾駆する怪馬へ、ラルフの仇である騎手へ銃口を向け、我武者羅に引鉄を引いた。直ぐ傍でけたたましく鳴り響く銃声に、我を取り戻したコリンとキムも、騎手へ向けて獲物を向けた。
ただ一人、サイモンだけが、持ち前の性格と取って付いた役職に

よって冷静なままに叫ぶ。
「止めろ止めろ撃つんじゃないっ。外れるしかないんだ、弾の無駄遣いは止せっ。」
その言葉の通り、三人が放った弾丸は騎手に、怪馬にかする事無く、彼方へと飛んで行った。
皮肉な事だが、直撃を食らって真っ先に死んだラルフの言った通り、この距離で小さな鉄の塊を当てる事は至難の業だった。ましてやその標的が動いているなら尚更の事である。
自身の言葉を受けて指を止めたヤン達に、サイモンは次なる指示を出した。
「一先ず逃げるぞ……いや逃げなくてもいい。止まっているのが不味い、動くんだっ。」
彼自身不安だったのだ。何せ、先に上げた様な、至難の業を、軽々と行って見せた相手である。距離に意味が無いならば、少なくとも動いてなければ、余りに危険過ぎる。
「お、おう、解っ、」
指示を受けてそうキムが頷いたその時、彼の胸にも大穴が開かれた。
一味の周りを囲う様に走る騎手が握る拳銃が、二発目の咆哮を上げたのだ。手綱を持って馬を操りながら、弾丸を命中させるなど、正気の沙汰では無い。並みの射撃、馬術の腕では、到達不可能な、神業とすら言える芸当である。
或いは、悪魔の技か。
「ひぃっ。」
「野郎、ケンタウロスかっ。」
目の前で物言わぬ屍に変わって、ラルフ同様地に落ちて行くかつての友の姿に、コリンが顔を引きつらせて短い悲鳴を上げる。悪態を突きながら再びヤンが獲物を向けた。
それを手振りで制しつつ、サイモンもまた叫ぶ。
「だから止めろ、死にたいのかっ。」

そしてブーツの踵を馬に打ち付けると、勢い良く走らせ出す。それに気付いた二人も、キムとラルフの死体に幾分か名残惜しそうにしながらも、後を追う様に手綱を叩いた。

何は無くともまず騎手から離れなければいけない。この距離を縮められたら、残った者達は抵抗する暇も無く、先に逝った二人を追う羽目になるだろう。それにこのままここで止まっているという事は良い的になる以外の何物でもない。

コリンとヤンを先導する形で、彼らの少し前を直走るサイモンは、その頬から一筋の汗を風に流させつつ騎手は今何処かと振り向いて、背筋を恐怖が駆け抜けて行くのを感じた。

彼の後ろを走る二人の更に後方、彼らが並ぶその隙間の向こう側に、騎手とその怪馬の姿が見える。それもかなり近く。自分達の馬のそれと重なってその蹄の音に気付かなかったのだろうが、十ヤードを切るか切らないかという所に居て、赤々と輝く血走った瞳を良く見る事が出来る。さっきまでは皆の周りを、もっと距離を置いて走っていた筈なのに。

あの馬の体は速く走るのには向かないものだ。本来ならば農作業か運搬か、重い物を長時間掛けて運ぶのに適している体格であり、実際相応のスタミナがある事を今示している。だが、そうして見せている急激な接近への走りは、競争用に改良された種のそれである。

その矛盾を可能にしているのが、あの八本の脚なのだろう。引き締まった筋肉の塊一つ一つに、一体どれ程の力が詰まっているのか。それが八本もあるのだから、想像も出来ない。おまけにこの調子であれば、まだまだ体力は続くだろう。限界速度で走るサイモン達の馬がそろそろへたりだそうとしている中で、だ。

相反する馬種の長所を兼ね備えているとは、一体何という馬か、と彼は戦慄した。

そしてその恐るべき馬に乗るあの騎手は、操るそれと同じ程度に脅威の腕前を見せたあの男は、一体何者だろうか。そもそも、あれ程の威力を持つ、馬鹿みたいにでかい銃を片手で扱えている時点で、

並の人間には思えない。馬に乗って、なのだから尚更の事である。
「……大鴉（ネバーモア）だ……。」
サイモンの心の中で湧いた疑問に応える様に、何時の間にか隣を走っていたコリンの唇が、わななきながらそんな単語を発した。
「大鴉……大鴉だと？」
「嗚呼……あの馬あの銃それにあの格好……間違いねぇ大鴉だ……大鴉のケインだっ。」
そして彼はもう駄目だ、と続ける。喉が張り裂けてしまいそうな金切り声で。

ケイン・ザ・ネバーモア。
それは奇怪な逸話を持つ、凄腕の賞金稼ぎが名前だった。
曰く、地獄の悪魔の息子である彼は、老いる事も死ぬ事も無い体をした黒い怪物あり、父から与えられた、放った弾丸が必ず命中する魔法の拳銃と、魔神が産み落とした八本脚の馬を持って、戦士の魂を捕らえて回っている狩人だという。そして彼に狙われた獲物は最早二度（ネバーモア）と、そう、最早二度と逃れる事叶わず、その右手に握られた魔銃の餌食となるか、何処までも影の様に付き纏われた挙句疲れ果てて死ぬかの二つに一つしかないのだ、という。
かつて、何処かの酒場で聞いた話だが、その時サイモンは、この話を笑顔で聞き流した。
そんなものは、日々刺激を求めて止まない西部の連中が考え出した与太話に過ぎない、と。
もし仮に事実だったとしても、噂なんてものは誇張に溢れているものだ。例えばサイモンは、以前テキサスで一仕事しに出かけた時、あの名高きビリー・ザ・キッドこと、ウィリアム・ボニー（と、呼ばれる者）を見かけた事があるが、その姿は噂に名高い金髪の伊達男などでは無く、雀斑だらけの、何処にでも居る様な若いだけが取り得の男であった。
それこそ何処にでも居るたかりの酔っ払いが語った話ともあり、

彼と一緒に居た四人の仲間達はそう笑い合うと、少しの間皆を愉しませ、またずっと安酒臭い息を嗅がせてくれたお礼として、密造ウィスキーの瓶ごと、語り部の頭へプレゼントしてやったものである。

今はそんな風に、笑って聞き流して終わりになんて、到底出来るものでは無かった。

その噂が、何処まで与太であるかは解らない。が、少なくとも、そう言われるに足りる程の脅威としてラルフとキムの命を奪い、そして今もサイモン達を狙って追い駆けている。

流石にあの速度で撃つのは難しいのか、銃口を向けてはいるものの撃っては来ない。それとて、こちらの余力が残っている間だし、もっと近付かれればどうなる事か。

最早二度(ネバーモア)と逃れられぬ。

最早二度(ネバーモア)と。

冥府の鳥の鳴き声がそう頭の中に響き、彼は畜生、と悪態を付いた。おかげで舌をしこたま噛んでしまったが、痛みは殆ど感じない。悠長に感じている暇なんか無いのだ。

「は、何が大鴉だ糞野郎っ。」

その時そう叫んだのは、ヤンだった。

コリン同様、サイモンの直ぐ隣にまで来ていた彼は、怯え震える二人から離れる様に馬頭を傾かせると、逆方向へと走り出した。

「おいヤンっ。」

友の無謀な行為にサイモンも喉を振るわせ叱咤したが、内心は感謝もしていた。

群れから離れて狙い易くなった一匹を狙って、大鴉はその進路を変えたからだ。

反転した事で近付いた二人は、距離を置きつつも横一直線に並び、元来た道を走って行く。

遠ざかる背中と計四本の後ろ足が掻き立てる砂煙を捉えつつサイモンは、ヤンがあの恐るべき黒の怪鳥とその僕を撃ち落してくれる

古の英雄たる事を柄にも無く祈った。
だが、本当につい先まで神の存在すら信じていなかった男の祈願など何の意味も無かった。
大地に刻まれた無数の足跡とは九十度逆に掛けながらヤンは、並行して進む大鴉に向けて、コルト・シングル・アクションアーミー、通称ピースメーカーの引鉄を引いた。
しかし当たらない。
射撃という行為の中で、最も難しいのは、動いているものを当てる事だ。遠くても、小さくても、それが止まっているならば、必要なのは己の腕だけだ。だが、動くものに対しては、その動作を読み取る必要がある。それに何らかの意思、意味、法則があればまだ楽とはいえ、しかし非常に難しい事には変わり無く、相対している射手、つまり自分も動いているならば、その困難の具合は相乗的である。
全く別の方向へ飛んで行く弾を哂う様に、鴉は銃口を向けもしない。
八本脚を忙しく動かす怪馬の口から、引き攣った叫び声が上がった。
それでも尚人差し指を動かし続けた彼に、銃器に纏わるもう一つの定説が働く。
そう。数を撃てば当たる、だ。
一発の弾丸を命中させるのは確かに大変な事だ。だが複数の弾丸となれば話も別で、数を増せば増す程に確率は高まる。最初は限りなく零に近いけれど、段々に変わって行くのだ。
そうして撃ち続けた結果、ヤンの弾丸は遂に適当な軌跡を捉えた。放たれたそれが対象に向かう時間など瞬きする暇も無いものだが、しかし、確かな手応えを頭で感じ、彼はほくそえんだ。これでラルフとキムの仇は取る事が出来たのだ。
だがその愉悦と満足も一瞬の事だった。
確かにその額へと向けて飛んで行った弾丸は、黒く分厚く巨大な

鉄塊によって遮られている。
　大鴉が握る拳銃だった。
　予見か反射か、どちらかは不明であるも、結果は同じである。普通のそれが棒状であるのに対し、箱状になったその銃身によって、彼はまず不可避である一撃から己を護ったのだ。
　手首を返して弾丸を振るい落とし、向けられた銃口に、最後の弾丸を撃って完全に無防備となったヤンの笑みは凍りつき、死の恐怖が彼の全身を硬直させた。
　そしてその、棺桶を思わす色合いと形状の拳銃が徐に火を噴いた。唯の人間に過ぎないヤンは、避ける事も受ける事も出来ず、そこから放たれた大き過ぎる弾丸をもろに喰らう。
　遠方からでも十二分の威力を持つそれを、遥かに近い場所からまともに受けた結果、彼の体は馬から落ち、地面を転がっていった。
　但し、そうなったのは彼の上身だけである。下半身の方は馬に跨ったままで、切断面から腸が、毒を吐いて威嚇する蛇の様に、のたうち回りながら血を吹き上げていた。驚き慌てる馬は、出鱈目な走りで地面に真っ赤な模様を刻み付け、何処かへと去って行く。
　その一部始終を見ていたサイモンは、沸き上がる胃液を抑える為、ごくりと唾を飲み込む。
　彼に出来る事は今、一つだけだった。即ち、半狂乱となって喧しく喚き散らしているコリンよりも速く走り、大鴉から少しでも遠くに離れる事だけである。
　馬の首に手綱を打ち付け、速度を上げる彼の耳には、あの不吉な鳴き声が聞こえていた。

　そうしてサイモンはたった独りになった。
　先に書いた様に死に様を見た訳では無いが、コリンもまた三人を追って逝ったのだろう。
　或いは自分もそうするべきかもしれない。
　生きる事に対するそんな弱音が出てしまう程に、サイモンもその

馬も疲れ切っていた。一体どれだけの距離と時間を走ったかも解らぬ程に走り続けていたのだから。
それでも大鴉は離れない。
今もまだ、それは後ろを走っていた。
実際の所は距離的にも時間的にも大して走っていないのかもしれないが、その逃れられていないという事実がサイモンを苦しめ、思考と感覚を鈍らせて行く。
もう、いいから早く撃ってくれ。
眼に見える様な荒い息を吐き、大粒の汗を垂れ流す彼は、自棄と化してそう嘆いた。
実の所それが故に彼の馬の動きは定まらず、彼方此方へとふらついていた為、大鴉は死を与える指を動かすに動かせなかったのだが。
そんな事など露知らぬサイモンが起こした次の行動も、やはり自棄によるものだった。
彼は右手を手綱から離し、左腰のホルスターから己の獲物を抜くと、視線はそのままに後方へと向け、そして撃った。どうせ当たらないのだから狙う必要など無いと言わんばかりに、何度も何度も撃鉄を起こしては引鉄を引く。
それは、彼が行く軌道が期せずして狙いを妨げた様に、全く意図していない効果を生んだ。
う、という小さな呻き声と共に、何かが落ちた音が聞こえ、サイモンは慌てて振り向いた。
視界には、前に一度見た時と同じく、八本脚の怪馬があるのが、その上に大鴉は居ない。そこよりまた後方、大分離れた場所で、彼は仰向けに倒れていた。
怪物と恐れられる存在であっても、人間には変わりない。無我夢中でサイモンが放った弾丸達は、風に流されるがままに飛ぶ羽虫が如く不可解なものだった。ヤンのそれを止めるのは、如何な大鴉でも出来なかったのである。
予想だにしない光景に、サイモンは脚を止め、深い息を吐いた後、

力無くも笑みを発した。
　一時はもう駄目だと思っていたが、どうにかこうにか助かったらしい。その完全な死を確認しようとはよもや思えないが、だが敵の沈黙は、彼が死んだと、終わったと思っていいだろう。
　その事実を確かめる様に彼は己の体を触り、何処にも怪我を負っていない事を確かめると、もう一度、今度はもっと大きく笑い声を出した。
　仲間達には悪いが、自分は生き残る事が出来た。災いを運ぶ鳥の声は最早聞こえず、そして手元には偉業を達した英雄へ常に与えられる財宝と名声、今行っていた大仕事に比べれば児戯に等しい銀行襲撃で得た金と大鴉を自らの手で退治したという事実がある。
　このまま州を出よう。別の州に行き、落ち着いたら酒場でも始めよう。今日の戦いを肴にして、客の相手をする。そうだ、もうこんな事はこりごりだ。足を洗って一から出直そう。
　恐怖が心に満ち溢れ、そしてそれが消えた時、サイモンは最早悪党では無く、唯の何処にでも居る一市民と化していた。ちょっとした資産と、語り草を持っているだけの。
　そうして平穏な気持ちの中、彼はふと、本当に何気無く大鴉の方へと眼を向ける。
　地面に背中を付けたままに、その巨銃を握った右手が、太陽目指して上がっていた。
　銃口は、サイモンの方を向き、親指は撃鉄へ、人差し指は引鉄に掛かっている。
　彼がそれに気付いたと同時、大砲が鳴ったと勘違いしてしまいそうな音が大地を震わし、サイモンの右腕は吹き飛んだ。
　超口径の弾丸により右肩は丸々消し飛び、そこには大きな空円が生まれる。二の腕から先が衝撃によって高々と上がれば、落ちて来たのはサイモンが、激痛で叫び、馬から落ち、砂塗れになって暴れてから漸く、それも彼から大分離れた所に、であった。
　サイモンは、喉を振り絞って大声を上げる。ついさっきまで頭に

浮かんでいた未来への展望など一瞬で消し飛び、今は唯、この苦しみを少しでも和らげようと、鮮血を迸らせる右肩、というよりも右胸を左手で抑えてのたうっている。主の狼狽ぶりに馬が逃げ去って行くが、彼にそれを止める力も声も出なかった。

そんなサイモンに、さっと影が覆い被さる。

血の気の失せた顔で彼が首を上げると、そこには大鴉が立っていた。

奇しくも弾丸を受けたのは、彼と同じ右肩だった。左手でその部位を抑えつつ、拳銃を握ったままの右腕をだらりと下げている。相当な速度を保ったまま落馬した筈なのだが、それに関する傷は、少なくとも外套の上から判別する事は出来ない。

燦燦と照り付ける太陽を背にするそれの左手が下げられ、そこより、歯を食い縛りながら呻きつつ最後の抵抗を、大鴉を凝視するサイモンの目の前へと何かが落ちた。

ひしゃげた金属の欠片は、決して見間違う筈が無い、サイモンが撃った弾丸であった。

別の意味で顔色を青くして行く彼の前で風が吹き土煙と共に弾がカラカラと転がって行く。それが視界より消えて去ってから、サイモンは再び大鴉を見上げた。

地面に最も近いそこからは、それの顔をよく見る事が出来た。今までずっと、前髪と帽子によって遮られていたものを。

大鴉は、想像以上に若かった。まだ二十代前半の、青臭い若者であり、何処か東洋的な、彫りが薄い顔立ちで、妙に白い肌をしている。

が、瀕死の状態にあるサイモンの目に留まったのは、そんなものでは無かった。

瞳。

爬虫類か何かに似て細長く、余りにもはっきりとした黄金の光を称えている瞳。

それは大鴉が今まで示してきた馬の、銃の、姿の、行動よりも余

程雄弁に彼の者の奇怪さを語るものであった。そうして彼は、解っていながらも決して口にする事は無かったあの単語を、それを認めてしまっては真に終わってしまうだろう名を、とうとう言ってしまった。この目の前に居る男が、端的に語って如何なる存在であるか、を。
「化物……。」
そしてその言葉が、彼の最期の言葉だった。
かっと大鴉の瞳が見開かれ、右腕が高々と跳ね上がる。一度停止してから、力強く振り下ろされたその先にはあの拳銃が握られており、蛮族の鈍器と化したそれは、サイモンの青褪めた顔を、少なくとも三インチは凹ませ、五人の強盗が最後の一人を地へと沈めた。
こうして彼は、その銃の担い手の噂がおよそ真実である事を、白日の下で証明したのである。

2．決まらぬ男（ミスター・ブラック）

醒歴１８８０年　九月
阿真利火（アメリカ）　南西部　アリゾナ準州

「そんな熱烈なキスの最中に、突然吸血女（ドラキュリーナ）が苦しみ出した。男の腕の中で暴れまくり、とうとう身を離すと、ばったり倒れてそれっきり、だ。で、何が起こったのかさっぱり解らないからずっと立ちん坊だった恋人の男は、暫くしてはっ、と、ある事に気付いた。」
「その間抜けは何に一体気付いたってんだい、トミー？」
「俺知ってるぜそのオチ。そいつぁな、」
「黙ってろよジョン、俺の出番（ターン）だぜ……いいかい、その男は気付いたんだ。さっき夕飯で何食ったのか、って事をな。奴（やっこ）さんが食ったのは、真っ赤なワインに厚切りのステーキ、それからそいつに添えられていた、たっぷりたっぷりの大蒜だったのよ。」
酒場（サルーン）の一角から下卑た笑いと共に、テーブルと床を叩く音が上がる。

　ここはベイツタウンの大通りに面する酒場『負け犬達の巣窟（レザボア・ドッグス）』。金鉱の権利者として、そこいらに居るゴロツキから一気に成り上がった男、エドワード・ベイツの名を冠して名付けられたこの鉱山街は、大き過ぎず小さ過ぎず、中庸と呼ぶに相応しい規模の街であり、その成り立ちや町並みを見ても、これぞ西部、という風体をしている。

　故にそこにある酒場もまた、これぞ西部、という有様だった。

　時は夕刻ならば、テーブルは満席、開いている場所皆無の盛況具合。片隅には、元来人間性は良い方だが、その人間がしばしば持ち合わせている悪癖で持って、蜜滴る人……片方は少々違うが……の不幸を国産の冗句で合えて堪能している鉱夫の一団が居る。彼らの隣では、出所不明のウィスキーを満たしたグラス片手に、俺は大統

領になって一生裕福に暮らすだの、あの野郎ぶっ殺してやるだのと、剣呑で過激で大仰な、けれども言うだけならば無料（タダ）の世迷言を、酔った男達が口にしている。更にその横では、左手にカードの扇を握り締めた者達が、僅かな金を賭けた、けれども本人達にとっては真剣そのもののポーカーをしていた。膝の上に置かれた拳銃は、イカサマであれ何であれ、勝負を妨害するなら容赦しないという意思の表れに違いない。そうかと思えば、テーブルの上に片脚を乗せ、機械で造られているそれを大声で自慢している者も居る。荒く掘られた木の外枠を持って嵌められたその義脚は、義体大国・土壱（ドイツ）のものと比べれば嫌が応でも阿真利火製の粗悪な出来のものだと解るが、生憎か僥倖か、この街に義体職人の類は居ない為、皆物珍しがって男の脚ばかりをじろじろと眺めている。そしてカウンターの奥には、大分額の後退したマスターが、穏やかに唇を吊り上げつつグラスを拭いている。自分の店に負け犬などという名前を付ける程の過去と諧謔を持ち合わせたこの男に取っては、周囲の喧騒も緊張も、心地良い音楽の様なものらしく、その表情は涼しげだ。

　かの様に酒場の中は、合衆国の他地域の者達が見ていなくともこうに違いない、と想像するものと、殆ど遜色無い風景を示していた。粗が目立つも愉しげで騒がしい光景だ。

　そんな場を一発で沈めさせる重々しい靴音が、扉を開けて響き渡った。

　上から下まで黒一色。唯一の色は黄金に輝く、長細い双眸。

　新たに現れた客の姿に、誰もが口を閉ざし、体を止めて、眼だけを動かす。完全に自分達の世界へ入り談笑していた者達も、カードをしていた者達も含めて、全ての者が魅入られたかの様に来客へと視線を向ける。そうして彼らは小さな声で、口々に言い合い始めた。

「見ろよ、大鴉（ネバーモア）だぜ……。」

「おい嘘だろ、この街に居たのかよ。」

「知らなかったのか馬鹿な野郎だな。最近ずっと居座ってやがるのに。」

「本当か？　あの化物が？　こんな所に？　悪い冗談だぜっ。」
「黙れよてめぇら、命が欲しくないのか。」
「馬鹿はどっちだ。黙ってたってどうせ殺されるじゃねぇかよ。」
「だったら、もっとでかい声で話せよ、聞き辛くて仕方無ぇ。」
「そういうてめぇはどうなんだよ兄ちゃん。」
　一人一人は小さくも、一斉に上がればどうしようも無く耳についてしまうものだ。けれども渦中の人物は、周りの囁きに何も応えず、カウンターへとやって来て座ると、
「珈琲を。」
　ただそう端的に、マスターへと告げた。店がぶっ壊れるか位しなければ決して驚いたりしない彼でも、『大鴉』と合っては話が違うらしい。僅かに片眉を上げながらマスターは頷くと、彼の為に既に用意されていたポッドからカップへ、黒々とした湯気立つ液体を注ぎ入れた。酒場で酒以外のものを飲むなどマナー違反も甚だしいのだが、誰もそれを咎めようともせずに、ただただ熱心に様子を伺うのみである。
　緊張は、彼がカップを持って口をつけ、一息入れると同時に漸く解けた。
　途端、銘々が口を開いて体を動かし、来店以前の話題へ、行動へと戻って行く。
　ただしそこには、先程までの熱が無い。時ならぬ客の出現に、客の集中は削がれてしまっていた。皆一様に、黙々と珈琲を啜っている黒尽くめの男へと目線を送り、何をしやがるつもりかと訝しがっている。反応の無いのを良い事に、さっさと失せろと呟いて憚らない者も居た。
　ここに居る者の半分程は、叩けば埃どころか鼠が落ちて着そうな連中である。空の狩人の存在に、穏やかでなくなるのも当然というものではあろう。

だが一体誰が知ろうか。

この場の状況に最も憂いを覚えていたのは、酒場の雰囲気を台無しにした当人、大鴉の異名で世間から恐れられている賞金稼ぎ、ケイン・ウェイトリィ自身である事を。

彼の職業は、確かに、生死を問わず賞金首を捕らえる事を生業としているが、だからと言って今ここで労働に従事しようとは思っていないし、そこまで勤勉でもない。休養すら義務となして、あくまでも合理的に動きたがるのは土壱人位だろう。が、彼は阿真利火人である。

そんなケインがこの店へと来た理由の一つは単純に珈琲を飲む為だった。酒を飲めぬ彼に取ってこの魅惑的な飲み物は数少ない趣向の一つなのである。

それ以上の理由など何も無いのだが、周囲はそう見てなどくれない。半ば自分から見せている、または見せた結果とは言え、その視線は心地良いとは言い難い。

つい先程もそうだった。

銀行を襲撃し逃亡した一党を、死体にして連れ戻してきたケインに、街の者達は一言も掛けず、怯えた小動物の様な眼で遠くより見つめていた。

彼らにとっての関心事は、自分達の金が詰まった麻袋の方で無く、ロープに結わえられた五つの袋と、それを引き摺っている担い手の方であるのは明々白々である。

そしてまた、仕事の成果は嘲笑交じりの苦笑を持って迎えられた。

「行って帰って二時間と少し、か。実に鮮やかな手並みじゃないかい。雑魚に掛ける容赦も時間も無ぇ、俺が求めるのは大物だ、って事かな、大鴉。」

秩序を護るよりも私腹を肥やす方が大事、という信念が身体にありありと表れた、肥満型の保安官（シェリフ）は、頬を緩めながら、そうケインに向けて言った。この胸のバッヂが輝いている間は、何を口にしても平気だという雰囲気を隠そうともせず。

保安官が身元確認をしているのを待つ間……五人の内一人だけ、矢鱈と時間の掛かったのは、そいつの顔が凹んで形になっていなかったからだ……窓や扉の向こう、物陰から、ケインを見つめる無数の視線があったのは言うまでも無い事である。
これらは、ケインにとって別に良くある扱いだった。
ただ、良くあるからと言って、良い扱いとは限らない。
肉と脂がたっぷり詰まった頬を震わせて、保安官が言ったネバーモアという発音が、モンスターのそれと似ていて、実際その様な意味を込めていた事を思い出し、ケインは舌打ちしつつ、カップを持とうとした。と、彼の手の中で見事な破砕音を立てながら、その取っ手が砕ける。飛び上がったマスターが早口に何か捲くし立て、新しく珈琲を注ごうとするのを彼は制しながら、今度は慎重にカップごと掴み、そっと口元へ寄せる。
こんな事をしていては無理からぬ事であるし、身から出た錆には違いないのだけれど、ケインとしてはこの状況がどうにもやり切れなかった。
そもそも彼は、皆が恐れる様な化物では無い。
他の人々に比べ、体質的な異常はあるものの、それでも列記とした人間だった。
もっと言えばこの世界、この時代に置いて、彼の様な者は別に珍しくも無かったのである。

世界の交流の幅が飛躍的に進歩した十五醒紀。新たな地を訪れた人々の中に、その心身を奇妙に変異させる者達が現れた。彼らは、神話、伝説伝承の類の中で生きる存在に酷似した姿、外見上違いは無いが魔術めいた体質、器官と、それぞれ様々に既存の人間とは別の者へと変わって行った。それだけでなく、彼らの周辺者にも同様の現象を迎える者が現れると、この変異は梅毒と似た、しかしそれよりも遥かに早い速度を持って世界を駆け抜け、瞬く間にあらゆる国家、地域で変異者の姿が見られる様になった。

病気なのか何なのか原因は一切不明であり、一度変異してしまうと治す方法の無い彼らは、当初宗教的、社会的弾圧を受け、多くの者が命を失うか、街や都市から逃げて行く羽目に陥った。だが数が減っても関係無く増え続ける事、基本的には通常の人間と変わらない事、啓蒙と科学の陽光が無知と迷信の暗雲を通して人民に差し向けられた事などを理由に、数醒紀も経つ頃には、彼らも受け入れられる様になり始めていた。

　人々はこの現象が大航海時代より起きた事から、未踏の場所へと行くという事に原因があると考えるも、しかし確固たる理由を設ける事が出来なかった。そこで十九醒紀初頭、風蘭守(フランス)の学者貴族エルゼアール・ジュシーは、「『何か』は解らないがしかし、『何か(キャリアー)』原因があるに違いない」と、変異した者達を保因者と名付けると、他の人々もそう呼ぶ様になった。

　その数ある保因者の一人が、ケインである。

恐らくはこの酒場にも、それが見える形であれ見えざる形であれ、何らかの変異を経た者が少なく無い筈だ。何せ新大陸こそ、暗黒大陸と並ぶ保因者のメッカなのだから。

　その意味で、ケインのみを化物と恐れるのは大いに理不尽な事だ。体質こそ超人的だが、それは他も似たり寄ったりである。故に彼を見ている者の大半も同じ名で呼ばねばならなくなる。

もとい、理性的には受け入れられても、未だ感性的に許容しがたいのが保因者だ。大っぴらにそうだと名乗り出れば、口さがない者は負の感情を持ってその名を口にするに違いない。

　ただ彼らには、一つ決定的な違いがあった。

　それはケインが、あえて自身を恐るべき者として見せてきた事である。

　彼は飾り気の無くなったカップを握りつつ、黒い水面に映る己の姿を見る。

西洋人のそれとは違う作りをした面立ち。
深淵の中にあって尚暗く、黒い髪。
金星の如き輝きを放つ蜥蜴の眼。
もう六十年以上前になろうか。家族どころか先祖の誰とも似ていないその容姿と人間離れした体質より、ケインは耄碌している祖母以外の家族中から気味悪がれ、生後一年、外見的には三歳の頃に荒野へと投げ捨てられた。文字通りに馬車の上から、である。
そこから当ての無い放浪の旅が始まったのだが、不気味な金眼の浮浪児を受け入れてくれる場所は都会にも田舎にも無かった。浮浪児は十年余りで青年へと成ったが、しかし反応に大差は無く、とうとう流れ流れて未開拓の西部へとやって来た。その地でも決して好転する事の無い待遇に、ケインは身を守るべく銃を握り、それを武器に生きる事にした。
ここそこと逃げる様に彷徨うよりも、堂々と地に脚を付けて生きよう。
気味が悪いと恐れ戦くならば、良いだろう、その様な有様に成ってくれる。
それでもまだ文句を垂れる間抜けには、鉛玉を腹一杯食わせてやろう。
自棄と諦観、つまりは開き直りを持って彼は賞金稼ぎという無法(アウトロー)的職業に就いたのだ。

天賦の才があったのだろう、ケインの手の中で銃は驚く程に一体となり、そこから放たれる弾丸によって多くの同胞を葬っていった。今まで石を投げられ、罵られて生きて来た彼にとって、それは実に愉快且つ興奮を伴うものだった。こちらが黙っているのに神経に触る言葉を吐き続ける馬鹿は決まってお尋ね者で、そいつらを生死問わず確保すれば金が貰えるというのは実に美味しい話であり、その顛末を見ていた者が、そしてその目撃者から語られた新たな者が、

自分に恐怖し、誰も後ろ指を指そうとしなくなったというのもまた良い話である。
　バーゲンのセールの様な利点で、ケインは一層職務に邁進した。ただ待っているだけで無く、自ら相手を求めて彼方此方へ行って、悪党狩りを愉しんだ。
　そして今までにも増して獲物を狩り続ける彼に、何処かの、少しは教養のある誰かが、エドガー・アラン・ポーの詩を引用し、逃れられぬ冥府の使いとして彼を『大鴉』と名付ければ、皆も納得してそう呼ぶ様になり、本人もまたそれを受け入れた。自ら黒い外套を羽織、八本脚の愛馬に跨り、巨大な拳銃を握り締め、この名に相応しくあれと荒野のあらゆる所へと赴いた。

　そして現在。
ケインの所業は、彼が望んだ通りの成果を生んだ。
彼は今や西部の『大鴉』であり、その名を恐れぬ無法者は居ない。恐れなかったならば、そいつはもう既にこの世には存在していないのだから、当然と言えば当然の話だ。
　その代わりに、誰も彼を唯のケイン・ウェイトリィと見ようとはしないし、その名前も呼ばない。彼はケイン・ザ・ネバーモアであり、そこには絶えず『大鴉』の影が纏わりついている。ただこうやって珈琲を飲んでいる時にすら、それはケインから離れる事が無い。ここまで来て彼は漸く、自分が道を誤った事を悟っていた。
　確かに、そう在らんとしたのは自分である。そこに喜悦を見出していたのも他ならぬ自分だ。銃把を握り、狙いを定め、引鉄を絞り、銃身から放たれた弾丸が、小五月蠅い敵の脳髄を、心臓を穿つ時、えもいわれぬ快楽を自分が覚え、続けているのは否定出来ぬ事実である。
　だが違う、違うのだ。
自分が本当に望んだ事は、真に求めた事は、こんな事では無い。もっと別の何かだ。

その何かが何なのか、ケインにはもう思い出せない。言葉に出来ない。
もっと幼かった頃には確かに胸にあった、ある想い。
『大鴉』であった罪業が、『大鴉』である矜持が、爪となり牙となってそれを掻き乱す。

　或いはそうする事でかろうじてケインという存在を保っているのかもしれない。己の願望が、思想が何であるかをはっきり自覚したその時、果たしてそれが絶対に得られぬものであれば、彼は『大鴉』であるしかなくなるのだから。ただもしそうだったとしても、解らぬ以上変わらない事に変わりは無く、こうして独り、珈琲を啜って慰めとする以外の方法などないのだし、そもそも簡単に得られぬからこそ、今のケインがあるのだろうが。

　しかし全く、誰が考えたのか知らないが、大鴉とは良く言ったものだ。それを最初に考え付いた者は恐らく余り深い意味を持って付けた訳ではあるまい。ただ何となく、イメージとして合っていたからだろうが、その詩の内容とケインについて照らし合わせれば、実に皮肉な名前では無いか。最早二度と（ネバーモア）、そう恋人を亡くした事を嘆く男へと発する鳴き声は、鳴いている当の本人にこそ、相応しい言葉であるのだから。

　ケインの、東洋の修行僧か何かの様な限り無く表情の無い相貌の奥に、消す事の出来ぬ苦い感情が浮かんだ。不味い珈琲を飲んだ後の様な嫌な気持ちを払拭する様に、彼はただの椀となったカップを握って中身を一気に飲み干す。

　そうして空になったそれを、彼は床に向けて思いっきり叩き付けた。

　空元気にも似た余所余所しい熱っぽさの中で、突然鳴り響いた破砕音は先程のそれよりも遥かに大きく、場を一瞬で凍らせるには充分過ぎるものだった。

　屈強な男達が顔を引き攣らせて固まり、あえて意識から外そうとしていた、だが出来ずに居た者の方へと視線を向ける。視線だけで

無く、銃口を向けている者も居た。これ以上何かが起きれば、その者は間違いなく引鉄を引いただろうし、他の者もそれに続いたに違いない。

しかしケインは何もしなかった。

ただ小さく、だが深い溜息を吐くと、懐から珈琲代と壊したカップ代、更にそれへ色を添えただけの金を取り出し、カウンターに置いて立ち上がった。

別に解っているのだ。こんな事をしても何にもならないという事は。だがもうどうしようも無いと知っていても、いやだからこそ、そうせずには居られなかったのである。

普段はここまで酷くなど無いのだが、どうやら今の自分は、先に片付けた強盗の最後の言葉によって、かなり神経質になっているらしい。

その事実にケインは自嘲気味に薄っすらと笑うと、これ以上の厄介事は勘弁してくれとはっきり顔に書いているマスターに向けて目礼し、奥の階段へと歩き始めた。

ここに来た目的の一つは済んだが、まだもう一つ残っている。

今の精神状態で言えば、もっと重要な目的。

つまり、休息である。

何の事は無いが、だがそれは必要な事だ。如何なる怪鳥であったとしても、巣に帰り、番を求め、心身を休めなければならないのだ。それすら満足に取る為には、畏怖を持ってこちらを見つめている、野良という意味で似てはいるが決して相容れる事の出来ない犬の群れの中を通らねばならないと思うと、実にうんざりする。

背中と言わず体全体に注がれる視線を感じつつ、彼は足早に歩いて行く。

途中、恐らく保因者だろう、顔を隠したフードの下で訳知り顔の、哀れみに溢れた笑みを浮かべる男の脚を踏み砕きながら、ケインは宿として寝泊まりしている二階へと上がった。

3. ヤン・シュヴァンクマイエルの嘆き

日堕ちて尚月も星も上がらぬ豪雨の夜空が下、原初の時代を思わす泥の海と化した大地を、たった独りでその少女、アリスは歩き続けていた。

踏み込む度に真っ赤に染まった靴が地面に沈み、一目で高級且つレディメイドで無いと解る黒のドレスが肌に纏わりついて動くのを邪魔するが、それでも街の灯り目指して進んで行く。

頭に付けた少女らしい赤いリボン付きのヘアバンドが、まるで鬼火の様に揺れた。

それに似つかわしい虚ろな表情のままに、一歩一歩脚を進めながら、彼女はふと思考する。

一体何をやっているのかしら、私は。

それに合わせ、アリスはぴちゃりと水溜りへ脚を踏み込んだまま立ち止まった。

自らが起こした行為のどうしようも無さに、頭が軋み、胸が震える。

悲しくて悲しくて泣いてしまいたい気分とは、きっとこの様な状態を言うのだろう。

泣いた事も無いし、機構的に泣ける訳が無いのだが、多分そうだと推察出来る。

水気を帯びて目元に張り付いてくる前髪を掻き分けつつ、アリスは唇を噛む。

それでも再び歩み出した彼女の脳裏に、これまでの記録が反芻されて行く。

アリスが産まれ、育ったのは、ここから荒野一つ越えた位にある小さな森の中の工房だった。

そこで生まれた時の事を、彼女は良く覚えている。

ノイズ交じりのかすれた声に誘われる様に、それは瞳を開いた。
「嗚呼……お早うアリス、目が覚めた様だね。」
彼女の目の前には、一人の老人が立っていた。ろくに洗濯もされていないだろう作業服の上からエプロンを着て、豊かではあるが薄汚れた髭をこんもりと蓄えた禿頭の男だ。
「私はカーシィ・キャルビン。君を作った、云わば君の父だ。」
言いつつ、彼はすっと退くと、後ろに置かれていた大きな鏡をそれに見せる。
そこに映っていたのは、椅子に座った一人の少女だった。
赤いリボンのヘアバンドを頂点に、腰まで流れ行く黒髪。
白のワンピースを着た、白磁の肌を持つ矮小な体躯。
丸く大きく、黒金剛の様に輝いている二つの瞳。
成る程。これが自分、アリスと呼ばれた者か。
それの頭の奥で、歯車がカチコチと回り、目と耳より得られた知識を刻んだ。
何も知らなかったそれに、紛う事無き叡知が、心が、魂が、音を立てて宿って行く。
「そうだ、これが君だ。君の姿だよ、アリス。」
それ、いや彼女の心情を表情の無い顔から読み取ったのか、カーシィは頷く。
「おいで、アリス。君に世界というものを教えよう。そして、君は世界を知ってゆくんだ。」
続けて言ったその台詞に、アリスは首を縦に振った。
そうする事が肯定を示すのだと、また一つ歯車を動かして。
そして彼女は、沢山の事を知っていった。
教養を身に付けて行くのは、金属の心臓も躍る、素敵な時間だった。

まずは基本的な言葉を音として教わった。
同時に、あらゆる存在には意味があり、それを示す名前がある事を学んだ。
それから金属から木材まで幅広い材料を持って作られた、大小様々の歯車。それと同じ位いろいろな形をした螺子。光に反射しなければとても気付かない程に細い金属の糸。床一面、壁一面に所狭しと散らばり、張られた設計図。槌や錐から、一体何に使うのか良く解らないものまで含めた工具の数々。机。椅子。棚。窓。扉。
工房の中にあるものが何であるかを、アリスは知った。
そしてその外、森の中にあるもの居るものも。木々に生い茂る葉に枝、花。そこに巣を作り、鳴き声を囀らせる鳥。緑の幕を通して見える空の遥か彼方に見える太陽、雲。ぐるりと森を囲む家の壁の如き岩肌。唯一開かれた場所を通して出入りする事が出来るけれど、父から立ち入りの禁止されている岩と砂だらけの荒野。そもそもが森自体。
どちらも後から考えると小さな場所だが、この二つがアリスの現実としてある世界だった。何か作業をしている父の隣を、または一人で木の間を歩く度に新たな発見があって、アリスの知識を募らせるのに役立った。
知ったものは実際にあるものだけでは無い。
言葉を視覚的に刻んだ文字もまた、アリスは教わった。
二十六のアルファベット、それを並べる事で示される単語。空気の振動として示される言葉よりも、それらは余程彼女の在り方に近く、覚えるのは容易かった。
そして文字は、書物という世界を新たに開いた。
工房には数限りない本があった。辞典や学術書は勿論、小説や雑誌も置かれていた。更には童話、果ては魔術書と呼ばれる類のものまであった。その多くを父は、実際に読んだ訳で無く適当に買い漁ったまま積まれて行ったものだ、と言った。
工房の隅の棚で埃を被っていたそれらは、アリスにとって絶好の

教科書だった。
　中でもお気に入りは、彼女と同じ名前をした少女が主人公の物語で、アリスはその本を続編も含めて頻繁に読み漁ったものである。
　こうして昼の間は、工房と森と、そして本の中でアリスは過ごした。
　そして夜になると、今度は父カーシィの話に耳を傾けたのである。
　かつて土壱（ドイツ）という国に行って、職人としての腕を磨いたという彼は、よくそこで過ごした日々の事を娘に話した。ここ海を隔てたもう一つの大陸にあるという皇路覇（ヨーロッパ）の事。アッシェンバッハ卿という師匠の下での、辛く、だが遣り甲斐のあった修行。
　それは愉しそうで、しかし何処か寂しげであり、アリスは一度こう尋ねた事がある。
「……何故ずっと土壱に居なかったの、お父様……。」
「出来るならばずっと居たかったさ。だが、ある男が土壱の人達に、とってもとっても悪い事をしてしまったのだよ。彼と同じ職人だった私は、外国人でもあったからね、故郷に戻って来るより他無かった。それに、私はその時、病気に掛かっていたのだよ。」
「……病気……？」
「あぁ、病気だ。私はもう長くないんだよ……尤も今は君が居るから大丈夫だよアリス。」
　安楽椅子に座りながらカーシィは、何処か遠くを見る様な眼でそう応えた。
　途中で現れた剣呑な単語にアリスは訝しがったものである。
　ともあれ、この眼で見た訳でも本を通した訳でも無く、父の口から語られるそれは、また違う印象を持つものであり、彼女にとって、とても新鮮なものであった。
　そうして月日は流れる。
　アリスは父カーシィの事が好きだった。何か一つを学び、覚える度、目元を緩めて褒めてくれるのだが、その時の表情が好きだった。

頑張ったたな、と囁く声が好きだった。
　彼女の父は、かつて病気だと語った様に、確かに少しずつ痩せ細り、元気が無くなっている風に見えたけれど、それでもアリスは、彼との暮らしがこれからもずっと続くものだと考えていた。私が居るから大丈夫だとそう確かに言ったのだから。
　だが、終わりは突然にやって来た。

「さぁアリス。今日はこれを着るんだよ。」
　良く晴れた朝、カーシィはそう言ってアリスに赤い靴と共に一着のドレスを渡した。
　フリルをふんだんに使った、豪奢で黒いそれを手にして、彼女は当惑気味だった。普段来ているワンピースとは作りが違い、着方が解らなかったからだ。それでも父に手伝われながら何とか着込むと、彼女はカーシィに尋ねた。
「……お父様、何故こんな服を着なければ……？」
「ああ、今日から森の外で暮らす事になるからね。その為の晴れ着だよ。」
　彼の返事は、アリスをより悩ませるだけだった。今まで行くなと言われた森の外へ行くというのも妙な話だが、今日から、というのも非常に気になった。
「……お父様も一緒、に……？」
　そう彼女が尋ねると、カーシィは少し戸惑った様な間を置いてから口を開いた。
「いや……いや、私は行けない。私は病気だからね、この森の外へは行けない。行くのは君だけだよアリス。そして今日から君は、ベイツさんという人の所で暮らすんだ。何、大丈夫。あの人はこの辺りでも一番のお金持ちで、それにとっても優しい良い人だよ。」
　ベイツさんが誰なのか、アリスは知らなかった。そんな人の所へ、父から離れて暮らさなくてはならないのは、非常に嫌だったけれど、彼女は最早何も言わずに、その事実を受け入れた。今までも、父の

言う事は何でも聞いて着たし、森の外という世界にも興味があった。何よりも、また戻って来られると考えていたのである。

そして昼となり、ベイツ氏の所から来たという双子の中国人が迎えに現れた。
それぞれ赤と青の派手な中華服と帽子を身に纏い、揃って辮髪を垂らして黒の色眼鏡掛けた彼らは、極東の人間らしく背丈もアリスと大差無い事があって、若いのか老いているのか、さっぱり解らない。ただ何と無く、三文小説（ダイムノベル）に出て来る悪党の遣いに見えた。きっとその、年齢不詳の顔に張り付いた笑みの所為だろう。それはカーシィと何か話している間も絶えず浮かんでいた。歯車と心臓が高鳴る不吉な感じを受ける。
父以外に本当に見た、初めての人間だというにも関わらず。
だが、今更行くのは嫌ですとは、言えなかった。
「……行って来ます、お父様……。」
「あぁ行ってらっしゃい。気をつけて。」
そう父娘の挨拶をした後、森を抜けた先で止まっていた馬車へと誘われるがままに乗ろうとしたアリスは、最後に振り返って尋ねた。
「……お父様、最後に一つ質問があるんだけど……。」
「何だいアリス。何でも聞いてご覧。」
「……何故……この服は、何時も見たく白くないの……？」
それは朝からずっと気になっていた事だ。
違う服なら形が違うのは当然だが、何も色まで違う必要はあるまいに。
その問い掛けに、カーシィは眉間に皺を寄せつつこう応えた。
「それはね、喪服だからだよ。」
その名前が意味する所は知っていた。死んだ（それがどの様なものなのかは、今でもまだ解らないが）人を悲しむ人が着る服だ。詠霧趣（イギリス）の女王がそれをずっと着ていると聞いた事がある。
けれど一体誰が死んだのだろう。

そして、悲しんでいる訳でも無い自分が何故それを着ているのだろう。
「……喪服……ぁ……。」
それを尋ねるより早く半ば無理矢理に、アリスは馬車へと乗せられてしまった。
そして馬車は走り出して行く。
後ろから見ると、父は佇みつつ、こちらをじっと見つめていた。
馬車から森が見えなくなるまで、彼はずっと佇んだままだった。

結局アリスは、この服が何故喪服なのか、知る事が出来なかった。
代わりと言っては何だが、森の外の世界をその眼で現実に知る事が出来た。
荒野は、行くなと言われる理由が良く解る場所だった。何も無く何も居ない。あるのは砂と岩と仙人掌位だ。死とは恐らくこの様なものなのだろうと、歯車が動く。
初めての馬車の割には、余り良いとは言えない風景だ。早く終わってくれないか、と考えていた荒野は暫くの間続き、やがて街が見えて来た。
『BATES'S TOWN』
入り口にはそんな看板が掲げられていた。どうもここは、これから暮らすベイツさんが所有している街らしい。自分の名前が街の名前とは、どんな気分だろう。もしくは、そんな風に名付ける人は、どんな人だろう、と、揺れる馬車の窓から外を眺めつつ、アリスは考えた。
外では、色々な人々が馬車を見つめているのが見えた。男も女も、若者も老人も居る。彼らの後ろには、工房とは作りの全然違う建物が見えた。あの人は誰でどの様な仕事をしているのか、あの店は一体何を売っているのだろう、と、彼女はまるであの大好きな物語の主人公になった心持だった。これから行く先の事など忘れる程熱心に。

そうこうしている間に馬車は街を抜け、再び荒野を走ってから、漸く止まった。

暫くぶりに外へと出たアリスは、夕日の中、鉱山を背後に聳え立つ館に眼を見開く。

とてもとても、大きな館だった。工房よりも街の建物よりも大きい。もしかしたら自分の方が小さくなったのかも、とすら考えてしまう程だ。

アリスはそう立ち止まっていたが、赤と青の双子に誘われ、中へと入る。

「やぁ今日は、いや今晩は、かな？　時間的にどちらかは曖昧だが、これだけははっきりと言う事が出来るぞ、始めまして、ようこそアリス。わしが、エドワード・ベイツだ。」

その扉の向こうで、アリスは更に面食らった。

何せ、待っていたのは醜悪な老人と、奇妙な背格好の男達だったのだから。

エドワード・ベイツと名乗った男は、彼女と同じかそれより頭一つ程小さい位の大きさだった。そして本の中でも見た事が無い程に醜い。ちゃんとした礼服を着ているだけに、それがより顕著になってしまっている。ただ、人以外も入れるならば、彼の様な者は知っていた。ブラウニーとかゴブリンとか、詠霧趣生まれの妖精達である。

彼の横、壁に背を付けて並んでいる男達は、多分護衛か何かなのだろうけれど、主人に負けず劣らず変わった容姿をしている。ある者は帽子を突き抜けて水牛の角を生やし、ある者は鉄製の手を鳴らしたりしていた。双子の姿が至極真っ当に思えてくる。

だがそれよりも、ベイツ氏の目が彼女には気になって仕方が無かった。

彼がアリスを見る視線は、奇妙に歪んでいながらも酷く熱烈なものだった。ハンス・クリスチャン・アンデルセンが生み出した王様

の様に、自身の着ている服が透明であった気にさせる。それで居て、見ているのは彼女では無く、どうやらその一部であるらしい。
ふと目を動かせば、従者達も似たり寄ったりの視線をアリスへと送っている。
それが何を意味するのか、さっぱり解らないが、彼女は一つ認識していた。
あの双子を見た時の考えは間違っていなかった。
ここに居る者はろくな者で無く、即ち悪党に違いない、と。
その様な者達に囲まれ、しかも逃げ場の無い状況に、アリスは内心愕然としていた。
だが彼女は、それを臆面に出そうとはしなかった。
「さて、まずはわしの部屋に案内しよう。おいでアリス、さぁ。」
そう言ってベイツ氏がアリスの肩を掴み、全く忍ぶつもりの無い笑みを浮かべている男達の間を奥へと向けて誘って行くのだが、彼女は抵抗しなかった。
お父様はこの事を知っているのかしら、ベイツ氏が悪者だという事を？
いいえ、きっと知らない。知っていれば、こんな所に自分を遣す筈が無いのだから。
ならばここで自分が抵抗しては彼に害が及ぶ、と、そうアリスは判断したのである。
そうして彼女は、一番奥にある、ベイツ氏の自室へと案内された。
工房が丸々入ってしまう様な広さを持った部屋には、豪華といえば豪華なのであるが、調和というものを全く考慮されていない為、ちぐはぐで不恰好なものに見える。
中でもそれが一番顕著なのは、中央に置かれたベッドで、他が彼の小さな体躯に合わせせられている中で、これだけ明らかに大きく、どう見ても一人で寝る為のもので無い。
そしてそれらの合間、壁際には、申し訳程度の窓、窓、窓。
「さぁアリスよ、そこのベッドに座っているんだ、いいかな？」

扉の前で突っ立ったままでいるアリスを他所に上着を脱ぎつつ、ベイツ氏はそう言った。
何時もの癖、というよりも本能的なもので、周囲の状況を観察していた彼女は、我を取り戻すと、言われるがままにベッドの上に座った。
ここまで来たならば、もう覚悟を決めて成る様に成るしかない。
一体何をされるのか、そこの所は解らなかったが。
アリスは瞳を瞑った。
「しかし……永遠の……か。わしも……も実に業が……」
そんな彼女の耳に、ベイツ氏の独り言が届く。
恐らく自分に聞こえぬ様小さく話したつもりだが、それでも耳に届いた事に、体は反応した。
脳髄が酷く引き締まり、心臓が声高に鳴り響く。これは一体何という状態なのだろう。
「ではアリスよ。早速で悪いが、わしと共に、」
自分の内側を理解するより早く、アリスの頭の上にベイツ氏の手が乗る。
その事実を目と耳で捉えた瞬間、彼女の中の機構が鋭く唸った。

そして再び外界を認識した時。
アリスは荒野に立っていた。
記憶が見事に飛んでいる。ここまで来る間に何があったのか、覚えていない。だがこの場所に居るという事、そして右手の甲に走る輝が、自分がしでかした行為を告げていた。
そう、逃げたのね私は。お父様の為に受け入れるって、そう考えた矢先だっていうのに。
彼女は暫くの間俯いて、ただ呆然と右手を見詰めていた。
だが、何時までもずっとそうしている訳にも行かない。
振り向けば、かなりの距離を隔てて、あの館が見えた。幸い自分が逃げ出した事は気付かれていないのか、或いは問題になっていな

い様で、追っ手は見えない。
　戻って前を見れば、かなり距離を隔てた所に行き掛けに通った街が臨める。館と街のどちらが近いかと言えば前者だが、後者でも行けない距離では無い。
　もう一度後ろを見てから、意を決すると、アリスは街目指して歩き出した。

　唯一時を指し示すものである天は、刻一刻と変化を遂げて行く。日は沈み、雲は流れ、雨が降り始めている。
　ただ、考えながら進んでいる為に、その歩みは酷く遅かった。砂埃に塗れた上に、汁気を帯びた脚を進ませながら、アリスはずっと考えている。

　逃げて来た以上は戻れない。でも、何処へ行けば良いのだろう。応えは一つだけ、あの工房だ。でも、果たして彼は許してくれるだろうか。自分は言い付けを破ってしまった。大好きな父なのに。勿論そこに理由はあるのだが、実は誤解であるという可能性も無いとは言い切れない。もしかしたら、そうもしかしたら、自分が誤っていたのかも知れない。それを考えれば逃げた事に言い訳は付かなく戻るべきなのだが、彼女としては戻りたくなどないし、戻った事で父には迷惑を掛けてしまうかもしれない。なら、やはり何処へ、という問題になる。とりあえずは街を目指すとしても、そこからどうするべきなのか。

　脈々と続く思考は、彼女の脳を沸騰させ、疲労させる。関節の隙間から水滴や埃が入り込み、歯車の動きを散漫にさせるのも、原因の一つだったが。
　湯気立ち上る程に沸騰した頭で歩き続けたアリスは、漸くにしてベイツタウンに脚を踏み入れたのだが、しかし最早それ以上何かをする力は残っていなかった。

頭から倒れ込み、彼女はその体を泥溜まりに横たえる。
文字通りの知恵熱で、頭が上手く回らない。ここまで深く悩んだのは久しぶりの事でどれだけ要るのかは解らないが、じっと待っている必要があるだろう。生物としての死は持っていないけれど、休息は取らねばならないのだ。人形として。機械として。
アリスは瞳を閉じると、頭の奥で留まっている熱が冷めるのを待った。

その状態のまま、どれだけの時が経ったのかは解らない。
まだ余熱が残っているのを感じながら、静かにじっとしていたアリスは、誰かが水を跳ね上げて歩み来る足音を聞き、そっと瞳を開けた。
体が持ち上がり、視線が上がる。その誰かが、彼女を持ち上げたらしい。
重い瞼を更に押し上げれば、誰かの姿が見え始めた。夜の雨とあって、全体としては黒い影の様にしか捉える事が出来ないが、性別的にはどうやら男性の様である。まだ若いのか髭は無く、ほっそりとした顎のラインをしている。
ただそれよりもアリスは、彼の眼が気になった。
この暗闇の中でもはっきりと見て取る事の出来る、黄金色に輝く瞳。
縦に長い黒目を持ったそれを、アリスは何かに似ていると思い、ほんの少し考える。
該当するものは直ぐに考え付いた。
月だ。
彼の瞳は、こうして暗い空を背景として見ると、月にそっくりなのである。
こんな日のこんな空の下にある月、それも二つとはおかしなものだわ、とアリスは微笑む。
すっと、唇だけを吊り上げたものだが確かに彼女は笑っていた。

今日は色々大変だったけれど、これが見られたなら十分かもね。
アリスはそう思ったのだ。自分でも本当におかしな考えだが。
ただその思考が、彼女に残されていた最後の力だったらしい。
どうしようも無く圧し掛かる重圧に耐え兼ね、彼女は再び瞳を閉じ、唇を噤む。
また眼を開けた時、あの月の眼がまた見られると嬉しい、かな。
そう霞がかった思考を薄っすら浮かべつつ、アリスは静かに眠りに付いた。

4．夫婦以上恋人未満の関係

「お帰りなさい。何時もより、三分と四十秒程遅かったですね、貴方。」
酒場(サルーン)の二階が奥にある部屋で、ケインを迎え入れた銀髪の美女の耳は長く尖っていた。
「嗚呼、少し確認に手間取ってたんだ。」
　そう言いつつ彼は何の躊躇も無く中へと足を進ませる。
　狭く、家具も洋服箪笥とベッド、古ぼけたテーブル位しか無いそこはしかし良く整理整頓がなされていた。テーブルの上に置かれた花瓶は真新しい花が活けられているし、箪笥の上の置時計も恐ろしく正確な時を刻んでいる。そしてその全てが良く磨かれ、埃一つついていない。
「それは難儀でしたね。」
　扉の前に居た女性は、ケインの後ろに付いて行くと、その黒い外套(マント)と帽子を脱がせつつ、
「所で……何か呑みますか？　それともお食事でも？」
と、続けた。
　ケインは、自分の中で、先程まで感じていたわだかまりが消えて行くのを感じる。
　ベッドの縁に越しを降ろしながら、笑みすら浮かべて彼は頭を振るった。
「いいや、いいやローラ……解っているだろう？」
　壁際のフックに外套を掛けると、ローラと呼ばれた女性はただただ何も言わずに振り向き、小首を傾げて微笑んで見せた。
　彼女は、ケインが酒を呑めぬ事も知っているし、燃費が良いから殆ど食べる必要が無い事も知っている。元よりここの内装を見れば解る通り、どちらも提供出来る訳が無い。どうしてもというならば一階に行くか、そこから上まで運ばせなければならない。だという

のに、ローラは何時も彼がそこに戻って来る度にそう言う。そのどちらでも無いならば、必要なのは一つ、いや一人だけだ、と。暗にそう言わせる為に、まるで本妻（ワイフ）の様な口振りで。
「ええ……お風呂も良い、という顔していますね。入ってからの方がさっぱりして良さそうですけれど、でも、まぁ、良いですよ。そんなに、と言うのなら。」
余り似合っているとは言い難い派手なシルクの肌着一枚の彼女は、その裾を揺らしつつ近付くと、ケインの隣に座った。その手を彼の足の付け根にそっと置きながら、金眼をじっと見据える。ローラの青い瞳を見つめ返しつつ、ケインは彼女をそっとシーツの海に沈めた。
「あらあら……まだ服も脱いでもいないのに、」
余りに訛りの無さ過ぎる、上品というには味気の無い書物的な詠語でそう言おうとしたローラだったが、しかし最後まで台詞を吐く事は出来なかった
ケインの唇が、彼女の薄いながらも艶やかな唇を塞いでしまったからだ。
それに対し特に抵抗も見せず、寧ろ積極的にローラは応え、自ら舌を入れて絡ませる。
二人は抱き合うと、暫くの間そうやって互いの味を愉しんだ。

サルーンとは酒場であり宿屋であり、賭場場であり、時に決闘場であり、そして娼館だ。
風蘭（フランス）守語で応接室或いはそれを催す社交界を意味する『SALON』が誤って綴られて出来た『SALOON』という言葉が示す様に、そこは貴さとはほぼ無縁と言っていい地で生きる男達の、凡その欲望を満たす場所なのである。
ローラはその二階に住み込む娼婦であり、ケインにとってはこれまで出逢って来た多くの人々の中でも数少ない、心許せる人間の一人だった。

秘訣は彼女のその長い耳にある。
かつて国を上げて保因者（キャリアー）が迫害されていた頃、多くの者達は人里離れた山や森の奥深くへと逃げていったのだが、その地での閉ざされた生活は、彼らの血をより濃くし、新たな一つの種として定着させる結果を生み出した。
その一つとして長寿と美貌、長い耳を特徴とする種族、エルフは生まれた。
ローラは、そのエルフの女性である。
本来詠霧趣（イギリス）北部を始めとする北皇の森深くに暮らす者の一人が、とても娼婦には見えぬ器量の持ち主が、何故こんな阿真利火（アメリカ）の、それもかつては鍍岸黄（メキシコ）と呼ばれていた様な辺境の地で花を売る仕事をしているのか、その訳をケインは知らない。ローラという名も偽名であり、方言と呼ぶには一つの言語として変わりすぎてしまった『エルフ語』による本名もあるそうなのだが、彼女は決してそれを明かそうとはしない。ついでに言えばその年齢も。
ただ、過去に何かがあった事は間違いないだろう。
常に浮かべた微笑の中に、時折薄っすらと哀愁めいたものが見られるからだ。
それに、もし普通の……と言っても、エルフの普通、である訳だが……人生を経ていたならば、ケインの様な存在を迎え入れる事はあるまい。市民は元より、多額の金を支払った商売女ですら、異様な風貌と風評から彼を拒む事があるというのに、ローラはそのどちらも怖がらず、あまつさえ共に寝泊りしている。さる賞金首を追い駆け、この街にやって来てから一ヶ月経つが、以来、ケインはここで暮らしている。同じ境遇を持つ者が故の共感だろう。で無ければなかなか出来るものでは無く、彼は事実それを感じていた。同時に、決して少なくない愛情をも。
「嗚呼……また、怪我して来たのですね。」
名残惜しそうに唇を離し、ケインがシャツを脱ぐのを手伝ってい

たローラは、布地を無残に穿っている赤い穴、その下の贅肉の無い体に出来た弾痕に気がついた。
　真昼の追走劇の折に負ったあの傷である。と言っても、既に治り掛けており、本人自身、もう何も感じていない。言われるまで存在をすっかり忘れていた位だ。
「昼間少し、な。」
「貴方がしたがる時って、大抵仕事で怪我した後ですよね。」
　じっと見据えていたローラは、ケインの背中に腕を回すと、右肩に顔を寄せる。
　そして小さく舌を出すと、母猫が子猫をあやす要領でそれを舐め始めた。
　ケインの口から、嗚呼、という感嘆の吐息が毀れる。くすぐったい感触よりも、そうされているという事実が、彼の脳髄を沸騰させ、心臓を高鳴らせた。
　だが、ただ成されるがままというのは歯痒いものである。そう感じていた時、丁度眼の前にローラの耳が揺れている事に気がついたケインは、間髪入れずにそれを口に含んだ。
「んっ。」
　僅かに呻きつつ、彼女は少し動きを止める。エルフにとって、そこは最も敏感な場所だ。森という見通しの悪い環境が少なからず影響しているのだろう彼らの耳は、人間では捉えきれない音でも聞く事が出来る分、接触による感度も大変に宜しい。
　しかし慣れているのか、震えながらもローラはちろちろと舌を動かす。声を出さぬ様堪えながら、負けまいとケインも含んだ口に唾液を含ませ、吸う様に舐めた。
　本来とは違う、しかし急所を啜りながら、二人はそっと相手の残った服を脱がして行く。衣服が外れる度に、わざと肌と肌が触れる様にしながら、ケインはガンベルトを手の届く辺りへ置き、ローラはその薄布をベッドの下に脱ぎ捨てる。
　そうして生まれたばかりの姿になった彼らは、シーツに頭から包

まると、今までのものが児戯だったのではと思わせる激しさで、パートナーを存分に味わい始めた。
「本当の、ん、赤ちゃんみたい。」
露となったローラの小さな乳房を、ケインは唇を押し付け、音を立てて啜る。空いた両手で彼女の全身を愛撫する事も忘れずに、丹念に舌で舐り、軽く歯で突いて、艶かしく光る女エルフの唇から漏れる歓声を愉しむ。ローラもまたそれを受け入れる様に、彼の体へ腕を、脚を絡ませ、喉から搾り出される声も自分から積極的に上げて行く。
高め、高まり合う二人は、快感の波もそのままに、より一層行為を深めた。
ケインは身を捩ると、彼自身をローラの股の間に押し付ける。刺激を受けて目を覚ましたそれは、もう我慢ならんとばかりにいきり立っていた。潤んだ青い瞳の奥に情欲の炎を宿した視線を向けつつ、呆とした表情を浮かべながら、ローラはケインに向けてこくりと頷く。
ずっと食事を待たされていた犬が束縛から解き放たれたかの様に彼は己の腰を入れた。
ア、という声と共に、入って来たケイン自身を、彼女自身が柔らかく抱擁する。
そうなってしまえばもう止めるものは何も無かった。
二人はベッドを軋ませ、息を荒げながら、無心に男女の交わりへと耽って行く。
喘ぎと呻きが小さな部屋の中に木霊し、湿度と温度が何処までも上がった。
そうして繋がり合ったままに時が過ぎれば、やがては果てへと至る。
殆ど同時に、ケインとローラは絶頂を迎えた。彼女の中に、男の精が注がれて行く。
それが決して実らぬ子種である事をケインは既に察しており、ロ

ーラもまたそれを知っているのだが、彼女は腹部に感じる熱さにふっと笑みを浮かべた。そして、粒と化した汗を数滴垂らしている彼の頬を掴むと、こう言ってみせる。
「……良かった、ですか、貴方。」
「……嗚呼、良かったよローラ。」
それに対し応えると、ケインはローラの背中に腕を回し、胸の中に深く抱き締めた。

その台詞をしかし、「本当に？」と問い詰められたなら、暫くの間考え込んでしまうだろう。
片腕を枕としてローラに貸しつつ、自分で巻いた煙草を咥えながら、物思いに浸るのが、行為を終えた後のケインの常であった。
「ねぇ貴方……何度も言っているけれど、そろそろ私達、一緒になりません？　いい加減、こういう関係も飽きました。子供なんて要らないから、二人で何処かに家でも借りて――」
耳元で囁く彼女の声も上の空に、彼は立ち上る紫煙をぼんやりと眺め続ける。

ローラを愛していないと言えば、それは嘘だ。確かに、彼女の事は愛している。
けれども、それを心の底から言う事が出来ないのも、また確かな事であった。
その理由は多分、ローラが自分の事を受け入れ切れていないから、だと思う。
例えば、彼女は自分の事を名前で呼ばないで、『貴方』と呼ぶ。長年暮らしを共にしてきた夫婦の間ならばいざ知らず、出会った時からそう呼んでいるのだ。ケインでは無く貴方。愛人として己を抱いてくれる不特定の存在。何時去ってしまっても良い者として。
そして、実際に体を重ねなければ解らない事だが、ローラの芯は決して解れず強張ったままである。どれだけベッドを共にしようと、

一向に変わらないものだ。今こうしている間も、彼女は何処か一定の緊張を保っている様に見える。『大鴉』の傍から何時でも逃げられる様に。

或いはそう自分が感じ、考え、表に出してしまっているからこそ、ローラは頑なであり続けているのかもしれないが。自分が感じているものを、彼女自身感じている、と。

卵が先か、鶏が先かの問題だ。いや鶏では無く鴉というべきか。しかし真に問題なのは、解答が得られた所で最早どうしようもないという事実である。

きっと二人とも、少しばかり長く生き過ぎてしまったのだろう。少なくとも、もうケインには、何ら疑いを持つ事無く己が全てを持って誰かを信じ、愛す事など、到底出来ぬ芸当だった。

これがもっと早くにローラと出逢っていれば、また違っていたのかもしれない。彼は賞金稼ぎなどという阿漕な仕事には就かず、健全たる一市民として差別と偏見と真っ向から戦いながら最後には勝利し、それこそ彼女が言う様に一緒になって、末永く幸せに暮らしたかもしれない。大鴉などと恐れられる事など一度たりとて無い、ごく普通の男の一生があっただろう。

しかし所詮は語尾に『だろう』『かもしれない』と付けなければ語る事も出来ない、現実には全く持ってありえていない過程の世界の話である。

ケインは煙草を握り締めながら、渋面を作った。

ここにもまた一つの皮肉がある。ローラこそはポーが謡った死せる少女レノアの末路に他ならない。詩の中で死を嘆いていたのは恋人らしき男であるが、今こうしてそれに思いを馳せているのは、彼に残酷非道なる事実を突き付けた大鴉自身だった。

「もう……貴方、ちゃんと聞いていますか？」

顔を覗き込ませ、唇を突き出してローラが問う。

その瞳は輝いていて、消す事の出来ぬ影を浮かべている。

「聞いているよ。けれど、駄目だ。まだそれは応えられない。」
そんな彼女の銀色に流れる髪を撫で弄りつつ、申し訳の無い罪悪感をブレンドした空しさを胸に抱きながら、ケインは応えた。彼女は先の願いを、一体何処まで本気に考えているのだろうかと訝しがる自分が居る。その程度の存在であるとすれば素直に去ってしまえばいいのに、だがこうして寄り添いたがっている自分もまた居る。
何と女々しい。これの何処が地獄の悪魔の息子だと言うのだろうか。
「またそうやって……まさか他の女でも居るのでは無いでしょうね？」
そんなケインの態度をどう取ったのか、ローラが更に体を前に出して言った。
「まさか。そんな相手が、俺に居る訳無いだろ。」
「解りませんよ。通り一つ越えたダリルの娼館のね、マリーがこの間言っていましたよ。『ネバァモアって色々怖いけど、あの眼と髪の色はとってもエキゾチック』てね。」
「確か……ブロンドヘアの娘だった、かな。」
聞き覚えのある名前に、ケインの唇は苦笑いを浮かべる。ケインが娼館に訪れ一晩愉しもうとした時、娼婦代表としてけんもほろろに断ったのが彼女だった。
化物となんて寝る位なら、まだベイツの所に言った方がマシよ、と。
それが今頃になって意見を変えた理由は解らないが、何にせよ滑稽だ。尤も、保因者への変異が、性的接触を行った者程起こり易いという事実がある事を考えれば、断った時の気持ちも解らなくは無い。ローラだって、ケインが来るまでは保因者か、変異など一向に御構い無しの何処までも飢えた男達だけを相手にしていたのだから。
「詳しいですね、貴方やっぱり何かあるのではないですか。」
「おいおい、馬鹿を言うものじゃないぞローラ。」
「馬鹿って何ですか。マリーだけじゃないんですよ。たとえばです

ね、」
「嗚呼解った、解ったよ。」
たとえばどんな女達が居るのかは知らないが、もし彼女がぽんぽん名前を挙げられる様な世界であったなら、ケインはここまで悩む事も苦しむ事もあるまい。
案外に嫉妬深く、放って置けば際限無く言っていそうなローラの唇を、浅いキスで封じ込めば、彼はそっとベッドから離れ、ただ一つだけある窓へと寄った。むっと眉を吊り上げて、シーツを頭から被りそっぽを向いてしまった彼女へ苦笑を送りつつ、ケインは窓を開ける。
気がつけば日は暮れて、何時の間にか雨が降っていた。この季節、この地方では珍しい豪雨は、大地を海の如く成さしている。吹き込む風が、火照った体には丁度良かった。
思えば昔は、こんな空の下で夜を明かさねばならない事が何度もあった。今では上に屋根があり、敵に襲われる事無く眠れる場所がある。そもそも襲ってくる様な輩の上に乗っているのは土砂か墓石。そして不満はあるけれども、愛人と呼べる女性も居る。
そう考えれば、自分の現状は幸福であると言えよう。
しかし、歯痒さが決して消える訳では無い。。
ケインは深く吸った煙をゆっくりと吐き出すと、殆ど灰と化した煙草を外に捨てた。
小さく丸まった白い紙が放射状に大地へと落ちて行く。
それを金眼でじっと見つめていた彼は、ふと地面に横たわっている人影に気がついた。
暗く、影としてでしか、捕らえられないが、確かに人であり、それが蹲っている。
恐らくは乞食か、行き倒れだろう。だがここでは別に珍しい事でも者でも何でも無い。どんな事情があったかは知らないが、流れ流れて辿り付いたこの地で、そのまま何処へと逝ってしまうなど、良

くある話だ。ケイン自身、何度もそんな目になりかけた事がある。幼い頃は抗う力など無く、金銭を奪われ、衣服を剥がれ、肉を喰われたものだ。

ケインはそう考え、窓からただじっと見ていた筈、だったのだがしかし気がつけば、何時の間にか外に出て、倒れていた人を抱えていた。しっかり服まで着込んでいる始末である。

まるで時を盗まれた様な、記憶の空白を感じつつ、彼は目線を下へと向けた。

うつ伏せになって倒れているのは、長く黒い髪をした一人の少女だった。行き倒れ、という言葉とは似ても似つかぬ、見ただけで上等と解る漆黒のドレスを着ている。フリルを多用したスカートから僅かに伸びる細く青白い脚の先に履いた真っ赤な靴が、水面にインクを零した様艶やかに地面へと広がっている黒髪の上に付いた赤いリボンのヘアバンドと共に実に鮮明だ。

もう既に襲われた後かもしれないな、と不穏な事を考えながらケインは向きを変えさせた。

人形の様に綺麗、という言葉があるが、この少女は正にそれである。血の気の抜けて青褪めた頬をし、無表情に眠りについているその顔は、生きている様に見えず、それ故に体の芯骨へ震えを覚える程美しかった。こんな野暮ったい西部という場所には相応しくない。

その容貌にケインが面食らっていると、表情に変化が現れた。

少女が眼を開けたのだ。薄い瞼の下から大きく丸く、黒い瞳が現れて行く。

ケインは何も言う事が出来ず、ただその瞳をじっと見つめていた。

黄金と漆黒の二つの視線が絡み合う。

時が止まった、という感覚を、今度こそ彼は確かに受けた。

笑った。

そう、見紛う事無く、少女は笑った。

弱々しくも薄く赤らんだ唇の縁を僅かに吊り上げ、全体を三日月

泣いている様にも見え、それ自体どうしようも無く儚く美しいという印象を与えるものだったが、ケインにとってはまた別の意味が存在した。
彼を見て、こんな笑いをした人間は始めての事だった。多くの者は嘲りか憐れみ、へつらいの笑みを浮かべる。もしくは好戦的な。そうでない僅かな人々ですら、そこには怯えや恐れの影が絶えず付き纏う。ここまで透明な、穢れの無い笑顔では断じてない。
ケインは眼を見開いたまま、少女を見つめ返すと、震える唇から声を出そうとした。
名前を聞きたかった。そして今何故笑ったのか、問うて見たかった。
だがその願いは適わない。
ケインが一言口に出すより前に、彼女はまた眼を閉じると、眠りについてしまった。
もう、あの笑みも消えている。
「……。」
暫くの間、激しい雫が打ち付けるのも気にせずに、彼は名も知らぬ少女を抱き締めていた。　だが直ぐに立ち上がると、彼女を抱えたままに酒場へと向けて歩き出した。ケインの頭の中において、この少女を介抱するという以外の思考は全てかき消えていたのである。

5. 西の国の無垢なる少女（オーバー・ザ・レイン）

まどろむ意識の彼方で、アリスは声を聞いていた。
若い男と若い女が、荒々しい調子で何か言い合っている。
まだ額は熱く脳も重い為、その意味内容は解りかねたが、どうやら自分の事で話しているらしい。音が自分の方に向けて発せられており、また断片的な会話の端々に、『少女』やら『人形』という単語が聞き取れたからだ。
それにしても彼らは誰で、何故そんな風に話しているのだろう。どちらの声も聞き覚えの無いものだ。尤も、聞き覚えのある声など、数人しかいないのだけれど。
興味惹かれたアリスは、二人の姿を見たいと思った。だが、まだまだ起き上がるのに休息は不十分であり、瞼を開ける力すら戻っていない。好奇心はあるけれどもそれ以上に抗えない困憊の前に、彼女は再び音も届かない闇の中へと浸って行く。

そうして気がつくと、アリスは天井を見つめていた。
見覚えのある自分の部屋のそれでは無い。
彼女は体を起こすと、辺りを見渡す。
余り大きくなく、家具も殆ど無い部屋だった。目に付くのは自分が寝ているベッドに箪笥とテーブル、二つの扉。片方が出入り口で、片方は洗面所に通じているのだろう。それからカーテンもレースも無く、澄み切った青空を映し出しているたった一つだけの窓。開かれたそれの向こう側には雨どころか雲一つ無い。当然且つ残念ながらあの二つの月も。
部屋はそんな空模様と同じ位に、整然としている。家財一切は綺麗に磨かれ、埃も汚れも無い。使い古された卓には花瓶が置かれ、活けられた赤い花が中で風に揺れている。背が余り高くなく、棚数も少ない箪笥の上には、一目で造った職人の腕が解る見事な置時計

が休む事の無く秒針を動かしている。長針と短針が挿すのは丁度十二の数字がある所だ。そこから耳をすます事で聞こえて来る、コチコチという機構の音は、アリスの中で刻まれている律動（リズム）と同じく正確で、自然と心地良い。

　数は最低限生活出来るものであり、物自体最高の代物という訳では決してなかったが、全てが最適な状態にされている部屋。雑多な物で埋まった父の工房とは大違いだ。

　そう観察していた彼女は、ふと自分の格好が、意識を失う前と違う事に気が付いた。

　この黒いドレスでは無く、何時も身に付けている様な、袖が短く白いワンピースを着ている。丈は合っておらず聊か大きい。肩からそのまますると脱げてしまいそうだ。恐らく自分をここに運んでくれた人のものだろうと彼女は推測する。多分、夢見心地の中で聞こえていた、あの男女の片割れのものだ、と。皹が入っていた右手にも包帯が巻かれている。

　一体どんな人がしてくれたのか。

　そう考えていると、ふいに出入り口と考えていた扉が開かれた。

「あら起きた様ですね。」

　手にお盆を持って入って来たのは、肩程までの銀髪を揺らし、少し細長く青い瞳をした女性だった。多少の齟齬こそあれ、同性として育てられたアリスが一瞬見惚れてしまう程に綺麗な顔立ちをしており、肌着同然に薄いレースのワンピースが長身痩躯に良く合っている事もあって、古代ケルト辺りの女神を連想させる。今アリスが不恰好に着ている服も、本来は彼女のものに違いない。ただ一つ奇異な事は、その長く尖った耳だろう。容姿の秀逸さと合わせて、アリスは彼女がエルフである事を直ぐに察した。彼らを実際に見るのは初めてであったが、その存在については既に本で知っていたのだ。

「お早うございます、私はローラ。貴女の名前は？」

　そうじっと見つめていたアリスに、微笑みながら彼女は名乗った。容姿通りの声色だわ、と思いながら少女は質問に応える。

「……アリス……。」
「アリス……そう、アリスね。嗚呼、朝食を持って来たけれど、如何です？」
うんうんと頷きながら、ローラはお盆をテーブルの上に載せた。
その上には、パンが二個にミルクを入れたコップが置かれている。
エルフの女性からそれらに視線を動かしたアリスは、目を伏せながら申し訳成さそうに言った。
「……ええ、どうも……ぁ、と……ごめんなさい、食事は私、出来ないの……。」
「ああ、そうなのですか。まぁそうだと思いましたけれどね。」
それをローラは事も無げに流すと、彼女はベッドに近付き、その縁に座る。
必要無いと考えながらどうして持ってきたかしら、と訝しがるアリスは、ローラが服よりむき出しとなっていた自分の肩や腕、指の関節を見ている事に気が付いた。各部位を接続している小さな球体へと送られているその視線は、何処か暗い青を湛えている。
「……あの…何か……？」
「と、あは、ごめんなさいね、じっと見つめてしまって。」
訝しがってアリスが声を掛けると、ローラは明るく微笑み、その行為を詫びた。
「でも驚きましたよ、私の連れ合いが雨の中で倒れていた貴女を運んで来た時は。自動人形、ですね貴女。何年か前に雲院（ウィーン）で開かれた万国博覧会の時、土壱（ドイツ）人の誰だかがその発明を出展したという事で、ここでも話題になっていたらしいじゃないですか。でもまさかこんな所でその一つを見る事になるなんて、夢にも思っていませんでしたわ。何処から来たのですか？　お家は、この辺りに？」
「……えぇ、まぁ……はい……場所は……そうですね、近く……。」
そのまま猛然と言葉を放つローラに、アリスは俯きながらしどろもどろに頷いて行く。
自動人形或いは義体人形、義体式自動人形。

確かに、アリスはそう呼ばれる存在であり、厳密には生き物で無い。その事は自分自身知る所だったが、こうしてまざまざと言われると、何故か余り良い気はしない。
「あら、迷子、という訳ですか。それは大変ですねぇ。」
そんなアリスの様子を、ローラは気の毒そうに受け止める。頬に手を当てて頷きながら。
「……。」
その反応によって、アリスはある事実へと思い至った。どうやらこの女性は、連れ合いが運んで来たという自分を快く思っていないらしい。声の調子や台詞回し、そしてその視線が、事情は知らないし可哀相だけれど早く何処かへ言ってくれないかしら、と伝えて来る。
あの口論は、私をここに入れた事が原因だったのだわ。
そう確信したアリスは、すっとベッドから起き上がると、ローラを見ながら唇を開いた。
「……あの……私を運んでくれた人は……。」
「彼でしたらちょっと出掛けていますね。それが何か？」
「……いえ……そろそろ出て行こうかと……お世話に、なりました……。」
「あら、こんなに早く？　もっとゆっくりして行けばいいのに。」
さも残念そうにエルフの女性は言う。本心では逆の事を思っているだろうけれど。
アリスは、あの荒野でたった独り歩いていた時の感覚を思い出す。嫌われる理由が解らない分、頭脳を形作る歯車の軋みも、金属製の心臓の震えも一塩だ。
「……ありがとうございます、でも急ぎの用事があるので……。」
そうアリスは言って、頭を下げると、
「……あ、最後に一つ、良いですか……？」
「はい、何でしょう？」
「……私が着ていた服、ありますか……？」

「あぁ、あれですか？　濡れていたし汚れていたので、勝手と思いつつ、洗って外に出してありますよ。多分、もう乾いていると思いますけれど。」

ローラへと、一つのお願いを頼んだ。

「……着替えたいのですが……手伝ってくれませんか……一人じゃ、着られない、ので……。」

黒のドレスへと着替えたアリスは、ローラに別れを告げると、外へと出た。

当然ながら急ぎの用事など無い。自分を運んでくれたという彼……確かそう言っていた……には一目逢って、お礼を言いたかったけれど、あの空気にはとても耐えられない。

そう感情的に立ち去ってしまったけれど、しかし何処に行けばいいのだろう。

昨日散々悩んだ問題が、再び彼女の念頭に上がる。

戻る事も帰る事も出来ず、すがれるのは父が最後にくれたこのドレスだろうか。気休め程度ではあるけれども、この服ならワンピースよりか露出が少ない。二階のあの部屋から、一階にある酒場（サルーン）を抜ける時に受けた好奇の視線を考えるとやはり素性は隠した方がいいだろう。

顔だけなら大丈夫ばれてない……筈、よ。

無理矢理にそう合点しながら、アリスは下を向きつつ『負け犬達の巣窟（レザボア・ドッグス）』が面する大通りを歩いて行く。ただ人形かどうかとは別の意味によってその外見はすこぶる目立っており、道行く人々の視線を嫌が応も無く誘っていたのだが、自分の事で頭が一杯の彼女は、その事実に気付いていない。

そうして暫くの間、昨日の雨が嘘の様に乾き切った道を進んでいたアリスは、ふと立ち止まると首をぶんぶんと横に振るった。

悩んでいても仕方が無いわ。

一つの動作を持って思考を転換させた彼女は、顔を上げた。

考えてみれば、街へ来るのは初めてである。そもそも、つい一昨日までは工房と森の中から出た事が無かったのだ。見聞を広める為に、見て回るのも良いだろう。もしかしたら、その間に今後についての何か良い考えが浮かび上がる、かもしれないのだから。

　アリスは精一杯前向きな方向へ頭を回転させると、周囲を観察しながら歩き出した。

　道の両隣に並んでいる家々の間には、様々な商品を売っている店が建っている。

　彼女には意味が無いが、普通の人間には必要不可欠の食料品店にレストラン。工房にあった様な道具類や、それ以外の数限りない品を取り扱う雑貨屋。

　そして、でっぷりとしたお肉と、胸に星のバッジをつけた大男が扉の前で安楽椅子に座り、心地良さそうに居眠りしている事務所。確かあのバッジをつけた人は街の治安を守る保安官（シェリフ）の筈だけれどあんな所で眠っていて良いのかとアリスは思った。ただ思うだけで何もせずに、その横を通って行く。それだけこの街が平穏だという事だろう。良い事だ。

　町並みはまだまだ続き、店々もそれに連なって行く。

　伸びない彼女は勿論、最初から無い父カーシィも同様に不要、だと思う床屋。隣に馬車を止め、アリス一人が丸々入ってしまいそうな袋を背負い込んだ男が入ろうとしているのは、きっと郵便局だ。とすると、屋根伝いに電線が伸びたあそこは、電信局に違いない。

　それから、一際大きく、頂上に十字架を掲げているあの建物は、教会と言うものだろう。神が住まう家、だそうだが、アリスはそもそも神とは何か良く解っていない。聖書に関しては旧約も新約も読んだには読んだのだが、全知全能なる者やら天の主やらを想像するのは酷く困難で、存在を信じていないという父は説明を乞うても答えてくれないのだ。死の感覚にも似た、難解極まりない問題で、その事を考えるだけで頭の歯車が悲鳴を上げる。

その様にアリスは、観察へと没入する事で、何時しか不安を忘れていた。
　このベイツタウンを歩くのは酷く愉しい事だった。新たな物を実際に見る度に、アリスの中で歯車が軽やかに噛み合い、心臓が踊る様に脈打つ。知識を得る事は彼女にとってある種の食事の様なものであり、またこの街は未知の宝庫だった。
　ちょっとした不思議の国、ね。地下の国と呼ぶには明る過ぎるけれど。
　同名のあの少女になった気分で、アリスは歩を進ませて行く。
　その道は、物語で描かれていた世界とは大分違うが、そんなものは考え方次第だ。
　そうして十字路にやって来た時、彼女はふと脚を止めた。
　角になった通りの端で、一軒の洋服屋が建っている。薄暗くて良く見えないが、扉の向こうでは紳士用、婦人用の服がハンガーに掛けられているのが解る。レディメイドではあるが、粗悪な出来という訳でも無い。更にショーウィンドウでは、人目を引く様配置された幾つかのドレスが、胸元やスカートにつけられた服飾を陽光に輝かせている。
　その煌びやかさにうっそりと見とれたアリスは、硝子に映る自分の姿に気が付いた。
　自分が着ているものと、店の中にあるものらと出来不出来を比べれば、彼女の方が間違いなく上である。フリルもレースも惜しげもなく使われて繕われたこのドレスは、ちょっとした社交界に出ても何ら遜色あるまい。
　ただ一つ、けちを付ける所があるとすれば、その色が黒である事だ。硝子の向こうで揺れる事無く佇むドレスは、赤に青に黄色と、ちょっと派手過ぎる位の色彩を誇っている。
　それらと見比べている己の服を父が喪服と呼んだ事を、今更ながらアリスは思い出した。

一晩立った今、改めて考えても、やはりその意図は把握出来ない。ただこうして比べると、この黒という色合いの暗さには哀しい気分になってしまう。そして窓に映る自分の白い肌が、その色に対してよく似合っている事へも。
外に出てからこれで三度目であるこの感情には、未だに慣れない。多分、きっと、これからも。
そしてアリスはある違和感に気付いた。
足元を見ればそうでも無いけれど、そこから上は黒と白のコントラストだけで色彩が消えている。どんな時も頭にあった、ヘアバンドが無くなっていたのだ。
あそこに忘れてきたんだわ。
恐らくは着替えさせられた時に一緒に外されたのだろう。アリスはそう考え、取りに戻ろうか一瞬躊躇する。ローラと再び逢うのが少し怖かった。彼女自身というよりも、自分と再び逢った時の反応が。
けれどもあれは、目覚めた時からずっと付けている大事な物。無くてはならない物、だ。
ぐっと意を決し頷くと、アリスは元来た道を戻ろうと振り返る。
丁度その時、出鼻をくじく様に洋服屋の扉が開いて中から一人の婦人が姿を現した。
「ちょっとちょっとそこの貴女。」
妙齢の女性、ではあるけれど、先に見た保安官並の肉密度を持った人物だ。胸からお腹に掛けての膨らみは、郵便配達員が持っていた袋にも匹敵する。それをかなり頑張って包み込む服は、何と紫色。その色も造りも似合っていない事は言うまでも無い。
アリスは面食らって、思わず目を見開き、店の主らしきこの人物を見つめてしまった。もし目の前に居る女性が、金に意地汚くタダ見するだけの客に全く容赦しない性格から、街の住人より『金メッキのステファニー』と影で呼ばれている事実を知っていたなら、少女も今の様な愚行は犯さず、早々に立ち去った事だろう。

だが不幸な事に、それを知る由も時もアリスには無かったのである。

「さっきからずっと見ているみたいだけど、貴女これをお買いになられるつもり？　だったらしっかりお金は持って来ているんでしょうね。そんじょそこらの品より遥かに高いから、額も気をつけないといけないけど、見ているならちゃぁんと持っている筈よね。」

実際の所、ステファニーがアリスの存在に気付いたのはついさっきなので、ずっと見ていたかどうかは知る訳が無かったのだが、お構い無しに彼女は捲くし立てる。一度思い込んだら梃子でもその意見を変えない重みもまた、この婦人の特徴だ。服飾を生業としている為、黒のドレスの造りからそれを着ている少女の身分も良い方向に勘繰ったかもしれないが、生憎と、ステファニーの中で彼女の価値は最初に見た時に既に決まってしまっていた。

そんな彼女に凄まじい剣幕に押されて俯きつつ、アリスは応える。

不幸とはしばしば連鎖的に起こるもので、

「……あの……お金、ありません……ちょっと、見ていただけです……。」

由も時も無い彼女は、ついでに金も持っておらず、良い言い回しも思い付かなかった。

「まぁ、まぁまぁ貴女、お金も持ってないのに私のお店の前に居たの？　なんて非常識でしょう。私のお店に来たのにお金を持ってないなんて……嗚呼非常識にも程があるわ。」

それが許し難き大犯罪であるかの様に、額に手を乗せながらステファニーが嘆く。

まるで何処かの意地悪な継母みたい。

アリスはそう思い、それにいびられている自分の有様を、話の中で良く同じ境遇にあっている義娘のお姫様と重ねて慰めにしようとしたが、無駄な足掻きだった。

「お金が無いならお客じゃないわ、さぁさぁさっささと行って頂戴な。」

「……。」

一方的な物言いに屈すると、アリスは俯いたままに去った。

すっと店の方を見れば、名も知らぬ女性が胡散臭そうにこちらを睨んでいる。何か悪い事をした訳でも無い、筈なのにあんな態度を取られ、彼女の頭脳と心臓は重く沈んだ。

これでもう四度目。

森の外はこれ程に哀しい場所なのだろうか、とアリスは考えてしまう。もしそうだとしたら、ずっと工房に居た方が幸せだったかもしれない。ただ書物と伝聞だけで外の世界を見聞きしているだけの方が、余程楽しかった事だろう。

些細な幸福から瑣末な不幸への逆転、落下による反動はアリスにとって大きかった。

街の中で、往来にも人が沢山居るというのに、彼女は独り荒野を彷徨っている様だ。勿論ある意味間違いでは無い。頼るべき場所も人間も居ないのだから。

それでもどうにかしようと、気を取り付けてこれなのだから、やりきれない。ブルーな気分で街そのものが青く染まって見えた。まるでエメラルドの眼鏡を掛けた様に。或いは取って。

思えばケチの付け所は、ヘアバンドを忘れて来た事だ。もしかしたらあれには、インディアンの呪術でも込められて、何かお守りの効果があるのかもしれない。そう思ってみるアリスだったが、余り笑えなかった。今それを実際に付けてはいないのだから。

肩を落とし、一歩一歩脚を引きずる様に歩きながら、彼女は瞳を瞑った。

もしお守りならこれで眼を開けたら目の前に……無い、わね。

我ながら子供じみた発想だ。非科学的な、でもいい。ともあれ、大分参っている証拠だろう。

くすりと自嘲気味に笑いながら、アリスは瞳を開く。

その目の前で赤いリボンが揺れていた。

はっ、と一瞬思考が完全に停止する。思い込みすぎて幻覚でも見

たか。そんなものがこの身で発生するだなんて、到底考えられない事ではあるけれど、正直他に取り様が無い。
しかしアリスがじっと見つめて数秒立ってもそれは消えなかった。本物、という事である。
と、同時に、ヘアバンドを握る手の存在に意識が向けられた。指の一つ一つが枝の様に細く長く、全体として大きな手だ。所どころ節くれ立ち、固くなっている肌の印象は、父の手の感じと告示している。
もしやお父様かしら。
幻覚よりも有り得ない……何故なら彼は今病気に掛かっていて、森からは出られない筈なのだから……仮定を立てつつ、アリスは手から腕、更にその上へと視線を動かした。
手と同じ様に細く、だが力強い筋肉が引き締まった腕は、アリス程では無いが白く、余り日に焼けていない。その付け根へと目線を移動させれば、この瞳程に黒く、薄汚れ擦り切れた外套（マント）が見える。そんな黒い壁を何処までも登れば、漸く顔が覗けた。
何処の国の出の人間か、いまいち判別が付かない青年が居る。顔立ちはインディアンに似ているといえば似ているけれど、彫りは深く無く色も白に近い。どちらかと言うと、昨日あったあの双子の中国人に近いだろう。真っ黒な帽子の下で、鳥の毛の様に生え茂る黒髪の色艶が東洋的なのだ。だが近いというだけであり、同じかというと、それもまた違う気がする。
正体不明の青年だったが、しかし見上げるアリスには一つ見覚えのあるものがある。
それは瞳の色だ。
蜥蜴や鳥の様な、少なくとも人間のものでは無い細く鋭い瞳孔を、光輪の如く取り囲む黄金の虹彩は、間違い無く昨夜の雨の中、意識を失う前に見たあの二つの月だった。
それが昼日中にあっても尚、優しげな光を称えながらアリスへと向けられている。

嗚呼そうか。この人が、私を助けてくれたのね。

黄金の瞳を見つめて、彼女はそう直感した。そしてその赤み薄く、透き通った唇は、自然とある一つの名を告げていた。まだ何も知らないけれどきっと素敵な彼への呼び名。

「……月、の人……。」

6. 重力に惹き寄せられて（ファム・ファタール）

日が傾き出した正午過ぎのメインストリートを歩きながら、ケインは自問自答した。
俺は一体何を感じているのだろうか。
ちらりと視線を斜め下へ向けると、黒いドレスに赤いリボン、靴をつけた少女が居た。
アリスと名乗った彼女と共に歩いている時、彼は酷く奇妙な感覚を得る。
頭の芯は冷めていてこういう風にちゃんと思考を紡ぐ事も出来ているのだが、体の方は熱く火照り、心臓が超蒸機関の如き高鳴りを発している。
氷と炎が面と向かって接している様な状態なのだが、しかしそれはどちらへも干渉する事無く上手く嵌り、落ち着いている。ずっと昔からそうであった様に。

思えば昨日の夜は、その空模様に似て、荒れに荒れたものであった。
「嫌ですからね私は。何故そんな見ず知らずの人を泊めなくてはならないのですか。」
倒れていた少女を抱え、訝しがる酔っ払いを無視して部屋へと戻ったケインを待っていたのは、ローラの激しい叱責だった。ただ、彼女が怒るのも、尤もな話ではある。夜分遅くに行き成り別の女……と、言う年齢に達している様には見えないのだが……を連れて来れば、大抵の恋人愛人夫人一切は目をひん剥いて怒鳴り散らす事に違いない。
「いや……嗚呼、その、雨の中でこんな娘一人を放っては置けまい。」
少女をベッドに乗ながら、それに応えるケインの声に覇気は無い。

それはローラが怒る理由を良く理解していながら、それに対抗せねばならない少女をここまで運んだ理由を、上手く説明する事が出来ない為である。善行と言えば善行だが、そんな気は全く無かったのだ。
　強いて言うと笑みが気に入ったから……だが、それは言えないな、流石に。
　濡れて額に掛かる少女の前髪をそっと払いつつ、彼は内心苦笑した。それを悟られまいと、努めて真面目な顔を浮かべて、ケインは振り向き、ローラへと言い返す。
「それとも君は、今から彼女を外へ戻して来いとでも言うのか？　君はそんな人間だったのか。」
　我ながら酷い言い草だ。思ってもいなかった事で煙に巻こうとしている。言った後で申し訳無さがやって来たが、それでも彼女を動かすにはこの言った方が良いとも思う。自尊心へ訴えかける手が有効なのは、自分自身そうだからだ。何せ似た者同士だからこうして近くに居る訳であり、案の定、彼女は折れた。
「うぅ、解りました、解りましたよ。」
　納得は行かない、がせざるを得ないという顔を浮かべて。

「やっぱり駄目です、こんな、こんな化物っ。」
「落ち着けローラ、落ち着くんだ。」
　そのローラが、先にも増して激情したのは、少女の濡れた服を着替えさせていた時だ。
　それは少女が風邪を引かぬ様に、というよりも自分達のベッドを汚したくなかった、という理由が大きいのだが、ともあれ彼女はその時見てしまったのである。
　一糸纏わぬ少女の、余りに白過ぎる裸体。
　その至る所にある関節、体の継ぎ目に付いた球状の接続部を。
　それがぴくりと、確かに稼動している所を。

少女は人では無く、人の形をした別の何かだった。
部屋の外で着替え終わるのを待っていたケインは、ローラの悲鳴に素早く中に入った。途端、抱き飛んできた彼女を受け止めつつ、彼はその少女の事実を知る。
人形、だったのか。
一拍を置いて見たケインは兎も角、ローラにとってそれはびっくり箱の様なものだ。半ば我を忘れ、再び捨てて来る事を進言する彼女に、彼は優しく囁いた。
「ローラ、大丈夫、怖がらなくていい。」
「でも、でもっ、」
「多分……いや彼女は、義体人形だ。間違いない。」
義体人形とは何ですか、と、小首を傾げるローラに、ケインは説明する。新聞を読み、噂話を聞いて得た程度の知識ではあるが、それでも概要程度は伝える事が出来る。

人間の肉体の代理となる機械『義体』は、この十九醒紀後半、土壱(ドイッ)国内から多数現れた天才達の手によって異常な発展を遂げた。義体は一昔前とは比べられないレベルにまで到達したのだが、そんな中、義体技術に並々ならぬ影響を与えた『七人教授』の一人、クリストフ・フォン・アッシェンバッハは、肉体だけでなく精神の代理すら造り出してしまったのである。
人工頭脳。
眩暈のする程に膨大な歯車により一つの小宇宙と化した階差機関を搭載し、まるで本物の人間の如く思考し、活動する自動人形……その肉体もまた義体である為、しばしば義体人形と呼ばれる……が、1873年の雲院(ウィーン)万国博覧会にて、硝子で覆われた頭部を持って設計図と一緒に公開された時は、各国の注目を集め、また相当な話題となったものだ。
それにより当時各分野にて大論争が行われた訳なのだが、その議論は直ぐに沈静化した。人工頭脳自体の特許を出願していない為に

誰でも作ろうと思えば作れるのだが、しかしそもそも余りに精巧過ぎて作れる様な人間が世界的にも僅かであった事、文字通り人工的に作り出した脳であるので事前に知識を植付けられず人間と同じ様に育てなければならない為、翻って労働活動、殊、軍事への利用はコスト問題としてまず不可能な事、原理原則を、作った当人すら完全には把握していない（と言われている）事があって、大量生産どころか再現すら難しく、『重要ではあるが今は何も産む事の無い発明』と認識されたのだ。現在でも激論を交わしているのは、哲学者と神学者位であろう。どちらも一般生活とは隔たりのある学問だ。

かく訳で、世を騒がすだけ騒がした義体人形は、アッシェンバッハ卿の隠居と相俟って、義体程の影響力を与える事も無く、一部の学者が生涯目標に設定するか、物好きな大富豪の蒐集品として造られる程度の代物と化していた。

「……良く知っているのですね、貴方。」
「それはそうだ、一時期至る所で言われてたからな。聞いた事は無いか？　ローラ。」
「いいえ、ありませんね。あっても忘れましたわ。」
説明が終わると、ローラはそう微笑んで答えた。興味が無い事に頓着が無いのも、エルフの特徴の一つだ。長く生きる為にそれは必要な事なのだろう、たとえ教養と呼ばれるものであっても知らない事が多い。同じく不老長命のケインにとっては、少し羨ましい事でもある。
「でも、そんなに珍しいものが、こんな所に何故？」
「さぁそれは解らないが……何、起きたら話してくれるだろうさ、色々。」

元より、それが目的と言えば目的なのだから。

ケインはローラから離れると、そっと少女の上にシーツを乗せる。彼女の体は細部まで念蜜に作られており、ちゃんと性器まで付けられていた。実に眼に毒な訳だが、彼にとってこの少女が人形である

事自体よりも、その出来に驚きだった。何故ならずっとそうとは思っていなかったのだから。先の時は、人形の様な、とは思いこそすれ、完全に普通の人間として見ていた。あの笑みに何とも言えぬ感慨を受けた時も。

或いは、人形であるからこそ、心が動いたのかもしれない。

答えを知るにはやはり話を聞かなくては、と考えつつ、ケインはそっと少女の髪を撫ぜる。流石に腰程まであってはまだ乾ききっていない。その感触は艶やかで心地良かった。

「……結局ここに泊める事には変わりないのですね。」

最早諦めた様に、ローラはそう肩を落として言うと、ケインに向けて更にこう続けた。

「所で貴方。」

「何だ、まだ何か疑問でもあるのかい？」

「えぇ。ちゃんと喋れるのでしょうね、それ。人間の様にしっかりと、会話出来る位？」

「……多分、な。」

だが朝になっても、ケインは少女と話す事は出来なかった。

余程疲労していたのか、或いは水気が原因か。雨が降り止み、苛烈な日の光が差し込む頃合いになっても、彼女は起きなかった。更に、行って置かなければならない用事の為に、名残惜しくも宿を去った彼が戻って来ると、少女の姿は影も形も無くなっていたのだ。

「彼女は何処に行った？」

そう憮然として聞くケインに、その場に居たローラがしれっと返す。

「あれでしたら、何か用事があるとか言って、さっき出て行きましたよ。」

「な……どうして行かせたんだ、ローラ。」

「どうして、と言われても、引き止める理由なんて別にありませんからね。」

それとも貴方にはあったのですか、と微笑みで語ってみせる彼女に、ケインはたじろぎ、何も言う事も出来ず、溜息交じりにベッドの上に座った。
ローラに気取られぬ様、シーツに触れる。昨夜、いやつい先程まで、ここにはあの少女が居たのだ。今はただ僅かな皺の波形でそう察せられる程度。ぬくもりも、もう消えている。尤も、最初からぬくもりがあったかどうかなど知らないが。
これなら、自分も残れば良かった。
ケインはそう残念に思う。
と、その時、彼は壁際のベッド脇にある狭い空間に、何かが落ちている事に気付いた。
何の気も無く手を伸ばすと、それは少女が付けていた赤いリボンのヘアバンドだった。
暫くの間じっとそれを見ていたケインは、すっくと立ち上がると、扉へと向かう。
「あら、何処へ行かれるのですか？」
「忘れ物があった。まだ遠くへは行っていまい。探して届けて来る。」
「そんな、別に良いじゃないですか。忘れたと気付けば戻って来ますよ。」
黒の外套(マント)と帽子を付け、出て行こうとする彼の背中へローラが声を放つ。
「そんな手間は取らせないさ。」
それを聞く事も無く、また彼女に止める時間を与えもせず、ケインは外へと出た。
右手でしっかりと、だがそっと、あの赤いリボンを握って。

そして彼は彼女と再び出会った。

然程探す事も無く、余り評判の宜しくないらしい洋服屋の近くに、

少女は居た。
だが彼女を見つけたケインは、その後何を言って、どうするかを全く考えていなかった。
そもそも自分でも良く解らない衝動によって、半ば突き動かされた様なものなのだ。
だから彼は口を噤み、少女に向けてリボンを差し出す事しか出来なかった。
何か……何か気の利いた台詞でも言わなくては。
そう思っても、言葉は出て来ない。
大鴉（ネバーモア）が、たった一人の少女を前にして、鳴く事も出来ない。
ある意味ではとてつもない脅威の前に、ケインの心は戦闘の時と同じ様子を示していた。
相貌は感情を押し殺しているが、内なる彼の方は滝の汗が降り落ちている。
そう考えあぐねていた時、ずっと押し黙ってじっと見つめていた少女が唇を開いた。
始めて聞く彼女の、鈴の様に可憐で、やはり人形とは到底思えない可愛らしい声に乗せて、紡がれた言葉は、凡そケインの意識の範疇を超えていた。即ち、
「……月、の人……。」

「……は？」
ケインは三度己の時が止まるのを感じた。ただ、今回のものは理解出来る現象である。単純に、この少女が何を言ったのか解らなかったのだ。
今、彼女は誰に向けて何と言ったのか。誰に、何と。
実に聞き慣れぬ単語に、築いていた無貌の仮面の上へ表情が浮き上がる。
その変化を見て取ったのか、少女ははっとすると、少し慌てた様子で言い募った。

「……ぁ…と、ごめんなさい、何でも、無いわ……うん……貴方、昨日の……？」
「あ……あぁ、そう、そうだ。これを、忘れた様なんでね。届けに来た。」
彼女の反応に、思わずケインも釣られて声を上げる。自分のものかどうか、一瞬疑問に思ってしまう様な声色に、彼は空咳を一つ上げて終止符とした。
「……わざわざ……ありがとう、ございました……。」
「でも無いさ……あー。」
「……アリス……。」
差し出されたヘアバンドを受け取って髪に挿すと、少女はそう名乗った。頷き、首を上げ、一片の汚れも無い漆黒の瞳を向けながら。
アリス……。
ケインは少女の名を頭の中で反芻、したつもりだったが、実際に声に出していた。
再び喉を鳴らして誤魔化す彼に、アリスが小首を傾げながら尋ねる。
「……はい……えと、貴方は……。」
「ケイン。ケイン・ウェイトリィ。」
「…ウェイトリィ、さん…。」
そう家名で呼ばれた事に、ケインの顔が苦い笑みを浮かべる。個人名以上に呼び慣れない……今ではネバーモアが半ば家名であり、半ば個人名みたいなものだ……上に、自分を捨てた家族との苦い思い出を想起させる。だったら、最初から個人名だけ言っておけば良いのに、名乗らざるを得ない気性の持ち主がまた彼である。
「……ケイン、でいいよ。ウェイトリィと呼ばれるのは慣れないんだ。さん、もな。」
「……ん……と、はい、ケイン……。」
筋肉が縮み、背骨が震えた。弾丸を受けた様な感触が身を貫く。

それを悟られぬ様勤めながら、ケインは言った。
「それでいいんだ。俺もそうする、から……それでアリス。」
「……はい……？」
「……君は何処か行く当てが？　その様子だと、特に用事も無さそうなのだが。」
「……。」
その言葉に、アリスは俯き、黙ってしまう。
不味い事を言ったか、とケインは頭の中で慌てながら、弁明した。
「いや、何だ……それがどうと言う訳でも無いんだ、悪かった。」
いえ、と首を横に振るう少女に、彼は小さく吐息を零しながら続ける。
「で良かったら……というのも、時間があれば、の話なんだが……少し辺りを歩かないか。折角知り合ったのだから、その、話をしたいんだ。少し、ね。」
「……。」
そこまで言い、そしてアリスがこちらを見つめたきり黙ってしまった事で、ケインは己が今した行為を後悔した。何と軟派なのだろう。これでは本当にただの若造だ。年齢だけで言えば、もう既に老人の域に達しているというのに、初心な事甚だしい。
けれども、その考えは、
「……いい、わ……。」
たっぷり、に感じられる時間の後、こくりとアリスが頷いた事で跡形もなく消失した。

そうして今二人は、共に肩を並べて歩いている。
間に会話は乏しく、ぽつりぽつりとそうらしきものがある程度の、本当に歩いているだけのものだが、ケインの中は、落ち着き払った興奮で満たされている。
最初の動機は単純な知的好奇心だった。話したい、知りたい、という。

実際はもっと簡潔で、ただ一緒に居るだけで、特別な感情を抱いている。
本当に、俺は一体何を感じているのだろう。
その答えなど当然の如く解らないのだが、それはそれで不快ではなかった。
それにまた、アリスについて、幾つか解った事がある。
一つは、知識こそあるけれど、実際の体験は少ない、という事。
彼女が街を見る眼は、絶えず新しいものを見つめる眼だった。こんな何の変哲も無い所が、この少女にはたまらなく物珍しいらしく、何度か立ち止まっては、「ここが教会ね。」だとか「あれが保安官よね？」と確認する様に言って来る。普通の人間ならば、わざわざ言うまでも無い事なのに。まるで何処ぞの遺蹟でも見ているかの様に。ケインもそれに対し、「嗚呼そうだよ。」「良く解ったな、とてもそうとは見えないのに。」と、応えたものだ。
そしてもう一つ、彼女が笑ってしまう程に幼い感性を持っているという事である。
というよりも実際にケインは笑ってしまった。
それを理解した瞬間をまた思い出せば、自然と笑みが毀れ出て来てしまう。
「……どうか、した……？」
「ん……いやいや、何でも無いよ、何でも。」
憮然とした様子で聞くアリスに頭を振りつつ、ケインはそっと口元を手で覆った。
きっと俺が考えている事を知ったら、彼女はまた恥ずかしがる。少女らしい仕草と表情で。
そう思うだけで、隠さなければならない程に唇が釣り上がる。
「所で、どうして君はさっき、俺を見て『月の人』と言ったんだ？」
つい前の時ケインはアリスへずっと疑問に残っていた事を尋ねた。
「……ぁ…ん、あれは……えぇと、笑わない……？」

「嗚呼、笑わない。」
少し困った様な顔をした後、わざわざそう確認してから、彼女はおもむろに唇を開く。
ケインはそこから飛び出した答えに眼を見開き、そんなつもりは無かったにも関わらず、約束を違えてしまった。アリスは彼の表情を察すると、そっぽを向いて、
「――やっぱり笑った……。」
そう恥ずかしそうに呟いた。頬は染まらないが、その仕草だけで愛らしく心苦しくて、
「と、悪かった。笑おうだなんて思ってなかったよ、本当だ。」
ケインはふっと真顔に戻すと、比較的必死に頭を下げる。
けれども、彼が笑ってしまったのも仕方が無いというものだろう。何故と言って、
「……昨日の夜にね……貴方、に抱えられた時、ふっと気付いたの……その瞳……その金色の瞳が……本当に、笑わないでね…月、に見えたの……二つの、満月……それが、素敵に綺麗で……何だから、そう、嬉しくなって、それで……それで実際に見て――」
そんな予想外の……それももう一つ別の疑問への……答えが返って来たのだから。

この眼をして月とは良くぞ言ったものである。誰しもが気味悪がる、大鴉の不気味さの象徴の様なものであるというのに。無論、誰も今までそんな風に言った者は居らず、周囲からの反応を考えれば、それは実に皮肉な訳だが、この少女から言われると、別に悪くは無い。
ならばアリスは三日月の君（きみ）だろうか。
そう思い起こしながら、ケインは、訝しがったままの彼女に言おうとしたが、流石にそれは止めた。幾ら何でもこれは気障過ぎる、と、ぎりぎりで踏み止まったのである。

7．天使のたまご（エンジェルエッグ）は割らせない

良く解らない人。
それが、ケインに対するアリスの感想だった。
こうして普通に接している時、彼の横顔は、その外見通りの、二十代前半位に見えるのだが、思わず言ってしまったあの名前の事で笑った時や、今も隠れて笑っている（多分あの事だ、恥ずかしいけれど）時の表情は少年の様に見えるし、かと思うと、ふとした瞬間に押し黙り、何か考えている風な時は、物凄く年を取った老人みたいに感じて怖い。態度も優しく、紳士的とはこういう事かと思えるが、言動と、あえて加えれば服装は、洗練されているとは言い難い。物腰だって、硬いのやら柔らかいのやら、判別の付かぬ事、付かぬ事。
もしかしたらそれが普通の男の人なのかしら、ともアリスは思った。何せ父以外に、まともに話した始めての男性なのだから。書物や話の中で知り、頭に描いていた者と違っていても、おかしくは無い。ただ、そう思うだけで、実際には違う気がする。平均的な男性というのは、彼とはまた別の、もっと別の生き物ではないか、と、同じ知識が否定する。
それこそ本当に良く解らなかい。ただ、最初に抱いた通り、悪い人間では無さそうである。老人のケインは少し近寄り難いけれど、それ以外の時は接し易いし、それに無理に何かを聞いたり話したりしないのが嬉しい。ローラや、あの継母とは大分違って。
そういえば、あの人とはどういう関係なのだろう。
ふと、思い出す。確か彼女はこう言っていた筈だ。私の連れ合いが、と。
家族なのか恋人なのか、ただ一緒に暮らしているだけなのか、それとも偶然あそこに居ただけの知り合いなのか、あの言い方だけではちょっと判別が付かない。顔つきは大分違うし、この人は耳が長

く無いから、血縁者という事は無いと思うけれど。
街を大体に見渡し、飽いてきた事もあって、無性に二人の繋がりが気になったアリスは、
「……ねぇ……。」
「……ん、どうした。」
「……あの、ローラという人は……貴方の……何……？」
そうケインへと尋ね、意図せず出て来てしまった己の言葉に少し驚く。幾ら彼女の事が苦手だとしても、『何』という事はあるまい。
「あぁ、そうだな……。」
けれども彼は、それで特に気を悪くした訳では無いらしい。
薄っすらと笑みを浮かべて考え込む顔は、青年と少年の間位のケインだ。
「ここに来たのは一ヶ月前位、だけど、俺はずっと彼女の所に身を寄せているんだ。」
「……恋人、なの……？」
「まぁ……そんなもの、か。別の言い方もあるけれど、大体それで間違ってはいまい。」
そう応えるケインの顔は、純粋な笑みでは無く、ちょっと苦味の篭ったものだ。自分で自分の言葉に疑いを持っている様な感じで、台詞自体の歯切れも良くない。
疑問に思ったアリスは直ぐ様に、
「……愛して、ない……？」
そう聞き返すが、言った直後に後悔が歯車の動きを早めた。
「どう、だろうな……。」
考え込むケインの顔からは笑みが消え、苦味だけが残ったのだから。
悪い事をしてしまったとアリスは思い、
「……あの……ごめん、なさい、変な事聞いて……。」
「いやいいんだ。構わない。」
謝罪しようとすれば、彼はそれをゆっくりと頭を振り、笑みと共

に優しい声音で否定し、
「はっきり言うと、自分でもどうなのか、解っていないんだよ。愛しているかと言われれば愛していると応えるけれど、それを断言出来るかといえば……難しい。出逢って、まだそれ程時が経っていないからかもしれないが、ね。」
「……。」
アリスはじっとそれを見つめ、今のケインの笑みが自分に向けられている事に気付いた。
彼は、こうだと言い切る事の出来ぬ自分自身を、せせら笑っているのだ。
そんな風に笑って欲しくない、とアリスは感じた。自嘲している時のケインは、何にも増して、老いて見える。それは父程の年齢であり、若々しい容姿には似合っていない。
「それで君は？」
「……え……？」
己の思考に浸っていたアリスは、行き成りのケインの問い掛けに一瞬反応出来なかった。
彼はその表情を見ながら、こう付け加える。
「いや、俺の事を言ったのだから、今度は君の番かな、と。何処に住んでいたのか、とか、そういう事を、ちょっと聞いてみたいんだが、どうだろう。」
「……え、っと……。」
まさかそんな事を聞かれるとは考えておらず、彼女は面食らってしまった。
けれども、何故だろう、この人には聞いて貰いたい、気がする。
「あぁ……答え難いならいいんだ、忘れてくれ。」
「……うぅん、構わない、わ……ちょっと、どう言おうか、考えていただけ……。」
ケインの言葉にそう返すと、金属の歯を絡み合わせながら、アリスは思案。

暫くの後に纏まれば、ゆっくりと生い立ちを語り出す。
「……私が目覚めたのは……一、二年前、かしら……この街からだとちょっと遠い所……荒野の向こうに、森があって……そこで、お父様に造られたの……。」
「え……あ、あぁ。」
けれど、ケインのはっという顔が気になり、最初の部分で中断した。
「……？」
この人は、一体何に驚いたのだろう。まだ話して間もないのに。
じぃとその顔色を伺うアリスは、もしや、と思い、
「……あの、私……これ、なんだけど……。」
すっと上げた右手の包帯を徐に外して、ケインへと差し向けた。
日に焼ける事の無い肌を持つそれは、見事な白磁で出来ており、関節を球体が結んでいる。
ケインはその手の甲に走る一筋の輝をじっと見詰めながら、そっと首を横に振って、
「いや、それは知っている、知っていた。ただ、ちょっと……忘れていた、だけだ。」
そんな事をさらりと言い放った。
「……え……？」
ギチリと、アリスは、己の機構が一瞬だが停止するのを感じた。
簡単に言ってのけたが、今この人はとんでもない事を、それこそ阿（ア）真利火（メリカ）が南北に分断して二つの国になったんだとか、もっと言えば実は地球はテーブル状だったのだよとか、そんなレベルの事を言った気がする。
当の本人は当の本人で、言った後で言葉の重大さに気付いたのだろう、
「……。」
口を紡ぎ、押し黙ってしまった。
「……。」

アリスもまた、何と言って良いのか解らず、唇を開く事が出来ない。
沈黙が流れ、二人の間に空気を凍らせて行く。
「……話の続きを、頼む。」
「……え、えぇ、うん、解った、わ……。」
それを、空咳と共にケインが打ち壊し、アリスもまたそれに習って唇を動かした。
「……それで……私は、ずっとそこで暮らしていたの……昨日までね……お父様と一緒に……本を読んで、森を歩いて、お父様の話を聞いて……でも、」
「でも？」
そこまで語ってから一度アリスは一拍置き、
「……私は、別の所に暮らす事になったの……ベイツという人……ここの街の名前、ね……だから、森から街に来て、館へ連れて行かれて……だけど、嫌な感じがして……気が付いたら逃げ出していた、わ……そして、こうして、ここに居る……。」
「……。」
そう語り終えると、ケインの方を見遣り、その顔が渋い事に再び後悔を抱いた。
また何か不味い事を言ってしまったのかしら。
じっと見つめていても、何の注釈も無くじっと考え込んでいる彼の様子に、アリスも自然と下を向いて、考えてしまう。何がいけなかったのだろうかと、心臓を高鳴らせて。

けれどもこの時ケインが考えていたのは、アリスの事では無かった。
彼が思い描いていたのは、彼女が語った名前、ベイツという男に関して、である。
エドワード・ベイツ。
ベイツタウンの町長である彼は、金鉱の利権で得た莫大な財産を

持って街に君臨しているも、だがその見た目の極端な醜悪さから、郊外にある館から殆ど出ない事で知られていた。
が、もう一つ、良く知られていながら余り語られぬ事実がある。それは彼が、変態的と言って差し支えない性的な趣向を過剰に持ち合わせているいう事実である。
娼婦達は、たとえ数年位は慎ましやかに暮らして行けるだけの金額を払ってくれるからとしても、決してベイツの元へは行かない。財産と本妻の地位目当てに出向した者の中で、五体満足な体で戻って来た者は非常に少なかったからだ。多くがもう花を売る事も出来ない姿と成り果て、また折角稼いだ金も、この国の、この州では、まだまだ普及しているとは言い難い義体の維持費に使いきってしまい、惨めな最期を遂げている。
一般女性はそもそも彼の様な存在に近寄らない訳だから、最早この街にベイツとまともに付き合う女性など居ない。にも関わらず、夜な夜な館からうら若き女の悲鳴が聞こえて来るのは、彼が廃れた筈の奴隷制度を未だ活用しているからだという専らの噂だった。勿論それを確かめようとする者なんていないし、確かめるべき役職に就いているのはそんな事など思いも寄らない様な馬鹿である。表沙汰になっていないから、ケインとて手出しは出来ない。
そんな名前が、この少女から出てくれれば、心中穏やかな筈が無かった。

「……それで君は、」
「……え……？」
「逃げて、そしてどうする……つもりだ？　きっと逃げた君を連れ戻そうと、追っ手が来るだろうに、これからどうしよう、と？」
「……解らない、わ……。」
少々の時が過ぎてから言ったケインの問い掛けに、我に帰ると、アリスはそう言った。
それはずっと保留にしていた問題である。

そして、彼に助けられた今でも尚、解決していない問題だ。
「……本当、解らない……。」
先とは別の理由でアリスは俯き、そう呟く。
「……お父さん、の所に帰るのはどうだろうか。」
「……それは、駄目……。」
ケインの提案は魅力的であり、現に考えた事であるが、出来かねる事でもあった。
「何故だ。他に行く所も無いのだろう？」
確かにその通りではあるが、アリスは頷かない。
「……でも……逃げてきたら、お父様に迷惑が掛かる、わ……。」
彼女は乾燥した、砂と埃ばかりの地面を見つめながら、そう言う。アリスはエドワード・ベイツという人間についての知識は無かったが、それでもあそこから逃げ出した危うさというのは察する所であるし、そもそも危ういからこそ逃げ出したのであるし、更に戻って言えば、それはそもそもお父様の言い付けで、
「馬鹿な。」
何時かと同じく入り組んだ思考の果てに熱が篭り出す、その前にケインがそれを断った。
「……ぇ……。」
アリスは思わず立ち止まると、その二倍以上ある背丈の持ち主を見つめる。
「実の娘が困っているのを、父親が見て見ぬふりをすると？　助けを乞うて来た子を我が家から放り出すと？　そんな事があるものか、いやあってなるものか。」
力強く言い放つケインの表情と言葉は徹底的に磨き上げられた剣の様だったが、その気鋭と声調は熱く強く、そして若々しい。まるで祈りだ。言った本人がそうだと願っているかの様な。
言い終えると、彼はじっとアリスの方を見つめる。
彼女もそれに応え、ケインへとその瞳を向けた。
黄金と漆黒の二つの視線が、再び絡み合う。

その人間離れして神秘的な、満月の輝きを捉えて、アリスは悟った。
このケインという人はきっと、本質的には幼い人なのだろう。幼いままに成長した人で、だから自分よりもずっと知識や経験があるから色々なものに認めたり諦めたり出来て、老人みたいに見える時があるのだけれど、認めたくないもの、諦めきれないものを、解り難いが、でも何処か頭の隅の方に抱えて頑なに護っている人、なのだろう、と。
そう思えば、何だかおかしな気分になる。逢ったばかりなのに、名前以外にろくに知りもしないのに、けれどとっても、自分に近い人間に思えてくるのだ。多分、そういうものを自分も金属の構築物の奥深くに持っていて、だから最後の最後で逃げたのだと思うのだが。
「……解った、けれど一つ、いいかしら……。」
そこまで考えてから、アリスはふっと笑みを浮かべながらに、沈黙を破った。
「そうか……と、いいよ。言ってごらん。」
そんな彼女にケインもまた微笑して見せると、腰と膝を軽く曲げ、目線を合わせる。
「……私には、馬が無い……乗った事も無いし、歩いて帰るには遠過ぎる……。」
「そうだな。」
「……それに逃げて来た身だから……追っ手が来るかもしれない……。」
「その通りだ。寧ろ来ているだろう。」
「……だから、ね……私を工房まで連れて行って……ケイン……。」
「……お安い御用さ。」
アリスの願いにケインは頷く。
そうしてそのまま暫く微笑み合うと、彼は立ち上がり、
「まぁ、俺が言った事だしな。そうするのが当然だ。戻ってからも、

無事と解るまで護るさ。」
「……ええ……。」
「決まったならば、直ぐに行こう。一応準備はするから、酒場に戻るけれど、いいな？」
そう言って、アリスの肩にそっと手を乗せると、『負け犬』目指して歩き出した。
「……そこは全て任せるわ、ケイン……。」
彼女は抵抗する事も無く、寧ろそっと身を寄せると、共に足を進める。
白兎と老騎士を、足して二で割った様な感じね。
そう楽しげに空想しながら、アリスとケインは連れ立って行く。
出来ればこのままもう少し歩いていたい所だったが、生憎と巣は目の前である。名残惜しくも散歩を終えた二人は、低い階段を上がると、スイングドアを開いて、中に入った。

ここで一つ確認しておかなければならない事がある。
それは、アリスに対するケインの評価と、ベイツのそれが必ずしも同じでない、という事だ。
ケインは彼女を、『どんな事情があったかは知らないが、兎に角親元を離れされた可哀相な少女』程度にしか……勿論それはあくまでも価値として、であり、感情や正体はまた別の問題である。……考えていなかった。つまり、大した追っ手など無いと見積もっていたのである。少なくとも、自らが手を焼く様な輩はいない、と侮っていた。質でも、そして量でも。
根本的に独りで過ごし、そして戦ってきた事で生まれた甘さだ。
その甘さが、扉の向こうで牙を剥き、待ち構えていた。
『負け犬達の巣窟』は、普段と変わりない盛況ぶりを示している。
鉱夫、山師の無法者一歩手前の一団は、テーブル乃至カウンターを占拠し、酒やらカードやら女やらを囲んでいるし、最早見た目か

らして無法者という連中も少なからずいる。マスターの額のてかり具合だって相変わらずだし、ケイン、そしてアリスを見る周囲の目も大差無い。
　何時もと違うのは、大鴉（ネバーモア）が現れての静まった空気が、奇妙に弛緩している事。二階の自室に籠っている事の多いローラが、一階へ降りてきている事。そして赤と青の東洋風の服に、揃いの丸縁黒眼鏡を掛けた双子の中国人が彼女の前に立って、似ているとは言い難いアリスの似顔絵を向けながら、何事か語っていた事。
　いた、というのは、今はもう黙り込み、ローラと一緒にこちらを見ているからだ。まるで、というよりもまずそうな気がするが、探し人を求めてその人相を教えていたら、丁度その真っ最中に、本人が現れた、という塩梅の顔で。
　そして彼らの背後には、恐らく手下だろう者達が居た。総勢で、七人。その容姿から雰囲気の、どれを取っても、明らかにカタギでは無いし、普通の人間かどうかも怪しそうな連中だ。

　アリスは双子を見て、直ぐにあれがベイツの所から来たと解った。けれど突然の事に、体が動かない。恐怖で神経代わりの銀糸が電気信号が上手く伝えず、脚も腕も、思考を含めた機構とは関係無く小刻みに震えて仕方が無い。
　ただ、先に酒場に居た連中の方も唐突であった為に、唖然としたまま誰も身じろがなかった。
　互いが互いに驚き、どうしたものかと判断に迷っている。
「何だい何だい、わざわざ街を練り歩く事も無さそうじゃなぇか。」
　その凍った空気を最初にぶち壊したのが、双子の配下の一人だった。薄汚れた鹿革のジャケットを羽織ったカウボーイ風の大男で、腰には左右二本のガンベルト、そのどちらにも妙に長い銃身をした拳銃を挿している。髭は無いけれど若くは無く、被った茶のテンガロンハットからは水牛（バッファロー）に似た二本の角が伸びている。どうやらそれは頭部から直接生えている様だった。

体が動かせぬだけに冷静にアリスが判断したのとほぼ同時に、そいつは歩き出す。
「さぁ来るんだお譲ちゃん。ベイツさんの手間を取らせちゃいけねぇぜ。」
　床を軋ませながら小走りに寄って来る姿は猛然としていて、本当に牛の様。
　その様子を凝視しながら、アリスは身を竦ませ、そして擦り寄った。
　共に入って来た、この場に置いてただ一人頼る事の出来る男へと。
その瞬間、彼女は自らの体が浮くのを感じた。
脚が床から離れ宙にあり、そのままばさりと宇宙に呑まれ、いや黒い外套に包まれる。
　そこに僅かながら出来た隙間から、アリスは見た。
　ケインの長い脚が高々と上がり、振り下ろされた黒いブーツが水牛男（バッファローマン）の角を蹴り飛ばすのを。
　男は野太い悲鳴を上げながら仰け反ると、そのままの姿勢で倒れ込んだ。彼の左角は床に突き刺さり、もう片方の角は蹴りと床への衝突に耐え切れず、ぽきりと折れてしまっている。
　まるで猛禽、みたい。
　そうアリスが感嘆するよりも早く、ケインは彼女を抱えて走り出していた。
　誰に遮られる事も無く、彼はあっという間に外へと飛び出す。
時間にして一分も掛かっていないこのやり取りに、何か成す暇も無く見守っていた双子の中国人の片割れ、赤い衣を着た方が、見た目とは裏腹に整った詠語で叫んだ。
「何をしているのです、早く追いなさいっ。」
　その命令によって、何をするべきか思い出した配下の者達が、叫び声を上げながらケイン達を追って、酒場前の大通りへと繰り出してゆく。
　彼らが去った後には、未だ何が起きているのかさっぱり解らない

様子の酔っ払いからマスター、色眼鏡越しに目配せしている赤と青の双子、腹を上にした橋の様な格好で完全に飛びている水牛男、そして憮然とした表情を浮かべているローラが残されていた。

8. 死亡遊戯の立案者達

評判宜しくないかのエドワード・ベイツには、やはり評判の宜しくない手下が居り、彼らはこれまた評判の宜しくない仕事を行っている。報酬が素晴らしい為、その傘下に入りたがる人間もかなり居るのだが、しかしそこには雇われる為の条件が二つ程あった。

一つは当然の如く腕が立つ事、そしてもう一つは、どんな理由であれ異形、異端であるという事だ。前者は元より、後者は、保因者（キャリアー）なのでは、と噂される（本人はそれを否定しているのだが）外見をベイツが持っている為である。彼は、周囲に普遍普通の……彼からすれば容姿端麗な……者が居る事に我慢ならないのだ。

その配下の中でも、眠れる獅子の国からやって来た双子は、ベイツのお気に入りだった。

赤い衣の方がメンシャン、青い衣の方がヤオシー。意味は中国語で『扉』と『鍵』らしいのだが、そんなものが名前として通じるのかは疑わしい所だ。恐らく偽名だろう。それでも、二人一緒に居る姿がぴったりと合っているので、皆そう呼んでいる。その方が東洋の、双子の神秘が感じられて良いし、また『ドア』と『キー』では締まりも悪い。

そんな名前と出身国以外何も知られていない彼らは、それでも長き歴史の果てに培われた技術を持ち、また金が支払われている限りは（と、常々公言している）決して主を裏切らず、職務を忠実にこなす精神も持っている事で、ベイツから最も信頼を置かれていた。側近として他の者達を指揮し、主の護衛から人に言えぬ雑務の処理まで、幅広い仕事ぶりを示している。

ただ、彼らが気に入られているのは東洋人で背が低いから、と言う者も居た。事実、双子の身長は、ベイツよりは大きいけれど他よりは小さい、という程である。

しかし、彼らの技量が高いのも、確かな事だった。

で、無ければ、精鋭七人を連れてこんな所まで来る筈が無い。
「何をしているのです、早く追いなさいっ。」
メンシャンは部下達へ叫ぶと、色眼鏡越しに、鋭い視線をヤオシーへと向ける。
眼は口程にものを言うそうだが、双子である彼らの場合は口以上の力があった。
何をしてでも逃げたアリスを連れ戻せ、というのが主の命令である。それがまさかこんなに早く見つかり、そしてあの大鴉（ネバーモア）が絡んでいるとは、思ってもいなかった。だが、この様な想定の範囲外の出来事が起きる事は予測していたし、その為に七名の部下達を引き連れてきたのだ。一人早々と消えて六人になってしまったが、構うものでもない。白人など、手駒として何かの役に立てばまぁ良い都言う程度の存在に過ぎない。それに、エドワード・ベイツには、現地にて兵を徴収出来る力がある。多くの人間の心を、用意に揺れ動かす力だ。それをよく把握し、助長させる技を、メンシャンとヤオシーは会得している。
一人が相手ならば二人。二人が相手ならば更に大勢を注ぎ込めば良いのだ。
彼らは僅かに頷き合うと、扉では無く酒場（サルーン）の中央目掛けて走り出した。
群集の眼が一斉に向く中、一気に駆け抜け、跳躍。
空中にて二人同時に一回転し、開いた脚で勢い良く卓を踏み鳴らして立ち並ぶ。
突然の奇行に皆の意識がそちらへ向く。水牛男（バッファローマン）の呻き声など、誰も気にしてはいない。
所詮は白い猿の群れか、と内心嘲笑いながら、双子は徐に跪くと、
「あそこに居られたお方こそ、親愛なる我らが主の麗しき来客、アリス嬢。」
「姿が見えぬ故探しに出れば、何と、かの大鴉が手の中に居られる

ではありませんか。」
「救いに迎えし我らの同胞も、これこの様に一蹴されてしまう始末。」
「直ぐに追った者達は六名。しかしそれとてあの者相手に叶うかどうか。」
「ならばこそ、ここに畏まって申し上げましょう。」
「我らが主と客人が為、この任に協力してはくれませんか、と。」
大仰な手振り身振りを加え、詠うが如く浪々と、そう交互に叫んだ。
突然の申し入れに、巣窟はざわめきで満たされて行く。
「勿論、何の報酬も無く奉仕してくれ、とは申しますまい。」
すっと立ち上がると、メンシャンは手を鳴らした。それに合わせ、跪いたままのヤオシーは、絶えず持っていたしっかりとした皮製の鞄を置くと、それを開けて中身を見せる。
「我らに協力して頂ければ、こちらを進呈致しましょう。」
そこに入っていたのは、整然と並んだドル紙幣の束だった。具体的に幾らあるかは解らないが、それでも全部合わせれば、半生は遊んで暮らせそうな位はある。染み一つ、皺一つ無い真新しい表面からは、独特の香りが匂い立ち、まるで媚薬の様に、周囲の者達の心をくすぐった。
酒場の一方ではどよめきが、もう一方では生唾を飲む音が響き、
「おいこれ本物かっ？」
「ええ、勿論本物ですよ。」
「あの娘を取り戻せば、これをくれるんだな？」
「その通り。我らが主、ベイツ氏は惜しげも無くそれを提供するでしょう。」
最も近くに居たカウボーイらしき一団が、辛抱ならんとばかりに紙幣へと躍り掛かる。
そんな彼らを見下ろしながら、尚穏便な口調で放たれる双子の言葉に、男達は叫んだ。

「そんな事でぃいなら、やってやるぁよ。」
「おぉおぉ、ベイツさんの頼みなら何だって聞くぜっ。」
彼らの叫びが口火となり、俺も、俺もと、ゴロツキ達が名乗りを上げた。
その様子に、双子は気取られぬ様、長い袖で口元を隠しながらほくそえむ。
意識の隙を付け込む大胆な演技。慇懃でありながら壮大で、巧みな口振り。相手が悪で、それを成敗する自分達は正義だという言い分。そして価値を、数量という最も解り易い形体にまで還元させた、金という存在の、大量極まりない額の提示。
これがベイツの力を利用した、双子の技である。
ものの五分と掛からずに、酒場に居た者達の凡そ半分は、彼らの配下となった。
愚かな民衆は虚言を真実と受け取ったのだ。元より、真実などどうでも良い連中である。騙す事など造作も無いし、そんな連中を騙す事に痛む心などある訳が無ぃ。
「ヘイヘイ待ちな、お前ら。」
そう己の成果に満足していた双子の前に、思わぬ邪魔が入り込んだ。
『負け犬達の巣窟(レザボア・ドッグス)』がマスターである。
彼は黙って演説を聞いていたが、とうとう我慢出来ずに口を開いた。
「俺様の店のテーブルに土足で立っているそこの怪しぃ中国人の言う事が、仮に正しくて本当にその金を渡してくれたとしても、あのいやらしいベイツが今回に限って凄ぇ敬虔深かったとしても、だな。お前らが相手にしようとしているのが、誰だか忘れるのは良くないぜ。おい、お前ら全員良く知っているじゃないか、あいつの噂は、よ。」
その言葉に、彼方此方から、うっ、という呻き声が上がる。
「……大鴉。」

誰かが思わず呟いた、その言葉が全ての答えだった。
思わず忘れていたが、敵は泣く子も黙るあの化物なのだ。
仮にここに居る全員が一度に挑んだとしても、勝てるかどうかすら解らない様な。
「ま、そういう事だ。おい、そこの中国人ども。うちの客を妙な事に巻き込まんでくれや。」
額を輝かせて、マスターはそうメンシャンとヤオシーに言う。結局の所、彼が言いたい事は最後の部分に集約されており、暗に厄介事は御免だと言っている訳なのだが、確かにその通りで、誰もが押し黙ってしまった。
表情こそ乏しいが、腸が煮えくり返る思いで、双子は色眼鏡越しにマスターを睨む。
後もう少しだったというのに、この禿が全く余計な事を。
きつく結んだ唇の中で、彼らはぎりっと奥歯を噛み締めた。
辺りが、無音に沈んで行く。

「あら皆さんお忘れですか？」

そんな中、凛と透き通った声が響いた。
マスターも双子も含めたその場の全員が、声が聞こえて来た方を向く。
カウンターの端、階段に最も近いその場所に、銀髪の美女が微笑んでいた。
細身の体に似つかわしくない派手な衣装を着た彼女の耳は、長く鋭く尖っている。
「あんた確か大鴉に囲われてたエルフじゃねぇか。」
「おい。一体何を忘れてるのか、教えて貰おうじゃないか魔女さんよ。」
静寂を破った銀髪のエルフに、男達は侮蔑と、そして歪んだ欲望が弄り混じった視線を送りつつ、口々に叫んだ。それでも彼女は、

微塵も顔を動かさずに、
「嫌だ、本当に忘れちゃって。噂ですよ、噂。大鴉の、最も良く聞く噂、です。」
そう言う。
噂、という言葉に、皆一様に頭を捻った。
大鴉に纏わる噂。
凡そありえないが、しかし実際に遭遇すると信じたくもなる噂。
曰く、地獄の悪魔の息子である彼は、老いる事も死ぬ事も無い体をした黒い怪物あり、父から与えられた、放った弾丸が必ず命中する魔法の拳銃と、魔神が産み落とした八本脚の馬を持って、戦士の魂を捕らえて回っている狩人で――
「では聞きますが、貴方達は戦士なのですか？」
皆がその噂について思い出した丁度その時、狙い済ました様に美女は言う。
「俺達が臆病者（チキン）だって言うのかいっ？」
「いいえ、違いますわ。そうとは言っていません。」
鉱夫の一人が声を荒げるのを、やんわりと受け流しながら、彼女は続ける。
「私が言いたいのは、貴方達は善良なる市民だ、という事です。」
そして、ちらりと双子の方を見て反応を伺いながら全員に聞こえる様、
「思い出してください、あれはこの方々の勇敢なお友達を殺す事無く、皆さんの前から逃げ出しました、一目散に、です。解りますか？　逃げたのですよ、貴方達から。あれは、あれこそは臆病者であり、悪党しか殺せない生き物なのですよ。殺しても、誰からも文句を言われない、同じ穴のムジナしか、です。でも、貴方達は違うでしょう？　哀れで可哀想な、そんな少女の為に立ち上がろうとした、貴方達一般市民の方々は。」
言い終えると、酒場中を見渡し、ふふっと微笑んで見せる。
群衆は、そういえば、と、その微笑に釣られる様に、水牛男へと

視線を向けた。片方の角を蹴り折られ、今もまだ意識戻らぬままとはいえ、命までは取られていない。最早二度と（ネバーモア）逃げる事叶わぬと言われた、あの化物が彼を逃したのだ。そして、逆に自分が逃げ出した。

　これはもしや、いやまさか、というどよめきが辺りから立ち上る。そしてメンシャンとヤオシーは、彼らの動揺を見逃さなかった。

「彼女が我々の言いたい事を代弁してくれました。」

「勿論、手元にあるお金はほんの心ばかりのもの。」

「アリス嬢を連れ戻した暁には、」

「ベイツ氏はこれよりも遥かな謝礼を与えてくれましょう。」

「「さぁ如何か、我らが街の素晴らしき民達よ。」」

　双子の声を聞いて、皆一様に黙り込んだ。

　そうして、暫くの沈黙と、時が過ぎた後で、

「……動かぬ訳が無ぇ。お前らそうだろっ。」

　双子の言葉を受けて、カウボーイがグラスをテーブルに叩き付けつつ立ち上がった。

　それを皮切りにして、一斉に賛成の歓声が沸き起こる。

「皆さん。あれに慰み者にされていた私からもお願いです。どうか、彼女を助けてください。」

　エルフが手を組んでそう嘆願するならば、正に火へ油を注ぐ様なものだった。

「おうとも、任せろエルフの姉ちゃん。」

「怪物退治の始まりだぜ。」

　男達は獲物片手に叫び合うと、鞄の中から札束を掴み取っては、次から次に外へ飛び出した。ろくな裏付けも無い論理だが、それでも彼らの最後の堰を断ち切るには十分過ぎるものだった。自分達だけは安全、という勝手な思い込みを胸に、自称善良なる市民は馬か、或いは己の脚で持って駆けて行く。

　その様子を、まるでやんちゃな我が子を見ている様な表情で見送る女性に、マスターがその額に皺を寄せながら、徐に尋ねた。

「……おいローラ。お前……何でそんな事を言ったんだ？」
彼は知っていたのだ。
自身や他の皆が何と言おうとも、この娼婦だけはあの男の味方であった事を。
「はい？　マスター、そんな事とは何でしょうか。」
「何、ってお前、そりゃ……。」
マスターは更に口を開こうとして、しかし押し黙ってしまった。
銀髪のエルフ、ローラが浮かべている笑みが、尋常ではない事に気が付いた。
「おかしな人ですねマスター。困っている人を助けるだなんて、当たり前じゃないですか。」
「……お、おう。」
精巧に造り込まれた仮面の如き微笑みの前にして、マスターは何も言う事が出来ない。嫌な汗が、つぅと一筋、その額から滴り、カウンターの上に落ちた。
「それが本当かどうか、」
「我々も聞きたい所ですね。」
そんな彼らの元に、メンシャンとヤオシーが現れる。
この女によって当初の目的は達した。だが、話を聞く限り、彼女は大鴉の愛人。
ならば何故、こんな愛人を売る様な真似をしでかしたのか。
黒のレンズを通してでも尚鋭い眼光を前にして、マスターはたじろぐ。
「あら……でも、大した事じゃありませんよ。」
だがローラは、あの仮面の笑みもそのままに、こう言ってのけた。
「泥棒子猫（プッシー）も、それに騙される様な人も、あれ位やらないと懲りない、でしょ？」
「……成る程。」
「そういう事ですか。」
そんな風に、ろくでも無い単語をのたまう彼女に、双子も笑って

頷いた。

　要するに、痴情の縺れだ。それならば、よく知っている。どれだけ時が移ろい、場所が変わろうとも、男と女が居る限り、決して無くならない、世のいざこざの元凶が一つだ。

　そしてこの女は、傾国の美女と呼ばれる類の存在に違いない。男達を翻弄し、引いては大国すら揺るがす、獰猛な英雄殺し（マンイーター）だ。

「えぇ、はい。」

　未だ笑ったままのローラを見ながら、メンシャンとヤオシーは同時に同じ事を考えた。

　エドワード・ベイツや我々、そしてこの街の者達に追われるよりも。

　この女一人を敵に回した事の方が、余程恐ろしいのではないか、と。

「この恩は、機会があれば必ずや返されましょう、我らが主によって。」

「解りました……ともあれ、貴女には協力して頂き、感謝します。」

「えぇ……それでは、我らも彼らを追いましょう。」

「それは楽しみですね。」

「何時かまた、時が来れば、その時にでも。」

　すっと袖の中に腕を入れてお辞儀をすると、二人はざっと一歩後ろに下がった。

　そして振り返ると、音も無く走り出し、スイングドアの隙間からさっと外へと消える。

　まるで目の前の、か弱きエルフから逃げ出すか様に。

「……本当に、良かったのか？　ローラ。」

　後に残されたマスターは、やはり佇んだままのローラに、恐る恐る問い掛ける。

「ええ、良いのですよ、これで。」

　そう応えた彼女の顔からは最早笑みが消え、驚く程表情の無い顔が浮かんでいた。

9. HELLOWEEN TAWN'S BOOGEYMEN

衝動があった。
感情の突然の隆起によるあの衝動だ。
それに押し流される様に、ケインは動いた。
例の如く、何か考えがあって行動した訳では無い。気が付けば彼の脚は高々と上がり、アリスをその外套の下で抱きながら、水牛男(バッファローマン)の角目掛けて蹴り込んでいた。
その行為に周囲は呆気に取られたが、それで止まったのは自身も同じだった。
が、硬い感触がブーツの踵を通して脚へと伝わった瞬間、ケインは直ぐに我を取り戻す。
そうして床に脚を降ろすと同時に、出口目掛けて走り出していた。
逃げなければ成らない。
まさかもう居るとは、それもこんなタイミング良く追っ手に出くわすとは思ってもいなかったのだが、何時までも驚いている訳には行かない。気付かれた以上は早々に離れなければ。
ケインはスイングドアを肩で押し開き、外へと飛び出した。
その勢いを殺すこと無く、アリスを小脇で抱えながら大通りを駆ける。
次の瞬間には、案の定二人を追って、何人かが酒場(サルーン)から現れた。
振り向いて見えたのは、あの七人。正確にはあの蹴り倒した一人が居ないので、六人と言うべきか。彼らは、走り去って行くケインの後姿を認めると、ある者は馬に跨って、ある者は己が脚を使って、二人を捕らえようと追い駆けて来る。
けれども、ケインの脚はなかなかに速かった。
彼は常人と比べて桁外れの身体能力を持っているが、中でも脚力には自信がある。幸か不幸か、挑む事よりも逃げる事を優先し、この大陸を渡り歩いて来た幼年期の経験によるものだ。

実際、彼我の距離は開き続けている。
人の走りは元より、馬に乗るのに戸惑っている間にも、ケインは走り続けた。
行き交う人々の視線を受け、彼らを掻い潜りながら、目指すのは街の外の荒野だ。
そこには彼の愛馬が居る。八本脚という奇形によって、無意味に他の人や馬を驚かさぬ様、普段それは放し飼いにされている馬だ。だが一人と一匹の付き合いは長く、呼べば必ずやってくる関係だから、何の問題も無く解放されていた。
このまま何事も無く荒野に、少なくともその近くに来れば。
情念が蒸気となって噴出し、脚という機関を猛烈に動かして行く。
その時、蹄の音が彼の耳に届いた。
しかも程近くに、ますます強まる音として。
ケインは決して脚を止める事無く、僅かに後ろを向いた。
確かに距離はあった。
追っ手の足取りは遅く、その前を行く馬も漸く本調子になるか否か、という所である。
ただ一頭を除いて。
或いはそれは、一人というべきかもしれない。
何故なら、その茶馬には、騎手が居なかったからだ。代わりに、本来馬の頭がある筈の場所から、ポンチョを羽織った男の上半身が生えている。
茶のテンガロンハットを被り、枯藁の如く髭を蓄えたその姿が、ガウチョを思わせる男だ。
そして彼の両手には、鉄の柄をした一本の槍が握られている。
ケンタウロスはそれを振り翳すと、通り際にケインへ向けて振り下ろした。
ケインは反射的に踵で急停止を掛け、帽子を押さえながら屈み込む。
先程まで頭があった場所を、ぶぅんと棒が通り抜けた。

そのまま本体も通り過ぎる、かと思いきや、半人半馬の保因者は少し前まで来ると、前脚を地面へと打ち込み、それを軸にして横周りに反転、ケインの方へと向き直る。
線では無く点として、星の如く刃が煌いた。
舌打ちしつつ、突き出された槍を、ケインは横へ飛んで避ける。
そのまま、家と家の間、小路へ至ると、脇目も振らずに駆け出した。
狭いこの道ならばあのケンタウロスも付いて来られまい。
が、しかし、彼の顔は苦りきっていた。
これで最短の道は閉ざされてしまったのだから。
どれだけ早かろうと、人の身で馬の脚には適わない以上、後は迂回して行くしかない。
そうして小路を抜けて、隣の通りへと彼は一歩を刻み、
「……ケインっ……。」
アリスの声で、はっと、視界の隅でちらつく人影に気が付いた。
首を傾ければ、先に走って来た方角、通りの奥に、男が立っているのが見える。
無帽且つ無毛の大男だ。汗ばんだ頭部が、太陽の光に寄って卵の様に光り輝いている。体には踝まである長いコートをきっちり襟までボタンを締めて羽織っていた。ただ右袖だけは肩口からごっそり切られていて右腕が露見している。厳密には腕では無い。左腕と比べて遥かに太いそれは、赤錆びた鉄の部品で構築された筒状のものであった。肩部には酒瓶大の金属缶が装着されており、その反対側の先には拳大の穴が穿たれている。
男はその穴の先を、左手で支えながら、ケインの方へと向けていた。
一瞥でそこまで把握したケインの全身から、嫌な汗が湧き上がる。
先回りされていた事、もう既に狙われていた事、そして男の装備が、圧縮された蒸気を火薬代わりに用い、高速で発射する蒸気銃（スチームガン）である事に気が付いたからだ。

そして彼が二の足を踏むより早く、男の右腕が白煙を噴いた。
後方部に配置されたピストンが上がって猛烈な蒸気を噴出し、その圧倒的圧力によって押し出された細い杭状の弾頭が、ケイン目掛けて飛来する。
ほぼ同時に、彼はアリスを抱える手に力を込めると、一歩を踏んだ脚で持って跳躍した。
彼女の小さな悲鳴が腕の間より毀れる中、中空で回って行くケインの脚元を、白い影の様なものが通り過ぎ、視界から姿を消す。
何処か遠くで鋭い着弾音がする中、ケインは両脚を地面に付けた。
と、先に着地した左脚が行き成り沈み、彼は体制を崩す。
今度は何だっ。
そう視線を下へと向けると、ケインの左足に無貌の仮面を付けた男が、乾いた砂より裸の上半身を剥き出しにしてすがり付いていた。
仮面を付けていたにも関わらず男だと解ったのは、その露出した体の所為だ。男の胸に脂肪は一切無く、筋張った筋肉が見えた。ただ、男というのにもまた抵抗がある。妙に生白い肌はまるで亡者であり、そいつが脚を抱えて押さえ込んでいる姿は、冥府へと生きる者を引き摺りこまんとしている様だったからだ。
生理的嫌悪が背筋を走り、ケインは咄嗟に後ろ腰へ手を向ける。
だが直ぐに抑えると、代わりに、掴まれたままの左脚を踏み込んだ。
引き摺り込むならばそうすればいいとばかりに力が入ったそれによって、仮面の男はずるりと離れて地中に潜った。尤も手応えは幽霊の様に薄い。自分から放した様だ。
その間にも大男は第二射を放とうと新たな金属管と杭を懐から取り出しており、またケインの後ろ、通りの向こうからは、騒々しい蹄の音と共に甲高い叫び声が聞こえる。あのケンタウロスが、挟み撃ちにしようと回り込んで来たのだ。
どちらへ行こうとも、敵と相対しなければならない。しかも地面の下には、保因者（キャリアー）なのか義体遣いなのか良く解らないが兎に角奇怪

な男が潜んでいる。留まっても居られない。
進退窮まった彼は、一度元来た小路へ戻ろうと跳んだ。
そこに二つの衝撃が襲い掛かる。
一つはケイン自身を向かいの壁まで叩き込んだ。
もう一つはその体からアリスを引き離して行く。
眉間に深々と皺を刻みつつ、彼は己を抑え付ける相手を見る。何処か狼を思わす若々しい青年であり、刈り込んだ金髪の下で、獰猛そうな瞳が青く輝いている。彼の左腕、肘から先は機械で、段々状になった装甲と鋭い刃と化した指を煌かす義腕だ。不意を付いたとは言え、ケインを倒したその力は、通常よりも出力を上げられた戦闘用の義体に違いない。今もまた気を抜くと、押し込まれた装甲によってそのまま潰されてしまいそうだ。
もう片方、アリスを抱えて、大男の方へと走るのは、しなやかな躯をした黒人女性で、背中まで届く程度の黒髪を、根元で縛り、一本の束にしていた。そんな髪が覆う頭部と、皮のパンツに包れた腰からは、それぞれ黒い、尖った耳と長い尻尾が生えていている。
その耳と尻尾を揺らしながら、怪猫女(キャットウーマン)は風の様に駆けて行く。
僅かに振り返り、黄緑色の猫目を笑みで歪めて見せながら。
ケインはその表情を見ていなかった。目の前で口を歪ませている金髪の青年でも無い。
彼は、ただアリスを見ていた。驚きに眼を見開き、そして手を伸ばそうとしながらも決して届かず、ケインからどんどん離れて行く少女の方へと。
胸から頭へと熱い血が上って行くのを感じる。
同時に不吉な言葉が、不気味な羽音と共に幻聴として耳元へと届く。
説明出来ぬ、そもその必要の無い感情が沸き起こるのを堪えながら、ケインは青年との間に膝を捻り込ませると、ブーツの裏を見せ、その腹目掛けて思いっ切り蹴り込んだ。
左腕以外はどうやら生身らしい青年は、彼から引き離され、後方

へと吹き飛んで行く。
その体は、走り込んで来ていたあのケンタウロスに当たった。
まさかそんなものが来るとは思わなかったのだろう、もろに食らった半人馬は、衝撃にぐらりと揺れて、青年ともつれ合う様に崩れ落ちる。
彼らが完全に地へと倒れる前に、ケインは走り出していた。
こうしている間にも距離を離して行く黒人女を、それが浚って行くアリスを追って。
だが数歩脚を動かした時、彼の背後で土が盛り上がった。
気配に気付いて振り返ったケインの目の前に、白い影が覆い被さろうとしている。
先に脚へとすがりついた、あの仮面の男だ。地面の下から魚の様に飛び上がったその姿は、太陽の光に晒されると、ますます生白さが映えて、薄気味悪い。しかもそいつが背中にしがみつくというならば尚更だ。耳障りな呼吸音を仮面の中で発しながら、怪人はケインの体を抱え込み、放そうとしない。その力の強さは万力のそれだ。
だがそんなものなどまるで無いかの様に、ケインは疾駆する。
更に万力の腕を強引にこじ開け、そして掴むと、先の青年と同じ事をした。
目の前を行く女を目標に、投擲武器として投げたのである。
放射線を描いて飛んで行く白亜の怪人を、ただ進む怪猫女は気付く事が出来なかった。
命中すると彼女は、悲鳴を上げて前のめりに倒れ込む。
その腕からアリスが離れたのを、ケインは決して見逃さなかった。
韋駄天と形容出来る速度で走り寄ると、彼女を抱え込み、一気に駆け抜ける。
立ち止まる訳には行かなかった。
まだ目の前には、あの大男が待ち構えているのだから。
敵味方入り混じった乱戦の中で引鉄を引けずに居た男は、一人抜きん出たケインに向けて、その銃口を差し向けた。新しい缶も杭も

装填済みで、後はもう撃つだけである。
　そして今、蒸気を吹き上げようとする銃へケインは詰め寄ると、がっと下から蹴り上げた。
　前から上、どころか返って後ろへと傾いた銃身が、大男の鼻頭をしたたかに打ち付ける。
　その反動で発射された弾頭は上に、噴出された蒸気は地面へぶつかり周囲へと広がった。
　予期せぬ、だが姿を眩ますには絶好の隠れ蓑だ。
　ケインはアリスを抱える手に力を込めると、だっとその中を駆けた。
　方角的には逆になるが、ここまで露見したからには仕方が無い。一度姿を消さなければ。
　その時、白い霧の中を銀色の光が煌いた。
　くんとケインの脚が止まり、アリスが息を呑む様な声を上げる。
　彼の背中を鉄の矢が貫いていた。銀で覆われた鏃は胸を通り、アリスの眼前に飛び出る。
　まだ敵が居たのかと、歯を軋ませながらケインは視線を後ろへと向けた。
　未だ立ち込める蒸気の向こう、口髭を鋭く立たせた男が小路から抜け出て、立っていた。灰色がかったハンティング帽とインバネスコートを身に付けた彼の右の眼孔には、瞳の代わりに赤いレンズが嵌められている。本物らしく見せる事を排除し、機能のみを追及した望遠機能付きの義眼だ。更にその両手には、今ケインを撃ったばかりらしいクロスボウが握られている。
　思わぬ伏兵が居たものだが、しかし、彼は再び走り出していた。
　幸い、矢は心臓には触れていないし、鏃を覆う銀もケインは効かない。少なくない保因者が銀を苦手とし、触れただけで死に至る者すら居るのだが、彼に取っては唯の金属に過ぎない。
　そうしてケインは、追っ手達が起き上がろうとするよりも早くに、白い闇の中へ身を潜ませると、一旦身を隠す事が出来る場所を目指

した。矢を抜く事も、機を待つ事も出来る場所へと。
「……ケイン、怪我、は大丈夫……？」
だが、敵に見つからぬ安全な場所でも、前者を行う事は出来かねた。
ケインはそうやって心配そうに身を寄せているアリスに薄っすらと微笑みかけた。
「嗚呼……嗚呼、アリス。大丈夫だ、心配するな。」
先に通った小路と似た様な場所に置かれた樽の陰に座りながら、
その背中には、依然として鉄の矢が突き刺さっている。弾丸の様に勝手に出て行くには形質的に不可能である事、刺さった角度が力の入れ難いものである事、抜く事を手伝えるアリスが全くの非力である事によって、そのままにされているのだ。しかもケインの肉体は既に回復を始めており、共に癒着しようとしている。大鴉（ネバーモア）の体質を相手が知っていたかどうかは解らないが、なかなかに厄介だ。本格的に抜こうとすれば、ちょっとした荒治療が居るだろう。
ただ、傷がそうである様に、痛みももう消えており、矢が刺さっていようとも、多少動き難いだけで、最早別に気にならないレベルではある。一つ残った問題は、
「……ケイン……あの、やっぱり、いい、わ……。」
この、人形と呼ぶには余りに人間過ぎる少女に多大な心配をさせてしまう事だろう。
「……何がいいんだい、何が。」
そうやって俯くアリスへとケインは体を向ける。
彼女は、本当に申し訳なさそうに下を向いたままに続ける。
「……うん……こんな、無理して……帰れ、ないわ……だから、そう、私は戻る……。」
その言葉に、ケインは肩を竦ませた。
「こんな矢なんて大した事じゃない。あの追っ手も、心配要らない。」

寧ろ、そんな悲しそうな顔をされる事の方が、辛いというものだ。

彼は微笑み、少しためらった後、アリスの艶やかな黒髪で覆われた頭を撫でた。

「……でも……ん……。」

アリスは尚も何か言おうとしたが、だがケインの手が自身を触ると、黙って眼を細める。

そうして暫く撫で続けていると、彼は唐突に立ち上がり、

「大丈夫だ。さぁ、行こうか。愚図愚図していると、日が暮れてしまうよ。」

そう言って、彼女の方へと右腕を伸ばした。

まるで熟練の音楽家が如き指をじっと見詰めていたアリスは、こくりと頷くと、

「……解った、わ……。」

その腕に収まり、身を摺り寄せる。

ケインは外套で再び包み込む様に抱き上げると、再び小路を歩き出した。

ここにやって来てから、まだ余り時間は経っていないだろう。精々十分から十五分だ。そして、これ以上居続けるのは厳しいものがある。あの六人の者達が、見つけ出してしまうとも限らないし、それに早く出なければ援軍を遣されるかもしれない。防衛戦、撤退戦を強いられた事もあるが、六人だけでも十二分に苦戦した。更に増えれば、どうなるか解らない。

自分の弱点が数である事は、ケイン自身一番良く解っているのである。

特に今、この腕の中にアリスが居るならば尚更だ。あの六人はどう控え目に見ても、自分とアリスの見境が付いていなかった。ケインが上手い具合に避けていなければ、大変な事になっていた攻撃も少なくない。目的はこの少女を奪還する事にある様だが、その手段が激し過ぎるのだ。一体何を考えているのか、さっぱり解らないが、しかしこれだけは言えよう。

この街に長く留まる事自体、避けねばならない。
そんな思いを抱いたまま、ケインは小路から抜け出た。勿論ちゃんと周囲は観察済みである。見た所、あの六人の姿は無い。居るのはただ道行く市民達だけである。
そして建物の隙間から彼が姿を現した時、何気無く歩いていた一人の親父が脚を止めた。
何処にでも居る様な、赤ら顔の中年だ。特に書き示す事も無い様な、どう見ても普通の男だ。
どうしたんだこいつ、と訝しがりながらも、ケインはその前を通り過ぎようとする。
親父が叫んだのはその時だ。
「なっ。」
「大鴉、大鴉がいたぞっ。」
ケインは驚き、思わず脚を止めてしまった。今まで遠巻きに見ているだけの、ただただ罵詈雑言を零すだけの市民が、こうやって干渉する事など、まずあるものではない。
しかもそれが、護身用の小さなものとは言え、銃を取り出し、向けるだなんて。
何が起きているのか解らなかったが、だが見覚えのある虚空の穴に、ケインの体は反応していた。千鳥足ながらも差し向けられたデリンジャーを、彼の脚が蹴り飛ばす。
更に振り下ろす脚で親父自身に止めを誘うとした時、ケインは周囲の連中までこちらを注目している事に気が付いた。本人へ気付かれぬ様に横目、では無い。事実、こうしてその視線に察しても、尚彼らは顔を背けないのだから。
嫌な予感がした。長い間感じた事の無い、嫌な予感だ。
と、群集の中から、何人かのカウボーイ達がこちらへと向かって来るではないか。
それも銘々、何かしらの獲物を携えて、
「見つけたぜ大鴉、こんな所に居やがったかっ。」

「あいつの言う事は本当だったな、獲物を持ってもいやがらないぞこいつ。」
などと訳の解らない事をのたまいながら。
だが何と無く、どうなっているかは解り始めたケインは、アリスを抱えたままに向きを変えると、腰を抜かしている親父を越えて迫る男衆に背を向け、小路を戻り始めた。
駆け抜けた先、隣の通りに脚を踏み入れても、反応は変わらない。
「うぉぅ、大鴉だ、大鴉を見つけたぞっ。」
「へイ黒いの、その娘を置いてさっさとお縄に付きなっ。」
隠れて侮蔑を送るか、何とか無視しようとするかのどちらかだったこの街の住人達が、自分に向けて襲って来ている。銃を、中には札束を持って。
戻る事も出来ず、飛んでくる銃弾に当たらぬ様、低姿勢で走りながら、ケインは察した。
時を待って敵をやり過ごすなどと言っている間に、敵は策を巡らせていた。
援軍、それも、余りに到着の早い援軍。
どんな風に焚き付けられたかは定かでは無いが、街一つが明白な敵と相成ったのである。
何度かケインは同じ眼にあった事があるから解る。この反応は、以前受けた事があった。何ら罪を犯していなくとも、気に入らないという理由で賞金を掛けられた時の周囲の反応だ。異なる事を理由に、異なる者の全てを、自分達の生きる糧としても何ら問題では無い、という。
そして、その時にした選択は、やはり逃げるだった。降り掛かる火の粉は容赦無く払う彼であっても、相手が火で無いのなら、手を出す事は出来ない。それに何度も、何度も言っている事だが、アリスが居る以上、取れる選択肢など、最初からその一つなのだ。
そうこうしている間にも、追っ手気取りは増えて行く。
多分、もといまず間違いなく金に釣られた連中だ。こちらがただ

立ち向かわないというだけで、大鴉が何であるかを忘れてしまっている様な輩だ。しかも中には女子供の姿すら見える。
彼らを乗せた者達を恨み……その中にあの彼女が居る事など、彼は夢にも思っていない……簡単に乗せられている者達を愚かと断じながら、しかしケインは逃げ続けた。
通りを下り、小路を抜け、時に戻り、また進んで。
だが、一向に街の外へ行く事が出来ない。
気が付けば、辺りは彼を探す者達で溢れていた。噂が噂を呼んで増えているのだろうが、何処を行っても、彼らと出逢い、追われ、逃げ隠れする羽目になってしまう。
ただでさえ目立つ風貌の上に、しかも今は矢が刺さっているのだから、目印としては最適だ。
これではもうどうしようもない。
つぅと一筋の汗を垂らし、荒い呼吸を上げながら、ケインは思った。
後方には十数人、下手をすれば数十人の群集が押し寄せている。性別も年齢も職業も、また武装もばらばらだが、同じ一念の者達だ。まともに手出し出来ない上に数だけは居るというのだから、あのけばけばしい、馬鹿げた六人よりも性質が悪い。ふと見れば、あのでっぷりと太った保安官(シェリフ)まで混じっているのだから余計にだ。
「……ケイン、あの……。」
「今は何も言わないでくれアリス。」
それに苛立ち、つい言動も厳しいものになってしまう。姿は見えなくとも俯くアリスの気配が感じられ、彼はますます己に苛立った。余程、鬱積が溜まっているらしい。
かくなる上は仕方が無い。
通りを走るケインは、行き成り小路へと入ると、そのまま全力疾走した。
待てぇだとか、この野郎だとか叫ぶ者達を放し、ただ立っている者達には風としか捕らえられぬ速度で傍を抜けて、彼はある所を目

指していた。
このままでは、二人とも無事に街を抜ける事など出来はしない。その前に、疲労の末、追い込まれる。市井の軍勢にか、あの六人組と再び出逢ってか、或いはその両方によって。
ならば、やはり時が過ぎるのを待とう。
この街では、ローラの次に心許せる者の所で。
関係無い者を巻き込みたくなど無いのだが、もうそうとも言っていられない。
でなければ、それ以上の方法で巻き込んでしまう。
ケインは走った。走り続けた。誰一人として自らがそこに入る事を悟られぬ様に。

そうして彼は、漸くに目的の場所へと辿り着いた。
追っ手を掻い潜り、突き放し、そして裏口から一気にさっと入り込む。
閉じた扉の向こうで、野次が通り、駆けて行くのを聞きながら、ケインはその場にへたり込んだ。幾ら体力自慢とは言え、これ程までに走り続けるのは容易な事では無く、
「大鴉。偉い疲れてそうな所悪いんだが、お前勝手に人んち入って来て何様のつもりでぇ？　それからそこのお嬢ちゃんは、何だ、とうとうエルフの姉ちゃんに捨てられたんかお前。」
パイプを咥え、そう呆れ顔で尋ねる小柄な老人にも、まともに応える事が出来ない。
「……いやその……その前に、何様ついでだが一つ頼みたい……事がある……。」
「何でぇ、言ってみろ礼儀も知らねぇ馬鹿鴉。」
額から垂れる汗をアリスが服の袖口で拭く中、足りない酸素を取り込もうと喘ぎつつ、ケインは言った。掠れて聴き取り難い声ではあるが、はっきりした調子で持って。
「……飲み物をくれ……出来たら・・・是非濃い珈琲を・・・・・

・。」

１０．珈琲と煙草

その時アリスが考えていたのは、前に考えたものと同じだった。

即ち、このケインという人はどの様な人なのだろうか、というものである。

ただ本質についてはもう察している。

彼女が言っているのは、もっと具体的な部分の事だ。

この人は何の仕事をしているのだろう。

或いは、今までどの様な人生を過ごして来たのかしら。

少なくとも普通の職業には就いておらず、並の生き方もしていない筈だ。

たとえば、あの酒場（サルーン）で自分を助けてくれた時の、そこから逃げた時の身のこなしは本当に兎と騎士の合いの子の様（この発想、我ながら微笑ましいわとアリスは思った）だったし、それにベイツの手先には見えない、ただの街の人達にまで追い回されるのは何か少し違う気がする。追われているのは私の筈なのに、彼らは凄まじい形相で、喉を振り絞りながら、口ぐちにネバーモアという名でケインを呼び、追って来た。銃を撃ってくる人までいた。矢を撃たれた事もあって、それはさっきまでずっと突き刺さっていたのに彼は一向に平気な様だった。

アリスの歯車で出来た頭脳は、一連の騒動をよく知覚し、記憶している。

突然の事に戸惑い、驚き、けれども助けてくれた事を感謝していた。

そこから彼女は、再び思うのである。

彼は一体、どの様な人間なのかしら、と。

そんな思いのままに、アリスは周囲に目を向けた。

ここは、走り回った末にケインが逃げ込んで来た場所だ。具体的にどの様な場所なのかは、裏口から入って来た事もあって良く解らないのだけれど、しかし父の工房に似ている。道具があり、器具が置

かれ、設計図がひしめいている。尤もそれらはどれもこれも使いこまれている上に、また汚れや埃が拭かれる事無く残されている為、あの工房以上に乱雑に見えた。それに良く見ると、設計図に描かれているのはどうやら銃らしい。

その家主は今、向こうでケインと共に何か話している。

背はアリスと同じ位の、痩せた老人で、殆ど脂肪のない肌の至る所に皺が刻まれている。ただ筋肉はちゃんとついているらしい事は、半袖のシャツとズボンという軽装によって剥き出しになった腕や脚を見れば解った。

そんな様相で木製の年季が入ったパイプを咥えている老人と、ケインは話しっきりだ。

彼の表情は、痛く真剣であり、眉と眉の間には皺が深々と刻まれている。

言葉を発する時、珈琲を口に付ける時以外、その唇は一文字に結ばれていて、笑みを称える事が無い。正しくは一回だけあったが、それも直ぐに消えてしまった。

眼光も鋭く老人を見据えたままで、ちょっと怖くもある。

アリスは彼らが何を話しているのか、酷く興味があった。それを聞く事で、名前以外にろくに知らないケインについて、何か知る事が出来るだろうから。

けれどもそれは禁じられていて、彼女は隅で待っている様にと伝えられている。

つまり余程重要な事なのだろう。誰にも聞かれたくない様な。自分を助けてくれる人間に迷惑を掛ける訳にも行かず、アリスは言われた通りにした。

少し残念な事ではあるけれども仕方が無い。

そう考え、更に考察へと歯車を向けながら、彼女は話を終わるのを待ち続けた。

「ふーん・……まぁ何だ、実に七面倒臭ぇ事になってるんだな。」

煙を浮かべてそう言う老人に向けて、ケインは珈琲を啜りながら、頷いた。

この老人、名をジョン・Bという。

彼はそのありきたりな個人名通り、西部の街では必ず一人はいると言って良い銃職人であり、ローラ程では無いが、ケインにとっては心許せる人間である。

ただ正確に言うと、職業的にせざるを得ないのだ。弾丸の調達から銃の整備までを行ってくれる彼ら職人が居なければ、如何な大鴉（ネバーモア）とて荒野を縦横無尽に駆け巡るなどという事が出来る筈も無い。磨り減らない銃も、決して絶えない弾も存在しないのだから。今日の朝出掛けた用事というのも、他ならない、弾丸の注文をしに、ジョンの元まで行っていたのだ。

その意味で彼はなかなかに信頼出来る人間である。職人としての腕前はなかなかのものだ。

それに、せざるを得ないと言いながらも、自分から心許せると述べられるのは、

「で？　どうする。あんたも俺を捕まえるか？」

「馬鹿こくな。誰が好き好んで糞野郎の掌で踊ってやるかってんだ、くっだらねぇ。それにお前は上客だかんな、客に対してんな事しちゃぁ駄目だろっ……ああ、ついでに言やぁ、お前あの銀行強盗ぶっ飛ばしたんだっけな、速攻で。良い事だ、豚保安官よりよっぽど使えるぜ。」

この、品は無いが頑固で、真っ直ぐな性格故である。

腕だけで無く、性根まで職人という訳だな。

ケインはそう思い、僅かに口の先を吊り上げた。

だからこそ、彼はここに逃げ込んできたのである。たとえその関係が商売上の付き合いの延長線上にあるものだったとしても、ケインというよりも大鴉という賞金稼ぎとして見て、接しているのだとしても、こうして僅かな間、身を寄せる位には信頼出来る。背中に突き刺さっていた矢も、彼によって外して貰った。痛みは伴ったが、

ずっと放置しているよりましだ。
ただ一つ文句をつけるならば、繊細さ、もとい気配りが足りない事だろうか。それが職人性とは対極の位置にあるものだとしても、多少なりとも欲しいのが人情というものである。
具体的に言うと、珈琲が薄い。
「所で……俺は確か、濃いものを頼んだ筈だが。」
「はんっ、贅沢言うんじゃねぇよ、珈琲飲めるだけありがてぇと思えよ逃亡人っ。」
その事を言ってみても、こんな風に体よくあしらわれるだけだ。ただ、確かに尤もな言い分なので、ケインは黙って肩を竦めると、再びカップを傾ける。
やはり薄い。
この老人といい、どうも西部の人間は珈琲を薄く入れたがるものらしい。節約の為か何かは知らないが、勿体無い話だ。あの深い香りを、味わいを愉しむ為には、もっと濃く入れるべきだろうに、これでは色付きのお湯を飲んでいる様なものだ。
あのマスターも最初はこんなものを出していたな、とケインが思い返していると、
「で、お前これからどうするつもりだね？」
ジョンがパイプを咥えたままにそう言ってきた。
すっと、カップを口元から放しつつ、ケインは応える。
「……逃げるよ。この街から出て、彼女の父親の元へ行くんだ。」
「はん……俺が言っているのはそんな所じゃねぇぜ。」
首を向けてアリスを指した彼に、老人は鼻から煙を吐き出した。
「聞きたいのは、いいか？俺が聞きたいのは、どうやって、だよ。」
「……それは……。」
ジョンの無遠慮な言葉に、ケインは奥歯を噛み締めた。
外では無数の市民達が、靴を踏み鳴らし、馬を駆りながら、ネバーモアネバーモアと狂った様に叫び回っている。騒ぎから一時間になるかならないか、という所だろうけれども、それが止む気配は一

向に見られない。寧ろ、次第次第に増している様に感じる。
「何時までもここに居る訳にも行かねぇだろ。俺もきっついからよ、そりゃ。」
今はまだ、あの大鴉をかくまう人間が居るとは誰も考えていないのだろうが、こうまで探して見つからなくては、もう街の外へ逃げたか、何処かに潜んでいるとするのが妥当だ。
となれば、外から中へと来る筈。この老人は先にも上げた偏屈な性格の所為で、人間関係に乏しく、ろくな人脈が無い。多分、相手は行き成り踏み込んでくるだろう。正誤の判断が真っ当に付かなくなった連中となれば、それは尚更だ。
長居は出来ない。元よりするつもりなど無い。
が、聞かれて応えられる具体的な案もまた、何も存在しなかった。最初からしてそうだったのであるし、そもそもここに来た事だってやむを得ずだったのだ。
「……。」
「はぁん、何も考えていない訳だ。おめでてぇこったな、お前は。」
ジョンは、ふんと鼻を鳴らしながら、そう言うと、やれやれと肩を竦めてから、
「……おい知ってっか？　人間には、三種類あんだぜ。」
唐突に、そんな事を語り出した。
真意が読み取れず、ケインはただ黙って、そちらの方へと視線を向ける。大鴉の、黄金に輝く竜が如き瞳は、見る者を不安にさせて来たものが、経験豊かなジョンは何も意に介さず、人差し指を一本立てて言った。
「一つ目は、行動する前に悩む人間だな。どうすりゃいいかこうすりゃいいのかって、あーだこーだ考えて、考えてから、ようやっと腰を動かす面倒な輩だ。」
次に中指を、人差し指はそのままにぴっと突き立てると、
「二つ目は、何も悩まずに、行動に移す人間だ。そもそも考えねぇ。考えるよりも先に体を動かして、そんな暇を与えないんだ。こうい

うのは、大抵が早死にするんだがね。」
最後に薬指を、親指と小指を曲げた状態で立てて言った。
「んで、三つ目が、行動してから悩む人間だな。やっちまうのは早いのに、その後でうだうだ後悔しやがる。もう遅いってぇのにな、馬鹿らしい。お前がそれだよ馬鹿鴉。」
「……。」
途中で答えを予測していたケインは、苦虫を噛み潰した様な顔を浮かべる。
確かにその通りだ。
行ってしまった以上、もう後戻りは出来ないのだからそのまま進むしかない。
にも関わらず、ここに来て立ち往生などするに至っている。
それは自分でも良く解っている事だが、しかしそういう人間なのだからどうしようも無く、
「そういう奴はな、基本的にこの西部にゃ似つかわしくない。こんな殺伐とした所は、ね。多分、どっか別の所行った方がいいんじゃないかい？」
そう言われても、返す言葉が無い。元より、あらゆる土地にて忌避され続け、その果てに辿り付いたのがこの西部なのだ。一体、ここ以外の、何処へ行けば良いというのだろうか。
「ま、そうは言っても簡単に行けるもんでも無いんだろうがね……。」
それはジョンも解っている事なのだろう。彼は呟く様にそう言った後は何も語らず、パイプを吹かした。ケインもまた唇を閉ざしたままに、珈琲を啜る。
そうして黒、というよりも濃い茶と言うべき色合いの液体が、カップの半分を切る頃、
「それとは別に、ちょいと聞きてぇ事があるんだが。」
パイプを口から離し、ふぅと煙を吐き出しながら、ジョンが言った。

「どうした。まだ何かあるのか？」
「応とも……大鴉よぉ、何だってお前、銃を抜かなかったんだい？」
更に腰の辺りを指差された事で、ケインの動きは止まる。同時に、カップを掴んでいない方の手を後ろ腰へ伸ばせば、ホルスターから一丁の拳銃を取り出した。
屈強そのものである黒い外見をした回転式拳銃に、二人の男の視線が注がれる。
「……何故抜いていない、と？」
「そいつの整備をこの一ヶ月間ずっとしてたのは何処のどいつだい？　弾丸を作った事もだ。その化物の引鉄が引かれりゃぁ、嫌でも聞こえるさ、あの砲声がよ……まぁ、そうなったらとんでもない事になっていただろうがね。当たれば一発でお陀仏、万が一外れても周りが凄い事になるだろうな……だが、それだけじゃあるめぇ筈だ。そいつを使わなかったのは……あー、名前何っつったっけ？」
「……レイヴンクロウ、だ。」
薄暗い工房の中でも明々と輝く金色の眼を向けながら、ケインは呟いた。

『RAVENCLAW』
それがケインの愛銃の名だ。
銃身長十九インチ余り。
重量凡そ十ポンド。
中折れ型回転式弾倉の装弾数は全五発で、所謂シングルアクションを採用。
使用する弾丸は通常よりも遥かに大きく、火薬も増量した専用弾だ。
この銃は、『保因者相手にも十二分に通用する威力と頑丈さを誇り、また見ただけで相手を委縮させる様な銃にしてくれ』というケインの要望と、量産性を完全に度外視した、多分に趣味的且つ変態的な銃器を造る事で既に当代随一とされている銃職人スタンリー・

Q・ロドリゲスの一世一代の熱狂的職人芸によって生まれた獲物であり、敵対する連中にとっては恐怖の象徴であり、その命を悉く奪ってきた正に大鴉の爪と呼ぶべき銃だ。
あくまでもケインの身体能力に合わせて製造されたというだけで神秘も何も無く、科学すら乏しいのだが、しかし単純にその威力は、悪魔の銃と呼ばれるに足るだけのものを持っている。
恐るべき硬度を誇る隕鉄によって造られたそれより放たれる弾丸は全てを粉砕し、更にその銃身自体、ケインの手によって屈強な剣にも頑強な盾にも変化する。無論の事、それは本来の使い方では無かったが、思わぬ幸運、という所である。。
唯一の難点は、専用の弾を、常日頃から持ち歩いているレシピに則り特注して貰う必要がある事で、その為に職人の技術と設備が要る事だろう。尤もそれは、造り貯めし、また消費したならば直ぐに補給する方針でどうにか補っている。

頑強さを与える為と、大口径による反動を殺す為、墓碑の如く長大化した銃身をケインはじっと眺める。その瞳には、奇妙な憂いが篭っていた。
ジョンは銃から視線を辿り、彼の眼を見て、
「ま、遣わないに越した事ぁ無いんだがな、だが銃が無いとどうしようも無ぇのも確かだろ。何なら、代わりの銃を貸してやろうかい？　勿論ちゃんと金は貰うがね。」
と言うが、ケインは頭を横に振るうだけだ。
それもまた、解っている事である。
射手が獲物を使わなければ、それこそ良い的に違いない。
けれども彼は使わなかったし、また使おうとも思っていない。
ちらりと横目で見た先に居る少女、アリスがその答えだった。
彼女はまだ、大鴉としての自分を見ていない。何十年に及ぶ月日の中で築かれて来た生き方、悔いてもしかし最早どうする事も出来ない人生の先端を見ていない。

故に、アリスの中で自分は唯のケインであるのだ。大鴉では微塵も無く。
その認識を改めさせる気など起こらない。たとえそれが、自己をも巻き込んだ酷い欺瞞であったとしても、彼女に己の正体を知らせたくなかった。
せめて共に居る間は、この銃を使わぬ事を。
そう願いつつ、ケインは肉厚の銃身から目を離し、それをホルスターに戻す。
そして、残っていた珈琲を一気に飲み干すと、がたりと立ち上がった。
「……何でぇ、もう行くんかい？」
パイプから口を離して問うジョンに、彼はぐっと頷く。
ケインは黒のカウボーイハットと外套（マント）を纏うと、空になったカップをジョンへ向ける。
「わざわざ悪かった……世話に、なったよ。」
「はん……構いやしねぇよ、別に。その珈琲もだ、御代は無しにしといてやる。」
言ってにやりと笑いつつ、カップを受け取る彼に、ケインは苦笑いを浮かべた。
そうして彼は、ばさりと外套を翻し、ジョンに背を向けると、アリスの方へと歩み寄る。
息抜きは出来た。喉を潤わす事も出来た。ちょっとした気持ちの整理めいたものも。
ならばもう行かなくては。

じっと眺めているのにも飽いてしまい、ふと見上げた壁際で飾られている幾つかの拳銃に興味を移していたアリスは、ケインがこちらへとやって来る事に気がついた。
どうやら話は終わった様だ。ここも、そろそろ出て行くのだろう。
少しは体を休める事が出来たのかしら。

拭いた汗がまだ乾かず、肌に張り付いている服の袖を見つつ彼女は思った。
そこから黒い体を通り、顔へと視線を送る頃にはケインは目の前に居て、
「さぁアリス……行こうか。」
などと言いながら、笑みを作ってみせている。
アリスはそれにこくりと頷きながらも、彼がまた老人めいて見える事に気が付いた。
吊り上げた口元、柔らかく細まる目元に、拭い切れない疲労が垣間見えた。
この人は、大分無茶をしている。
肉体的にか精神的にかは解らないが、アリスはそう思った。
多分後者だろう、とも。何をしている人なのかは見当も付かないけれども、根は子供の様な人だから、色々と不満があるに違いない。きっとそこには、私の事も含まれている。
何とも言えぬ申し訳の無さに、アリスは眼を伏せた。
助けて貰っているというのに、それで苦労させているだなんて。
そう感じ、そしてこうとも考えた。
これから先は、少しでも負担を掛けない様にしなくちゃ、と。
彼女は、ふっと上目遣いの視線をケインの方へと送る。
訝しがって、どうかしたのかと聞いてくる彼に、アリスは言った。
逃げている間にこれだけは解った事、そこから自分がやれるだろう事。
言おうとして結局は言えずにここまで来てしまった事を。
「……ケイン、あの……話があるんだけど……。」

１１．炎の海すら越え行く駿馬（スレイプニル）

ベイツタウンの者達は必死の思いで大鴉（ネバーモア）を探し回っていた。
あの化け物じみた賞金稼ぎが連れ去ったという少女の事などどうでも良かった。彼らは、ベイツの使者という奇天烈な二人組が約束した報酬にこそ興味があった。貰える額は魅力的で、等分されてしまってからは流石に半生とまでは行かなかったけれど、それでも暫くは汗水流して働く事無く、豪奢な暮らしを愉しむ事が出来るだろうからだ。
それは西部の者ならば誰しもが多かれ少なかれ持つ願いである。
だが、そんな願いを抱いて熱心に探索しているにも関わらず、二人は見つけられなかった。
「あん畜生、全然見えやしねぇぞっ。」
「まさかもうこの街から出たんじゃねぇんだろうな？」
「それは無ぇよ、もしそうだったら、どっかでそう言ってるだろうさ。誰かが。」
「だな、だが本当に何処に行ったんだあいつら。」
「どっかの家にでも忍び込んでるんじゃねぇか？」
人々は口々にそう言い合い、辺りを見渡すも大鴉の影の形も無く、彼らは首を傾げた。

彼が語り合う中、その直ぐ側の小路から抜け出、通りを横切る影があった。
アリスを小脇に抱えたケインである。
大通りを真っ直ぐに行けぬ彼らは、そこを跨いで、向かい側へ、そこから別の小路へと入る。
その姿を垣間見ている者は、幸いだが誰も居なかった。
別の所を向いているか、そもそも人自体居なかったからだ。
けれども、それは決して偶然では無い。

「……いいわ、ケイン行って……。」
耳の下から囁かれるアリスの声に誘われ、ケインは直走る。
「……待って、そこで曲がって……。」
途中で左折し、別の小路へと身を潜ませれば、向かいから幾人かが走って来た。
そうして、改めて元来た道を行こうとするケインを、
「……このまま、ここを、行って……。」
そうアリスが制し、彼は今居る小路の奥へと駆ける。
「……ケイン、貴方は……熱中すると、周りが見えなくなる、みたい……。」
それが、ジョンの工房から出る時にアリスが言った言葉だった。
共に逃げていた彼女は、ずっとそれを感じていた。
彼は、何か一つの事をやろうとすると、他の事がお座なりになる傾向がある。走る事に意識を集中させれば唯それだけを遂行し、危険が無いかと、何処へ行けば良いのかと、周囲を垣間見る事が疎かになってしまうのだ。
「……それは。」
上目遣いの視線と共に注がれた言葉に、ケインは口ごもった。
例の如く、その通りではあっても、という奴だ。
この性質は長所であれ、短所である。
今のこの局面では、それは間違いなく後者だろう。逃げる事と守る事を同時にこなさなければならないのだから。どちらかだけを、という訳には行かない。
だがそれは彼固有の気質であり、おいそれと変えられるものでも無いのだ。
「……うん、解ってる……解ってるわ、ケイン……。」
唇を閉ざしたケインへ、アリスは首を横に降った後で、彼女はこう言った。
「……だから私が貴方の眼となり耳となる……わ……。」

義体人形が持つ感覚は、二つに限られる。

それは視覚と聴覚だ。光と音という多分に他者と共有が可能な刺激を伴う感覚であったからこそ、その二つは出来たのであり、如何に土壱（ドイツ）の技術が優れていようとも、人間の五感、その全ての感覚を機械で再現する事は、未だ不可能な事だった。

だが、それ故に、人形たるアリスの、その眼と耳は、常人を遥かに越えるものを持っていた。彼女が世界と関わる方法は、その二つだけであったのだから。

そして彼女は、その機官を存分に活用したかった。

自分一人では、ここから抜け出し、父の元へ帰る事は出来ない。ケインの力が必要だ。けれども、ただ状況に甘んじているのは、こうして親身になってくれている彼に申し訳ない。

私にも何か出来るなら。

そう思い、アリスはケインを見つめる。

彼もまた、その想いに答える様に瞳を向けた。

黄金と漆黒の視線が三度絡み合い、そして、

「解った……頼むよ、アリス。」

ケインは口元を綻ばせ、老人から青年の表情を作り出した。

そうして二人は、互いに互いの欠点を補いながら街を駆け抜けて行く。

ケインは鳥の飛翔を思わす疾駆を持って。

アリスは機械で造られた眼と耳を持って。

それはまるで最初からその為に生み出された二つの歯車の様に、見事に噛み合っていた。

ただ、そう示されるがままに、ケインは疾駆する。一切の迷い無く、また同時に考える事も無く動かされる脚は実に素早い。小一時間も無かったとは言え、ジョンの工房で休息を入れた事もあって、その勢いは正に疾風怒濤の如くだった。

そしてまたその勢力は、アリスの言葉を持って、次なる場所へと正確に導かれ、動かされて行く。通りを、小路を、建物の影を、誰が、何人居て、どの様にしているのか、外套（マント）から顔を突き出して彼女はつぶさに捉え、観察し、彼へと仔細に伝えているのだ。何処へどう行けば、或いは行かなければ、敵と遭遇しないのかを。

　ベイツタウンの実に半数以上の者達が彼らを追い掛け始めて、一時間近く経とうとしている。

　にも関わらず、市民達はその姿すら捉えられていなかった。

　それは、あの六人と加えて一人の、七人組にも言える。

　街のあちこちに、異様な風貌を称えた者達が闊歩しているが、誰も二人を見つけていない。

　そしてあの『負け犬達の巣窟（レザボア・ドッグス）』が前の大通りには、

「あぁんの大鴉っ、大鴉の糞野郎、何処に行きやがったっ。」

　昏倒から眼を覚ました水牛男（バッファローマン）が居て、折れた片方の角の付け根から血を垂らしつつ、豪快に叫びながら往来を練り歩いていた。左右の手にはそれぞれロングバレルの拳銃を握り締めており、ケインの姿を一目でも見たら直ぐ様に引鉄を引いてしまいそうである。剣幕の激しさに、一応は同じ志を持つ市民もおいそれと近づこうとはしない。

　尤も、その裏側にある小路を二人が走っていた事を考えると、彼の剣幕は実に滑稽と言えた。

　アリスはその声を聞いて、我知らず微笑む。

　本来なら追われている立場であり、笑っている余裕などある筈も無いのだが、こうして追っ手達を掻い潜り、逃げ遂せているという事実が彼女を心地良くさせた。

　今見えている風景も、またその勘定を助長させる一因である。

　駆けるケインに抱えられて見るそれには、疾走感があった。移動する乗り物に乗っているという意味では馬車と同じだけれど、こうして身を寄せている時の感覚とは段違いだ。あらゆるものが自らの

眼前をあっという間に通り、耳に振動の尾を残してさっと消えて行く。それを捕らえ続けケインへと伝えなければならない事は、確かに出来るとは言えなかなかの苦労を強いられはするものの、しかしそれだけ新鮮であり、また興奮を呼び起こした。

馬を駆っているという時が近いのかしら？

砂塵舞い上がる風で靡く前髪を邪魔にならぬ様手で押さえながら、アリスは思った。最初は月で次が猛禽、そして今度が馬に例えられて、本人がそれを聞いたらどう思ったかは解らないけれど、事実彼女はそう思ったのである。

そのケインも、こんなに近くに居るとなれば先程とはまた変わって来る。

視界を流れて行く家々、道々、人々と共にアリスは彼を感じていた。高鳴る心臓の音を、体の揺れと共に軽く、だが荒く放たれる息遣いを、姿勢低くし砂地を踏み締めて前へと向かう足音を、滴る汗の雫の一つ一つが跳ねて肌に当たる音を、彼女は聞いていたのである。

ただ、索敵に対してはどちらかというと視覚の方が重要で、進路伝達の為にも文字通り眼を離せなかったから、アリスはケインの方を見る事は出来なかった。

しかし、耳に入る音だけでも十分であった。

この人は、私に親身に成ってくれている。

敵を翻弄している事よりも見知らぬ世界を垣間見る事よりも、アリスにはそれが嬉しかった。

彼に助けられ、それをまた助ける自分が誇らしかった。

かつて森の工房の中で、父と共に感じていた喜びの波形が、その脳裏で音を立てて動く。

そこでアリスは、思わずふふっと笑みを発した。

「アリス、どうした？」

己を高速の波に乗せながら尋ねるケインに、

「……うぅん、何でも、無いわ……。」

そこの小路を、とアリスは返す。
そう、喜びに浸るのは早いのである。まだこの街を抜け出せた訳では無いのだから。
笑うのは、ちゃんと逃げ終えてからね。
アリスはそう考えると、勤めて笑いを押さえ込んだ。
それを察してか、ケインもそれ以上尋ねる事は無く、小路を進む。
延々と、無益に走り回っているかの様だが、実はそうでも無い。敵を欺く様遠回りしながらも、二人は確かに街の外へと近づいていたのである。
この小路を抜けて更に行けば。
そんな期待がやにわに漂い出した時、
音も無く赤い影が、突如として彼らの眼前に降り立った。
「見つけましたよ。」
「逃げ回るのも、ここで終わりです。」
更に別の青い影が、同じく音も無く後方へと舞い降りる。
狭い小路の出入り口を塞がれた。挟み撃ち、である。

アリスは思った。どうして、と。
「……どうして……。」
そして我知らず、思考を口に出していた。
それだけ意外な事だったのである。
どうして、この双子がここに居るのか。
前も見ていたし、後ろから来る声も無かった。確かに追っ手は巻いた筈だ。
「物事は俯瞰的に、」
「そして大局的に。」
もし青褪める事が出来たならばそうしていただろうという表情を浮かべるアリスに、前方に居る赤い衣の男が、次に後方に居る青い男の方が端的にそう応えた。
漠然とした言葉だが、その種を明かすと、つまり彼らは見ていた

のである。当ても無く探し回り、右往左往している群集とその動きを、この街で最も高い教会の屋根の上から。
周囲の喧騒からして、まだ二人がここに残っている事は解る。それが一向に見つかっていないという事は、逆に言うと、群集が居ない所に、ケインとアリスは居るという事になる。
そこで彼らは空白を探し、見つけると、屋根を飛び移って、この小路まで来たのだ。
双子は、大挙して出向いていった街の者達も、自身が連れて来た配下達も、大鴉を捕らえる事は出来ないだろうと、遭遇した瞬間に見越していた。だからこの二人は、白紙に刻まれた線を擦り塗る事で浮かび上がらせる鉛筆の様に、白人を、阿真利火人(アメリカ)を利用したのだ。
勿論、自分達より早く大鴉を捕らえ、人形を奪還出来たならば、それに越した事は無い。
その時は、彼らの主人のはした金が少々消費されるのみだ。金で解決出来るならば、した方が良く、そして大抵の事は金で解決出来てしまうものである。
とは言え、抑えられる出費ならば抑えたいというのが、金の価値を知る者の考えだ。
それをよく心得ている側近達は、にこやかな笑みを……しかし、丸い縁取りが成された色眼鏡の下の眼光は鋭いままに……浮かべながら、
「さてと、申し遅れましたが私はメンシャン。」
「そして私はヤオシー。以後お見知り置きを。」
東洋風の、奇妙な作法で一礼すると、すっとケインとアリスへと近付いた。
ケインの顔が引き締まり、その黄金の瞳が前方の敵を睨み付ける。
「おっと、そう邪険になさらずに。」
メンシャンは、それを大仰な身振りで制すると、更に一歩踏み込んだ。

「我々は、ただそこに居る令嬢にだけ興味があるのです。」
それに気を取られている間に、ヤオシーもまた歩み寄る。
「そこに居るアリス嬢は、我らが主人の客人。」
「彼女を渡してくれれば、我々は良いのですよ。」
「何なら、そうですな、幾分かの謝礼も差し上げましょう。」
「或いは主の元へ遣える事も。きっと感激される事でしょう、大鴉が来た、と。」
「解りましたね？　未来は安寧で、その方法は簡単ですよ。」
「その手を離し、こちらへと差し向ける、それだけでいいのです。」
「さぁ。」
「さぁ。」
「「さぁっ。」」
メンシャンとヤオシーは、そうして交互に話しながら、一歩一歩差し迫る。
その物腰の柔らかさとは裏腹な意味を含む物言いに、アリスは怯えた。
脳内の歯車がゆっくりと軋みを上げ、心音が大きく遅くなる。
彼女は思わず首を上げて、ケインの方を見た。
彼の表情は硬く、その視線は前と後ろを順々に見据えている。その顔から、簡単に諦めてしまう様な事は無いと解るけれど、如何ともし難そうだった。
「……断る、と、そう言ったならば？」
ケインの唇がそんな言葉を発するけれど、声は解れず緊張を維持したままである。
「その場合はその場合で考えがあります。」
「どうなるかは解っているでしょう大鴉。」
警戒してかゆっくりと、だが止まる事無く歩む双子は、ほぼ同時にその右腕を振るった。ぴたりとそれが止まった時、何時の間にか彼らの手には針の様に細いナイフが数本、指の間で握られている。何時の間に、何処から取り出したのか、アリスでも解らなかった。

ただ、もう駄目だという事は理解出来た。
現にケインはこの場から動こうとせず、ただ相手が来るのに任せている。というよりも、動けないのであり、そしてそれは自分の所為に違いない。彼はずっと逃げていたが、決して反撃しようとはしなかった。どんな瑣末な事でも、だ。身のこなしからすればまずありえず、つまりはアリスを優先して逃げていた、という事である。
私のせいで。
彼女は哀しくなった。
ただでさえ多大な迷惑を掛けているというのに、この後に及んで更にとは。
泣けるものなら泣きたいと思ったけれど、しかしどうしようも無く。
アリスは眼を伏せた後、再びケインの方へと視線を向けた。
だが、どうした事だろうか。
「……嗚呼、そうだな。」
今一度見た彼の顔には、苦い笑みが篭っていた。
どうしようも無い、がどうにかするしか無い、と言った様な笑みである。
何だろう、と不思議に思っていると、彼はこう続けた。
「俺は大鴉なのだから……。」
そしてケインは一歩踏み込む。
前に、では無い。
横に、である。

その時、ケインはケインで、アリスに対する申し訳の無さを感じていた。
今こうして追われている事の大半は、自らの名に理由がある。もし自らが、大鴉と呼ばれる者で無ければ、ここまで苛烈な追撃を食らう事も無かったであろう。
だが、この双子の出現において、彼は同時に察した。

大鴉であるからこそ、逃げ切る方法もあったのだ、と。
そも彼らは何処から来たのか。誰にも邪魔される事無く、易々とここまで。
ケインは応えの直ぐ側を走っていたのに、完全に失念していた。それ所では無かったのだ。
だが、もう行ける。
双子が動揺し、アリスが小さな悲鳴を上げる中、ケインは右の壁を蹴った。
そこから力を入れて押せば、左の壁へと己を移し、更に蹴り込んで右の壁へと移る。
交互に左右の壁を蹴り込み、踏み砕き、ケインは上へと進み。
素早く登り切ると、屋根の上へと到達。
そして、下の小路から聞き慣れぬ言葉が聞こえてくるのを無視しつつ、彼は走り出した。
邪魔する者が居ない、真っ直ぐな道を。
往来を行き来していた連中が、頭上を駆けるケインに気付き叫び声を上げ、その中には銃を撃ってくる者も居たけれど、彼は無視して屋根から屋根へと飛び移って行く。
その空の道を阻む通りの交差も、全速疾走するケインの前では小川の様なものだ。
十分な助走を経て、彼は軽々と飛び越える。
後ろからは、同じ様にして登って来たあの双子が来ているけれど、距離は余りに遠い。
彼らの投げた奇妙なナイフが通り過ぎて行く中で、ケインは叫んだ。
いや呼んだ。
指を弾いて鳴らしながら、目前へと迫って来た荒野まで届く様に。
元は古代祈璃社(ギリシャ)の月の女神を意味するある一つの名前を、彼は高々と上げた。
「セレーネッ。」

突如姿を現した大鴉に注視する群衆の元に、馬の嘶きが届いた。
それは何処か遠くからだったが、しかしはっきりと耳元に届き、体の芯を震わす。
一体何だと、彼らは身を捩り、その声の正体を確かめんと、耳を澄ませた。
嘶きは、大鴉が向かおうとしている荒野の方から聞こえて来る。それも最初は遠かったが徐々に近づいて来た。盛大な、まるで何頭もいるかの様な蹄の音と共に。
けれども、その甲高く荒々しい鳴き声は、一頭だけのものである。決して複数では無い。
市民達は不安に思った。こうしている間にも、音を増させながら近づく何かに。
だがその不安は長続きしなかった。
小高い丘を超えて現れた、一頭の怪馬によって、恐怖へと変わったのである。
超大な拳銃と並ぶ、大鴉の象徴。
殆ど黒と言って良い並みに覆われた屈強な体格。
それに似付かわしくない疾走を見せる異常な八本の脚。
狂った様に赤い瞳と、不気味な三日月型の白斑を宿す頭部。
富と名声に目が眩んでいた者達は、その怪馬の姿を見て、はたと気が付いた。
今思えば簡単に解りそうなのに、詭弁によって完璧に忘れ去っていたのだ。
自分達が、どんな存在を相手にしていたのかという事に。
今逃げているからだって、何だというのだ。次があれば、その逆であるかもしれない。
荒野から猛烈な走りで迫る大鴉の愛馬は、その不安を現実のものであるとした。
誰もが竦み上がり、動けぬ中、何かは知らないけれど探し当てれ

ばお金が貰えると聞いて外に出ていた『金メッキ』のステファニーが、こう呟き、夫に支えられながら昏倒した。
「きょ、恐竜……。」
当然見間違いである。
真竜(ドラゴン)であればいざ知らず、恐竜などとうの昔に滅んでいる。
けれどもその言葉は、怪馬を指し示すのに相応しい説得力を持っていた。
そして、人々を動かす引鉄となった。
自称善良な町民達は悲鳴を上げると、我先にと逃げ出した。通りを戻り、物陰に隠れ、家の中に潜めて、少しでも馬から離れようと全力を振り絞った。馬を商売道具として扱うカウボーイ、勇気と無謀の区別のつかぬ無法者は残り、己が獲物を構えて放つも、内心の弱さは狙いを狂わせ、出鱈目な弾丸が怪馬に当たる事は無い。怪馬が街へと至り、目の前に現れると、彼等もまた銃を投げ出し、冗談じゃねぇぞと喚きながら逃走した。
それでもまだ逃げ出さずにいるそれなりに肝の据わった者、逃げ遅れた一部の者達の前まで走り寄ると、怪馬は上半身を持ち上げ、豪快に嘶いた。そこから身を翻し、四本の蹄を地面へ打ち鳴らしながら反転すると、それは再び盛大な音を立てて走り出す。
己の主人が居る所へ。
屋根と地面の違いはあるが、一人と一匹が並ぶ。
そして騎手は、今走る屋根が途切れた所で、怪馬に向けて何の躊躇も無く跳躍した。
中空にて吹き荒ぶ風にはためく外套は、巨大な翼の様だ。
後ろから来る双子が、刃を投げ付けるも、その翼を貫くのみで、何の意味も為さず。
まるで舞台の台本にそう書いてあったかの様な見事さで、大鴉は己の愛馬に飛び乗った。
ずしりと掛かる重みを受け止めた馬は、我が意を至りとばかりに一声上げると、後はその逞しい八本脚を駆使して、一目散に街から

荒野へと走り出す。
恐るべき加速で影は直ぐ見えなくなり、ただ立ち上る砂埃だけがその痕跡を残して行った。

12．二人の真摯な愛情

　自らの手の元を離れた義体人形が、どんな経緯があったかは不明だけれど大鴉（ネバーモア）という賞金稼ぎの手を借り、多勢に無勢による追っ手から逃れて街を脱出したという事実は、メンシャンとヤオシーという側近の口を通して、直ぐにエドワード・ベイツの耳へと届いた。

「貴様らが居たにも関わらず逃しただと？　馬鹿めが、何をやっていたんだっ。」

　その事実は、当然の様にこの成金を激怒させ、彼の叫びを己が部屋中に響かせた。

　主へと膝を付いて報告していた双子の中国人は、僅かに首を上げて弁明する。

「我らとしても大変遺憾な事でして、ただ、あえて言わせて頂ければ、」

「よもや人形をあの化け物が助けるとは、思ってもいなかったのです。」

　その様子を鼻で笑うと、ベイツは表情の読み取り難い二人へ向けて吼えた。

「言い訳は要らんわっ。大鴉だか何だか知らんが、どんな事態に陥っても処出来る様、貴様達を出し、且つその為の資産を出したのだぞ。それが解らん貴様などでもあるまいっ。」

　雇い主たるベイツの言葉に、メンシャンとヤオシーは中国風の呼気を用いた賛同で返すと、頭を伏せて見せる。主からは見えぬ彼らの口元は、噛み締めた歯も剥き出しに苦く歪んだ。

　ベイツはそんな部下達を腹に据え兼ねる風に肩を揺らす。

　腕っ節だけの他の連中ならば兎も角、この者達でも駄目か。

　字義通りの意味も兼ねて実に高くこの東洋からの使者を買い、期待を込めていただけに、彼の落胆は一塩であった。

　それは自身の醜い顔を更に醜く歪ませ、包帯が巻かれた鼻を痛ま

せる。
怪我は、あの人形に付けられたものだ。突き込まれた正拳を避けられず、もろに食らった鼻の骨は折れ、以前にも増して潰れてしまった。まさかあの少女人形にそんな力があり、そんな行動を起こすとは、全く持って想定の範囲外であったのである。
その分も含めて、あれはたっぷり可愛がってやるつもりだったのだがなぁ。
先にまで抱いていた期待感をベイツは再び呼び起こすが、事実は変わらない。
「やれやれだ。私は忙しいというのに……まぁ手は打とう。下がってよいぞ。」
彼はそう言って、双子を自室から退出させた。
再び呼気で応えると、彼らは素早く部屋から出て行く。
居残った彼は、仕方無しに自らの相手をしている土壱（ドイツ）人娘へと意識を集中させた。
金髪を一本の三つ網にして背中に垂らしたその少女は、まだ年若く、十二に行くか行かないかという年齢だろう。一糸纏わぬ姿から垣間見える肉付きや肌の色艶から、それが察せられる。
彼女はベイツの脚の間に縋って、先程からずっと彼への奉仕を行っていた。
虚ろな光を湛えている青い左眼並みに空ろな右の眼孔を用いて。
貧しかったかつてに、『ゴブリンとドワーフの間に生まれた保因者』『神々の悪戯が最も成功した一例』などと言われ、周りの人間、殊に女から蛇蝎の如く嫌われていたベイツは、異性に対し、特殊な感情を抱いていた。愛情と憎悪が深く入り混じった、複雑な感情であり、それは奇妙に攻撃的な性癖として顕現している。
その趣向は、金鉱を見つけ、一生優雅に暮らす事の出来る大富豪となった今でも変わる事無く、いや権力を持って全てを思い通りに動かせる様になった事で、より苛烈を増していた。
ベイツは、少女の小さな頭を掴んで揺らがぬ様に抑えると、その

瞳の奥へ向けて、半ば無意識がままに振っていた腰を叩き込む。頭蓋の中を揺らされ、彼女の全ての歯を抜き取られた口から、あー、とも、うー、とも取れるか細い声が毀れ出た。
　現代の少年十字軍或いはハーメルンの笛吹きによって、本国か移住先からかは知らぬが連れて来られた少女は、膣も肛門も口の中も開発され尽くし飽きられた結果、その眼孔を使われていた。未使用である他の穴、例えば耳や鼻は狭過ぎて具合が悪く、わざわざ穴を開けて内臓の温かみを味わうのは、面倒だった。それはそれで、オツではあったのだけれども。
　この悪魔的行為は、眼孔から脳まで殆ど距離が置かれていないという人体の構図をあえて上げるまでも無く実に命の危険を齎すものであるのだが、ベイツにとっては構う事では無い。
　彼はその第四の穴を、矮小な体格に似合わない大胆な動作を持って堪能する。本来の相手を得られず、また邪魔が入っていた為に溜まっていた熱い欲望が、その動きを潤滑油の如く滑らかにした。以前にも別の娘で味わった事があるが、何時味わっても珍奇な感触に、彼の愚息は固くそそり立ち、その根元から性の塊を沸き立たせる。
　と、行為に熱中していたベイツは、歯が抜かれている為妙にくぐもった、息を吐くかの様に紡がれる少女の声を聞いた。音だけを書くと、ヒルフビッテ、というものである。
「おぉ、久しぶりにちゃんとした声を上げたじゃないか。」
　ひしゃげた顔から汗を垂れ流しつつ、ベイツは唸った。眼球を摘出して以降、この娘が喋る事は無かったのである。その直前まで、歯が無くとも元気に喚き、暴れていたというのに。
　頭蓋の中身を揺さぶられながら、少女は同じ言葉を呟く。それに対し、
「だが残念。わしは土壱語が解らないんだよ、キャベツ畑の娘よ。」
　富豪は笑って言うと、ますますピストン運動を押し早めた。
　同時に荒くなる呼吸に、少女の声は掻き消される。
　その動きが頂点に達した時、小さな呻きと共にベイツは一物から

白濁の汁を飛ばした。
固定された頭部の窪みにそれは音を立てて溜まって行く。
そして彼が無造作に手を離せば、少女はばたりと倒れ込んだ。
少女は感情に乏しい表情を浮かべると、その右の眼から妙に白く、粘った涙を垂れ流す。
「ふむ……なかなかに良かったぞ、と、あー、」
年もあって疲労の色を浮かべた、しかし快活とした顔でベイツは言おうとして、途中で口篭った。毎度の事ではあるが、この少女が何という名前だったのか、忘れてしまったのである。
「まぁ、気持ち良かったのだからどうでもいいか。」
だがベイツは、直ぐに思考を移し変えると、高笑いを上げた。この娘の眼孔は他の娘のそれと比べても遜色無い所か一番かもしれん、部下達にも使わせてやるか、と、そう考えながら、彼は少女の美しい金色の髪の毛を根元からそっと撫で遊ぶ。勿論それまで生きていれば、の話だ。彼女の表情や顔色を見るに、半日持つかどうか、という所だろう。
と、その時、まるで彼を嘲笑うかの様な、より一層高々とした笑いが上がった。
「……何だ、何が面白いと言うのだ、シドー・アサクラ。」
それに折角の良い気分を壊され、ベイツは衣服を整えつつ、眉間に皺を寄せた。
彼の瞳は少女から、部屋の隅に立つ虎の絵の屏風（ビョーブ）に向けられる。純西洋的趣向の部屋であるにも関わらず、東洋的装飾を持って一部を仕切られているのは、その向こう側にいる者が、神の代わりに金を信仰する狂信者でも一目置いている存在だからである。そもそもベイツが行為をしている最中に部屋へと入る事が出来るのは極一部の信頼置ける部下だけだ。それ以外は近づく事すら許されていない。だから今笑った男がここにいるのは、彼の意思自身に他ならないのだけれど、それでも癪に障るものは触るのである。
「いやいや、お盛んだな、と、そう思ったのだよ。老いてもね。ミ

スタァベイツ。」
　そんないらついた視線に応えるかの様に、屏風の脇から一人の老人が歩み出て来た。
　シドー・アサクラと呼ばれた彼は、その名と、奇妙な発音の詠語から解る様に、東洋人であった。ただ、あの中国人の双子とは似て非なるものがあり、恐らくは極東の島国、日本（ニホン）から来た者だと推察出来る。その白く染まった髪は肩程まで無造作に伸ばされ、脂の抜けた顔は細まり、骨ばって見えた。だが頭部に垣間見える老衰の兆しも眼だけには及ばす、そこに黒々として力強い光が宿っている。
　またその下、彼の肉体は、顔から窺い知れる年齢からは凡そ不釣合いな程逞しく、背丈もベイツの倍近くあった。そしてこの西部ではまず手に入るまい、白い着物（キモノ）に紺色の袴（ハカマ）をガンベルトで縛った出で立ちから突き出た四肢は、何処までかは解らないが鋼鉄と成っていた。戦闘の為に頑強な素材を用い、基部の出力を上げた義体である。良く見れば、服からぎりぎり出た首にも接続部のラインが見えた。
「全身義体の貴様がそんな事を言うとは、生身の体が羨ましいか？　シドー。」
　苦虫を噛み潰した様な顔を浮かべてシドーを見つつ、ベイツは言う。
　この男、彼方此方で法律の悉くを無視した武勇を立てた為に破格の賞金を掛けられた異邦人であり、今はそれにも増して膨大な額を持って、鉱山主に雇われている用心棒である。のだが、どうにも口が悪く、日本の騎士、侍（サムライ）らしき身形をしている癖に、主を省みようともしない。
「馬鹿を言うな。そんなものに興味は無い。俺ぁ、今のこの体が気に入っているのさ。」
腕が悪ければ解雇するものを、残念な事にその腕は恐ろしい程立っていた。
　その事を自身が最も自覚しているのだろう、シドーは雇い主の苦言をさらりと受け止める。

「それに、あんたが注文してくれたこの新しい奴もね、実に使い易くて動かし易い。やっぱ阿真利火（アメリカ）人が造るのは駄目だな、義体は壱人が造るに限るってもんだ。」

そう言って頬を吊り上げ、右手を握り開きする彼に、ベイツは当たり前だと、呆れ顔で言う。

「技術を持っていて更に口の堅い職人を見つけ出し、指から心臓まで造らせるのに一体どれだけの金を使ったと思っている。しかも換装の為に一ヶ月の暇もくれてやった上に、それとは別に日本刀まで新注してやったんだ。これで出来なんかに文句があったら、わし自ら貴様をバラバラにして、アリゾナ砂漠に埋めてやるわ。」

「へぇ、それが本当に出来ると思っているのかな？　あんた。」

その言葉にシドーは、不遜な笑みと台詞、つぅと白い柄を撫ぜる動作を持って応えた。

機械の体も然る事ながら、腰に差したその獲物も大変な代物だ。その刀は、現存する技術の中では世界最高のものとして知られる日本刀のさる名匠が、先住民達から禁断の地として恐れられているアリゾナ砂漠のとある地より出土した、異常に純度の高い隕鉄を鍛えて造り出した一振りであり、日本刀の特徴としてしばしば挙げられる『折れず曲がらず、良く斬れる』を字義通りに体現した、非常に強靭且つ凶悪な一品へと仕上げられていた。

それを、わざわざ海を越えて造らせに行かせたのは、他ならぬベイツであるのだが、しかしシドーにとってはそんな事など何処吹く風だ。一度手にしてしまえば問答無用で己のものだと言わんばかりの態度で、刀に触れている。

全く持って、何という男だ。

ベイツは彼の態度に実に辟易としたが、だが強くは言い返せない。この男は、配下の中で最強の腕前を誇っていた。周りの連中で、その腕前に相当するのは誰も居ない。雑務を任せるのにメンシャンとヤオシー程重宝する輩は居ないが、殊戦闘に限ればシドー程便りになる存在もまた居ないのだ。そうでなければ、ろくに主の言う事も

聞かない様な不快な奴を手近に置いて、幾つもの我侭を聞いてやっている意味が無いというものである。
「失礼、ベイツ様。」
「少々宜しいでしょうか。」
そう思っていると、噂が影を呼んだのか、双子の声が扉の向こうからノックと共に聞こえた。
「貴様らを呼んだ覚えは無いのだが、何か用か？　入って来い。」
ベイツがそう言うと、扉が開けられ、双子がさっと入って来、薄ら笑いを浮かべて佇むシドーを見てにわかに顔を曇らせる。彼らも、この男には良い感情を抱いていなかったのだ。
「で、どうした。特に無ければ、この娘を片付けて貰いたいんだが。」
くい、っと首で横たわる少女を指すベイツに、双子ははっと顔を引き締め、
「実は貴方に是非お逢いして話をして頂きたいという方が居りまして。」
そう先に言ったのはメンシャンの方であり、
「来客、だと？　実に珍しい、自分から来るとは。で、それは誰だ？」
「それが……大鴉の愛人、ローラというエルフなのです。」
興味深げに問うたベイツに返答したのは、ヤオシーの方だった。
ほう、という感嘆の言葉が小鬼の如き男の口から毀れる。快楽を存分に味わった後である為だろう、彼はうんうんと頷くと、なかなか心広くも言葉を紡ぎ、
「また妙な輩が来るものだ……いいだろう、ではここに呼んでくるがいい。」
「ありがとうございます、そう言って頂けると思っていましたよ。」
言うが早いか開けて入って来た銀髪長耳の美女へと、その驚愕に見開いた瞳を差し向けた。

かつてエルフの種族的特長として、興味が無い事には頓着が無い、と語ったのは、厳密には正しくない。いや確かにその通りなのだが、誤解を招かぬ様追記しておく必要がある。

エルフは確かに、興味を持たぬ事には大変疎く、その無知を直そうともしない。

だが逆に言うと、彼らは、興味を持った事には並々ならぬ関心を注ぐのである。

恐らく、全てはその長寿に原因があるのだろう。

長く生きる為には瑣末な事を覚えているのは不便なものである。

しかし、何か一つでいい、大事な何かを心に抱いていなければ、常人の数倍を超える寿命を生きる事は難しい。

例えば、大半のエルフは、その長寿自身と、美醜に関心を抱く。

弾圧が多少なりとも薄らいだ現在でも森の奥深くにある里から多くの者が出ようとしないのは、はっきり二十四時間と定められた時間感覚や、工業化の果てに汚染された都会の空気などに、肉体的精神的に耐えられない為である。どちらの苦痛も健康を損ない、寿命を縮めて美を損なわせる原因の一つだ。

ただ、勿論その二つ以外に関心を持つ者も居る。有り余る時を技術の進歩へ向け、街に住み職人を志しているエルフの数は、割合に少なくない。時間の感覚を一般社会に合わせる為に正確無比な物が必要だとする『エルフと時計』という言葉を振った『エルフの時計職人』という言葉もまた存在する位、技巧に励む者も然程珍しくは無いのだ。

その上で、このローラが胸中に抱いているものは何かというと、それもまた奇妙だった。

それは、情愛であったのである。

エルフという種にちょっとした幻想を抱いている人間からすると、その俗物臭い思考は異端とも取れるだろうが、彼女は真に愛の営みの成就を望み、これまでずっと生きて来た。

愛する者と共に暮らし、子供を産んで、家族に見取られながら死

ぬ。
嗚呼。その何と素晴らしく、幸福な事なのでしょうか。
数醒紀という、何かを成すには余りに長い間生きられるにも関わらず、彼女はそう願った。何かきっかけや理由があった訳では無い、生まれた時からそう想ってきたのである。
たが、そんな些細な願望は、手痛く裏切られた事がある。
周囲から隔離した熱っぽい感情に森から抜け出たローラは、都市へと赴き、どうにか生活にも慣れた頃に新大陸から来た男と出会って恋に落ち、阿真利火へと旅立って、その地で捨てられた。他の女と出来た男に、娼館へと売り飛ばされたのである。
「たとえ美しくとも、魔女と共には居られない。悪いが、ここまでだ。」
変異を遂げ、魚の鰭の様な耳を引く付かせながら、男はそう最後に言った。
後に、女に売り飛ばされた人面魚の噂をローラは聞くが、それが彼かどうかは定かでない。
ともあれ、こうして身を落とした彼女は、しかしその願望を諦め無かった。
何時か、きっと何時か、私と結ばれる人が現れる。
その想いにしがみ付いたままに、ローラは一醒紀余りも彷徨い続け、男達に体を明け渡した。変わる事の無い美貌こそが、彼女の生きる為の唯一の道具であり、指針だったのである。
そして今、ローラの元には理想とも取れる男性が居た。
ケイン・ザ・ネバーモアその人である。
違う風に生まれ、違う風に育った、人と違う存在。
一ヶ月前程前に出逢った彼は、彼女と同じものを持っていた。
だからこそ、愛するに足る。夫婦として永劫を共に暮らして行ける。確かに気味の悪く、受け入れ難い所はあるけれど、所詮は些細な事。ずっと生活して行く間にどうとでもなる筈。
そうローラは頑なに信じていた。

だがここに来て、予期せぬ邪魔が現れた。

かつて彼女を捨てた男がそうだった様に、別の女が後から割り込んで来たのである。

初めて逢った時から、あの人の心が揺れ動いているのは簡単に見て取れました。

そしてあの酒場（サルーン）での必死さで、もうそれが確たるものに近づいている事も。

でも、だからって、どうして簡単に諦め切れる事が出来ましょうか。

あんな、あんな人形如きに、おいそれと取らせはしませんよ。

今正に、彼女の精神は完全に、完璧に、一つの者のみに集中していたのである。

「突然の来訪、失礼しますわ、我らの市長様。」

そんな意識の流れは、目的の為には手段を選ばぬ程度に強固なものであり、

「けれど取り急ぎの用事があるのですよ。大鴉と、お宅の人形に関して。」

ローラは、その流れの矛先を、大元の源流へと差し向けたのであった。

１３．一千一瞬物語（ウェスタンナイト）

傾け出した日もそろそろ終着点に至ろうとする頃、眼を眩ませんとする光に照らされたアリゾナの荒野を、ケインは愛馬セレーネを駆って進んでいた。歩みは小走りという所であり、八本の脚は確かな足並みを持って砂地を蹴ると、軽やかに前へと行く。
　そして、手綱を握る彼の両腕の間には、アリスが跨っていた。スカートが捲れぬ様横向きに座り、雌馬の首にそっと腕を這わせて体を支えている。その表情は穏やかであり、黒い瞳には慈しみの光が湛えられている。
　それにしても、大変な目にあったな。
　馬上で揺られながら、薄っすらと笑みを浮かべて、ケインはそう思った。
　この少女……と言っても人形だが、そうにしか見えないのだから仕方が無い……を無事に父親という者の所まで連れて行く。最初に想定していたのはそれだけだった。だというのに何の因果か、気が付くと物騒極まりない連中や街の者達に追い回される羽目になっていた。
　こうして逃げ切れたから良いものの、捕まっていればどうなっていたか。
　彼一人ならばどうとでもなるけれど、アリスが居る今では、ぞっとしない想像だ。
　だが、何はともあれ、街を抜ける事は出来た。今は一路、彼女の親元へと向かっている。酒場でちらりと見たローラが、あの後どうなったのかが気になるが、今一番の関心は、このまま無事に辿り着く事が出来るのかである。
　しかし最後のは、こいつのお陰、だな。
　そう思いつつ、ケインはアリスからセレーネへと眼を動かした。

彼とこの奇妙な雌馬が出逢って、どれほどの月日が経ったかは、本人達も定かではない。
覚えているのは、まだ大鴉(ネバーモア)と呼ばれる以前の頃、先住民族達との戦闘に陥り、からくも勝利するも負傷したケインの元へ、ひょいと彼女が訪れた事である。
原始を思わす森の中で一人倒れていた彼は、枝が折れる音を耳元で聞いた。
顔を横に向けると、八本の脚をした黒い馬が歩み寄ろうとしている。
その異形の姿に、ケインは最初、幻覚かと思った。即ち人々が死ぬ間際に見るというアレだ。
とうとう迎えが来たか、と彼は自嘲した。
経験に乏しく幾度も傷を負いながら、しかしその体質が故に、ケインは生き残って来た。
それもこれで終わりという訳だ。
どうせ特に目的も無いのだから終わるならここで終わってもいい、と彼は思った。
だが、どれだけ近くに歩み寄って来ても、怪馬が幻の様に消える事は無い。寧ろ蹄の音、静かで荒い息吹が耳元に届き、より一層現実味を増して行く。
訝しがるケインの目の前に、ずいっと馬の頭が差し出された。
その瞳は黒く潤み、彼の姿を映しこんでいる。
「お前……雌か。」
格別馬の知識がある訳でも、直接性器を見た訳でも無いが、ケインはそう感じた。
二つの眼に宿っている光が、慈母を思わすものであったから。
と、不意に、雌馬はすっとその舌を出すと、彼の頬をぺろりと一舐めした。
続けて、一舐め、一舐めと、頬以外の部位へと伸ばして行く。
「おいおい……まさか俺を喰うつもりじゃないだろうな?」

それも悪くない、と言って、歯が突き立てられるのを待つも、その気配も無い。
この妙に人懐っこい野生馬は、純粋に彼を舐める事が目的らしい。母猫が子猫にそうする様に、傷ついた体を癒すかの様に。
その感触は生暖かくてくすぐったく、ざらざらして少し痛くもある。
が、決して嫌ではない。
ケインは暫くの間、瞳を瞑って、されるに任せていた。
そして愛撫が為だろうか、痛みが薄れてきた腕を上げると、
雌馬の変わった形の白斑を持つ頭を撫でながら静かに問い掛けた。
「一緒に、行くか？」
彼女は舌を引っ込めると、ぶるんと体を奮わせ、頭を上下に動かす。
首肯している様に見えた。

そうして彼女は、先の脱出が時の様に、要所でケインを救う彼の愛馬となり、またセレーネという名前を与えられた。白斑が三日月の形になっている事に由来するのだが、それ以上に、この奇怪な八脚馬には、何か美しい名前を与えてやりたかったのである。
実際のセレーネ女神は、牛を聖獣としているのだが、その想いの前には関係あるまい。
尤も、騎手が大鴉という不吉な名で呼ばれるにつれて愛馬の名前で無く、異形ばかりが広まっていったのは、やはり皮肉という以外の何物でも無いのだが。
まぁ、事実結構おっかなくもあるんだがな。
大鴉の噂の中で共に恐れられるセレーネの事を考えながら、ケインは苦笑した。
何時だったか、不用意に街の中へ入れた所、酔っ払いに絡まれた挙句、後ろ足でそいつを酒場（サルーン）の屋根まで蹴り飛ばした事があった。
他の馬達に突っ掛かって無用な悶着を起こした事もある。割合に相

手からというよりも自分から厄介事を起こすのであり、その為に外へ出しているという面も大きい。
きっとこいつもまた独りだったからこそ、あんな所に居たのだろう。
そしてそれ故に、孤独を知らない者達へ当たるのに違いない。
騎手と愛馬は似るものか、と、笑みの苦味を増さしつつ、ケインはセレーネの鬣を見た。
最早その感覚は、愛馬というよりも相棒と言えるレベルに達している。
実際付き合いは長い訳で、気性の荒さから何まで、良く心得ている所だ。
しかしこの娘には平気なのだよな。
ケインはすっとそこから眼を離すと、再びアリスの方に視線を差し向けた。
彼以外の誰かに触られただけでそいつを蹴り飛ばす様な馬が、こうして平然と彼女を乗せて、走っている。自分が共に居るから、という訳でもあるまいに。
その答えを、しかしケインは既に持っている様な気がした。
アリスは稀有な存在だ。今までに出逢ったどの人間よりも清涼であり、純真であり、そして無垢である。長い時の間、物事に対し克服も諦観も出来ず、ただ停留して来た人間にとっては、正に得難い存在だ。それがほんの僅か共に居ただけで察する事が出来た。恐らくセレーネもまた、静かに己を撫ぜている彼女に、同じものを感じているのだろう。
そう思い、同時にケインは、アリスがそこまで言うに足りる存在だと、自らが心許している事実に気付き、黄金の眼を細めて、何とも言い難い表情を顔面に浮かべた。

「……どうか、したの……？」
頭上で気配を感じ、アリスはぐいっと首を上に傾けてケインを見

た。
　彼は、今までに彼女が見た事の無い様な、顔を浮かべている。
「……何か、あった……？」
　自分は気に障る事をしたかしら、とアリスは眼を細めて再び問い掛けた。
　それに対し、ケインはただ首を横に振って、何でもない、と応えるのみだ。
　何でもない筈は無いと彼女は思ったが、しかしそれ以上言明しようとはしなかった。
　この人は信頼が置ける人物。余り詮索するのも失礼だろう、と。
　そうしてアリスは、首を戻すと、再びセレーネの首に手を伸ばし、そっとその肌を撫ぜた。　感触は解らないけれど、自らの指の動きに合わせて揺れる毛並みや、絶えず微妙に脈動し続けている筋肉を見て取る事は出来る。荒れた大地の上を小気味良く蹴って進む八本の蹄の音も、そうして吐き出される少しだけ荒い息遣いも、彼女の耳を奮わせた。
　良い馬ね。とても、良い馬。
　すぅっと口元を上げて微笑みつつ、アリスは考える。
　馬車は兎も角、馬に乗るのはこれが始めてであるし、またその脚は本来四本だと図鑑に乗っていたものが、それでもこの子は良い馬だと彼女は思った。
　それが手を通して伝わったのか、セレーネは小さく喉を震わせ、声を上げる。
　アリスもまたふふっと笑い掛けると、その様子を己が歯車達に刻み込んだ。
　これで、お父様の所に帰れるわ。
　そう思いつつ、同時に、別の所に刻まれていた記憶を呼び起こす。
　それにしても、さっきのあれは凄かったわ。
　彼女がその脳裏に思い起こしているのは、ベイツタウン脱出の最後の場面である。

逃げてきたけれど、ここでもう一巻の終わりなのね。
小路にて、あの双子の中国人に絡まれた時は、もう駄目だと、そう思ってしまった。
彼もそうだと思って見ているると、しかしケインは奇妙な笑みを浮かべていて、次の瞬間に視界は急速に上へとずれ込んだ。行き成りな風景の変貌に思わず悲鳴を出してしまいつつも、気付いた時にはあの狭く暗い通りとは正反対な広く明るい空の下、屋根の上。
何時の間に、こんな所へ。
そうアリスが思った時には、彼は猛然と走り出していて、高みから見える光景に風が切れ、抜けて行く音が、彼女にまるで飛んでいるかの様な錯覚を与え、自らを抱えて直走るケインに、かつて抱いた様な感想を、より強い形で浮かばせた。
本当に鳥の様だと。
そうして彼は、一つの名で何かを呼ぶと、脚を付けるべき地の無い中空へと飛んだ。
翼など持っていないのに、けれどもまるであるかの様に、一切の迷い無く。
悲鳴こそ上げなかったけれど、アリスは我知らず瞳を瞑っていて、直ぐ耳元で聞こえて来る嘶きに瞼を上げれば、一頭の黒い馬に跨っていて、これは何と判断するより早くに駆け出したそれに寄り、街を後にしている所だった。
振り返って見えたのは、呆然と佇む、或いはその場にしゃがみ込んでいる何人かの市民達であり、それを最後に見たものとして、馬はあっと言う間に街から離れて行った。

この一連の流れは余りにも突然に起こり、そして早々と終えた。その素早さにはアリスの中にある機構の動きも急かされ、今までに感じた事の無い波形を生み出す。
スリリング、とでも言えばいいのかしら。

興奮であるのは確かだ。それならば新しいものを知った時に何度も得た事がある。

だが、そんなものよりも、それはもっと、もっと激しい興奮だった。

悲哀に並ぶ未知の感慨で、その余波は先程までずっと残っていたが、悪いものでは無かった。これが幾度も、続け様に受けたならば、堪ったものでは無いし、そうさせる事件も無い方が良いのだが、それ自体は悪くない、寧ろ心地良い、とすら言える代物である。

正に冒険ね、不思議の国の。

忙しなく事態が動く中で忘れていた物語を頭の中で浮かび上がらせながら、アリスは笑った。

その中で同じ名前の少女が巡ったものを、自らもまた経験しているという喜びに。

いや、よくよく考えると、それ以上のものがある。

だって、あの世界にこんな荒野は無いじゃない。

彼女はそう思うとますます笑みを募らせた。

そして一番最近に読んだ荒羅舞(アラブ)地方の物語を思い起こす。

あの少女は二つの世界を巡ったけれど、私はまた別の世界を行っているのだ。

人の手によって積み上げられた心臓を熱烈に揺り動かす感慨を前にして、この生命に乏しいと感じていた荒野はその下に豊満な大河や魅力的な財宝を秘めた砂漠へと転じる。砂と埃を掻き揚げながら走り抜けた町並みは異国のバザールで、この変わった馬は駱駝だろうか。

それで行くと、私達は何かしら?

カチリカチリと刻み造られて行く想像はまるで本物の乙女が抱く様な可愛げのあるもので、その正体を知る者ならば驚愕する行為ではあろうけれど、本人はそんな事など露とも考えずに無邪気な思考を続け、そしてとうとうクスクスと笑い声を上げた。

「……そちらこそ、どうしたんだ？　アリス。」

行き成り聞こえてきた声に面食らい、ケインは思わずそう眼下の少女へと尋ねた。

笑っていたアリスは、はたと気付くと、幾分笑みを抑えながらにこう返す。

「……また、笑いそうだから、言わないの……。」

その答えに笑ったのはケインの方だった。

まだ月の人という言葉に笑った事を根に持っているのか。

あれはもう過去の事だし、それに最初から悪意など無かった。

そう弁明してから、彼は何を笑ったのかと更に乞う。

ケインの言葉に、アリスは少し、ほんの少しだけ躊躇した後、己の空想を口にした。

「……まるで千夜一夜物語（アラビアンナイト）みたい……そう思ったの、さっきまでのものが……。」

彼女は言った後で、また笑われるかしら、と半ば期待していたが、彼は小首を傾げる。

「名前だけは聞いた事がある、かな。」

「……有名な物語、だけれど……読んだ事は、無い…かしら……ある王様が、お姫様を次々に殺しちゃう、の……それを止めさせる為に、シェヘラザードっていうお姫様が、毎夜話を聞かせて、気を紛らわせる様とする、って話なんだけど……。」

そう語りながら向けられる、黒々とした宝石の様な瞳を受け止めながら、ケインは首を横に振った。銃ばかり奮ってきたこの半生の中で、真っ当に読んだ本など殆ど数える程度しか無い。

その事を彼が伝えると、アリスはふと意味深な笑みを作って、

「……だったら……私が、読んであげる、わ……家に行けば、本もあるし……。」

頭上に居るケインへとそう言った。

対する彼は、少し困った様な笑みを浮かべながらに、こう応える。

内容はともあれ、言わんとしている事は理解したつもりなので、そ

れに便乗する様な形で、
「ならば俺は、お姫様を殺す王様という事かい。」
そう、ある意味では間違っていないな、などと思いつつ。
乗って来てくれた事が嬉しいのか、アリスはくすりという笑みを再び上げた。
「……あら、それを止めさせるのが、私の役目、よ……見た事も、聞いた事も無い様な話をして慰めてあげる……貴方の物語の語り部（シェヘラザード）、になるの……よ……。」
彼はその笑みに、声に、何よりも言葉に、体中を電流が走り抜けた気がした。
特にそう感じたのは、物語の語り部と称した彼女の、その前に付けられた言葉に、だ。
そんな風には思ってもいなかった、しかし心の片隅で密かに望んでいた台詞。
ケインの顔から笑みが消え、ただ真摯な、何処までも真っ直ぐな視線だけが残る。
彼の雰囲気が変わった事に気付いたのだろう、アリスもまた押し黙ると、自分が言ってしまった言葉の意味に瞳を泳がせた後に、同じく視線を直線に返した。
二つの瞳が、引力か何かによって互いに惹き寄せられたのは、これで四度目だろうか。
しかし、今回はそれだけで無かった。一瞬は、一千と一夜、殊に寄れば百億の昼と千億の夜を巡る時に匹敵する感情を、想い巡らす者に与えるのである。
堪え難く、今までにもケインを動かしてきた衝動がその胸中に灯り、彼は手綱から手を離した。そして、アリスの体の前に、そっと回り伸ばして行く。彼女は相手がしようとしている事に気付いているのかいないのか、身動ぎする事無く、ケインの方を見つめたままでいた。
両の手が、彼女の前で結ばれんと近づく。もしアリスの頬に赤み

が灯り、瞳が潤む事があるならば、この少女は間違いなくそんな反応を眼前の青年向けて示しただろう。
だがそれは起こらず、そしてケインもまたそれ以上何もしなかった。
戸惑いを抱かせる空白が間を作り、停滞した時が二人の間を過ぎて行く。
そうして再び動き出す切っ掛けを生み出したのは、セレーネであった。
石か何かでも踏んだのだろう、突然彼女の体が揺れ、胴体が僅かに反れる。
その衝撃にアリスは僅かによろめき、ケインは咄嗟にそれを支えた。
彼女の体に触れた時、先程までずっとそうしていたにも関わらず、心臓が撃鉄で打ち付けられた様な高鳴りを、彼は感じた。弾丸の様に、それが飛び出てしまいそうな程の、である。
ケインは慌ててアリスを放すと、手綱を握り締めた。
離された彼女は眼を伏せると、身動ぎ、顔を前へと戻す。
聞こえただろうか。
未だ脈打ち続ける胸に無視を決め込みつつ、ケインはアリスを見た。
もうその瞳は見えず、黒く流れ落ちる髪だけが視界に飛び込んでいる。
彼女に何と声を掛けて良いか解らず、彼は唇を閉ざした。

ケインはアリスを抱き締めたかった。
自らを認めてくれた者として、この聖なる少女を熱烈に。
けれど後少し、という所でそれが出来なかった。
今、手綱を握り閉める手が重く、汚れている様に感じたのである。
そうやって挿してあるのが当然だと思っていた、後ろ腰のレイヴンクロウもまた同様に。

アリスが類稀な者だと、純朴な者だと思えば思う程、そうでない自分が見えて来たのだ。
不吉な声で鳴きながら、不運を齎して来た大鴉。
そんなお前が彼女に触れて良いのか、許しを請うて良いのかと問う己自身が居る。
成る程、自分を欺き、今抱擁してしまっても良いだろう。事実、隠している。だが、もう一つの、いや年月だけで言えば本来の姿を見た時、この少女は一体何を連想するのだろう。
それは永劫の罰を受け続ける、狂気に囚われた月の男か、数多の者達を葬ってきた、恐るべき砂漠の王か、はたまた、全ての人間が忌避する死の象徴か。
いづれであれ、今のケインとは凡そ懸け離れた存在として彼を見るのは確かだ。
それを思うと、あそこで彼女を抱くだなど、到底出来るものではなかった。

そうして気まずい沈黙が漂って行く。
なまじ素振りを見せてしまった分、アリスを傷付けてしまった事は解っていても、しかしそれ以外どうする事も出来なかったケインに、この状況を打破する方法は思い付かなかった。
せめてこの時が忘れ去られる様な事が起きればいいのに。
己の行為を後悔し、それを洗い流す為の事態、それこそ敵の襲撃すら、彼は願った。その場合はその場合でまた面倒だろうけれども、視野の狭まりは、思考すら狭めるものである。
ただ一つの幸運は、
「……あそこ……ほら、あのちょっとした谷間にある、あそこ……。」
目的地が、もう目の前へと迫っていた事である。
漸くか、と思いながら、彼はブーツの踵を当てて、セレーネの走りを早ませた。

もう日は地平線の向こうに堕ち様としており、最後の残り灯が大地を燃える様に照らし出す。もう直ぐにそれも消え、今はほんの僅かしか出ていない夜の帳も、完全に空を覆うだろう。

ついさっきは願いつつも、しかしこんなだだっ広い空間で夜襲など御免である。

街を出て以来、追っ手がここまでやって来ている気配は無かったが、用心に越した事は無く、せめて太陽が出ている間に行こうと、ケインはその愛馬を駆って、荒野を走り抜けた。

１４．オズの国の父なる神（ゴッドファーザー）

そこは、ちょっとした岩と岩の隙間に築かれた、ある種のオアシスだった。

周囲がすっかり乾燥し、ろくな草木も生えていない中、その場所だけが豊かな木々で覆われている。小さいけれど、密度は確かに森のそれだ。恐らくはベイツタウンがそうである様に、周囲ではここからだけ、地下水が湧き出ているのだろう。

「ここでいいのだね？」

「……そう、ここが…私の生まれた所……。」

ケインがそう語り掛けると、アリスはこくりと首を縦に降った。

彼はセレーネから降りると、アリスに手を貸して降ろしてやり、更にその黒い背を押して、愛馬を解き放つ。一応の道はあっても、こう幹が連なっては満足に走る事も出来まい。用があるまで解放して置く。

そうして彼らは、二人連れ立って、森の中へと進んで行く。唯でさえ影となる枝葉の下に、更に日も暮れた今、その視界には静謐な闇が湛えられているけれど、ケインもアリスも、視力は普通の人間よりも良いのだから、歩みは一向に変わらない。一つの雲に遮られる事も無く、緑の天幕を通して月と星の明かりが差し込まれるならば尚更に。

その様な道を進む彼らの間に会話は無い。特にケインは、未だに馬上での事を気に掛けており、あえて唇を噤んだままでアリスの前を歩いていた。彼は、己について考えまいと心掛けながら、別の問いを、彼女の父親について考えていた。

一体この少女の人形を造り出した人物とは、どの様な人なのだろうか。

アリスが、彼について言明した事は、殆ど無かった。けれども彼女の薄い唇から「お父様」と紡がれた時、故郷について静かに語っ

た時、そこには深い愛情と尊敬、そして哀愁の念が込められている様に感じられた。それに義体人形は、本物の赤子の様に無知として生まれ、そこから実際の子供の如く育てなければいけないとも聞いている。人形がどの様な魂を持つのかは、その生育者に委ねられているのだ。

技術は元より、人間としてもさぞや出来た人なのだろうとケインは思い、そして自らの脚が妙に忙しないのは、彼に逢う事に少なからず緊張しているから、という事に気付いた。

ケインとアリスは、何の神秘性も込めずにただ事実を述べるならば、成り行き、としか言う事の出来ぬ状況によって巡り合い、そのまま縺れ込む形であれよあれよとここまで来てしまった関係である。それを、彼女がここに来るとは知らぬ人物へ説明する事は容易でないだろう。

さて、どう言ったものか。

彼はそう弱った、苦い笑みを浮かべる。これまでと比べれば、相当易い悩みであるけれど、余り口の達者では無いケインに取っては、相応な悩みだ。強いて幸運だったのは、その奇妙な表情を、彼の背に居るアリスには見られていない事程度だろうか。

そうこうしている間に、幅の広い小屋じみた建物が見え始めた。

「一体誰かね？　こんな時間に、こんな所へ。」

言いつつ扉を開けて出て来たのは、見事に髪と反比例した髭を持つ老人だった。かつてはもっと筋肉質な体型をしていただろうに痩せこけ、顔に深い皺が出来てしまっている。身に付けているのは、何時洗ったのか解らない作業服に、皮の分厚いエプロンだ。

「……お父様……。」

「……アリス、か。」

そうして彼は、ノックし、目の前に立つ少女へ、自身が作った人形に眼を見張った。老人は、無言のままに彼女の黒い硝子の瞳を見つめた後、厳しい顔はそのままに、

「……お帰り、アリス。やはり戻って来たのだね。」
そう言って、華奢な肩に腕を置きつつしゃがむと、大きな抱擁をした。
「…あの…うん…うん、ただいま…。」
アリスはそれに応え、小さな手と腕を父と呼ぶ男の背中へと力を込めて回す。帰って来てしまった理由でも言おうとしていたのだろうが、彼女は黙って抱き付くだけだ。
「で……君は？彼女をここまで連れて来てくれたのかね。」
その様子を考え深げに見つめていたケインは、体を起き上がらせてこちらに話し掛けて来た老人に、あ、と一拍子置いてから、手を伸ばした。
「ケイン。ケイン・ウェイトリィだ。その、偶然知り合って、ここまで連れて来た。」
老人は、差し出された手を見、それからケインの顔を見た後、それに応えて、
「私はカーシィ・キャルビンだ。彼女の生みの親、に当たる者だ。ここから街までは大分離れていただろうに、わざわざすまないね。」
ぐ、っと握手した。もっと何か指摘されるかと思っていただけに、簡単に受け入れられた事へケインは安堵しつつ、首を横に振りながら指に少し力を込めて返した。
「……ねえお父様……早速だけど、話したい事があるの……いい、かな……彼も一緒に……。」
そこにアリスが、カーシィの袖を引きながら割って入る。彼女の言葉に彼は頷くと、
「解った、いいだろう……君も入ってくれ、立ち話というのも、何だからな。良かったら食事でもしながら。と言っても、精々缶詰になってしまうがね。」
首を傾けて、奥を示した。
如何に燃費が良いとは言え、二十四時間以内で食したものが珈琲のみで、且つあれだけの大立ち回りをやった後では、当然に腹も減

る。ケインは拒否もせずに、あぁと頷くと、アリスと共に、誘われるまま中へと入っていった。

本当に、唯の、何の調理もされていなければ、食器に盛られてもいない缶詰を渡された。

ジョンもそうだったが、職人というのは余り衣食住に拘らない様だ。一応ではあっても客人に出す様なものでも無いだろうが、彼らよりも余程それらに頓着の無いケインは、特に文句も無くスプーンで豆を掬いつつ、アリスとカーシィの会話に静かに耳を傾けていた。

入って直ぐの工場から続く更に続く居間、その中央に置かれたテーブルに座って、彼女はさっきからずっと、自らが見た事、聞いた事、何があり、それがどうなって、ここに来る事になったのかを、拙い言葉遣いで積極的に父へと話している。初めて見た荒野。街。城な屋敷、直感的に悪だと解ったベイツ氏。そこから逃げ出した自分。倒れていた所を助けてくれたケイン。己を嫌っているらしいローラ。愉しげな街の探索と、嫌な女性との会合。ケインとの再会と会話。酒場での一悶着から、ベイツの手下による追跡、市民達の増援。職人の工房での小休止。再びの追跡と、大脱走。神秘的な八本脚の馬に乗っての帰宅についてを。そしてまた、多分追っ手はここまで来て、けれどもケインが必ず（ここで少し不安げに流された視線に、彼は微笑を浮かべながら頷いた）護ってくれるだろうという事を。

カーシィはそれについて何か言うでも無く、うんうんと頷きながら、思い出した様に豆缶を減らした。会話というよりも、一方的な報告の様なものだった。ただアリスが最後まで語り終えると、そっと彼女の肩に手を置いて、

「ともあれ……お前が無事で、良かった。問題は、何、どうとでもなるだろうさ。」

そう一言だけ、言葉を発した。自らの肩に乗った手をちらりと見やってからアリスは、

「……うん……ありがとうお父様……。」
　そっとその手に、白磁の肌をした自らのそれを重ねる。
　空になった缶にスプーンを置きつつ、ケインは彼らの様子をやはりじっと眺めていた。
「……それじゃ……いいか解らないけれど……お休みなさい……お父様、ケイン……。」
　食事が済んだ後に、アリスはそう言って、己の部屋へと入っていった。
「嗚呼、疲れたろう。今日はお休み、間接はちゃんと自分で拭いておくんだよ。」
　カーシィは彼女の後姿にそう言いつつ、手を軽く降った。ケインもまた、お休み、と応える。
「……義体人形というのも、睡眠が必要なのだな。」
「そうだよ。外部からの情報を極力廃し、蓄えた知識が最適な状態で保存される様に、歯車を整理整頓する必要がある……らしい、のだが、実は詳しい所は解っていない。」
　そうして二人きりになったケインとカーシィは、食後に淹れられた珈琲を啜っていた。その淹れ具合は、やはりというか何というか、薄いものだったけれど、流石に文句は言えない。
　ケインは黙ってそれを飲み込みつつ、義体職人の言葉に返した。
「解っていない、というのは？　あんたが造ったんだろ？」
「知識の保存どうこうの前に、機械による人間そのものの代理を造る事が、義体人形の最初の理念だったからだ。何とか再現しようと奔走し、結果、その要である歯車式人工頭脳が出来たのは良いのだが、誰も、それを発明した私の師匠ですら、原理は解明出来なかった。そんなものを無視して、兎に角製造しようとしたものだからね。云わば偶然の産物、魔法の品物なんだ。」
　彼の質問にカーシィは応えると、同様に珈琲を啜って唇を潤す。
何か少し誤魔化された気もするが、ケインは成る程、と応えてから、

人差し指をすぅと立てて言った。
「だがこれだけは確かに言える事がある。」
ほぅ、と興味深げに老人がその指へと眼を向ける。
「何かね、それは。」
「彼女は……アリスは、良い娘だと言う事だ。」
ケインは臆面も無く言うと、再びカップを傾けた。一瞬、何を言ったのか良く解っていないという顔をしたカーシィだったが、くっと直ぐに唇を歪ませ、違いない、と呟く。
「で、だ。」
そこに、半分以下まで珈琲の減ったカップを置きつつ、ケインが唇を開いた。
その彼の瞳は、異様に鋭く黄金の輝きを湛えながら、カーシィに向けられている。
「ん、何かね？」
不穏当な視線に気付き、老人もカップを置くと、彼を見つめ返した。
ケインは、その年を取って小さく萎んだ瞳から一切眼を逸らさずに、こう続ける。
「良い娘だと……頷きつつ、何故あんたは彼女をベイツの元へやった？　噂を知らないのか？」
「……。」
台詞が全て紡がれると同時に、緊張の糸が二人の間に走った。
それは、ケインがこのカーシィ・キャルビンに逢ってからずっと抱いていた懸念だった。
最初にアリスと再会を果たした時は、本当に父の様な人物なのだな、と、ただそう感じた。
けれどもその後、彼女が事情を説明している時の反応を見て、ケインは奇妙な違和を覚えた。
この人物は、何も驚く事無く、淡々と説明を聞き入れていた。た

とえ人形であれ、自らが造り出したという意味では実の娘と大差無く、事実彼の言動はそれを指し示している。だが、その娘が手酷く扱われそうになり、そこから派手に逃げ出してきたというにも関わらず、彼の表情は穏やかなものであったのだ。まるで最初から、そうだと知っていたかの様に。

或いは、自ら望んで行ったかの様に。

「……如何にも、知っていたよ。当然だ、この辺りで知らぬ者は居ない。」

ケインの視線を真っ向から受け止めつつ、カーシィは言った。

「だがそれでも送った。何故か？　彼女を造った理由は、ベイツ氏の依頼だったからだ。」

「……何？」

その言葉に、ケインは片眉を吊り上げる。

それを無視しながら、カーシィは言葉を続けた。

「愛玩用の人形を一体、造ってくれと頼まれたよ。永遠の処女が欲しい、無限の寿命を持ち、何をしても決して壊れない娘が欲しいと、そう言われたのさ。」

老人は、そこで依頼に来た時の事を思い出したのか、はんと鼻で笑い、

「愚かといえば実に愚かだ。決して壊れない物など、決して造る事は出来ない。あれから伝え聞く趣味趣向は相当手荒らしいからな、そんな事をされれば肉体的にも精神的にも、アリスは壊れる……死ぬだろう、ね。しかも性に関わる機構は、付いてはいるけれど、本物に匹敵する様な出来では無い。まともに満足する事も難しいだろう。あの男なら、癇癪を起こして、そのままぶち壊してしまうかもしれない。」

「……何故だ、何故依頼を受けた。」

抑揚も無く、事実を語り続けるカーシィに、ケインは椅子から立ち上がって歩み寄った。

アリスの裸が、奇妙な程精密に造られている理由は解ったが、それに纏わるものは到底納得出来るものでは無い。自らの娘を死なせに行かせる親の言動とあっては、尚更だ。彼の脳裏には今、遠い昔に自らを捨てた両親の姿が、おぼろげに浮かび上がっている。

そんなケインに向けて、カーシィも同じく立ち上がると、歪んだ笑みのままに応えた。

「私はこの義体技術を、土壱（ドイツ）で学んだ。私の夢は、私の師匠クリストフ・フォン・アッシェンバッハの後に次いで、あの恐るべき叡智の結晶である機械の人形を産み出す事だった。だが、時同じくして、私の同胞が犯したある事件により、私の様な人間は土壱を去らざるを得なかった……病を患ってしまっていた事もあってね。無一文で皇州に赴いた私には、祖国に帰っても時間も、設備も、道具すら真っ当に無かった。技術はともあれ、な。途方に暮れつつ彷徨っていた所、あの男と知り合った。正に千載一遇の機会だ……当然乗ったよ、私は。」

「……そんな事の為だけに、あんたは彼女を造ったというのか。」

「そんな事？　職人として、その技術を完遂させたいと願うのは当然の事だ。」

最早眉間に深々と皺を刻むケインを、せせら笑う様にしながらカーシィは言う。

だが、直ぐに疲れた風な顔を浮かべてから首を振って、

「……しかし、悔いが無い訳でも無かった。幾ら完遂したとは言え、そのまま後世に残される事無く無碍にされるのは忍びない……だから、君には感謝しているよ大鴉（ネバーモア）。」

「……あんた、何故その名をっ。」

そうケインの表情を驚きの色に染め上げ、思わずその両手を老人の襟首に掴ませた。

首を上に向けられ、息苦しそうに顔を顰めつつ、カーシィは続ける。

「一ヶ月程前から滞在している様だがね、それこそ知らぬ者は居な

い、というものだ。君の姿を見た後、アリスの話を聞いて、即座に解ったよ……本当に、奇怪な眼をしているのだな。」
その両目がケインの、細長く輝く瞳を捕らえる。怯えは無く、真っ直ぐに。
「……その様子だと、彼女には言っていない様だね。やはり、言い辛いか。」
「……。」
ケインは更に睨みを利かせ、眼光をより鋭くさせるけれど、本当の事なので何も言えない。
「まぁ、君がケインにしろ大鴉にしろ、感謝には変わらない。それにこれからも、だ。」
カーシィは軽く喉を摩り、襟元を正しながら言った。
思わず逆上して掴み掛かった襟首を離しつつ、ケインは問うた。
「……どういう事だ。」
「私は長くないのでね……彼女を好いているのだろう？」
「なっ。」
その言葉にケインは甚く動揺した。カーシィに掴みかかる様な真似こそしなかったけれど、普段は色の白い顔が、完熟したトマトの様になっている。
老人は、さも愉しそうに、陽気な笑い声を上げた。
「本当に解り易い人間だな君は、それではさぞ生き難い事だろう。嗚呼……多分あの娘には、君の様な者の方が合っているな。だからこそ、これからも、なんだが、どうかね。」
「……俺は、」
ケインは、すぅと瞳を閉じ息を整えた後で、その言葉に返答しようとした。
だがそれは、突如家の外で高々と上げられた銃声によって遮られた。
直ぐ様窓の外を見る彼に続き、眉間に皺を寄せてカーシィが視線を送る。

「そろそろだと思っていたが、もう来た様だな。行き成り襲わず、銃声を上げたという事は、話し合いでもしようというのか、或いは罠か……どうする、行くのかね？」

「……無論、だ。」

窓の外から自身へと向けられたカーシィの視線に頷きつつ、ケインは後ろ腰に手を伸ばした。黒の外套の中に手を入れ、ホルスターからレイヴンクロウを取り出す。銃身を銃把から折って離し、全ての弾倉に弾丸が装填されている事を確認すると、勢い良く振って元に戻した。

「……まずはこれを終えてから、だな。頼んだよ大鴉。」

カーシィは、その様子をじっと眺めてから徐にケインの肩を叩く。彼は真剣な面持ちで頷き返すと、銃把を握り締めつつ、外へと飛び出して行った。

「ふむ……。」

カーシィは、開かれた扉の縁に立つと、夜の森の中でもはっきりと見て取れる黒い影が、完全に闇へと溶け込むまでじっと見つめていた。

そうしてケインの後姿が見えなくなると、さて、と振り向き、呟く様に言う。

「もういいよ。起きているのは解っているから、出ておいでアリス。」

きぃと、小さな悲鳴を上げて、奥の扉が開かれた。

そこには、困惑気味な表情を浮かべているアリスが佇んでいた。

15．続・惨夜の七人と哀しきウンドーミエル

「これで本当に大鴉（ネバーモア）は出てくるんだろうな、エルフの姉ちゃんよ。」

森の中に少し入った辺りで、右手に握った超長銃身のピースメーカーを天へと向けながら、水牛男（バッファローマン）ことフランク・ザ・ダブルホーン……その名前の由来となっている頭部の片角は見事に折られて包帯が巻かれているので、正確にはシングルホーンである……は、正に水牛（バッファロー）が呻く様な野太い声で、傍らに立つ銀髪長耳の美女ローラへと言った。

「はい、あの人の性格からすれば、必ず来るでしょうね。」

ええ必ず、と続ける彼女の口振りは、自信たっぷりなものだった。己の言う事に、何ら間違いなど無い、とそう言わんばかりの顔である。

本当かよ、とフランクは心の中で叫ぶも、実際に口には出さなかった。ここまで来る間の馬車の中で、色々とちょっかいを掛けたはいいが、悉くやり込められていたからである。

それに実際の所、大鴉に出て貰わなくては困るのだ。

フランク、そして共に遣って来た仲間達の目的は、彼らの主人であるベイツの元へあの自動人形を連れ戻す事であるが、あの何故か共に居る大鴉の存在が目障りで仕方が無く、そしてこの大鴉の愛人と名乗るエルフは、奴を呼び寄せる為の餌なのであった。

邪魔な賞金稼ぎに危機に瀕しているローラを見せつけ、アリスと交換させる。

云わば狂言の人質である。

だが、それを持ち出したのは、他ならぬ彼女自身だった。

その見返りは、大鴉に害を与えない事、である。成る程、無駄な流血を避けて通る事の出来る有効な手立てではあるが、何故そんな役を買って出たのかは、フランクには解らなかった。質問した所、手酷い言葉の刃で切り返されたから。

しかしながら、そんな生易しい方法では、真っ昼間の大追跡の果てに取り逃がした屈辱、何よりも蹴り折られた片角の恨みを晴らす事など到底出来ない。大鴉が現れたらフランクは、人質（偽者だけれど）が居るのを良い事に、あの男を散々痛め付けてやる気持ちで一杯だった。姉ちゃんには悪いが、それ位やらねば、仮にも二丁拳銃の使い手として悪名を轟かせた事のある彼の気持ちは収まりそうに無い。

ただ、一応殺しはしないつもりでいる。徹底的に殴り倒す位で終えてやれば、約束を守った事に成るだろ、とフランクは本気で思っていた。それに化け物と評されている噂が本当なら、その程度の事で死ぬ事も、まぁあるまい、と実に気楽な気持ちである。

そんな使命と感情の二つの目的によって、大鴉の出現を待つフランクは、恐らく自らと同じ心境であろう六人の仲間達、金目当てにベイツの部下となるまでは悪行の限りを尽くして来た名うての無法者（アウトロー）達へとその眼を動かした。

彼の近くに佇む大男、その見事に剃り上げられた頭から『ザ・エッグ』の名を持つラリーは、右腕より置き換えられた蒸気銃の整備に余念が無い。頭上から注がれる月光に禿頭を照らされながら、さっきからずっと微調整に当たっている。威力はともあれ速度に置いて無二の実力を誇る自慢の弾丸を大鴉は避けて見せたのだから、それも当然だろう。尤も、その頃のフランクは、『負け犬達の巣窟（レザボア・ドッグス）』の床で大の字になっていたのだけれど。

ラリーの隣には、顔の無い仮面を付けた男、リアム・ザ・トレマーが、首を上に傾けて空を眺めている。鏡の様に磨き上げられた面を通して外が見えるのかどうかは解らないが、襤褸切れ同然の布を下半身に纏っただけの青白い半裸と相俟り、かなり不気味だ。震え（トレマー）という名通り、自らの体を扇動して地中を掘り進む事が出来る体質を持ち、その能力で強盗殺人を行っていたというらしいから奇怪な印象も一塩である。

フランクはさも嫌そうな顔を浮かべてから視線を移すと、今度は、木の幹に体を持たせて互いの唇を奪い合いながら、自分達の世界を築いている男女の方を見た。

　リアムと打って変わってこの解り易い二人は、ブルース・ザ・レフトガンドレットと、ハル・ザ・ベリルキャットだ。それぞれ、左腕に成り代わった戦闘用の義腕と黄緑色の猫目へ由来する二つ名を持った彼らは、今の主人に雇い入れられる前から恋人同士だったらしい。相当長い間コンビを組み、機械の豪胆さと猫の俊敏さで悪さをしてきたのだという。

　お暑い事で、とフランクは嫌味な笑みを浮かべて二人の行為に見入る。猫の特性を持つ保因者（キャリアー）のハルと乳繰り合ってきた影響だろう、ブルースの土壱系らしい濃い顔は昔に比べて狼に似てきており、このまま行くと人狼（ヴェアヴォルフ）に成るのではと言われているが、当の本人は一向に構わない様で、寧ろ積極的に、恋人を右手で抱きかかえながら唇を交わしていた。

　久しく女を買っていないフランクは羨ましく思い、己の股間に熱い血が滾るのを感じた。けれど彼は黒人女など好みでなく、寧ろローラの方がタイプだった。事が済んだら一発ヤりたいもんだと、そのエルフに顔を向けると、彼の心を見抜いたのか、彼女は笑みで返す。ただ、眼は笑っておらず、手を出したら何をされるか解ったものでは無いので、フランクは首を竦めた。

「振られたみてぇだなぁ、フランクよ。」

　その様子を見て声を掛けて来た人物に、彼は心底嫌そうな顔をして言う。

「黙れよホースファッカー。悪趣味極まり無ぇお前に言われたか無いぜ。」

　実に不遜な名前で呼ばれた男は、何だと、とその前足の蹄を鳴らして唸った。

　彼の名前はガルシア。鍍岸黄人（メキシコ）であり、見ての通りのケンタウロスである。ただ、正確には、馬の下半身に変化出来るだけで普段は

人型で居るのだから、少し違うかもしれない。
　その彼の武器は鉄の槍であり、全力を持って相手に突貫する戦法を得意とする為、ザ・ジュースティングという気取った二つ名で呼ばせているけれど、身内からはホースファッカーと呼ばれる事の方が多い。これは、性欲を持て余した果てに、自らの雌馬を犯した事があるという逸話から来ている。当人が酔った末にそう言っていたので間違いあるまい。今の体に変化出来る様になったのも、その時からだそうな。
「てめぇ言わせておきゃいい気になりやがって、この片角野郎がっ。」
　ただガルシア自身は、その名前を嫌っている様で、呼ぶと激怒する。それを知っていながら言い放ったフランクは、更に品の無い笑い声を高々と上げて見せた。
「あ？　お前こそ何勝手な事抜かしてやがる、次言ったらぶっ殺して干し肉にしてやるぜ？」
「この片角野郎がっ。」
「干し肉にしてやるっ。」
　それに切れてガルシアの口から出た売り言葉に、フランクは買い言葉で返した。同時に向けられる鋭い穂先に、彼は両腕を交差させて、牛の角の様に拳銃を構える。
「くだらん事をしてるんじゃない、お前ら。一体何しにここまで来たつもりだ。」
　それを制したのは、この場の実質的リーダー格に当たる詠国人、リチャード・ザ・ホークアイだ。右目に白内障を患うまで、別の言い方をするならば、義眼の支給目的でベイツの元に付くまで、クロスボウ使いの暗殺者として、数多の要人を震え上がらせて来た男である為に、フランクもガルシアも頭が上がらなかった。灰色のインバネスコートが懐に納まっている弓矢に狙われては、たまったものでは無い。双方、どちらとも無く獲物を戻した。
　リチャードはふんと鼻を鳴らして、その服の色にも似た口髭を揺

らした。その様子を見ていたブルースとハルも抱き合いながらにけらけらと声を上げ、ラリーもまたにやりと笑みを浮かべる。あのリアムですら、仮面の下笑った様な気配をさせる。更には続き、演技とは言え彼に拳銃を向けられているローラが、クスクスと笑みを浮かべた。

「まぁまぁ、仲の宜しい事ですわね。」

くだらん冗談を言うんじゃないと、フランクは拗ねた様に、彼女から眼を逸らした。

その視線の先、森の奥から、奔って来る黒い影が見える。

夜闇の中でもはっきり見えるその黄金の双眸は、間違いなく大鴉であった。

「ローラっ？」

こちらがあちらに気付いた様に、大鴉も直ぐに人質の姿を認めた。右手に握っていた偉くでかい拳銃の銃口が、目にも止まらぬ速さでリチャードへと向けられ、

「動くな大鴉。その位置で止まるんだっ。」

彼が持つ拳銃が、こつんとローラのこめかみに当てられたのを見て、停止した。

「お願い貴方、そこで止まって頂戴なっ。」

そう叫ぶ彼女の声色は、表情含め正に命の危機に晒されている女性そのものだ。流石の大鴉も、まさか愛人が謀っているとは気付けない様で、一同から二十インチは離れた所で停止する。

よくやるよ全く。

内情を知っているフランクは、ローラの演技に舌を巻いた。同時に毀れ出そうになる笑いを必死で堪えようと歯を食い縛りながら、他の者達と一緒に動向を伺う。万が一という事もあって、各々獲物を抜いておいていた。

「我々はこの通り、貴様の妾を手元に置いてある。生きるも死ぬも、我々の采配次第だ。」

大鴉の視線を真っ向から受けつつ、リチャードは引鉄に指を掛けて大鴉へと叫んだ。ひっ、という小さな悲鳴がローラの喉の奥より毀れ、止めろという返答が彼の者より放たれる。
「殺すつもりは無い。我々は、ただ我らの主人が不当に奪われた資産を取り戻したいだけだ。これは、貴様が人形を奪ったから打って出ただけの事。大人しく、あれをベイツ氏に返すというのであれば、こちらも同じ様に、このエルフを貴様の所へ返そう。」
「……。」
「これは実に公平な取引だ。そうは思わないか、大鴉。」
リチャードの低く穏やかな、それでいて立派な脅迫の言葉に、大鴉は暫し相手を睨んだままでいた。そうしてちらりと、その視線をローラの方へと送る。真剣に怯えた様に見える彼女の表情に、ぐっと眉間に皺を寄せて、彼は言った。
「……いいだろう解った。その取引に応じる。」
「良い考えだな……が、言葉だけでは駄目だ。まずは貴様の銃をここに置いてゆけ。」
それに応えて、リチャードはそう返す。
大鴉はゆっくり頷くと、拳銃を手から離した。地面に付いたそれは、鈍い音と共にずんと小さくも確かな砂煙を舞い上げる。
そうして彼は、何も無くなった両手のひらを星空目掛けて上げた。フランクはひゅぅと口笛を鳴らす。こんなに簡単に事が運ばれるとは、思っていなかったのである。聊か拍子抜けしてしまった程だ。勿論そうなる様に彼女を連れてきたのであるが。
まぁ何にせよ構わない、これから俺の復讐が時の始まりだぜ、と彼が心浮かれていた時、徐に大鴉は言った。相手を値踏みする様な、ねっとりとした声で。
「所で……置くだけでいいのか？　ここに置くだけ、それだけで？」
その妙な言い回しに、ローラ含め一同怪訝な顔を浮かべる。この男、突然何を言い出したのか、と皆が皆、真意を測りかねていた。
「あぁ何、一つの老婆心だ……このレイヴンクロウ、と、その銃の

名前なんだが……そいつが俺の近くにあっていいのか、と聞いていいるんだ。こんな、屈めば直ぐに拾える近くに？」
「……わざわざ言う辺りが気に食わんが、そうだな、そいつをここまで蹴って寄越すんだ。」
　続いて出た言葉に、漸く合点がいったリチャードが、くいっと首を動かして言う。それでもフランクはまだその心を読みかねていた。何故自分から不利になる様な事を言うんだこいつ。
　大鴉はそのリチャードの言葉に、半身になって疑う様な目付きのままに問い返した。
「本当に、蹴って寄越せばいいのか？」
「そうだ、蹴って寄越せ。俺らの方には一歩たりとも近づくんじゃないぞ。」
　何とも人を木馬鹿にした言い方に、彼はむっと顔を苛つかせて応える。こちらの思惑通り順調に事態が運んでいるというのに何故くだらない事で邪魔をするのか、という顔付きだ。
　だが大鴉の台詞はそれで終わりではなかった。
「嗚呼解った……いや、もう一度だけ聞こう。『蹴って寄越す』それでいいんだな？」
「くどいぞっ、時間を取らせて油断を誘うつもりなら、全く持って無駄な足掻きだっ。いいからさっさとその無駄にでかくて黒くて太い奴を寄越すんだ、蹴ってっ。」
　余りに冗長な言葉の連続に、とうとうリチャードが怒声を上げて、その銃口を大鴉の方へと向けた。普段冷静沈着な彼にしては、実に似つかわしくない言動である。
　それとは反対に、大鴉は甚く平静な態度で頷いた。そうして僅かに右足を曲げると、
「そうか解った……こうすればいいのだなっ。」
　地面ごと、その拳銃を力任せに蹴り上げた。
　衝撃で砂が彼の身長程にまで上がり、カーテンの様に彼の前方を覆う。

そして拳銃は、重々しい外観からは想像も付かない程軽やかに中空へと舞い上がり、何が起きているのか解らないという顔を浮かべているリチャード達の前で、大鴉の右手に収まった。
砂柱が静まり、彼の姿が鮮明になると同時に、大鴉はその引鉄を絞る。
砲声と聞き間違わんばかりの銃声が、烈日の如き一瞬の閃光と共に轟いた。
その後に僅かばかりだが確かな静寂が訪れ、
「……え？」
ぴしゃりと降り掛かった真っ赤な血飛沫に呆然とするローラの声で破られた。
彼女がばっと振り返ると、そこには顔の上から半分を吹っ飛ばされ、仰向けに倒れ込もうとしているリチャード、だったものの姿が垣間見えた。
何が起きたのかは明白である。
「てめぇ何しやがるんだっ。」
行き成りの反撃へ、一番に反応したのはフランクだった。
彼は、他の連中よりも早く、雄叫びを上げつつ拳銃二丁の銃口を向ける。
だが、その時既に敵は懐へと飛び込んでいた。
黒い影がその視界の下方を過ぎり、突き出された腕と腕の間に割り込む。
そこに見開かれ、煌く黄金の眼と眼が合った瞬間、フランクは横合いから鋭い衝撃を受けた。
十分な助走より放たれた廻し蹴りを、左頭部にもろに喰らったのである。
尤も、受けた本人は、何をされたか解っていなかった。
ただ激痛が脳天を駆け抜け、残っていた唯一の角が音を立てて折れる感触を味わっていた。
そうして壁に衝突したと錯覚する様に、フランク・ザ・シングル

ホーン改めノーホーンは、大地へと倒れると、最後に一つの思考を浮かべながら、その意識を失った。
　こんなので終わりなんてありかよっ、と。

　残された五人は、凍り付いた様に固まっていた。予期せぬ攻撃に応じようとした矢先に、あっという間に一人倒された驚きが、彼らの肉体と頭脳を麻痺させたのである。
　だが、それも直ぐに飛んだ。
　円弧を描きつつ、蹴り上げた脚を着地させた大鴉。
　その龍に似た黄金の瞳を見て、彼らは悟ったのである。
　何故この男が、蜥蜴の瞳に漆黒の頭髪という強い身体的特徴を持つにも関わらずその名で呼ばれないで、ただあの不吉な異名で呼ばれ続けているのか、を。
　こいつは正真正銘の化け物だ。
　人質なんて生易しい方法でどうにかなる相手ではない。
　それを我々は、どうしようも無い程に追い込んでしまった。
　遮二無二暴れて抵抗しなければ、リチャード達の二の舞になる。
　彼らはそんな本能的恐怖に動かされ、恐るべき噂が真実たる事を証明した大鴉へと殺到した。

　違う。
　銀の長髪と白のドレスを朱に染めながら、ローラはへたり込んだ。
　これは違う。
　頬を手で拭い、掌にべっとりとついた血を見て、ぶるぶると戦慄く。
　こんなのは違う、と。
　彼女は、自らが人質になる事で、ケインを取り戻すと共に、彼を測ろうともしていた。
　もし彼が自らの姿を見て素直に反抗を止め、アリスを差し出すというのなら、それでいい。後は一緒に街へと帰って、末永く幸せに

過ごすまでである。
だが仮に、そうで無くとも、それはそれで良かった。薄情にも自らを捨てて行くというならば、所詮その程度の男だったという事で諦めも尽くし、その後で今までに味わった、本人は解ってもいない様な苦渋のお返しをする事が出来るのだから。勿論、彼の性格を考えるならば、この後者はありえないと思っていたのだけれど。
つまり情愛の試練だ。どちらにせよ、ケインにはただで済まない。
しかし、彼はそのどちらでも無い事をした。
順応に従ったつもりで、その実猛然と襲い掛かったのである。
それだけならいい。それだけなら、彼の気持ちの表れと解釈出来る。
だが、何だというのだ、あの容赦の無さは。
ローラは、ここまで来る間にあのベイツの仲間達と少しばかりだが会話をしていた。
コミュニケーションの取り様の無いリアムに、ずっと昼寝していた白髪の東洋人以外は、皆悪党なりに悪くは無い者達だった。要は『負け犬（レザボア）』に集まる連中と程度は同じであったのだ。
リチャードはあれでなかなかに紳士的だったし、フランクは下品な冗句と幼稚な性格で、行きの退屈な時間の良き相手になってくれていた。
その二人が、あっという間に倒された。
フランクはまだ息がある様だが、リチャードはまず無理であろう。
そうして今この時にも、馬車と共に奔っていたガルシアとかいうケンタウロスが倒された。突撃した所を横から組み付かれ、馬の胴体に馬鹿でかい風穴を開けられたのである。
馬固有の長い腸がパスタの様に吹き飛び、びちゃびちゃという嫌な音と共に地面へと堕ちる様を見て、ローラは込みあがった吐き気をごくりと飲み干した。
そこに居る彼は、酒場二階の彼女の部屋に居る時の彼とは、全く別の生き物だった。

勿論ローラとて、彼にまつわる噂は知っているし、腕が立つという事も十二分に解っている。何時か酔っ払いに絡まれた彼女を、彼は素手で救ってくれたから。
でも、それとこれとは、次元が違い過ぎた。
幼稚で、子供っぽい彼がその本質だと思っていただけに、ローラの衝撃は大きかった。

だがケインには、次元の違いだとか何だとかいう感覚は更々無かった。
寧ろ彼は、今目の前に居る敵を倒す事に精神も肉体も精一杯であったのである。
仮にも自らの娘と称している者を、ぞんざいに扱ったカーシィへ、ケインは良い感情を抱かなかった。それと共に、アリスを護りたいと思う感情が強まった矢先に、目の前にローラが現れたのである。
敵に捕らえられた、危うい状態で。
彼女は、彼にとっては心許せる、稀な存在である事に変わりない。
それを簡単に、見捨てられる訳が無かった。
だが、その事はアリスとて同じである。
二つを天秤に掛けて、どちらを取る事も出来かねるケインが取った方法は、天秤自体を壊す事だった。アリスを護り且つローラをも救うという道を取ったのである。
その為の脅威を最優先で排除する。
彼の意思は強い衝動を生み、精神はその一点へと集中した。
殊、戦闘においてそうである彼の近視眼的思考は、この場において極まったのである。
それは相手の実力が解っているだけに、尚の事ケインの視野を狭めた。
フランクを一射で無く、一蹴したのも、装填する暇が無いと即座に判断した為である。レイヴンクロウの装弾数は五発で既に一発撃っていたから、なるべく弾は使いたくなかった。

こうして彼は、その意思に従って瞬く間に三人を屠ったのだった。

ガルシアが慣性に促されて暫く走り貫け、滑りつつ倒れ行く中、残りの四人は己の獲物を、かつての味方に組み付いている大鴉目掛けて殆ど我武者羅に撃ちまくった。ナイフ付き拳銃、短散弾銃（ホグズレッグ）が火を上げ、蒸気銃が猛煙を噴く中、彼は馬体を盾に連射を防ぐ。

更に血飛沫と砂煙が立ち上る中、装填の一瞬の隙をついて大鴉は木の蔭へと走った。

漸くに弾を入れ終えたラリー、ブルース、ハルが一斉射撃を放つも、当たるのは幹か地面だ。

それら遮蔽物を上手く使いながら、黒い影が彼らの周囲をすり抜けて行く。

その黄金の瞳だけが、微塵も動く事無く敵のみを見据えている。

抑えがたい原始の恐怖が体を貫き、ブルースが止めるのにも関わらず、ハルが踏み出した。

猫の様な、しかし決して可愛くは無い甲高い悲鳴を上げながら、銃身下の刃を煌めかせて。

それを見て大鴉は、大地に蹴りを打ち込んで停止。

両手で漆黒の大拳銃が柄を握り込み、絶滅必死の一撃を放とうとする。

が、その二人が交差するよりも早くに、動く者があった。

地面に先行していたリアムが突如としてその足元から踊り出て、体ごと腕を抱え込んだのだ。　そうしてあの常人離れした腕力を持って、大鴉を引きずり込もうとする。多くの者がその青白く細長い腕に掴まれ、命を落としたのだ。

だが、今の大鴉に、その程度の拘束など何の意味も無い。

まるで児童にじゃれつかれてでもいる様な無関心さで、無造作にハルへと狙いを定めた彼は、彼女のナイフがその喉を掻っ切るよりも早くに、引鉄を引いた。

鼓膜を破られそうな音が鳴り響き、事実彼女はその胸を紙の様に

楽々と打ち破られて倒れた。
　更に大口径が故の反動によってリアムの腕が浮くや否や、大鴉は力任せに腕を振った。
　前から後ろへと放られたその先には、弾丸すら受け止めて見せた鉄の塊が握られている。
　充分な加速と一緒にそれを顔面に受けたリアムは、情けなく両手両足を開いたまま吹っ飛び、木の幹に叩き付けられると、そのままがっくりと力を抜かせた。
　砕かれ、破片となって落ちた仮面の下から、のっぺりとした口だけの顔が覗く。
　大鴉はそれに一瞥すらくれず、残りの二人を見た。
　恋人を殺された怒りによって、歯を剥き出しにブルースが唸る。
　彼は、左腕の機械を震わせ、右手の短散弾銃を握りながら、大鴉へと詰め寄った。
　無謀にも我を忘れて飛び掛かって来る相手に、大鴉は無慈悲な一撃を叩き込もうとする。
　だが直後に狙いは代わり、真っ直ぐ向かってくる杭へと引鉄が引かれた。
　二つの弾丸が中空でぶつかり合い、互いにひしゃげてぽたりと落ちる。
　その隙を見過す事無く、一気に距離を縮めたブルースは、大鴉へとその義腕を突き出した。
　蒸気を上げて迫るそれを、彼は銃身で受け止めるも、しかし衝撃は貫通する。
　思わず一歩下がってしまった大鴉の腹は、ガラ空きだった。
　ブルースは短散弾銃の銃身をそこへ突っ込むと、敵が何かするより早くにその引鉄を引く。
　レイヴンクロウ程では無いが大きな銃声が鳴り、白煙が立ち上る。
　外しようの無い絶対的な零距離射撃。加えて、撃ったのは散弾だ。
　まず助かるまい、と口元を綻ばせたブルースの顔すれすれに、大

鴉の顔が突き出された。
その瞳の中には戦意がありありと宿っている。
ブルースがはっとし、体を離そうとした時には、もう既に遅かった。
自分が出来るならば、また相手も出来る。
お返しとばかりに放たれた大鴉の零距離射撃は、ブルースの腰付近を丸ごと消し飛ばした。
ラリーは、ブルースの血と骨と肉と皮の飛沫が砂へと帰って行くのを、確かに見ていた。
だが、同時に、あの眼が今度はこちらに向けられている事に気付くと、彼は、さっと右腕と成った蒸気銃を上げた。既に新たな蒸気缶と杭は入れてある。後は撃つだけだ。
大鴉がブルースの死体を脇へと退かし、一歩踏み出した。
その瞬間、ラリーは撃った。
凄まじい蒸気が立ち込め、通常の弾速より余程早い杭が飛来する。
正面からはただの点にしか見えぬそれを、大鴉はじっと見据えていた。
その杭が彼の頭を貫く、という絶妙なタイミングで、大鴉はしゃがんだ。
片脚を曲げ、片脚を伸ばし、両手で銃の柄を握り込む、狙撃体制。
自らの一撃が外れた事をすぐさま悟ったラリーは、右腕を惜しげもなく除装した。高価な蒸気銃を放置してでも、逃げるのに必死だったのである。
だが背を向けると同時に放たれた弾丸に寄って、彼の逃亡は一歩たりとも出来なかった。
正にその名が示す様な塩梅で、彼の頭蓋は弾け飛んだ。
骨の殻が飛んで行く中、黄身と白身を掻き混ぜた様な状態の脳を垂らして、ラリーは倒れた。
数え上げれば、戦闘開始より五分か十分、という所であろう。その間に森の静寂は破られ、そして地の上に六人の死体と一人の敗北

者が積み上がる事となった。

終わった。
ケインは体から力を抜くと、静かに、だが大きなため息を付いた。
その腹部から煙と共に撃ち込まれた弾丸が押し出され、ぽろぽろと落ち葉の中に落ちて行く。
終わった、ひとまずはこれで片が付いた。
土と汗と煤と、そして血で染まった頬を拭いつつ、彼はレイヴンクロウを閉まった。
そうして目を向ければ、ローラがしゃがみこんでいるのが見える。
体中に血が付いているけれど、あれは義眼の男のもので、彼女のものでは無い。
我ながら無茶な事をしたものだ、とケインは思い、苦笑いを浮かべる。
けれども他に方法は無かったし、結果的にローラを救う事が出来た。アリスも無事なままに。
ならば良いかと考えながら、ケインは立ち上がると、彼女の方へと歩み寄った。
「大丈夫かい？　ローラ。」
そうして、右手をそっとローラへと差し出す。
その手が、ぱんと弾き飛ばされた。
彼女自身の手に寄って。

「……あ。」
ローラは、今ケインが差し出してくれた手を、反射的に払ってしまった事に気が付いた。
そうしてそれは、直ぐに彼女の中に耐え難い後悔を生み出す。
空いたままの手を愕然と見つめる彼の、その表情を見てしまったからだ。
しまった、と彼女は思った。

「……あ、あの、あの、すみません貴方。」
いやだ私ったら、とローラは慌てて言い募る。
それにケインは力無く笑いながら、
「……いや、いいんだ。気にするな。」
そう応えるも、しかし彼の顔には深い諦念が浮かんでいた。
やはり君もか、という。
その表情に、ローラはますます後悔の念を強めた。
こんなつもりじゃなかったのに。
唇を噛んで、自らがしてしまった事を悔いるも、だが最早どうする事も出来ない。
それに、あの時大鴉として戦っていたケインに抱いていた思いは、紛れもない事実だった。
彼を恐ろしいと、見た事も聞いた事も、まして逢った事も無い化け物と思ったのは。
「あ、貴方これは違うんですよ？　はは、何でしょうこの手、」
それでも尚ローラは取り繕うとしたが、だがそんな暇は無かった。
「ローラッ。」
「えっ。」
唐突に引き込まれ、成す術も無く体はケインの胸の中に飛び込んでいた。
一昨日そこに居た筈なのに、久しく忘れていた温もりがそこにあった。
未だに消える事の無い戦いの痕跡と共に。
喜悦と戦慄を、同時に感じたローラだったが、直ぐにそれは消えた。
自らをそっと離したケインを見れば、その左の二の腕には奇怪な形の短剣が刺さっている。ついで振り向けば、荒野の奥、彼女が乗ってきた馬車の前にあの双子の中国人が立っていた。
ケインは再びホルスターから拳銃を抜くと、彼らの方へと歩み寄って行く。

「あ、」

ローラは咄嗟にその腕を伸ばした。離れて行く彼の外套(マント)でも何でもいい。今掴まなければ永遠に自分の元から居なくなってしまう。

そう思い、伸ばされた腕が掴んだのは、無情にも虚空だった。

嗚呼、と嗚咽を零しながら、ローラはぎゅぅと砂を掴む。

彼女は、相反する二つの思いを抱えながら、去って行くケインを虚ろな目で見つめていた。

16．闘争の果てのトゥルーロマンス

ケインと共に在った時に、アリスが父について詳しく述べなかったのは、何か意図があったからでは無く、それが言うまでも無い、当たり前の事だったからである。
何せ先日の朝、森を出るまで、彼女はずっと彼と共に居たのだから、当然の事だろう。
だからこそ、父とケインの会話を盗み聞きしてしまったアリスは、強い衝撃を受けた。
ただ正確に言うと、強い衝撃というだけで、具体的な事は理解していなかった。
生を深く理解していない彼女に性を認識する事は難しかったのである。
けれども、それが何か良からぬ事であるのはケインの激しい言動から推察する事が出来たし、何よりもその為に自らが作られたという事実は、アリスを哀しい気分にさせた。自らが気分と言っているそれが、経験と観察にのみ頼ったもの、感覚的には何の確証も無い、あえて言えば偽物であり、それを感じる自分もまた唯の人形である事は、勿論解っている事ではあるけれども、それでも、アリスの心は悲哀で一杯だった。自らを造り、産み出した創造主、父親たるカーシィ・キャルビンこそは、自分をそうでない者として扱ってくれていると考えていただけに。
「……あの……。」
「そら、おいでアリス、こちらに。」
扉の隙間からおずおずと半身を出していたアリスは、そう父に言われ、そっと出て来た。彼女の服装は今までと同じ、フリルを多用した漆黒のドレスである。体を拭いて寝る様に、と言われながらも、ケインと父の会話が気になって、そのままにしていたのだった。
カーシィの前に立ったアリスは、暫くの間どうしたものかとまま

でいた。
視線は泳ぎ、あらぬ方向、父の姿が焦点に合わさらぬ様な方向へと彷徨う。何をどう言えばいいのか、どう接すればいいのか、解らなかったのである。
それを見て取ったのか、カーシィはそっと手をアリスの頭の上に置くと、
「……ぁ、」
そのまま首の後ろへ向け、自らの体へと優しく抱え込んだ。彼女自身、特に抵抗もせず受け入れ、父のその、衰えてはいるけれど大柄な体へ華奢な体を収めさせる。
見えないが、骨ばかりな指が自らの髪の毛をすいているのを耳で感じ、アリスはあえて瞳を瞑ると、されるに任せてその指と髪が絡み合う音を聴いた。更に耳へと意識を注げば、父の心臓が脈打つ音が聞こえる。真昼間の大脱出の折に耳にしたケインのそれと比べると、熱さも昂りも無いけれど、自分の歯車が噛み合う音と共鳴する様で、心地良い。
それらは今日の朝まで、何度だって平然と感じていたもの達である。
だからこそ、より一層解らない。
「……ねぇお父様……。」
僅かに体を離しながら、アリスは首を上に向けてカーシィを見つめた。
「……どうしたかね？」
その漆黒の視線を逸らす事無く、父は穏やかな瞳で見つめ返す。彼女は一種の居心地の悪さを感じて眼をさっと横へ向けるが、直ぐに引き戻し、言った。
「……さっきの話は……本当、なの……？」
カーシィの顔に、すっと影が差す。彼は一言、すまないが、と付け加えてから、
「本当の事だ。決して、言うつもりも無かったがね。」

「……。」
悲哀の波形が脳裏で刻まれて行くのをアリスは感受した。合わせて金属の心臓が嫌な音を放つ。結局の所、彼女を苦しめた荒野での悩みは、無意味なものだったのである。
ただ、それが解っても、いや解ったからこそ、彼女にはまだ聞くべき事があった。
自らが、良からぬ目的の為に造られたのであるとするならば、相応の扱いがあるだろうに。
「……どうして、こんな……風に……本物の女の子みたく……？」
その言葉に、カーシィはますます影の深みを増させると、撫でる手を止めてこう返した。
「最初は、単純に一個の作品を完成させる為だったよ。生きている少女と寸分違わぬ存在にさせようとな、私の師匠と同じか、或いはあのヤーコプ・グルムバッハの様に……だがそれでもやはり、どうしようもなく情とは移るものなのだね。だからこそ悔いはあったし、それにそんな服を着せた訳だよ。喪服だ、なんて自己満足でな。」
彼は、そこまで言い終えると、一拍を置いてこう言った。
「そうだ……私は君を愛していたよ、アリス。」
「……。」
父の表情を、アリスは決して反らす事無く彼の瞳の奥を見つめた。その中に宿っているだろう真意を読み取らんが為に。
そうして導き出された解は、偽で無かった。
彼女は唇に笑みを浮かべると、私もよ、と言ってから父の胸に顔を埋めて呟く。
「……愛しているわ、お父様……。」
そうやって仮初の親子は抱き合い、一つとなって、互いの愛情を確かめ合った。
きっかけが何であれ、元々が何であれ、愛情があるならば、どうとでもなるのである。
だが、アリスにはまだしなくてはならない事があった。

「彼が気になるのだね。」
静かに体を離した娘に、カーシィはそう尋ねた。
彼女は、こくりと頷く。
ケイン。今もまた、外で戦っている彼の安否が、無償に気に掛かっていた。そこに至る思いは父へのものに似ているけれども、それとは別種の衝動めいたものを感じるのだ。
行かなくてはいけない。
カーシィの体から離れたアリスは、首を窓の外へ向けた。
それを見て、父は何とも言い難い複雑そうな表情を示して、
「多分彼は君に来て貰いたいとは思っていないだろうな。自分の闘っている姿を、君に見せたくなどあるまい。君に嫌われると思っている。だが、行くというのかね？　アリス。」
それはあのネバーモアと呼ばれていた事に関わるものだろうか、と彼女は考えると、その問い掛けに小さく、だがはっきりと首を縦に振って見せた。
それは何度も思った事だ。
彼が何者であろうと、構わない。
その魂が幼く、また善良である事は、良く解っているのだから。
だから何を見たのだとしても、きっと受け入れる事が出来る。
アリスはそう確信していた。
そんな娘の想いを黒く煌めく瞳に見たのか、カーシィもまた頷く。
そして立ち上がると、彼女の肩に手を置いて言った。
「解った、解ったよアリス。行きなさい、君の思うがままに。」
「……はい……。」
その言葉に再度頷き、肩に置かれた手を愛おしそうに頬ずりしてから、彼女はくるりと背を向けたと床を蹴って外へと出ると、森の出口目指して走り出していった。
呆けた様に座っているローラを背に、ケインはメンシャンとヤオシーに対峙した。

双子の中国人は、荒野と馬車を背にし、隣り合って立っている。ケインから見て、左に赤い衣のメンシャン、右に青い衣のヤオシーだ。そしてそれぞれ、横の者に向いていない方の手に、あの奇妙なナイフを数本持っていた。

「これはまた、実に見事なお手並みでしたな、大鴉（ネバーモア）。」

刃を弄び、月光で銀色に輝かせながら、メンシャンが言う。

「その七人は、我らの中でも相当な手練だったのに。」

同様の事をしながら、ヤオシーが続けた。二人共に掛けた丸縁の黒眼鏡は、月夜の下に虚空の円を四つ程穿っている。その下にある筈の眼をケインが見通す事は出来なかったが、今の言葉が本心からのもので無い事は、その妖しさから十二分に感ぜられた。

「……見殺しにしたのか。加勢も出来ただろうに。」

レイヴンクロウの銃身を折って、新たな弾丸を込めながら言うケインに対し、二人はほぼ同時に、さも愉しそうな、故に見る者を不快にさせる笑みを浮かべると、

「これは何とも人聞きの悪い事を仰るものですなぁ。まるで我らが鬼畜外道であるかの様に。」

「戦に勝利するには敵を知るのが重要。その為に尖兵を出す。我々の行いは利に適ってるかと。」

「良く言う。」

ケインは、がきりと、乱暴に銃身を元に戻しつつ、そう応えた。

彼は先にも増して酷く苛付いていた。アリスを護らねばならない所にローラも護らねばならなくなり、そしてその末に、彼女の心の内を垣間見てしまったのだから。

彼の頭の中では、単調なまでに同じ言葉を鳴き続ける鳥が降り立っている。その声が、或いは一時のものでは、という弁解を容赦なく掻き消し、強引に一つの結論を出さしめるのだ。

嗚呼、彼女も心の何処かでは、そういう風に俺を見ていたのか、と。

元よりそう思わせるだけの言動はずっとあった。

そしてあの平手打ちである。
あれは応えたな、とケインは自嘲する。つまり、それだけ自分は彼女に心を許していたという事だ。自身がそうだと思っていた以上のレベルで、だ。
だがそれを気付かされた一発は、同時に決別のものでもあった。
また皮肉か、とケインは奥歯を噛み締めた。
そうして、ささくれ立った感情を視線に込め、金色の眼で双子を睨み、唐突に言う。
「所で……何故俺が戦っている間にさっさとアリスの所へ行かなかった？　隙はあっただろ。」
行き成りの発言に二人は少し戸惑ったのか、きょとんとした顔を浮かべた。
だが直ぐに先程の笑みを作って言う。
「理由は二つですな。地理的なものと、それにベイツ殿の意思です。」
「森は岩に囲まれて、行けるのはこの場所からだけ。」
「更に我らが主は、貴方を生かす事無き様に、と言われました。」
「残しておけば間違いなく、後々の遺恨になるが故に、と。」
「成る程……それこそ愚かだな。」
口々にそう告げる双子に対し、ケインは深く頷き、下を見た後、嘲る笑いを彼らへ発した。
瞬時にその腕が上がれば、二人の片割れへと銃口を向ける。
この大鴉と恐れられる者を、真正面から相手にしようとはな。
そしてケインは、誇りと嘲りが同時に混ざり合った感情がまま、人差し指を引鉄に掛けた。
暗き闇を抱く今の彼にとって、こんな中国人など、哀れな三下程度に過ぎなかった。
そう、少なくとも、ケインの中では。
一方のメンシャンとヤオシーもまた、大鴉に対してある結論を導

き出していた。それは街で逃げ続け、つい先に七人の者達を相手取った彼を見てのもので、この様なものであった。
大鴉など恐れるに足らない、と。
確かに、この男は強い。動きは素早く逞しく、人間を一発で塵芥に出来る拳銃を巧みに駆使する事が出来る。またその肉体は不死身が如くあって、これが一番厄介極まりない。見た所弱点は無く、しかも殆ど瞬時に回復する体質は、世界中の保因者（キャリアー）の中でも破格であろう。
だが、それだけである。詰まる所は、生まれ持っての力に過ぎない。
彼には、その力を行使する為に必要不可欠な、技が足りていないのだ。
いや、多少はあるのかもしれないが、メンシャンとヤオシーには遠く及んでいない。
誇張はあろうが、仮にも中国四千年。
その大いなる時の中で培われて来た数多の技を継承する一派に属し、術と付くおよそあらゆるものを会得してきた彼らと比べれば、大鴉のそれなど児戯に等しいのである。

だから双子は、レイヴンクロウの巨大な銃身を見ても、動揺などしなかった。
その引鉄が引かれるよりも早く、彼らは弾かれる様にして左右に分かれた。
大鴉の狙いが、二手に分かれた相手のどちらへ向くかで迷う。だが、横へ走りつつ、近づいて来る相手に、もたもたはしていられないとばかりに、彼はメンシャンへ銃口を向けた。
そうして引鉄を引こうとしたその時、三本の白刃が飛来する。
ヤオシーが放ったナイフであった。
その狙いは正確であり、軌道は両の目と銃を握る右手へと進んでいる。

大鴉は思わず拳銃を振るった。
鈍い音と共に黒い塊が通り過ぎ、硬質な音と共に刃が砂地に突き刺さる。
彼はすぐさま銃口を戻し、今度はヤオシーへと向けた。
だが、そこに生まれた決定的な隙を、見逃す二人では無かった。
気が付けば、大鴉の前にメンシャンが奔り寄っていた。
前傾姿勢のまま、早々と接近したその動きは、まるで赤い猿の様である。
舌打ちしつつ、大鴉は撃つ事を止め、メンシャンへと銃身で殴り掛かった。
それは本来の用途では無いが、しばしば必殺の一撃として用いられてきた鈍器である。
その一撃が東洋人の小さな頭を砕くより早く、メンシャンはしゃがんだ。
頭上すれすれを大鴉の右腕が通り過ぎる中、彼は円を描く様にその脚を払う。
重心がぶれていた事もあって、それは鮮やかに決まった。
体制を崩し、思わず大鴉は仰向けに倒れる。
すかさずメンシャンは立ち上がった。
そしてがら空きになった大鴉の脇腹目掛け、人骨で最も硬い踵を叩き込んだ。
素晴らしくはっきりと、ものが砕ける音が響き、堪らず大鴉の口から血と息が吐き出される。
それでもまだ敗れはせず、大鴉は痛みの中で上半身を起こした。
おっと、とメンシャンは後ろへとステップを刻みつつ、そのまま高々と跳ね飛んだ。
中空で後ろ向きに回転して行く彼へ、唇から垂れる血はそのままに大鴉は狙いを定めた。
赤い影の下を、這う様に青い影が疾走する。
はっと大鴉が眼を降ろせば、ヤオシーが懐へと飛び込んで来てい

た。
彼は左手で相手の右腕を上へと逸らしつつ、半身となって右肘を突き込む。
場所は先にメンシャンが砕いた肋骨である。
二重の激痛を受け、大鴉は反射的に引鉄を引いた。
轟音と共に、大口径の弾丸が、空しく夜空へと飛んで行く。
その反動もあって、彼は後ろへと下がった。
左手でそっと脇を抑えつつ、痛みと怒りを堪えてヤオシーを見る。
彼は既に離れ、横へと跳んでいた。
その後ろには、既にナイフを投げる構えを取るメンシャンの姿があった。
咄嗟にヤオシーからメンシャンへ、大鴉が次なる弾丸を撃つ同時に、彼はその刃を放った。
指から放たれたそれは、今度は全て銃を握る右手へと突き刺さる。
刃の衝撃で狙いはぶれ、必中の一射はメンシャンの横を通り過ぎた。
そして、もうその頃には、既にヤオシーは動いているのである。

片方が打って出る時、それをもう片方が支える。
次にはその逆を。次の次にはまた逆を。次の次の次には更に逆を。
それが延々と続く。
それが、メンシャンとヤオシーが最も得意とする対人戦術である。
弛まぬ修練によって体得した功夫（クンフー）と、まるで意識を共有しているかの様な双子の神秘。
この二つを最大限に生かして敵を翻弄し、遂には打倒する。
扉と鍵という名前に相応しい、かちりと見事にはまった組み合わせ。
常に独りで戦い、相手もまた一人ずつ仕留めて来たケイン・ザ・ネバーモアにとって、絶えず二人で戦い続けるこの敵は、天敵と言っても過言ではなかった。

そうして気が付くと、ケインは荒野から森の方へと確実に追い詰められていた。
戦っている間に砕けた骨は一つに繋がり始め、突き刺さったままの刃も勝手に抜け落ちて行くので、倒されこそしないのだが、だからといってこのままでは勝てる見込みも無い。その傷の治癒とて、一体どれ程持つのか、本人すら定かではないのだ。
ローラは離れた所からそれを見つめて、ごくりと生唾を飲み込んだ。
彼女は信じられないと思った。
あのケインが殆ど一方的に負かされようとしている。
それもあんな小さな男、たった二人によって。
先程まで、あれ程の強さを示していた者が、である。
しかしながら彼女は、同時に二種類の安心を感じていた。
それはあの大鴉とて、人の子であるという事と。
あの化け物を、倒してしまえる人間が居る事だ。
その事に気付き、ローラは首を激しく降った。
私ったら本当に何て事を。
だがそれでも思いは消えず、彼女はじっと、ケインが蹂躪される様を見つめていた。

勿論当の本人は、自らの敗北に安心など抱ける訳も無く、怒りを持って敵を捕らえていた。
何と小賢しい相手だ。
一対一であれば苦も無く勝てるだろうに、それが適わない。徒党を組んでも結束など容易く壊せたものだが、この二人に限ってはそれも出来ない。
刺され、倒され、殴られ、蹴られ、一歩一歩ケインは押されて行っていた。
そうやって下がる度に、彼の中で怒りと憎しみと憤りが募る。

このままでは負けてしまう。
負けてしまっては、アリスを護れない。
無駄に体力を消費する中で、ケインの思いはどうしようも無く昂った。
今まで篭っていた鬱屈がそれを後押しし、意識はただ一つへと収束する。
この赤と青の毛皮を被った黄色い猿に、眼に物を見せ付けねば。
何故自分が、大鴉などという不快な異名を誇っているのか、を。

放たれた四発目の弾丸が小脇を抜けて地面を抉るのを見て、メンシャンは微笑んだ。
大鴉の持つ拳銃が五発しか撃てないのは、先の戦いの折に確認済みである。つまり、あの中には一発しか残っておらず、相手はもう不用意に引鉄を引けないという訳だ。勿論再装填などさせるつもりは無い。このまま一気に、押し倒してしまえ。
彼はそう考え、ヤオシーに目配せすると、相手も解ったのか頷き、笑った。
そうして今度は青い彼が大鴉へと詰め寄った時、彼らはある異変に気付く。
レイヴンクロウが、その主の右手から消えていた。良く見ると、後ろ腰のホルスターに収められており、黒く染め上げられた木製の柄が腰元より垣間見える。
とうとう諦めたか何か策があるのか、と疑う双子を前に、彼は走り出した。
後者か、と投げられるナイフを地面に転がって避けつつ、大鴉が寄ったのは、フランク・ザ・ノーホーンの側だ。
更に立ち上がった時、彼はあのロングバレルのピースメーカーを掴んでいた。
二十インチもある銃身が後方に備えられた回転式弾倉に込められている弾丸は、左右合わせて十一発。本来六発まで込められるそれ

は、大鴉を呼び寄せる為に一発使用していた。とは言え、それでも、十一発といえば結構な数である。
あの牛め余計な手間を、と双子が同時に思っている間も無く、二丁の銃が火を噴いた。
しかし当たらない。銃身を伸ばした事でその命中精度を上げたのだとしても、一度に二つの的を射抜くのは困難で、走っている相手ならば尚更である。二丁拳銃遣いならばいざ知らないが、大鴉はそんなものでは無いし、また二丁持つ理由は元来撃てる弾の数を増やす事に使われる事が多く、二人を一度に撃つ為にある事は少ない。
そんな事は大鴉とて解っているだろうに、しかし彼は引鉄を引き続ける。
自棄に成ったか、とほくそえみつつ、ヤオシーは詰め寄った。メンシャンが袖から抜き出したナイフを指に挟み、何時でも投げられる様に構える。
だが、彼らは知っておくべきだった。
大鴉が放つ弾丸は、今メンシャンに集中している事を。その為にヤオシーは接近出来るけれども、彼の片割れはその場に縫い付けられ、距離を縮められないという事を。そして避ける事に専念する余りに、攻撃の手を届けられないという事も。
功に焦るヤオシーは、銃弾が来ないのを良い事に、一気に詰め寄った。
腕の中、胸の内に跳んで入った彼は、その掌底を大鴉の鳩尾へと叩き込む。
たとえどれ程人間離れした体を持とうと、急所の数も間接の場所も同じなのだ。
ぐらりと倒れる大鴉に、ヤオシーは笑みを称える。自らの見事さを褒めてやりたい位だ。
だが、彼は直ぐにそこにある違和を感じた。
何故この男は、こうまで何の抵抗も示さないのか。
そう考えた突如、ヤオシーの体は前へと傾いた。

り込んだのである。

誘ったのかと、堪らず叫びながら、ヤオシーは空いている拳で殴り、脚で蹴った。自らの腕を離させようと、金的を含む打てる限りのあらゆる急所を強打する。

だが大鴉は決して離そうとしなかった。寧ろその力は一層に増して行く。

何という力かっ。そうヤオシーが恐怖すら覚えた時、彼の天地は真逆になった。

ねじり込まれた膝に、彼と大鴉との位置関係は反転したのだ。

今度は大鴉が上となり、馬乗りになっている。

そうして彼は、がきりと残ったピースメーカーの銃の先を、ヤオシーの額へ押し付けた。

それに気付いたメンシャンがナイフを投げ付け、それらは全て背中に突き刺さるも、大鴉は一向に構う事無く、ぐっと銃を握る手に力を込めた。

そうして今正に引かれるというその瞬間、ヤオシーは見た。

雲の無い空に輝く月を背景に揺れる、魔性の双月を。

瑣末な力ではどうしようも無い、絶対的な力の持ち主を。

黒眼鏡の下で瞳を震わせながら、止めようの無い脂汗を垂らしながら、彼は一言呟く。

それは中国語で、『魔王』という意味の言葉だった。

その言葉が解ったのか、大鴉はぎりっと瞳を細めると、容赦無く引鉄を引いた。

寂れ、乾いた地面に、潤いを与える赤い水が溢れ出す。

咲いたのは、己が半身の名を呼ぶ、悲鳴と言う花。

その中の悲哀を、次に己へと来る憤怒の視線を感じ、ケインは我知らず笑った。

どうだ、この俺に仇なすその不届きさを、身を持って思い知った

だろう。
彼は無造作にピースメーカーをフランクの方へと投げ捨て、レイヴンクロウを取り出す。
ケインは、久しく忘れていた爽快感を、高揚した心で確かに感じていた。
ちょこまかと小五月蝿い虫の如き奴らを叩き潰す事の、どれ程に素晴らしいものか。
そんな清々した気分で、彼は最後に残った獲物へと視線を送る。
哀しみ、怒っていた相手は、睨まれた瞬間に確かに震えた。
怖がっているのだ。恐れているのだ。この俺を。
そう思うだけでケインは高笑いしたくなった。
そしてそんな想いは、新たな獲物を求めて一歩を踏み締めた時、
「……ケイン……っ。」
聞こえた声によって、際限の無い後悔へと瞬時に変わった。

森を彼女なりの全力で走ってきたアリスは、抜けた先で思いも寄らぬ者を見た。
地面に横たわる無数の死体。七人、に見えたが、しかし一人はどうやら生きているみたいなので、正確には六人が、所々欠損した奇怪な姿で倒れている。そこから離れた所には、何故か怪我はしていないみたいだけれど血まみれのローラが居て、自分を見て驚いた顔をしている。
そうして、彼女からもまた離れた所に、ケインが居た。彼の右手には物凄く大きくて黒い拳銃が握られていて、側にはまた別の死体があった。服装からすれば、あのベイツの部下の中国人だろう。もう一方の赤い方は、ケインと対峙する様に今だ立っている。
何が起こったのか。
そんな事は、小さな子供であっても、物を知らぬ人形であっても、一目瞭然だった。

何故彼女がここに居る。
ケインは愕然と佇んだままで、戸惑いの表情を浮かべている少女を見た。その黒い瞳が自らを捉えるのを感じた彼は、熱く煮え滾っていた精神が、急速に冷めて行くのを感じた。
見られたのか。
ここに居る、という事はそういう事だ。
何処から見ていたかは解らないけれど、そんなもの、辺りの惨事だけで十分であろう。
見られたのだな。
その言葉の意味を深く噛み締めるケインの耳に、奇声が飛び込んだ。
振り向けば、メンシャンが、怒涛の勢いで奔って来る。その手にはあのナイフが、力み過ぎの余り血が流れ落ちる程に握り込まれていた。
あれも刺さり所が悪ければ死ねるかな、とケインは半ば他人事の様に見ていた。
けれどもその体は、まるで機械仕掛けの人形が舞を踊る様に正確に動く。
唯一無二の肉親を殺されたばかりに無謀にも突っ込んで来る相手へ、右腕を動かし、レイヴンクロウの銃口を向ければ、引鉄を引く。
至近距離まで詰め寄っていたメンシャンは、その胴体に大穴を開けながら倒れた。
返り血が吹き上がり、唯でさえ汚れたケインの体を、ますます朱に染める。黒い外套(マント)を着ていたとしても、それは余りにも鮮明な赤を月明かりに称えている。
終わった、な。
ケインはそんな虚ろな想いで振り返ると、アリスの方を見た。
アリスは、一切の感情を欠いた表情を浮かべているケインを見て、こう思った。

この人は誰、と。
彼女にとって、彼は幾つもの顔を持った人物だった。
少年、青年、老人。そのそれぞれにそれぞれの感情を覚えたものだが、今目の前に居るケインは、どれにも当て嵌まらなかった。まるで知らない人、始めて出逢う様な人に見えた。
その身を血に染めているというならば、尚更に、である。
アリスは一瞬戸惑い、向けられた視線に怯え、ざっと下がろうとした。
だが、そうやって脚を動かそうとして、彼女は留まった。
それはケインの、黄金に輝く瞳の奥に見えたのが、馴染みあるものだったからである。
その感情なら、アリスは良く知っていた。自らが森を出て幾度も受けた感情だ。
彼は哀しんでいる。
アリスはそう思った。そしてまた、何に哀しんでいるのかも悟った。
私に見られたから。
恐らく、これが彼の普段の姿なのだろう。何の為かは知らないが、人を殺す存在。
だが、ケインはそれをアリスに隠そうとした。隠し、見られた事に哀しんでいる。
何故かしら?
答えは、時間を賭ける必要も無く、簡単に導き出された。
本人は、それを決して心から喜んではいないから。
もし喜んでいたならば、逃げている時にだって銃を撃っただろう。けれども、彼はしなかった。殺さざるを得ない自分を、殺す事の出来る自分を、好いてなどいないからだ。
そう思った途端、この黒い影に包まれた人が、かつてその本質を見た人に摩り替わった。
体はしっかりしていても心の内は幼い少年なのだと感じた彼が、

目の前に立っている。
そもそも彼は何の為に戦っていたの？
その理由を思い出し、そしてまたかつてここに来るまでに自らが言った事を思い返し、アリスは一度は下がろうとした脚を前へと踏み出し、ケインへと歩み寄った。
自らには居なかった母親が抱く様な心持を基にして。

「……ケイン……。」

アリスのその小さな声に、ケインはびくりと我を取り戻し、同時に訝しがった。
彼女は、自分の方へと歩み寄っている。こんな血に汚れた化け物の元へと。
君は駄目だ。君は、来てはいけない。
そう思い、そして言葉に出そうとしたが、震える喉は声にならず。
気が付けば、彼女は目の前に居た。
目の前に居て、何の恐怖も躊躇も無い漆黒の瞳で、ケインを見据える。

「ぉ、」

その何処までも真っ直ぐな視線に、彼は一切を忘れて膝を付いた。
二人の体が、同じ程度の高さになる。
と同時に、アリスはそっとケインの頭に華奢な手を乗せた。彼女の父親がずっとそうして来た様に、或いは何時かでケイン自身がそうした様に、黒い髪を白い指が撫ぜる。
優しく、そっと優しく。
そこに人肌並の暖かさは無い筈だったが、彼は確かに温かみを感じる事が出来た。
今まで感じた事も無い様な、人間としての、素晴らしき暖かさ。
そしてその瞬間、ケインは何もかも全て一切を忘れてアリスに縋りついた。
ごとりと、レイヴンクロウを離し、彼は彼女の背中に腕を回す。

アリスの胸に埋めた口から、幼子の様な嗚咽が毀れた。
ケインは思い出したのだ。
自らが、一体何を望んでいたのかという事に。
長い歳月の果てに身も心も汚れ、遂に叶わぬと諦め、忘れてしまったもの。
それを今、ケインは己の内に宿るのを感じた。
この機械仕掛けの少女の無垢な、穢れの無い掌を通して。
ケインは、アリスに縋り付いたままで、長年の汚辱を削ぎ落とす様に泣いていた。
大鴉の名が与える感慨もそれが告げる言葉も最早遠く、感ぜられるのは彼女だけだった。
アリスは頭を撫ぜたままに、彼がするに任せた。
血で肌やドレスが汚れるのに構わずに受け入れ、聖母の様にその頭を撫ぜる。
月と星の光の下で、二人は今、一つになったのである。

一体ここは何処の劇場なのでしょうか？
抱き合ったままのケインとアリスを見て、ローラはそう半分呆れ気味に思った。
けれども残りの半分では、至極羨ましい気持ちで二人を眺めていた。
ケインとは一ヶ月余り過ごしたけれど、あそこまで心を打ち明けられはしなかったと思う。愚痴は聞いた事があるし、疲れていれば慰めもしたけれど、でもあれには到底適わない。もう二人は、周りの死体も、そして自分すら眼中にはあるまい。
ああまでやられると、もう何も言えませんよ。
最初にアリスの姿を見た時、ローラは彼女を嘲笑った。ほら御覧なさい、と。貴女がかどかわした相手は、こんな者なのですよ、と。自身がそう思ってしまった様に、同じ眼でアリスがケインを見る事をローラは願ったのである。

けれども、結果はこの有様だ。
相手が悪かったのですね、あんなの人間じゃありませんもの。
そう、理由はきっとあれが人形だったからだ。純粋無垢といえば聞こえは良いけれど、要は何も知らないだけだ。知識はあるから動けるけれど精神的に未熟で、だから異形極まりない者を受け入れる事が出来た。ただそれだけに過ぎない。その意味で、ケインは騙されているのだ。
しかしながら、もし自分が同じ立場だったら、どうなるか、と考えると、心は揺らぐ。またどうせ、自分は人形になんてなれはしないのだから、考えるだけ無駄というものである。それこそ、ケインと同じ様に全てを開け放たなければ、とてもとても。
ローラはふぅと溜息を付くと、星空を見上げた。
でも、やっぱり、口惜しいですね。
一面の夜空に輝く星々の様に、綺麗だがしかし届かぬ光は、彼女が抱いた夢の様だ。
きっと今度は叶うと、そう確信したのだと考えると。
やれやれ、と彼女は首を横に振ってから、今だ抱き合ったままの二人を見つめた。今となっては透き通った、ある種純粋な嫉妬を持って。
そしてその瞬間、場の空気の悉くをぶち壊す白痴の如き高笑いが上がると共に、煌く白刃に寄って、今まで沈黙を保っていた馬車が真っ二つにぶった斬られた。

１７．決まらす男（ミスター・ホワイト）

「最高だっ。ここ暫くの間じゃぁ最高の見世物だったぞっ。」
　丁度真ん中辺りを軸にして、二つに崩れ落ちる馬車。
　馬が嘶きつつ手綱を解いて逃げ出して、今粉塵を上げるその間から一人の老人が姿を現した。
　東洋の島国が民族衣装たる白い着物（キモノ）と紺色の袴（ハカマ）にガンベルト、ブーツという異装。
　冷たい光沢を放つ機械の腕と垣間見える胴に、ベルトに差される白柄の日本刀。
　髪も髭も白く垂れ、肌も老いてしわばかりだが、唯一衰えず輝く黒い眼。
「人形一体連れ戻せなんてくだらん命令出しやがってむかついてた所だが、なかなかどうして愉しい死合いが出来そうじゃないか。そうだろう大鴉（ネバーモア）、そうだろう我が兄弟っ。」
　その姿形は正に奇異であり、口調と相俟ってこの場に全く似つかわしくない。
　異邦人の行き成りが登場に、一同は戸惑いの表情を浮かべて彼を見入った。
　特にケインの反応は顕著であった。
　彼は振り向くと、泣き腫らした眼を手で擦りつつ、半信半疑の視線を男へと送った。
　何故だ、何故奴がここに居るっ。
　それも、よりによってこんな時にっ。
　ローラはここまで来る間に、ちらりと見ただけだったが、彼は男の事を知っていたのだ。
　シドー・アサクラ。
　この男こそ、ケインがベイツタウンまで追って来た者に他ならな

い。
彼は何年も祖国からこの国にやってきて以来、西部で暴れ回っていた賞金首だった。強そうな者に出逢えば、男だろうが女だろうが子供だろうが老人だろうが、誰彼構わず勝負を挑み、その腰に差した日本刀のみで戦い、全てを斬り伏せてきたのだという。

そして一度誰だかに敗れた折に、可能な限りの肉体を戦闘用の義体にしたらしい。そうなってからますます屍は増えて行き、彼は幾つもの異名で呼ばれる事になった。

例えば『白髪鬼（ホワイトヘアーデビル）』。例えば『薄刃上の快走者（ブレードランナー）』。例えば『カラクリ殺人機（キラーマシン）』。等々。

どれもこれも彼の趣向や様相に噛み合った名だ。

けれど一つ、外見からすればまず呼ばれるだろうに、決して呼ばれない名前がある。

それは『侍（サムライ）』だった。

シドーは、戦意旺盛な人間で、それ以外に何らの趣向を持たず、時に誰かに仕える事があっても、それはあくまでも次なる敵を求めてのものであり、かの日本の騎士が持つ忠義、武士道（ブシドー）は欠片も持ち合わせていなかった。恐らく在り方として最も近いのは、フリーランスの傭兵たる『浪人（ローニン）』だろうけれど、そんな言葉を知っている人間なんて、アメリカには数える程しか居るまい。ここ西部で言えばもっと居ないだろう。

しかしながら名前などどうでもいい。

重要なのは、兎にも角にもシドーが危険な男だという事である。

だが、こいつがまさかベイツの配下になっているとは、一体誰が予測出来ただろう。

ケインはそんな采配をした神を呪いたくなった。尤も、信じる神など居なかったが。

だが、そんな僅かな間にも、シドーは動いていた。

「そぅら、それじゃさっさと俺とやろうぜ、兄弟、よっ。」

砂塵を巻き上げる猛烈な勢いで義脚を動かし、彼は一気に近付く。
その勢いがままに、シドーはケインへと前蹴りを叩き込んだ。
「……ケイン……っ。」
アリスが叫ぶ中、彼の体はもんどりうって地面を滑って行く。
何と力強い蹴りか。あの双子の腕っ節も決して弱くは無かったが、これはそれ以上だ。
「どうした兄弟。さっきまでの威勢はっ。」
「誰がっ。」
木の幹に当たって漸く止まったケインは、更に踏み込んで来るシドーのブーツを同じくブーツで止めれば、逆に押し返し、その力を利用して立ち上がり気味に前蹴りを入れた。
うぉ、という悲鳴を上げながら彼はかなりの勢いで下がって行く。
けれど、ケインに手応えは余り無かった。
敵は自ら後ろへと赴く事で衝撃を逸らしたのである。
この男、出来るっ。
「……誰が兄弟だ。」
額から、今までとは別の意味に寄る汗が一筋垂れる中、内心の動揺を気取られまいと、彼は眼を細めてシドーを睨んだ。彼は、右手に掴んだ日本刀を肩に担ぐと、にしゃりと笑って、
「兄弟は兄弟だよ。さっきそこで寝ている連中を倒しただろ。あれを見てて思ったね、こいつは俺と同じだってな。だから……そらあれだ、戦いの神……そうそう、マーズの兄弟なのさ、俺達は。だったら、愉しまなくちゃいけねぇよ、戦いを。」
「……勝手に言っていろ。」
そんな世迷言に付き合っていられないとばかりに、ケインはアリスの方へ寄った。心配そうに彼女が見つめる中で、側に落ちているレイヴンクロウを拾い上げると、頷き、笑って見せる。
そしてそっとその頭を撫でると、ローラの所へ行く様に、肩をとんと押した。
二、三歩揺らめいたアリスは、そこで立ち止まると振り返り、

「……気をつけて……。」
そう呟き、ローラの側に立った。
二人の乙女が並ぶのを見てからケインは無言で再び頷くと、弾倉に弾丸を込めた。全五発。ガンベルトに収められた弾丸は、そろそろ半分を切り、補給する必要があるが構うまい。この狂った男相手には、全ての弾を使う必要があるだろうから。無くなれば、ジョンの所へ行けばいい。それよりも、この場を切り抜ける事が大事だ。
彼女を失う訳には行かないのだから。絶対に、だ。
そうして、ケインはシドーと対峙する。
「もう知ってそうな感じだが一応名乗ろうか。俺ぁシドー・アサクラ。まぁお尋ね者だな。」
「ケインだ。ケイン・ウェイトリィ……賞金稼ぎなんてやっている……ただの、男だよ。」
この一ヶ月余り、逢う事も無かった相手で、半ばもう諦めていた所だった。
そんな中で出会うとは、運が良いのか悪いのか、彼には解らない。ただ、どうせならそのまま居なくなっておいて貰いたかったのは確かである。
見る限り残りはこいつだけ、つまりこいつを倒してしまわなければならないのだ。
その相手、シドーは、ただの、という言葉にかっかっと笑い声を上げると、
「さて、一時の迷いは済んだかね兄弟。これから素晴らしい死合い(デスマッチ)が始まるんだぜ。」
すっと日本刀の白い柄に手を添え、右足を前にした構えを取る。
「そんなものよりも遥かに素晴らしいと、俺は思っているよ、彼女を。」
用心鉄を軸にレイヴンクロウを廻してから、ケインもまたその銃口を向けた。
三連戦目とは言え、まだまだ十二分に余力は残っている。

行く、いや行こう。
ローラと、そしてアリスの視線を感じながら、ケインは動いた。
瞬時に狙いを取れば、引鉄を引き、弾丸を放つ。
敵は構えたままで、びくとも動かない。そんなものは撃てと言っているのと同じだ。
そうして轟音と共に閃光が上がり、大口径の弾丸が命中した。
シドーの遥か後方の地面へと。
自らが外した事に愕然としつつ、ケインは砂柱が立ち上って上がるのを見ていた。
今の一射は、何の邪魔も無い正確なもので、普段ならば間違いなく当たる筈だった。
それが何故？
「おいどうした。それで終わりか？　兄弟。」
最初の構えはそのままにシドーが言う。
その顔は、実に嫌味な笑みを称えていた。
「舐めるなっ。」
先のは何かの間違いだ。次は必ず当てて見せる。
ぎりっと奥歯を噛み締めつつ、ケインは再び引鉄を引いた。
軌道は先程と同じ。何の抵抗も無ければ必ず当たるというもの。
だが結果は同じだった。弾丸は当たる事無くシドーの背後を抜け、砂柱を上げる。
「……馬鹿な。」
ごくりと唾を飲み込みつつ、ケインは撃った。撃ち続けた。
「はぁん、」
だがまたしても同じ事が起こった。三発撃って、全てが見当違いの所へと飛んで行くのだ。
硝煙の煙漂わす銃先を震わせ、その事実に驚くケインは、シドーの足元を見た。
今まで目に留めていなかったが、何時の間にかブーツの下の砂に波紋が浮かんでいた。それもかなり激しいもので、中心は深く、周

囲は高くなっている。
まさか。
ケインは、相手が何をしたのか理解した。
至極簡単な事だ。避けたのである。
ほんの僅か、ほんの僅か脚だけを滑らせ、体を移して。
成る程、それならば自らも行う事が出来る。銃口を軌道を予測すれば、直進する弾丸は決して当たる事は無い。前にも言ったが、所詮は親指大の弾丸なのだから、ちょっと位置が変われば、容易く関係無い方向へと飛んで行くのだ。経験を積み、反射を鍛えた結果、ケインは、撃った後からでも反応し、避ける事が出来る様になっている。尤もそれには、全神経をそちらに集中させる位で無ければならないが。
だが、出来るのと、されるのとでは訳が違い過ぎる。
日本刀の遣い手という今だかつて戦った事が無い相手の攻撃など予測も付かない中、こちらの生半可な攻撃が通用しない事は、相応に不利な事態であった。
「その程度かい兄弟……まぁいいさ、今度は俺の番だなっ。」
そんな懸念を後押しする様に、シドーは右足で一歩踏み込んだ。
たった一歩。
だがそれだけで、彼我の距離は無くなった。
ケインは既に、進みつつ左下方へと向けられた刃の射程内に納まっている。
来るっ。
弾丸を全て使い切った今、装填している暇は無い。
彼はシドーに向けて銃身を振るった。
十ポンドもの鉄の塊である。まともに当たれば一たまりも無い。
それが奴の脳天を打ち砕くより早く、ケインの体を何かが通り過ぎた。
ぶしゅりと、脇からその斜め上に掛けて赤い線が迸る。
その振動で腕がぶれる中、ケインは既に日本刀を抜いて、振り終

わったシドーの姿を見る。
こちらの方が先に動いたにも関わらず、奴は速度で彼を凌駕していた。
速過ぎる。
「流石土壱(ドイツ)の義体だなっ。こちらの思い通りに動く、最高だっ。」
不味いと感じ、ケインは大地を蹴って後ろへと跳んだ。いや跳ぼうとする。
「それに比べてぇっ。」
その時には既に次なる斬撃が奔っていた。
手首を返して刃を向ければ、シドーの白刃がやや斜め上から下へと煌く。
ケインは縦に一直線、左肩から右脇まで斬られた。
常人を超える視力を持つ彼でも、斬撃の瞬間はおぼろげにしか捉えられていない。
歪んだ十文字の傷口より真っ赤な血を噴出して尚、ケインは後ろへと下がった。
どうにかして新たな弾を込めなければ。その為にも、一旦離れなければ。
そうして後退する彼の背に、無情にも木の幹が当たる。
シドーは彼から見て左、ケインから見て右側から、既に刀を振り上げようとする。
「そっちは随分と不便そうだな拳銃遣いよっ。」
だが今度は咄嗟に反応出来た。
高速の刃の軌道に合わせ、ケインは銃身を盾に身構える。
一瞬の後、刀身と銃身が衝突、火花が散る。
最高の素材、最高の技術を持って作られたシドーの刀であっても、レイヴンクロウを斬るのは不可能の様だ。ただ、かの銃も、分厚さを持って刀身を食い止めるのみで傷付ける事は出来ていない。どちらもこの星の外から来た鉱物を使用している事を思えば、当然の結果か。

ともあれケインは、己が銃の力により、からくも刀身を受け止める事に成功した。
だが、
「弾丸込めなきゃ何も出来ないんだからなっ。」
その体がぐらりと揺らめく。
受け止められて尚、止む事の無い力に、ケインは横へと押し遣られた。
「くっ。」
抵抗し切れない事を察した彼は、自ら倒れ込み、力を受け流す。
地面に向けて横這いに落ちるケインの眼前すれすれを、刃が通って行く。
決して細くなど無い木を抜けながら。
ケインが地面に到達するのと、音を立てて木が倒れて行くのはほぼ同時だった。
「だが弾切れ位でどうにかなる訳でも無いだろ、おいっ」
シドーは刃の先を下へと向けると、柄の終わりに手を添えて倒れるケインへと突く。
倒れたと思う間も無く、彼はごろんと横へ転がって行く。
その横転する力を利用して一気に立ち上がった瞬間、シドーの刃が来た。
今度は間に合わない。
新たな刀傷を容赦無く刻まれ、ケインは呻いた。
「さぁっさぁっさぁっ、本当頼むぜ兄弟よぉっ。」
それでもまだ留まる事無く、シドーは狂った笑いを上げて刀を振るい続けた。

後は、もう、語る必要など無かった。

一度傾き出した事態は、そう易々と元には戻らない。
寧ろ時を増せば増す程、それは加速して行く。

ケインは斬られた。避けられず、抵抗もろくに出来ぬ中、幾度も幾度も斬られた。
正に滅多斬りである。
いや違う。そんな受動的な、消極的な言い方は正確でない。
シドーのそれは、最早そうとしか言い様の無い程の、鮮やかな滅多斬りだった。
その果てにケインが生きており、人の形を欠いていなかったのは、単に体質的問題である。死なぬとまで言われた治癒の力が無ければ、とっくの昔に彼は粉微塵にされていただろう。
詰まる所、この時点で既にもう今回の勝負は決したと言って良く、後はシドーが飽きるのが先か、ケインが遂に倒れるのが先か、というだけであった。

切り刻まれ、他人の血だけでなく自分の血を持って赤く染まって行くケインの姿を、ローラは唖然とした様子で見つめていた。隣に居るアリスもまた同じ様に、目を見開いたまま、その視線と共に体を硬直させている。
彼女達は、彼を手玉に取るシドーが信じられなかった。
確かに、あのメンシャンとヤオシーの二人に対しても、ケインは苦戦を強いられた。だが、それとこれは、また違う。彼が双子相手に苦しんだのは、婉曲的な戦法を取られたからである。別の言い方をするならば、彼らの戦い方は姑息で、実直なケインとは相性が悪かった。言ってしまえばそれだけで、力量としては彼を上回ってはいなかった。だからこそ、一人ずつ片を付ける事で、ケインは勝利して見せたのである。
けれどもシドーの戦い方は、もっとずっと直情的なものだった。やっている事と言えば単純で、踏み込み、斬り付けるのみである。だから別に、ケインにとっては苦手な相手では無い。にも関わらず追い詰められ、圧倒されているのは、彼我の実力差に開きがあるという事だ。

あのケインが、大鴉が敗れる。
ローラは彼と、そして彼に敗北を齎そうとしている者を見た。
縦横無尽に刃を奔らせ、返り血を浴びる度に笑いを上げる老剣士は、まるで白い悪鬼の様。
そんな想像に彼女はぶるりと身震いした後、幾度も振られる刀を見てはっとなった。
このまま放っておいてはいけない。幾らケインでも、命が危うい。一度はその死に安寧すら感じ、恋に破れた事も解かっていたけれど、やはり見捨てておくなど出来なかった。
ローラは周囲を見渡した。何か今、あれを止められるものがある筈だ、と。
そしてそれは直ぐに見つかった。元来女の、それも肉体的に貧弱なエルフの細腕では扱えない様な代物だったが、幸い既に準備は整えられていたから力は必要無い。後は狙いを定め、引鉄を引く。それだけでいいのだ。そも、あの男相手に通用するかどうかは解らなかったが、だがやらない訳には行かないし、物は試しというものである。
彼女はぐっと腹に力を入れつつ、自身でも驚く程大きな声で叫んだ。
「止まりなさいっ、そこまでですっ。」
ん、と、頭上に掲げた日本刀を振り下ろそうとするシドー、その前で力無くぐうな垂れているケインが振り返り見たのは、矢の番ったボウガンを構えるローラだった。今は亡きリチャード・ザ・ホークアイから拝借したものである。頭を撃たれていた為、背のそれは無事だったのだ。
その矢先を向け、シドーをきっと睨みつけながら、ローラはある約束について言う。それは本来もっと別の目的の為に交わされたものだったが、彼を助ける為なら構うまい。
「私は、貴方達に協力する折条件を出しているのですよ。彼を傷つけないと。もとい、もうどうしようも無い程甚振られていますが、

けれど約束は約束。彼を死なす事だけは、」
「知らんねっ。」
そんな必死の想いで言った言葉を、シドーは僅か一言で一蹴して見せた。
「なっ、」
「そいつはあんたとミスタァベイツとの約束だろ？　俺ゃ関係無いな。俺は、ただ人形を連れ戻せとしか言われて無い。つまり、それ以外は俺の自由な訳だ、何をしようと、な。それが俺とミスタァベイツとの取り決めでもある……勝手に言ってるんだなぁ妖婦。」
「こ、この糞野郎がっ。」
自らの主人が決めた事を無為に帰し、己の欲望を貫かんとする男に、ローラは怒りも露に彼の顔面目掛けて矢を放った。反動が襲って来て、彼女は尻餅を付くが、放つ事は出来た。
そして、腰に掛かる痛みを堪えてローラが視線を向けた先では、「んんぅ……悪くない、悪くないがぁ、良くも無いな。」
がきり、と矢の先端をガリガリと咬んでいるシドーの姿があった。
どう見てもまだ生身の歯で受け止めたのだという事実が、彼女の脳へと到達するより早く、彼はガキリと矢を噛み砕く。中途半端な長さで二つに折れた鉄の棒が、ぽろりと地面に転げ落ちた。その刀を握っていない手が瞬時に伸び、ローラの首を掴み上げる。がっ、と、聊か女性らしくない悲鳴を彼女は喉から絞り上げるけれど、そんな事を気にしている余裕は無かった。歯を食い縛り、唇から涎を零しながら両手で掴んで、どうにか己の体を支える。
その様子へ、シドーはにやにやという笑いを浮かべながらに言う。
「だが肝の据わった女だ……どんな風に据わっているか、是非とも見てぇ位ぇに。」
鉄の右手に力が込められた。握り込んだ柄の先で、刃が銀と赤の薄明かりを煌かせる。己が何をされるのか察したローラは、ぶるぶると震えながらに彼を睨み、
「……止めろ……。」

そこへケインが割って入った。
彼の体は正しく満身創痍だった。黒い外套(マント)はボロボロになっており、己の血の所為で、水を被った様に体に張り付いている。呼吸は小さく乏しくて更に荒々しい、虫の息という状態だ。何とか立ち上がってはいるものの、傷自体はまだ治っていない様で、足元はおぼつかない。
また彼の体からは熱蒸気が陽炎を伴ってゆらゆらと上っていた。恐らく、肉体が生きようと必死になっているのだろう。その為に体温が急激に上昇しているのだろうが、だがそれは、ケインの体がそこまで危険に晒されているという事実の裏返しでもある。
もうまともに戦えるかどうかすら解らなかったが、彼はシドーを睨んだままに、レイヴンクロウを二つに折った。アリスの哀しげな視線を感じる中、一つずつ一つずつ弾を込めて行く。
「嗚呼何だ、まだ動けたのか、あんた。」
興味がローラへと移っていたシドーはそちらに振り向き、獰猛に歯を剥き出して哂った。
「或いは、こいつの所為かい？　こいつに危機が及んだからか？」
そして唐突に左手を開くと、ローラを地面に落とす。地面に体を投げ出して、咳き込む彼女を尻目に、シドーはアリスの方へと視線を送った。
「だったら……こいつならどうかな？　下らん茶番だが、効果的かもしれん。」
「……ぁ……。」
自らと同じ色の、だが決定的に何かが違う瞳を見て、彼女は震えた。
「そもそも、連れて来いとしか言われて無いからなぁ。達磨にしたって構わんだろ。」
そう言ってシドーは、アリスの方へと一歩を刻む。
「止めろっ。」
その瞬間、ケインは叫びと共に腰貯めに銃を構えると、シドー目

掛けて引鉄を引いた。更に引いた状態を維持したままに開いた掌で撃鉄を払えば、立て続けに四発も撃ち放った。
　扇ぐかの様に掌を動かす事で間髪無い連射を行う、ファニングという銃技である。
　それは確かに素早く多くの弾丸を叩き込めるが、一気に来る反動の為に狙いがぶれてしまう諸刃の剣でもあった。しかもレイヴンクロウに使われているそれは、大口径強火薬の特性弾。
　ただでさえ凄まじい衝撃が四発分、折り重なり一つになって手首に襲い掛かり、当然の様に弾丸はシドー本人ではなく、全てその足元へと飛来した。
　既に弾の軌道を見切っていた彼は、身動ぎもせずに空しく弾が地面を抉るのを見ていた。
「むっ。」
　が、立ち上った砂柱が煙幕となってケインの姿を隠すを見、シドーは笑みを消した。
　今の射撃は囮。本命はこの後、砂の影から来る五発目の弾丸。
　なかなか考えるな、と構えはそのままに彼は次の攻撃が来るのを待った。どんな軌道を保とうと、瞬時に見切り、避けてみせると言わんばかりに、にしゃにしゃと笑みを浮かべて。
　そして、宙高く上がった砂が落ちようとする頃に、それが来た。
　だがそれは、シドーが予測していたものではなかった。
　来たのは弾丸などでは無く、ケイン自身であった。槍を突き出す様にレイヴンクロウを前に伸ばしながら、彼は猛然と駆け抜け、砂柱の中から飛び出した。
　それと共に、弾倉に残された最後の弾丸をシドーの胴目掛けて撃った。
　二人との距離は至近。
　如何に見切ろうと、最早避ける事は出来ない必中距離である。
「はっ、っはぁんっ。」
　だからシドーは避けずに斬った。

上から下へ、高速で飛来する弾丸より速く振られた刀剣は、中空で触れると、激しい火花を放ちながらそれを二つに両断する。鉛の塊が鉄の線によって分かれて行く様子をはっきりと見て取ったケインの瞳は、飛び出さんばかりに見開かれた。
そしてその視線は、即座に襲って来た胸への衝撃により、ぴたりと凍り付く。
ケインは震えた。銃を突き出し、眼を開いたままで、震えた。何か、決定的な何かが、自らの身に齎された様な気がして、しかしそれを確かめる勇気がなかなか沸いて来ない。
漸くにして、僅かながらに動かした眼が捉えたのは、己の左胸に突き刺さる日本刀だった。それは深々と根元まで刺さっており、背中から先端が突き出ているのを感じる。
それを認識した突如、ケインの五感は急激にその機能を停止させ出した。
視界がぼやけ、音が掠れて行き、血の臭いは飛んで、痛みも熱も何もかもが和らいで行く。
気付いた時にはもう刃は抜かれていて、彼は地面にどうと倒れ込んでいた。
皺と輝が混じる中、懐から取り出した古紙で日本刀を拭いているシドーが見える。口元に手を当て、驚愕の表情を浮かべるローラが見える。そして何事か叫びながら走り寄って来て、必死にしがみ付いてくるアリスの姿が見えた。
嗚呼……いいな。
次第に頭の回転が遅くなり、意識が薄らぐ中で、ケインはそんな、何処か見当違いな想いを浮かべつつ、アリスへと笑みを造った。それは傍目にはとても笑みには見えない様なものだったのだけれど、彼にとっては間違いなく笑顔だった。彼女は、今にも泣き出しそうな顔で首を横に振るうと、ケインの手を掴もうとした。
その背後に、苛烈な笑みを称えながらにシドーが歩み寄る。
アリスははっとして振り返ると、やはり何かは解らないが、何か

を叫んだ。彼は、顎に手を当てて珍しくも真顔で思案した後、歯を剥き出した笑みを浮かべて頷いた。
その顔がケインの耳元へと向けられ、シドーは何か囁くと、冷たく光る手でアリスを抱えた。
ケインは思わず手を伸ばし、待てと叫んだ。待ってくれ、と。後生だから待ってくれ、と。
けれどもそれは彼の気の所為であり、現実の彼は微動だにもせず、倒れているだけだ。
そして胸を反らせて笑いながら去って行くシドーと、名残惜しそうにこちらを見ているアリスの姿を最後にして、ケインの精神へ暗幕が降り立ち、彼は意識を完全に失くしたのだった。

18・まだ死ねるものか（ダイ・ハード）

そして再び幕は上がり、光景が音と共にやって来た。

「おお、よしよし。また悪い子達にいじめられたのかね？　ピーター。」

そう言って、足元に縋りつく僕の頭を、ホリー・ウェイトリィは笑みと共に撫ぜる。

彼女の手は暖かく、優しく、それ故に直ぐに僕はこれが夢である事を悟った。

「お前は何も悪くないんだよ、ブルース。ただちょっと、人と違う瞳をしているだけなんだよ。それにねハルク、そんなに早く大きくなるのはきっとばぁばの為なんだろうさ。ばぁばはもう直ぐ天国に行っちゃうから……だから直ぐに立派な大人になって、ばぁばを喜ばそうとしてくれているんだね。そんなに急ぐ事は無いのに、けどばぁばは嬉しいよクラーク。」

生まれて一年も経っていないに関わらずそこいらの餓鬼と大差無かった僕を、幾度も名前を間違える程に呆けていたとはいえ、祖母は何の変哲も無い孫として扱ってくれた。

そんな彼女は、僕が姿だけでも立派な大人になるより早く死んだのである。確か、まだ生後十ヶ月の位の事だったろう。そもそも、今のこの体はどう見ても児童のそれだった。

これが夢以外の何だというんだ？

そう考えた時、視界が回転木馬の如く周り、新たな光と音が映し出された。

「大方インディアンとでも寝たんだろうこの糞女っ。えぇ、さっさと白状したらどうだ。」
「私に問題があるっていうの？　勘弁してよ、問題はあんたの家系じゃない。見て解らなかった？　あんたの母親のイカレっぷり。どっかおかしいのよあんたの血は、狂ってるんだわっ。」

父と母……祖母と違って名前は忘れているから、本当に唯の父と母だ……の口論だった。狭く薄汚れた居間で、譲る事無く怒鳴り合っている。直ぐ側に本人が居て、じっとそれを見ているのに、二人とも全く抑えようとはしなかった。
二人は、僕が生まれてからずっと、彼の事で喧嘩し続けていた。それは祖母が亡くなってからより激しくなり、口だけで無く手まで出される様になった。お互いに、だ。
だからある意味、僕を捨てたのは良かったのかもしれない。それで諍いの原因は消えたのだから。

額縁から絵が外され、破け、次の絵が差し込まれた。

湿地帯にある無人の荒野だった。
枯れ果てた木があるばかりで他には何も無い。動くものも、暗澹と垂れ込む雲だけだ。太陽の光も、その厚い雲の層によって遮られ、ろくに差す事が無い。聞こえてくる音も、吹き荒ぶ冷たい風の音か、耳音を飛び交う気味の悪い虫の羽音位だった。
と、一つ正確では無かった。これを見ている僕が、その中に居るのだった。
その地を踏み締め、歩いた感触は今でも覚えている。妙に湿っていて、裸足には凄く歩き難かった。何処まで行っても不毛で、不愉快な気分にされた。

そうして絵の中を歩いている間に劇が始まる時間と相成った。
もう時代も場所も定かでは無い、何時か何処かで体験した出来事の再演。

都市。世界各地から集まった沢山の人々が、侮蔑か憐憫のどちらかを宿しながら、寄らず触れずただ眺めながらに通り過ぎて行く。時に物珍しさから近付く者も居るけれど、大抵はそれを売り物にしている商人達で、決して僕を見ている訳では無い。気になるのはこの黄金の瞳と、気が付けば成長している体だけだ。要するに、観賞用の玩具という訳なのだろう。

田舎。無知が齎す列記とした害悪の対象であり、鋤と鍬を持った迷信深い農民達に、幾度も幾度も追い立てられた。連中はあらゆる災厄の原因が僕一人にあると思っているらしい。滑稽だ。何が滑稽かって、それから必死になって逃げ惑うこの僕自身に違いあるまい。立ち向かえば、多分勝てるだろうけれど、怖くてそんな事すら出来ないのだ。

ただ時には逆の場合もある。この大陸に流布する彼のお方への信仰に仇を成す宗教の連中だ。それのご神体だか何だかにされた事は結構ある。厚遇といえば厚遇だが、邪教なんてものには興味は無かった。それに好まれる理由は、嫌われる理由と同じなのだ。やってられない。

体と言えば、何処かの道を歩いている時、頭の悪そうな子供に馬糞を顔面目掛けて投げ付けられた事があって、余りに空腹を覚えていたから、思わずそれを舐めた事があった。
苦かった。
肉体的には耐える事が出来た飢えを、精神的にも克服したのは、確かそれ以来だ。

克服した、というよりも、麻痺した、と言った方が良いのかもしれないが。

食べる反対に、食べられた事も無くは無い。勿論直接的意味じゃなく、性趣向的な意味だ。彼方此方を放浪している小汚い浮浪少年でも良いと思える程飢えていて、また物好きな者は居る様だった。食べ物をくれると付いていって、倒され、その後で本当にくれてからは、どうしても腹が減った時なんかに代金代わりで自分から差し出す事もあった。

ただ、別に好んだ訳じゃない。痛いし、気色は悪かった。

最初に殺した相手は、その手の好みを持つ中でも酷く性質の悪い奴だった。暴力が好きで、相手を支配下に置かなくては気に済まないというタイプだ。誘われ、捕まり、愛玩動物として飼われそうになった時、隙を見てそいつの持っていた銃を奪い、撃ち殺した。

頭に一発、それから体に残りを全部だ。

拳銃は重く反動は強く、死体は汚く、僕は思いっきり吐いたものだ。勿体無い、と思って、吐瀉物を戻そうと一瞬したけれど、流石に止めておいた。

それがまた始めて銃を撃った事でもあり、結構上手くやれるものだと思った僕は、そいつを常に手元に置いておく事にした。軽く指を引き絞るだけで、僕を嘲って来た奴らを黙らせられる。こんなに良いものは他に無いと、僕は本気で思ったものだ。

そうして遂に西部へと来た俺は、銃によって身を立てる術を知った。賞金首と掲げられた者を撃てば、それに見合った賞金が貰える。何て良い仕事だろう。相手は生きている事を望まれていない連中なのだから、好き放題銃を撃てる。実に素晴らしいではないか。

仮に失敗して自分が撃たれても、どうせ誰も構いはしないのだ。

こうして始まる銃火劇は派手極まりなく、実に刺激的で、だがやっている事は単調だった。
追っては撃ち、撃っては追う。時々は負ったりもするが、直ぐに治ってまた最初から。
何人もの、名も知らぬ、顔もろくに覚えていない者達を殺した。生きる糧を得る為に、それよりももっと大事な、何かを充実させる為に。
けれども決して満たされる事無く、時と屍が積み上がるだけだった。
振り向けば、闇の中にそれらがうず高く聳えている。まるで山の様に。

そんな中で、セレーヌと出逢った。
ローラやジョンみたいな、少しは自分の悩みを晒せられる者とも出逢った。
ある種の満足を、感じる事も出来た。

だがそれでもやはり望みは遠く、想いは届かない。
僕はそれをずっと抱いていた筈なのに、でも俺はもうその言葉すら忘れていて。
気が付けば、周囲はケインを大鴉と呼んでいた。
最早二度と逃れる事の出来ぬ死の象徴としていたのである。
俺は嘆きつつも誇りはしたが、思い返せばそんなもの、昔から抱えていたものでもあった。
結局、僕は俺になっても、根本的には何も変わってはいなかった訳だ。
ただ悪い方へ、悪い方へとどんどん向かっていただけで。

結論は結末で、そこに辿り着いた以上、後は終わりが訪れるのみだ。

俺の上に、終幕の黒い布がゆっくりと降りてくる。
舞台は閉ざされ、客席の俺は暗闇の中に残された。
そこで考えるのは、今見たこの俺の人生数十年間分について。
他愛も無ければ意味も無い、語ろうとしても直ぐに終わってしまいそうな内容。
それに思いを馳せれば笑いたい気分にもなり、泣きたい気分にもなった。
こんなものかと。所詮、こんなものなのかと。
いっそ割り切ってしまおうか。
高々と、誰も見ていない、聞いていない舞台に上って叫ぶのだ。
僕が生きている事を心底望む人なんて、この広い世界の何処にだっていないのだと。
だから俺は、そんな望まれぬ人間として、同じ様な人間を駆逐して行こうと。
認めてしまおう。楽になりたければ。
そうすれば誰もが幸せで、自分だって愉しいに違いないのだから。

「……違うわ……。」

その時耳にした声は、遠くからの様にも、近くからの様にも聞こえた。
顔を上げれば、灯された照明の下、客席の中央に、彼女の姿があった。
アリス。
そうだ、アリスだ。アリスがそこに居た。
彼女は長く艶やかに腰程まで流れる髪の毛を揺らしながら、白いワンピースの下から伸び行く余りに白く、汚れ一つ無い人形の脚を

動かして、跪いている俺の元へと遣って来た。
それに合わせて照明が動き、一筋の閃光が濃密な闇を掻き消す。
光の中でアリスは、俺の前にしゃがみこむと、そっと俺の頭を抱えた。
そして伸ばされ、撫ぜる手の、何と心地良く、暖かな事だろう。

「……違うわ……違う……貴方は、」

彼女は舌足らずな言葉で、けれどもはっきりとある言葉を告げる。
それの、嗚呼、何と素晴らしき事か。
夢である事は解かっている。そこには俺の、勝手な願望も混じっている筈だ。
だが、それでも構わない。一向に、一向に構わない。
夢であれ何であれ、俺の魂を癒し、許してくれる事に変わりは無いのだから。

その時、ふつりと明かりが消え、アリスの姿も消えた。
薄明かりも無い闇の中で、俺は叫び彼女の名前を呼んだ。
返事は無かった。
代わりに返って来たのは、白い敵の姿と声であった。
砂地を踏み締め、虚空に煌く星々を背に、シドーは俺に囁いている。

「惜しかったな。だが、俺はあんたを気に入った。心臓は傷付けちゃいない、ほんの少しずれているから、ま、大丈夫だろ。止めは刺さないで置く。この人形は、連れて行くがミスタァベイツに手は出させない。だから、目覚めたら追って来いよ。連戦の疲れを癒した後で、誰に邪魔される事無く純粋に死合おうではないか……待っているぞ兄弟。」

その様子を、俺と、僕は一緒に見つめていた。
視線は離れ、高笑いを上げながら去って行く敵を見、連れて行かれるアリスを見た。
最後に僕は俺を、俺は僕を見た。互いに頷き合うと、暗闇から僕が持って来たレイヴンクロウを、俺は握った。もしこの銃と、己の力に何かしらの意味があって、それが真に役立つ時があるのだとするならば、それは今だと、確信していた。
そしてあいつに証明してやるのだ。
自分は決して、お前と同じなんかでは無い、と。
そして僕が、銃を握る俺の手に自らの手を添えた時、ケインははっと眼を覚ますのだった。

19．始まりと終わりは、鳥の声が聞こえる朝に

そうしてまず始めにケインが目にしたのは、見慣れぬ天井だった。朝か昼か、そのどちらかは解らないが、差し込む日の光で、ここ最近ずっと寝泊りしていた『負け犬達の巣窟（レザボア・ドッグス）』が一室の天井とは違う木目が、はっきりと見て取れた。

次に感じたのは、自らを包み込んでいるシーツの柔らかさだった。その色は異様な程に白くて汚れ一つ、染み一つすらついていない。また、匂いらしい匂いも無かった。

幾つかの情報を経て、意識を呼び覚ました彼は、シーツを退かし、上半身だけ起こした。

そこに服は纏われていなかった。あるのはシャツと見紛う程に手厚く巻き付けられた包帯だけである。勿論、下はちゃんと黒の革ズボンが履かれているけれど。

誰が手当てしてくれたのか、と考えつつ、ケインは視線を周囲に送った。

そこは窓が二つに扉が一つだけの、小さな部屋だった。清潔感はあるが質素な造りで、家財道具は今寝ているベッドを入れても余り多くは無く、他に机と椅子と本棚がある程度である。

ただ、棚に並ぶ本の数はかなり多く、上から下までずらりと並んでいる。種類も幅があって、分厚い辞典からペーパーバックの薄い大衆小説まで様々だ。恐らくそのどちらに置いても、ケインが今までに読んだ書物を上回っている事だろう。ぽんとそこだけ取り出せば、彼が一度も行った事が無く、また行く事も無いと思う図書館の一角と言っても問題はあるまい。よく眼を凝らせば、そこには詠国の作家ルイス・キャロルの児童書が置かれてあり、それに隣り合う様にして、訳された荒羅舞（アラブ）の物語が並んでいる。

そこでケインは、ここがアリスの部屋である事を悟った。

意図せず、眼が辺りを彷徨う。居るべき相手、居る筈の相手を探

して。

部屋の主は、今この部屋には居なかった。

自らの意識が途切れる前に何が起きたのかを思い出して、彼はぐっと眉間に皺を寄せた。

更に拳に力を込めた時、ケインは漸く、己の右手が握っている黒い拳銃の存在に気付く。寝ている間にもずっと握っていたのだろう、右の指は白く染まっている。

彼はまた、先程まで見ていた奇妙な夢を思い出した。

その夢の最後、少年時代の自分自身から、このレイヴンクロウを手渡された事も。

ゆっくりと、ケインは右腕を上げた。更にぴんと伸ばして、銃口を真っ直ぐ、目前の壁に定める。通常の拳銃の凡そ十倍近い重量があるそれは、散々打っては撃った、しかもファニングなどという無謀極まりない行為までした手首にはなかなか響いたが、我慢出来ない程では無い。

そこに弾が込められていない事を確認しつつ、彼は用心鉄を軸に銃身を回した。最初は遅く、次第に速めて風切り音を発す。行き成り止めて構えれば、銃は回転を始める前ときっちり同じ位置へ、その巨大な口を向けていた。

やれる。

少なくとも、ある程度動けるまで体は回復したらしい。清々しいまでに斬り刻まれ、更には心臓の一歩手前を突き込まれたというのに、こうして生きている体には、最早笑ってしまうより他無かったが、けれども同時に感謝の念も浮かんでいた。こんな体質で無ければ今頃は……さて今頃は一体何時なのだろう。エルフのローラは、常に秒針まで正確に巻いた時計を持っていたから、時間の把握には困らなかったが、この部屋には時計すら無い。自分が倒れてから一体どれだけの時間が経ったのか検討が付かなかった。余り、経っていなければいいのだが。

そう思っていると突然ノックと共に扉が開き、銀色の髪を揺らし、

少し小さめの……多分、アリスのものだろう……ワンピースを身に纏ったローラ当人が現れた。

「あや……起きちゃったようですね、お早うございます。」

爽やかに挨拶しつつ、彼女は脚でドアを閉めた。品は無いけれど、それも致し方あるまい。彼女の両手は盆を持っている事で塞がっていたのだから。

「お腹空いてると思って、カーシィさんに台所お借りしてきましたよ。貴方に食事を出すのは、初めてですね。何分この家にはろくな材料がありませんでしたから、かなり手を抜いてますので……口に合うと、良いのですが。」

「お早うローラ……と、ありがとう。」

ローラはそう言いつつ、ケインの今だシーツに包まれたままの膝の上に盆をそっと置いた。そこには、豆とトマトとジャガイモ、後何かの野菜が一緒に煮込まれたスープ、ふた切れのパン、彼好みに深く淹れられた真っ黒な珈琲に、それから見た事が無い焼き菓子らしきものが、皿やカップに盛られている。

壮絶な戦闘をこなした後で、流石のケインの体も、空腹を訴えていた。そこで彼は銃を小脇に置くと、盆を手元に寄せる。そしてローラの、さぁどうぞと言わんばかりの笑みに促されるままに、その脇に置かれているスプーンを持つと、赤い汁に先を向けつつに、こう尋ねた。

「所でローラ……今は何時なんだい？」

彼女は、うぅんと呻きつつ、懐から銀蓋の懐中時計を取り出して応える。

「十時二十八分三十五秒ですね。あ、もう四十秒ですけど……貴方がシドーとかいうアレに倒され、私がここに連れ込んでから、まだ一夜しか経っていませんよ。」

ケインが何を知りたいのか察したのだろう、ローラは最後に言うと、ぱちんと時計の蓋を閉じて微笑んだ。彼はスプーンを動かす手を止める事無く、考える。

一夜。まだ一夜しか経っていない訳か。
それならば、まだどうとでもなる。
急がなくては、なるまい。
そう思い、スープを飲み続けるケインに、ローラはおずおずと尋ねた。
「あの……美味しいでしょうか？」
「ん？……と、嗚呼、悪かった。美味いよ、凄く。」
感想を求めていたのだろうに黙々と食していた事に苦笑しつつ、彼は言う。無論、それが嘘でないのは、黙々と、という時点で明らかであり、事実、美味かった。量だけで無く、味に関しても無頓着なケインではあるが、これならば食欲に無理を言ってでも作ってもらえばよかったかもしれない。千切ったパンをスープに落とし、程よく汁を吸わせてから食しつつ、彼は今更ながらに少し後悔した。一緒に添えられている珈琲の具合も最高である。
そうしてパンごとスープを飲み干したケインは、焼き菓子に手を伸ばしてひょいと摘んだ。
「気になっていたんだが、何だいこれは？」
「嗚呼、それはですね、レンバスと言いまして、エルフの里に伝わるお菓子なんですよ。荒挽き粉にハーブ類を混ぜて焼き固めたもので、美味しい上に体にもいいんです……ま、ハーブなんてありませんから、さっきそこら辺で採って来た草なんですけどね、入ってるの。」
最後の台詞の剣呑さに、う、とケインは口に運ぼうとしていた指を止めた。味の良し悪しは兎も角、毒でも入っていたら洒落にならない。そう考えている事に気付いたローラは、慌てて両手を振り振り大丈夫ですよと言って、
「ちゃんとそれっぽいのを入れましたし、毒見はやりましたから。」
その言葉を信用して、ケインはざっくりと歯を立てた。成る程、悪く無い。本来はもっと別の味なのかもしれないが、これはこれで美味である。それに心無しか、疲れが取れて行く気もした。尤も、

適当な草ではその効果も薄いだろうから、本当に気の所為だろうけれど。
ともあれ食後のデザートとしては上等なもの（そも、彼の様な者にとって、食後のデザートという概念そのものが上等だったが）を最後の一欠片まで噛み締めると、最後に半分程残っていた珈琲を一気に飲んで、ケインは一息ついた。
「ありがとう、本当に美味かった。」
「いえいえ、お粗末さまでしたよ。」
そう言って、頭を下げてみせる彼に、ローラもまた会釈で返す。
そのまま彼女は盆を退けつつ、珈琲のお代わりはどうですか、とケインへ尋ねた。それを彼は被りを振って断ると、脚をベッドから出して言う。
「いや、もう充分だ……ありがとうローラ、俺はもう行かなくては。」
久方ぶりにちゃんと食した、暖かい手料理により、ケインの鋭気は養われた。それに合わせて、体もまた幾分か楽になった感を受けている。時は十分だろう。そう言って、ベッドの下に置かれていたブーツを履こうとする彼に、ローラは満面の笑みを浮かべると、
「やはり、行ってしまうのですね……散々私に縋った癖に。」
冗談めかして、けれど心に来る一言で応え、ケインの動きをぴたりと停止させた。
確かに、その通りと言えばその通りであろう。
ローラとは、幾日も幾夜も、同じ屋根の下で暮らした仲である。ケインにとってその日々は、心穏やかに出来るものでは無かったか。たとえ最後の一線を、恐らくは互いに、踏み越える事が出来なかったのだとしても、その事が消える訳では無い。今からアリスの元へ行くという事は、そんな時を過ごした彼女を置いてゆくという事である。
だが、
「……すまないローラ……けれど、ね。」

ケインはブーツを履き終えると、立ち上がり、ローラへと向き直った。彼女は微笑みを称えたままに、彼を見つめ続けている。こうして改めて並ぶと、その背や肩が自らと比べて如何に小さいかを、痛い程良く解った。こんなに差があったのかと、訝しがる程に。
しかし、それでも、ケインは己の開かれた右手を真摯に見つめながらに、言った。出逢ってから僅か一日、しかしその時の中でどうしようもなく大きくなった彼女への想いを。
「……アリスは、俺の眼を月の様だと、素敵で、綺麗だとはにかんだし、荒羅舞の砂漠の物語を知らないと言ったら読んであげると言ってくれたんだ。それに……俺を抱き止めてくれたんだ。敵の血に汚れた俺を優しく、頭さえ撫でてくれたんだ……だから、だから俺は、」
「解っていますわ、そんな事。」
そう語られる唇を途中で押し止めたのは、ローラの人差し指だった。
彼女は、美貌と長寿を誇る一族らしい、何とも妖艶な笑みを浮かべて、
「ただ、それでも聞きたかったのは、踏ん切りをつける為です。貴方を、ただの貴方として、去って行った他の男達と同じ様に、見送る為に。」
そう言うが早いか、するりとケインから身を離した。
「ローラ……。」
「哀れみっぽい言葉は要りませんよ？　それよりも、貴方にはまだやる事がある筈です。」
ケインは、そんなローラに手を伸ばそうと腕を伸ばし掛けて、途中で止めた。そして、さぁ早く行きなさいな、と告げる彼女の笑みに、唇を一文字にして頷くと、小脇に置かれていたレイヴンクロウを掴み、ローラに背を向け部屋から出て行った。
エルフの女は笑顔のままに、彼の後姿を最後まで眼のみにて追っていた。

が立っていた。
アリスの部屋から居間を抜け、工房へと至ると、壁際にカーシィ
「これを聞くのは二回目だが……行くのかね？」
腕を組み、そう尋ねる彼に、ケインもまた前と同じ台詞で、だが
はっきりと言う。
「無論だ。」
「……そうか……だったら、至らぬ私からはもう何も言う事は無い
な。娘を頼んだよ。」
明瞭に、端的に述べられたその言葉に、彼女の父は頷きつつ応え、
ケインも首肯して返した。
と、そこで彼は何かを探す様に辺りを見渡す。
「所で……俺の帽子と、外套（マント）を知らないか？　あの部屋には無かっ
た様なのだが。」
「どちらも、ここにある……が、帽子は兎も角、外套なんてどうす
るのかね。まさか着るつもりじゃないだろうな。最早着衣として意
味を成さなくなっているぞ、これは。」
カーシィは怪訝そうな顔をしつつ、隅からケインの黒い帽子と外
套を持って来た。その言葉通り、外套は酷い有様だった。帽子も大
なり小なり血で汚れているが、それはこの比では無い。シドーの手
によって思う存分斬られた為に、半ば襤褸布と化しており、更に内
側から、外側から付いた血によって生地は強張り、錆びた鉄の様な
異臭を放っている。
だがケインは、そのどちらも躊躇する事無く受け取ると、
「いや、そのまさかだよ。」
頭から帽子を被り、ばさりという音を立てて、外套を身に纏った。
それは、彼なりの戒めであった。手も足も出す暇鳴く破れ、無様
に倒れた果てに、彼女を失ってしまった愚かな自分を、決して忘れ
んとする為の。また、長年大鴉（ネバーモア）として戦って来た中で、ずっと着込
んできた馴染みのあるそれは、云わばケインの戦闘服である。ただ

それを身に付けるというだけで、アリスを救わんとする心構えもまた鋭く、逞しいものになる。
そうして彼は、ガンベルトのホルスターに愛銃を入れると、
「では……彼女を、取り戻しに行くよ。」
「嗚呼、行ってくるがいい。」
そうカーシィと、簡単な言葉を交わし、後はそのまま家の外へと出た。

本来なら恐ろしい光と温度で照り付けてくる太陽も、葉の天窓越しには爽やかで心地良い。
昨日とはまた印象が違う、正に荒野のオアシス然とした森の小道を、ケインは歩く。
そして彼は森の出口まで来、昨日と変わり無く残っている戦場を眼にした。
あの時存分に争った形跡は、一夜程度ではまだ消えていない。木々や地面の所どころに弾痕が出来ているし、赤い染みがこびり付いているし、そもそも死体からして、まだ残っていた。後で埋葬でもするのだろう。そしてまた、シドーによって斬り倒された木はそのまま横たわったままであり、荒野に眼をやれば、同じく真っ二つに両断された馬車が見えた。
ケインはぶるりと震える。改めて、あの男の力量を思い知ったのだから。
だが、それでも戦わぬ訳には行かない。彼女を取り戻す為ならば、是が非でも勝って見せる。
そう頷き、荒野に居るだろうセレーヌを呼ぼうとした時、
「おい銃泥棒。」
と、背後からだみ声が掛かった。
振り返ると、木の幹に寄りかかる様にして、水牛男(バッファローマン)ことフランク・ザ・ノーホーンが立っていた。その名前通り無くなった両角の付け根と、首に包帯が巻かれており、片手でレンバスを咥えている。

「勝手に人の銃を遣いやがっててめぇは……まぁ、それはもういい。お前は、その、あれだ、あの人形を取り戻しに行くのかい？　ベイツの所へよ。」
「……嗚呼、そうだ。邪魔する者を全て蹴散らして、な。」
仏頂面でそう尋ねる敵に、ケインは睨みを利かせて言った。それに対しフランクは、正にその名が示す様な、ざっくばらんな口調で応える。
「けっ、戦うつもりなんか無ぇよ、くだらねぇ。ただ一言言って置こうと思っただけさ。今日ベイツは屋敷にいねぇ。どっかのお偉いさんに逢う為、州都プレスコットに向かってる。そういう予定だったんだ。今頃は列車に乗って丁度向かってる頃だろうよ……まず、あの人形も一緒に連れて行っているぜ、旅のお楽しみに、な……あの馬で今行きゃ、多分間に合うだろ。」
旅のお楽しみ、という言葉に、ケインはますます眼を細めたが、それ以上にこの男の言動そのものが不可思議だったので、怪訝そうに尋ねた。
「……良いのか？　そんな事を言って。お前の主なのだろう？」
ケインのその質問に、フランクは破顔すると、歯を食い縛って笑いつつ言う。
「金で雇われてただけだからな、信頼も糞もねぇよ。一緒に来た仲間は、あの胡散臭ぇチャイニーズ野郎共々死んじまったからな、おめおめと帰る訳にも行かん。それに、だ。」
更に折れた角が出ているテンガロンハットの縁で顔を隠し、フランクは続けた。
「お前には貸しが出来たからな。他の連中は殺されちまったが、俺だけは生きている。大事な角を失ったのは悔しいが、生きてるだけマシってものさ。それに、あのローラの姉御は、わざわざ俺まで手当てしてくれたからな……愛人だったんだろ？」
「……前は、な。後、別にあんたを殺さなかった事に理由は無いさ。あの時、俺は本気で蹴ったからな、殺すつもりで……それで生きて

いるのなら、それはあんた自身のおかげだよ。」
ケインは苦笑いを浮かべてそう応えると、フランクは、けっと口元を歪めた。
「どちらにせよ結果は変わんねぇし、もうこれで貸し話しだ。さっさと行けよ、こうしている間にも、どんどん離れてるんだぜ、列車はな。」
「そうだな……その通りだ、行かせてもらう。」
彼に一瞥を送りつつ、ケインは頷くと、セレーネという一唱と共に指を鳴らす。
暫くして、騒々しい足音と共に、馬の嘶きが耳に届き、彼の愛馬がやって来る。それに自ら駆け寄ると、勢い良くケインは馬上に飛び乗った。
相棒然とした主人の指示に応える様にセレーネは高鳴ると、そのまま一気に奔り出した。
手綱を掴み、踵で軽く背を叩く。
烈日の光差す荒野、その彼方目掛けて。

「……えぇ、そう、解っていましたとも。」
「ん？　何が、だね。」
ケインが寝ていたシーツを掴み、そこに顔を埋めているローラへ、カーシィは聞いた。
「あの人が離れて行く、なんて、そんなの解り切った事でした。それでも、もしかしたら、って少しは思っても、良いじゃないですか。ほんの少しだけでも、とどめられるかもしれない、と。と。色々あるけどお互いに眼を瞑って、ね……ねぇ？」
だがそれは所詮『もしかしたら』であり、現実にはありえなかった未来である。
その言葉に、カーシィは腕を組み、眼を背けて応えた。
「さぁ、な……私は、君でも彼でも無いから、何も言えんよ。」
「別に答えを聞こうとは思ってませんでしたけど……ずるいですよ、

それ。」
シーツから顔を上げて、ローラは笑った。その目元には微かに濡れた様な痕が残っているけれど、あくまでも痕だ。今はもう泣いてなどいない。そうかもしれん、とカーシィも笑った。
「で……君はどうするかね？　このまま街へ帰るというならば送って行くが、何ならここに居ても良いぞ。一人だけではここは寂し過ぎるからな。」
勿論親心で言っているが、と付け加えてそう言う彼に、ローラは解っていますよと言って、
「そう、ですね。少し居させてもらいましょうか。ここは、故郷に似ていますし。」
ちょびっとだけ、と、人差し指と親指で幅を付け、そして更に笑った。
望んだ願いは叶わなかったけれど、自分はエルフであり、時はまだたっぷりとある。
哀しいし、寂しいけれど、でも過去は過去と思って、次に行きましょう。
きっと何時か何処かで、本当の相手と出逢える筈なのだから。
その時こそ、彼も彼女も羨む様な、幸福な生活を送って見せてやります。
種族固有の性格と弛まぬ精神的努力を持って、彼女はそうエルフの微笑みを浮かべた。

20．三者三様の西部（ワイルド・ワイルド・ワイルド・ウェスト）

既に時刻は朝から昼と呼べる頃合になり、上がりきった太陽も、その光を情けも容赦も無く大地に降り注いでいるのだが、ベイツタウンの住人達の多くはまだ家の中に篭っていた。或いは宿か酒場か、商売女の所に。どちらにせよ屋外では無く、通りに人気は少ない。

昨日の大鴉狩り（ワイルドハント）、その顛末に一同強い衝撃を受けていたのである。

よもやあんな瑣末な、と皆が思い込んでいる事で、アレが復讐に来るとも思えなかったが、しかしそうでないと思い切るには八本脚の怪馬が姿は強烈過ぎた。それに飛び乗る大鴉（ネバーモア）の姿も悪夢めいた印象深さを称えており、人々はよもやと同時にまさかとも考えてしまうのである。

だからその時、荒野の向こうからやって来て、そして通りを抜けて行く、何頭も居るかと錯覚してしまいそうなけたたましい蹄の音に、市民達は震え上がった。

まさかと抱いていた思いが、まさかでは無くなってしまった。

その事を、ぴったりと扉も窓も閉じた家々の中で思い知った彼らは、過去の自分の軽率さを悔やむと共に、それを導いたあの双子を恨んだ。目の前であの馬を見た事ですっかり寝込んでいたステファニーなんかは、恐竜が来る恐竜が、とシーツに頭まで被り、呻いている程だ。

馴染みの酒場（サルーン）に居座っている、厳密な意味で市民とは言い難い連中の場合は、悪態を付きつつ何時あの悪魔の息子が戸口に現れてもいい様にと、銃の柄を握っていたが、本当に現れるのかと確かめに行く様な者は誰一人居なかった。『負け犬達の巣窟（レザボア・ドッグス）』がマスターは、そら言わんこっちゃないという冷ややかな視線を送りながら、コップを拭いている。

その知らぬ顔で通りを歩いていた極少数も、蹄の音に竦み上がり、直ぐ物陰に隠れてしまった。

そうして誰に邪魔される事は愚か、見られる事も無く馬の足音は通りを駆け抜けると、ある一軒の店の前にして嘶き一つ上げつつに立ち止まった。
「何だ、何だ、騒々しい。」
その声に気付いた店主が、腹を掻きつつ扉を開けて表に出る。銃職人ジョンである。
今まで寝ていたのだろう、欠伸を噛み締めつつ、彼は目の前に立っている黒い馬を見た。それの脚は八本もあり、更に騎手は馴染みある顔をしていた。
丁度日の影となったその男に、ジョンは眼を細めて見上げながらに言う。
「よぉ、大鴉。乗り入れなんて珍しいじゃねぇか、どうしたんでい。」
「頼みがある。直ぐに弾丸を補充したいのだが、新しいのはもう造ってあるか？」
騎手……大鴉は、すっくと愛馬から降りてそう言った。
ジョンはまず彼の実に酷い有様に成り果てた外套を、その隙間から覗けるそれより一層悲惨な体を見、最後に黒の帽子の下にある顔を見て、にんまりと笑った。
「お前……迷いが消えたな？　腹にたまってたもんが綺麗に無くなった、いい顔してやがる。」
「御託はいい。あるのか、ないのか、どちらだ。」
「へへ、急かすなよ。多分入用だって思ってな、たんまり作ってある。」
おかげでこちとら徹夜だよ、と更に声を上げて笑いながら、ジョンは一度工房に入ると、拳大の大きさをした麻袋を持って早々と戻り、大鴉へと投げ渡した。受け取ると、彼はその中身を確かめてから、深々と頭を下げつつ、代金が入った袋を投げ返す。
「いいって事よ……行くんだろ？」
ぽんと受け取ってから、ジョンは聞いた。

「ああ……多分、このまま戻らないだろう。」
大鴉がそう応えると、ジョンはうんうんと頷いて更に言う。
「だと思ったぜ……ま、何だ。折角消えた悔いだ、また作らん様、精々気張ってくれよ。俺に、お前の銃の整備をしたって事を誇れる位の働きは期待するぜ？」
それに、そうだな、と苦味を入れた笑みを称えると、大鴉は麻袋をガンベルトに差込んだ。ばさりと外套（マント）を打ち振るいつつ振り替えって馬に乗り込む。
ジョンは、その後姿を眩しそうに眼を細めて眺めながら、ぴっと親指を立てるのだった。

荒々しい野を、果てが無いかの様に何処までも走る真新しい線路。僅か半年前に建造されたその上を、州都プレスコット目指して一両の蒸気機関車が進んで行く。義体大国として、ここ最近の間に一気に技術先進国となった土壱（ドイツ）発端の、超蒸機関では無い従来機関の、タンク式を採用したそれは、代わりに大型化がなされていて、速度も馬力もなかなかであった。
アリゾナ準州にて始めて立てられた本格的鉄道であるこのバロック線の乗客達は、前方から後方へ砂の海が高速で流れ行く風景を、一等から三等の違い無く愉しんでいる。かつては馬か、もしくは馬車で通るより他無かったその地を、遥かに楽な方法で通っているのだから当然だ。
そんな、脈々と繋がる客席が一番先、特別車両の屋根に、シドーは居た。彼は昨夜と同じ、けれども血で汚れていない格好をして、進路方向に向きつつあぐらをかいている。表情は完全にくつろいだもので、歯を剥き出しにしたあの凶悪な笑みだ。
彼は待ち遠しかったのだ。兄弟と感じたあの男が姿を見せるのが。
今来るかどうかは、あの傷だから、微妙な所だろう。
が、しかし来るという確信があった。
奴ならば、まず間違いなく来るだろう、と。

それに、来なくてはわざわざ生かしてやった意味が無いでは無いか。
　そも、彼がこの国に遣って来たのは、強敵と戦う事が目的であった。
　時は、今から二十年近く昔の事になる。
　シドーの祖国たる日本(ニホン)は、その当時、他国との接触を拒む鎖国(サコク)状態であり、将軍家・徳川(トクガワ)が打ち立てた政権・幕府(バクフ)による、閉ざされた、しかし平和な時代を享受していた。だが、そこに強引に割って入った外国からの開国要求を発端に国の統治体制は乱れ出し、幕府側、反幕府側によるある種の内乱状態に陥ったのである。
　そこでシドー……当時は別の名前であったらしいが、その詳細は不明である……は、反幕府の若き戦士として倒幕運動に明け暮れていた。尤も彼は、幕府打倒を真剣に目指す同志の様に、明確に戦う言い分など持っていた訳では無い。類稀な才能と修練によって鍛えられ、達人と呼ばれるレベルにまで到達した剣術を活用したい、そんな単純な理由でシドーは戦ったのである。友人達が幕府を打つ、と息巻いていたからそちら側についただけであり、もし周囲が逆の事を言っていたならばその通りにしただろう。
　ともあれシドーは、思う存分刀を振るった。
　さしたる理由も目的も無く、ただ己の力を磨きたい、試したいその一心で。
　そして当然の様に彼は人を斬った。斬った。斬り続けた。
　その度に、シドーは感じたのである。
　苦も無く敵を倒した時に刀を通して伝わる生々しい感触。
　刹那の後、猛然と吹き上がる血飛沫の心地良い暖かさを。
　やがて術理の研鑽と利用は、実戦闘を通して本能に火をつけ、闘争への快楽を生み出した。
　もっと戦いたい。
　もっと斬りたい。

もっと勝ちたい。
もっと殺したい。
そう、もっとだ。
もっともっと、もっともっともっと、もっとっ。
無限の如く湧き上がる欲求は、唯の剣士を恐るべき剣魔に変えた。
一人倒す毎にシドーは喜び、新たな獲物を、刺激を求めて町中を奔走した。
その異常性が露骨に表に出始め、周りの人間から殺人狂として恐れ出された頃、彼は唐突に狩りの場を失った。遂に幕府が倒れ、新たな政府が打ち立てられたのである。
彼は呆然となった。
これでは戦えないではないか、と。
その心は飢えて乾いたままで、何もかもが事足りていなかった。
壮絶な勢いで押し寄せる皇火の文化に、そして築かれる新たな社会に、居場所を奪われた彼は、欲望を満たすべく辻に立って、闇夜の中道行く人に襲い掛かった。だが、既にそこらの人間を斬った位では収まらない程度まで、その飢餓は進行していたのである。
そうこうしている間に討幕運動の最後の一花には参加しそびれ、本格的に始まった新時代の中で唯の犯罪者として追われる羽目になったシドーは一丸発起する事になる。
日本は狭くなった。狭く、最早この腕を振るう事も出来なくなった。
だが海の向こうであれば、きっとまだ戦いの場があるに違いない。
彼はそう思い、逃避行の末、横浜港（ヨコハマポート）から密航、国外へと脱出したのである。
目指すは阿真利火（アメリカ）の西部であった。人づてに聞いた話によると、その地は金が出たとかで、世界中がら夢見がちな連中が集まり、まだ日本では一般に流通していない銃が幅を利かせた、素晴らしい混沌の地と化しているのだという。
そこならば、と、これまた長い時を掛けて阿真利火大陸に到達し

たシドーは、昼は剣術披露、夜は辻強盗で路銀を集めながら、西へ、西へと脚を進めた。

拙いながらも詠語を理解し始め、着たきり履いたきりだった着物（キモノ）と草履（ゾウリ）が現地の服とブーツに変わる頃、西部と呼ばれる地方へ付いた彼は、荒野にてあっと言う間に盗賊団に取り囲まれた。敵は多数で全員が銃を持った、絶体絶命と言える状況である。

だが、シドーの心は狂喜と共に乱舞していた。

この荒廃さ、無法さ、豪快さ。

ここだ、ここに違いない。

ここここそが俺が求めていた場所、極楽（パライソ）にして浄土だっ。

所詮は少し速い突きに過ぎんと直ぐに弾丸を見切り、一対複数という不利をたった一振りの日本刀で覆して見せたシドーは、そう確信すると、死体の散乱する地で高笑いを上げた。

この時より彼は、今の名を名乗る様になる。

漢字（カンジ）で『斯道』と記すそれは、さる筋の道、分野を意味する言葉である。正に戦と死の道に精通する彼が、西部の荒野に無数の異名を轟かすのに大して時間は掛からなかった。

そうして月日は経って現在。

ただ一度の敗北から、シドーは生身の体から機械の体となり、その整備の（ついでに衣食住）確保の為ベイツの用心棒となっていたが、彼を本当に満足させる相手とは逢っていなかった。

そんな風に、いい加減退屈を味わっていた所へ、大鴉が姿を現したのである。

合計二回の戦闘を垣間見、そして実際に一戦交えて、シドーは思った。

こいつは俺の兄弟だ。

誰もが叶わぬ力を持って、全てを殺し尽くす有様こそ、正に血を分けたそれであり。

実に殺し甲斐がある、と。

伸びるに任せられた白髪を風で棚引かせて、シドーはそう笑みを強める。
待ってやっているのだ、早く来い兄弟よっ。
更にガンベルトに差した白い柄を握り締めて、彼は好敵手の出現を待つ。
その中で、『もっと（モア）』と囁く声が、毎秒毎に声量を上げた。

シドーが居る特別車両の中では、ベイツが寛いだ面持ちで新聞を読んでいた。
この車両は、彼の為に造らせたもので、ここで暮らすのに申し分無い程の家具と設備が、その成金的趣向によって備わっていた。
これは、バロック鉄道線敷設の折、責任者であり、技師でもあるトム・バロックに相当な額を援助していた為である。時間的にも技術的にも資産的にも、本来ならもっと掛かるとされていた鉄道敷設だが、ベイツは金の力によって半ば強引に成し遂げたのだ。
それは彼の金に対する絶対の信頼と、飽くなき願望が原因であった。

かつて鉱山を見つけぬ前の若いベイツは、学も無ければ体格的にもそう恵まれておらず、何の後ろ立てても地位名声も存在せず、しかも大変に醜かった為、親兄弟知人友人全てに疎まれた。
そんな中で鬱積していった高みへの欲求は、金鉱発見と共に大いに爆発した。
ベイツは、金で買えるものは何でも買った。
堅牢な屋敷を建て、豪奢な家具を買い揃い、自分と同じ異形の部下を雇って、世界中の女を、少女を取り寄せた。自らの価値が、その資産のみである事など重々承知していた彼は、それを惜しげもなく活用する事で、昔日の自分が満たせなかったあらゆる、そう、あらゆる欲望を叶えるべく邁進したのである。
バロックへの援助もその一環であるし、またプレスコットへ行く事もそうだ。

ベイツは鉱山都市の一市長で終わる気など無く、更に上を望んでいた。州知事、それこそ大統領の地位を。そこから見える風景は、果たしてどれ程のものか。想像するだけで絶頂を覚える。かつて己を見下してきた連中全てを見下し、意のままに出来るというならば、その為に使う金に糸目は無い、と、ベイツはそう考えていた。
その考えは、もう一つの欲求に置いても、同様である。
彼は、ちらりと新聞から眼を離すと、窓辺に座る義体人形の方を見た。
その人形、アリスこそは、七人教授の一人にして『歯車式人工頭脳の祖父』と呼ばれる男、クリストフ・フォン・アッシェンバッハに師事した一級の義体職人カーシィ・キャルビンに大枚を叩いて造らせた愛玩少女である。
彼女の姿は実に美しい限りであり、ベイツはその出来を甚く気に入っていた。
そして、そんなアリスを陵辱し尽くす様を想像し、えもいわれぬ快感を感じた。
カーシィに彼女を造らせたのは、女達がベイツの責め苦に耐え切れないからである。ベッドの上で、彼女達は肉体的にも精神的にも呆気なく壊れてしまうのである。反応が一切返って来ない、本物の木偶人形を相手にしても、何も面白く無かった。
故にこそ、彼は決して死なない少女を求めたのである。何を、どんな風にしても決して壊れず、或いは壊れても治せば良い、そんな、永遠に、自らの趣向の相手が務まる存在を。
わざわざ製作者の説明を聞くまでも無く、常識的に考えれば、そんな者居る筈が無い、不可能だと解りそうなものであるが、強欲の権化であるベイツには及びも付かない。彼が考えるのは、如何に支配し、如何に愉しむかだけなのである。
それこそ、今から出来るならば、是非したい所であるのだが、それは何故かシドーに止められていた。もし少しでも触れたならば、お前を斬る、と。勿論不服ではある。七人の精鋭を、更に側近のメ

ンシャンとヤオシーを失いはしたが、それでもあの大鴉は潰えた（と、あの件の男が言っていた）のである。今更何を恐れるというのだろうか。
だが、それを言うと、今一番恐ろしい相手は、大鴉では無く、間違いなくシドーである。よもや手を上げるとは思えないが、油断が出来ない以上、彼の言う事は聞くより他ならない。
こうして殆ど揺れぬ特別車両の中、視線だけでベイツはアリスを味わう事にしていた。
その白磁の肌を抱けば、やはり見た目通りに冷たいのだろうか、それとも温かいのだろうか。蕾のままで止まっている薄い唇は、果たしてどの様な味わいをしているのだろうか。間接の繋ぎ目ばかりの指や脚、生身のものと比べて余りに艶めいている黒髪は、己の一物をしごくのに向いているのだろうか。そして肝心要の穴は、一体どんな具合なのだろうか。それを致した時、あの人形はどんな悲鳴を上げてくれるのだろうか。嗚呼、全ての部位をばらしてから（どうせ後で繋ぎ直せばいいのだ）行為に及ぶというのもいいなぁ。
ちらりちらりと、新聞とアリスを交互に見つつ、彼は悶々と思考を巡らせ、舌なめずりする。
ベイツは、やがて開放するに至るだろう強欲を、ねっとりと熟成させていた。

一方のアリスは、ある意味では一番単純で害の無いベイツの事など眼中に無かった。
彼女が考えていたのは、只管にケインただ一人の事だけであった。無駄に細かい装飾がなされた窓枠に体を傾け、外を眺めながらに彼女は昨夜を想う。
自らの体に縋りつき、本当に幼い子供の如く泣きじゃくっていた青年の姿を。
アリスはそんなケインを見て、自身もまた哀しみを抱くのを感じた。

彼の様子は、本当に弱々しかった。
凛とした強さを垣間見せていたケインがまるで嘘の様に。
だが逆に言うと、その行為は、それまでの彼の全てが虚勢であった事を告げており、普段との段差は、彼が人生の中で強いられてきた諸々を指し示す。
その事をアリスは共に考え、共に感じたのである。
今、己の胸に顔を埋めている青年、いや、少年の心の内に。
無限に限りなく近しい有限を持つ歯車が動き、彼女は愛しさと慈しみの感情が沸き立つのを感じた。父親に抱くものとは少し違う、だが穏やかで優しい、良い響きを持った動作だ。
その感情に動かされるがままに、アリスはケインの頭を撫ぜ続けた。
アリスはそして、次第に別の感情が、ある種の喜びが形を成してゆくのを察する。
今ケインが、自分を信じ、頼っているというその事実が、彼女には嬉しかったのだ。
アリスは、今日に至るまで自らが造られた理由を知らなかった。知らなくとも、父は居るし、本もあったし、世界は広かったから、何の問題も無かったのである。
けれども今日彼女は、その製造理由を知った。それは端まで理解出来なくとも、しかし認め難いものだった。生まれてからの歳月を全て壊しかねないものだったからである。
そんな彼女がこの時、誰かの心の拠り所に成れた。
どうしようも無い理由で造られた人形の自分が、だ。
それが彼女を、どうしようも無い程喜ばしい気分にさせた。
彼と一緒に居て彼を支える事こそが、自らの造られた本当の理由だと感じたのだ。
だが、そんな想いをまるで無視し、蹂躙した相手が居た。
アリスは、窓の向こうの荒野から眼を離し、天井へと視線を向け

る。
　見えはしないけれど、そこにはあのシドー・アサクラという東洋人が居る筈だ。
　彼は、異常な程に強かった。同じ義体とはとてもでは無いが思えぬ程に。
　ケインとて決して弱くは無い筈なのに、しかしシドーはその上を行く強さを誇っていた。あんな風に彼が手も足も出ないままに倒れるだなんて、誰が想像出来るだろうか。少なくとも、もしあの時、止めを刺そうと近寄るあの男の前に立ち塞がり、自らの差し出す代わりに彼を見逃す様言わなければ、きっとケインは死んでいたに違いない。
　そう、彼女が今ここに居るのは、自らの意思によるものに他ならない。
あえて死地に飛び込む事で、アリスは彼を救おうとしたのである。というより、彼女はそれ以外に何もする事が出来なかった。
ケインが腕も脚も腹も胸も肩も背中も顔も斬られ続けている間、アリスは一歩も動かず、ただただ目の前で繰り広げられる光景に、信じられないと思いながら釘付けになっていた。彼が、自分の為に戦ってくれている事を知っている上で、且つ彼女の隣に居るローラが、シドーを止めようと必死になっているにも関わらず、だ。
　彼女が漸く我に帰ったのは、ローラが捕まれ、ケインが刃によって貫かれた瞬間である。
　そうして咄嗟に飛び出したけれど、しかし所詮それは後の祭りに過ぎない。
　戻り様の無い時は流れてしまった。何をしようと、彼が倒れた事実には変わりない。
　今、列車に揺られる中で、その事が無性に悔しかった。
　存在の意義を見出した癖に、その相手を見ているしか出来なかった自分が憎かった。
　流れ行く大地を見て、いっその事飛び降りてしまおうかとも思っ

た程だ。だが、そんな事をしても、ケインはきっと喜ぶまいと信じ、こうして留まっている。
アリスは今、自らの命よりも彼の事で頭が一杯だった。
助けになど来てくれなくとも別に良い。
ただ今は、あの傷が癒えてくれる方が、その時間を稼げた事の方が重要だった。
そして何よりも、次にケインの為に何が出来るかが、だ。
コチリコチリと脳内の歯車を刻ませながらに、アリスは考える。
もしまた時が来て、彼が絶対の絶命になった時。
その時こそ、自らが出来る事をしよう。そして、ケインを助けよう、と。
で無ければ、自分がこの世に居る事など、無意味でしかないのだから。

刻一刻と、プレステッドへ近付いて行く蒸気機関車の中で三者の思考はバラバラであり、互いに口を開く事も視線を交わす事もせずに、ただ己の内に閉じ篭っていた。
それを現実へと引き戻したのは、客車から轟いた叫び声だった。
まず、あれは何だ、という疑問詞が最初に告げられる。
次いで感嘆と驚愕が上がり、最後に恐怖と共に、一つの名が聞こえて来た。
「大鴉だっ、大鴉が居るぞっ。」
その声に、がばりとシドーが振り向いた。
アリスもまた、立ち上がって窓に張り付く。
ぎょっとした顔を浮かべて、ベイツが続いた。
彼らの視線の先、まだ先頭には程問い後部車両の直ぐ隣。
彼が、三日月の白斑を持つ愛馬に乗って奔っている。
右手に超大な拳銃を、左手に手綱を握った黒尽くめの騎手。
襤褸と成った黒の外套を纏い、黒い帽子の下で鋭い金の光を輝かす賞金稼ぎ。

化け物と呼ばれ続けながらも、今はただただ愛する者を救わんと直走る一人の男。

その姿へ向けて、ほぼ同時に三人は声を上げた。それぞれに全く違う、己の言葉で。

「来たな兄弟っ、待っていたぞっ。」

「大鴉、大鴉だとっ？　何故奴が、奴が生きているのだっ？」

「……ケイン……っ。」

銃声が上がる中、彼が馬より列車へと飛び乗ったのは、次の瞬間だった。

21．遠い空で奪われた貴女を取り戻しに（エンター・ザ・パラダイス）

蒸気機関車に乗る客の半分、この西部の砂漠に長い間居る者達、警護の為に客席に乗ったベイツの部下達は、突如現れた大鴉（ネバーモア）の姿に震え上がった。
馬固有の嘶きと、特徴的なその音が聞こえ、外を向いた時には、愛馬に乗ったアレの影はまだ遠くにあったというのに猛然と砂煙を上げて見る間に近付き、気が付けば直ぐ隣に居る。
そうして併走する大鴉の姿は正に噂に違わぬ不吉なものがあった。
自らに待ち受ける末路もまた噂通りではないか。
彼はそう恐れ、叫び、銃を撃った。
ただ、残りの乗客は他所から来た本当の意味での市民が為、大鴉の噂など殆ど知らなかった。
だから彼らも喚声を上げたのは、セレーネの異形と、その走る速度による所が大きい。
脚が八本もある馬だなんて動物園に行っても見られる様なものでは無く、白斑も珍しい三日月だ。それに、馬の走りは余りに速い。一昔前ならいざ知らず、仮にも最新の技術によって造られたこの列車に後ろから追い掛けて、追い付く馬など、早々居る筈が無いのである。
故に彼らは、確かに気味の悪い所こそあれ、周りの者達が恐れ戦きつつ銃を撃つまでは、純粋な好奇心で黒い影を追っていた。
尤も、実際の所、ケインは無関係な者に危害を加えるつもりは無かった。邪魔立てするというならば話は別だけれど、それとてアリスを救う目的を前にしては掠れてしまう。その目的こそが第一に優先される事で、他の全て、何もかもは後に回されるものである。当然、折角補充した弾の消費などあってはならないのだから、撃つ訳も無い。

それからまたセレーネも、乗客の想像以上に危うい状況にある。ベイツタウンからここまで、彼女が出せる速度の限界を維持したままに駆けて来たのである。他の馬であればとっくの昔に脚に来て倒れているだろう事を思えば、確かに驚異的と言えるけれど、それでももう危険な域に達している事に変わりは無い。

それでも尚列車まで届けてくれたのは、主の為を想ってか。鼻と口から苦しげな吐息を上げ、全身から滝の様な汗を流す愛馬を優しげに見つめつつ、前傾姿勢を持って高速度を維持していたケインは、更にその耳元へそっと顔を寄せた。片手を手綱から離し、軽く彼女の頭を撫でてから、彼は静かに言葉を紡ぐ。

「ここまで走ってくれて、ありがとうな、セレーネ。」

揺れる馬上で、途切れ途切れにそう言ったケインの言葉に、セレーネはヒィンと声を鳴く。

頷いたのだろうか、と微笑みながら、彼は徐にレイヴンクロウを振り抜いた。

鉄と鉛がぶつかる音が響き、列車から放たれた弾丸を叩き落す。その恐るべき事実に恐慌状態となって撃たれ続ける無数の弾丸が、一発たりともセレーネに当たらない様悉くを堅牢な銃身で迎撃しつつ、ケインは続けて叫んだ。

「お前はゆっくり休んでいてくれ。」

彼は鐙から脚を離すと、膝を曲げて鞍に乗った。

手綱を操り、出来る限り列車へと近付く。

「次は俺が行く番だっ。」

そして、装填の為に弾丸が止まった瞬間、ケインは跳んだ。

殆ど垂直に、水平に、数ヤード近い距離を一瞬で埋め、屋根の上に立つ。

ケインを無事に送る事が出来た事を喜ぶ様に、セレーネが鳴いた。更にその体を線路より反らすと、新たな弾丸が跳んでくるより早く、彼女は離れて行く。賢明な馬だ、と彼は頼もしく思い、その黒い体が遠のくのを見守ると、ふっと前方を見た。

何両もの客席を越えた先に、シドーが佇んでいる。
馬と同じ位揺れるこの屋根の上、悠然と両手を広げ、その口元に笑みを浮かべながらに。
ケインは眉間に皺を寄せ、眼光鋭く睨むも、しかし何もしなかった。
風にはためく外套（マント）を振るいつつ、車両の連結場所へと降りて行く。
アリスを連れてそのまま逃げる事など許してくれる相手ではあるまいし、あの男との決着は個人的に付けねばならないものと考えている。
だが、それでもやはり、まずは彼女を見つけ、救い出す事こそが大事なのだ。そして、まだ何処に居るか解らない以上、最後尾から虱潰しに掛からねばなるまい。

ケインはそうやってシドーを無視すると、連結場所上の扉を蹴った。
勢い良く開いたそこへ、上げた脚はそのままに一歩を踏み込む。
絶叫と共に銃声が上がったのはその瞬間だった。
既に攻撃してくる事を予想していたケインは、客車へ入ると共にしゃがみ込む。
頭上を何発かの弾丸が通り過ぎる中、彼は内部の細部に至るまでに視線を送った。
そして、確認する。
この三等客車は、長椅子の列を左右に並ばせたもので、大人二人分の幅がある通路がその間を真っ直ぐに伸びている。乗客は満員とは言い難いが、決して少なくは無い。椅子の陰に隠れているのが大半である為、具体的にその数を確認する事は出来なかったが、聞こえてくる小さな悲鳴や吐息で、それとなく解るのだ。そしてその奥、次の車両へと続く扉の前には、列車に乗るよりも襲う方が似合いそうな二人組の男が、撃ったばかりでその先より白煙を上げている拳銃を握り締めている。どう見てもベイツの手下であり、且つ自分と

セレーネに向けて撃って来た連中と考えて問題無いだろう。
ケインはここまでを、数秒で認識した。
そして、出来るだけ姿勢を低くしたままに通路を走り出した。
目指すは前方の二人組
彼らは迫り来る黒い影へ何かって何か叫びながら、撃鉄を下げ、引鉄を引いた。
重なって上がる二発の銃声に、絹を裂いた様な女性の悲鳴が共鳴する。
だが、放たれた弾丸は、ケインが通り過ぎた後の床に穴を開けるだけで。
無残な結果に阿呆面を浮かべる二人に彼は腕を伸ばして衝突。
外見的には遥かに屈強な彼らを、壁際に叩き付ける。
鈍い音と共に強烈な衝撃を受けた二人組は、白眼をひん剥きつつ、膝を崩した。
ずるずると床に付く彼らの背後の壁は罅割れ、ささくれ立っている。
外套を払いながらケインは体勢を戻すと、彼は背後を振り向いた。
恐れと怯えが混じった視線が、一身に黒い体に注がれる。
だがケインは、その瞳にも揺らぐ事無く辺りを見渡すと、一人の貴婦人を見た。
恋人らしき相手に抱かれ、涙を浮かべる彼女は、彼の爬虫類じみた眼に震え上がった。
まぁそんなものだろう、とケインは思いつつ、乗客を代表して彼女に会釈する。
騒がして悪かった、と慇懃な態度で。
その仕草で彼女がどんな表情をするかを見るより早く、彼はこの客車から出て行った。
もう人々の不穏な視線や会話などで、動揺する様なケインでは無くなっていた。

全ては、彼女のお陰か。
たった一人でいい、本当に心の底から想え、想える相手が居るのは良い事だ、と彼は思いながら次の客車の扉を蹴り開ける、と同時に、屋根の上へと飛び乗った。
連続して弾丸が、誰も居ない虚空を穿つ。
騒ぎを聞いて、待ち構えていたのだろうけれど、それはケインとて先刻承知の上である。勿論唯の弾の一発や二発では死なぬだろうが、生憎これでも病み上がりの身であり、何処まで本調子なのか本人にも定かで無い以上、そんな簡単に食らってはやれない。
今度は腕を組んで、にやにや笑っているシドーを横目で見つつ、ケインは屋根を行く。
出来るだけ音が出ぬ様腹這いになって移動すると、顔を出して、横の窓から敵を見る。
客席の構成も、乗客の数も、前の車両と余り変わらなかった。
ただ今度は、通路の真ん中にゴロツキ風の男が四人居た。
少し厄介だが問題も無い、と、ケインは縁に手を当てる。
体を起こし、ぐるんと回る様にして、彼は窓を蹴破り、中へと入った。
そこに客が居ない事は確認済みであり、更に敵の一人は目の前に居る。
入ると同時に顔面へ蹴りを放つ。
仲間の一人が倒れる中、残りの三人は銃を捨てて殴り掛った。この至近距離では逆に当たらないと判断したのだろう。けれども、それで勝てる道理も無い。
ケインは放たれる拳を流れる様に避け、脚を払い、急所を打った。最後の一人が、この野郎っ、と突いて来たナイフを後ろに下がって避ける。
それは更に突かれ、振るわれるけれど、しかしケインにはかすりもせず。
とうとう痺れを切らして突撃してきた所を、闘牛宜しく避け際に

上げられたレイヴンクロウに自ら顔面を直撃させ、彼もまた他の者達同様あえなく倒れた。
ふぅ、とケインは息を付いた。
肉弾戦はそれなりに出来るけれど、物凄く得意という程でも無い。やはりこいつを使おうか、とも彼は思い、黒鉄の銃を見る。
が、結局はまだ使わぬ事にした。撃てば周囲への弊害が凄まじい、こんな雑魚相手に撃っていざという時に弾が切れたでは洒落にならない。最終的に戦わなければならないのは、そんな油断も隙も生めば、たちどころに斬り伏せてくる様な相手なのである。
あの老いて尚闘気張り巡らす男の姿を思い起こし、ケインは首を軽く振った。
そうして、気持ちも新たに次へ進もうとして、かつんと脚を止めた。
誰か、何かが外套の裾を引っ張っている。
振り返れば、そこには一人の、本当に幼い少年が居た。恐らく親である人物が、震えた眼で手招きしているけれど、彼は気にせず、じぃとケインを見上げている。
その両手には、覚えのある黒い帽子が握られていた。
あ、と思い、手を頭に乗せると、案の定そこには伸ばすに任せられたぼさぼさの髪しか無い。
戦っている最中に脱げたのか、と思いつつ、ケインは帽子を受け取り、
「ありがとう。」
そう一言告げてから、わしゃわしゃと彼の茶髪を撫ぜた。
少年はくすぐったそうな顔をして、それを受け入れると、親元へと戻っていった。
その様子を見送ってから、ケインは外套を払いつつ、帽子を被って、反転。
なかなか上々な気分がままに、次なる車両目掛けて走り出した。
あえて使わないのもまた手か、などと、そう思いながら。

次第に近付いてくる悲鳴と銃声に、ベイツは怒りも露に頭上へと叫ぶ。
「シドー、シドー貴様っ。あれは殺した筈では無かったのかっ。」
返事は無かった。
ええい肝心な時に使えぬ男だと、彼は口汚く罵りながら地団駄を踏んだ。
「……。」
アリスは、そんな彼など歯牙にも掛けず、ただこの部屋に唯一ある扉を見ていた。
あの人が、ケインがやって来る。
その事実は、彼女に複雑な感情を抱かせた。
彼がここに来るのは、大変嬉しい。何故なら、私を助けに来てくれたのだから。ここまで来るのに、ベイツタウンから結構な時間が掛かったから、かなり急いできたのだろう。その事を一緒に考えると、泣いてしまいたい程に嬉しくなる。だが、同時に心配にもなる。つまりはそれだけ無理をしてきたという事だ。いや、こうして来ている事自体が、無謀と言って構うまい。あんな酷い怪我だ、簡単に治る訳が無いのに。それで居て、自分はこうしてまた待っているより他無いのだろうかと思うと哀しくなる。
そんな様々な想いが渦巻く中、それを一つに纏めたのは、ベイツの行動だった。
「糞めっ、役に立たん糞どもめっ。金を払っても、それ以下の仕事しかせんっ。」
彼は叫びながら、奥に立てかけてあった何かを取り出した。
それは一丁の散弾銃だった。
ケインが持っていた銃より長くて、筒の口もより大きい。アリスがその実物を見るのは始めてだったけれど、それが散弾と呼ばれる、無数の小さな弾を発射する為の銃であり、至近距離で当たればとんでも無い威力になる位は知っていた。

その時彼女の体が、本人も意図せずに動いた。
光景が動作を促し、思考するよりも早くに拳を、かつてベイツを殴り付けたのと同じで今だ輝が入ったままの拳を叩き付けた。流れる様な、自然そのものの力強い動きで、
「おっとっ。」
だが今度のそれは、ベイツには当たらなかった。ひょいと、彼が後ろに下がった事で空を切り、更に伸び切って無防備になった腕を捕まれたアリスは、力任せに床へと押し倒される。
「早々何度も殴らせはせんぞ、この人形風情がっ。」
ベイツはその華奢な体に馬乗りになると、握り締めた拳を横合いに殴り付けた。
強い衝撃にアリスの首は横へと向けられる。触感の無い彼女に痛みは無かったが、頬を打たれた時の音が、ガタガタと揺れる視界が、造られた脳へと容赦無くその事実を叩き込む。
呆とした表情で、首を横に向けたままのアリスを、ベイツは荒い息遣いと共に見下ろした。その醜い顔が、良からぬ感情によって、見る間により醜悪なものへと変わって行く。
「主人に手を上げる様な所有物（モノ）には、一つ調整が必要だな。」
傍らに散弾銃を置くと、彼は彼女を再び殴った。続けて別の手、更に別の手と、左右交互にテンポ良く、アリスの頬を打つ。ベイツの様な人間にとって、暴行と性行は同列のものなのだろう、内に堪っていたものを吐き出す様に、下卑た笑いを浮かべながらに、彼は拳を振るった。
その度に見る側を変えさせられるアリスは、もう抵抗する事も無く、されるままにしていた。
最初の反抗が失敗した時点でそれは瑣末となり、もっと重い問題が鎌首を上げたのである。
抗っても、簡単に組み伏せられてしまう。
これでは本当に、唯の人形では無いか。
見ているだけで、聞いているだけで、考えているだけで。

何も産む所の無い、唯あるだけの人形。
自らの体が傷付けられる事よりも、その事の方がアリスには余程哀しかった。そんな自分の為に、あの人がやって来ようとしている事が、より彼女の感情を重いものにする。
ベイツは、そんな内心などお構いなしであった。無口で、感情に乏しい相手程に情欲がそそられるのだろう、殴る度にその力と速度を速めて、次の拳を注ぐ。生身の肉体では無いのでまだ強いけれど、しかしやはり衝撃を受け続けるならば、その結果は同じだ。アリスの片頬には小さな亀裂が入る。それはやがて大きく、深いものになって、最後を迎えた。
ばきっと、硬いものが折れる音と共に、彼女の樹脂で出来た外皮が弾けた。
そこで漸くベイツの手が止まる。
中空で拳を突き出さんとしたままで、ぎょっとした顔を浮かべて。弾けた部分は、右頬とその眼の周囲、つまりはアリスの右顔の殆どだった。そうして露と成った内部では、表情を作り出す為、小さな蟲の様に忙しなく動く夥しい数の歯車と、それに連なる種々様々な極小要素、蜘蛛の巣の如く張り巡らされた擬似神経たる銀色の神経糸、それに繋がれている白い陶器と黒い硝子で造られた抜き身の眼球が犇いていた。
少女の小さな顔面に、ここまでの技巧を織り込む様子は、職人や研究者の目から見れば感嘆すべきものであり、カーシィの腕の確かさを照明するものであるけれど、しかし想像する者で無く消費する者であるベイツは、露骨に嫌な顔を浮かべて言った。
「何だ、わしより醜いでは無いか、この人形。」
彼の言葉と表情は、剥き出しの片目と無事に残ったままの片目……いっそ壊れていた方が良かったかもしれないが……を通し、アリスの機械の脳へと、電撃となって迸った。
嗚呼やはりそうなのか、と彼女の瞳から光が消え、全身から動力が抜けて行く。

繊細な機構は、物理的暴力よりも、精神的暴力に余程弱かった。
「…私は…」
虚ろな瞳はベイツから焦点を外し、視線を中空に彷徨わせる。
その中でアリスは、何故ローラが、あの女性が、自身を嫌ったのか、解った気がした。
そうして鈴の様な、とは言い難い掠れ声で、彼女は呟く。
何故なのか、という決定的な理由を。
「……醜い、人形……。」

「違うっ。」

魂の深遠から搾り出される様な叫び声と共に、扉が蹴破られたのは正にその瞬間だった。
蝶番を砕いて、飛んで来たドアに当たったベイツは、蛙が踏まれた時に出す様な声を上げげつつ、共に押し流さ、壁際にぶつかって漸くに止まる。
拘束が解かれ、身を上げたアリスが見たのは、襤褸を着て息を滾らす、黄金の力強い光、彼女曰く月光を称えた瞳を向けているケインの姿だった。
彼は、蹴り上げた右脚でそのまま一歩を踏み出すと、
「君は何より穢れなくっ。」
下敷きとなったドアから抜け出したベイツが延ばした腕の先の、散弾銃を踏み砕き、
「清らかでっ。」
更に強い足取りで彼の成金の下へ行くと、ボールの様に空中に蹴り上げ、
「そして、美しいっ。」
同じ脚を高々と上げたから、一気に踵を下ろして、床へと叩き付けた。
強烈極まりない三連蹴に、ベイツは大量の吐き出しながら、仰向

けに横たわる。
苦しげに呻きつつ、その眼を細めてケインを睨みながら、
「こ、こんな、貴様っ。」
胸を踏んで見下ろす彼の足首を掴んだ。
「こんな、このわし……金のある……しか……こんなっ。」
その指は一瞬ケインすら怯む程の力を出したが、しかしそれだけであった。
莫大なる財産を得たが為にその欲望を止める事が出来なかった、ある意味では哀れな老人エドワード・ベイツは、憎悪に顔面を歪ませたままに呆気無く事切れたのだった。

脚の下から、急速に消えて行く生気を感じつつ、ケインはふぅと溜息を付く。
結局、一番後ろから前のここまで、一両ずつ戦いながら来る羽目になってしまった。流石の彼にも疲労が顔色に出てしまっている。最初からここと解っていたならば、こんな苦労も……いや、どちらにせよ結果は変わらなかったかもしれない。
ともあれ、ケインはやって来たのである。アリスの元へと。
彼は、息絶えたベイツより離れると、もう一度深く息を付いてから、ゆっくりと振り返った。
そこには彼女が居て、じぃとこちらを見つめている。
自然と顔が赤くなった。その視線もあるし、また自らが言った台詞を思い出したからだ。思わず聞こええて来た無体な言葉に激情して吐いたとは言え、余りに熱情的な言葉である。こうして気を緩めた瞬間に、それが伝わって来るから堪らないというものだ。
とは言え、言ってしまったものは仕方が無い。
軽く頭を振るうと、ケインはアリスの元へと歩み寄り、片膝を付いた。
そっとその手が彼女の、欠けた頬に触れる。
既に死んだ男への怒りは多少沸いたが、直ぐに止んだ。

彼にとって、そんな欠損など何の意味も無かったから。
人間だろうと人形だろうと関係無く、アリスはアリスだったたから。
ケインはそっと、アリスの頬を撫ぜた。
優しく、そっと、慈しみを持って。
彼女の顔の、まだ無事な半分がぴくりと表情を強張らせる。手の下で、無数の機構が動くのをケインは感じた。恥らっているのか恐れているのか、両方なのかは判断付かない。
その感触に、彼は思わず彼は手を離し、視線を反らした。こちらには明瞭な理由ある。気恥ずかしいと同時に、畏れを感じたのである。自分が触れて良いものか、を。けれども、
「……。」
アリスは、受け入れた。そっと腕を伸ばして、離れた指を掴むと、同じ場所に触らせた。
「……ありがとうケイン……。」
微笑む彼女の顔は、左右で全く違う、美醜合わさった表情を作り出すが、ケインには、その台詞と共に、どちらもがアリスという一つの存在の中で至福を生み出す。
彼は、促されるままに頬を、次に髪を撫でると、感極まった様子で腕を首に巻き付け、自らの胸の内へと彼女を抱き込んだ。乾いた血や砂ですっかり汚れている外套があったが、アリスはそんなものなどまるで無いかの様に力を抜き、耳を胸に押し当てる様に顔を埋めた。
自身の元までしっかりと聞こえて来る心音を、ここまで間近に聞かれるという事実は、更にそれを一層高鳴らす事となったけれど、悪い気はしない。
ケインはさせるがままに、彼女を抱いたまま、その髪の毛を撫ぜ続けた。自らを受け入れてくれたこの少女が、あの月の夜にしてくれた様に。
その二人の背後から、大仰で硬質な拍手と共に、聞き覚えのある

高笑いが上がった。

　ばっと顔を上げて見れば、何時からだろう、あのシドーが扉の前に立っている。吹き飛んだドアの枠に体を傾け、さも愉しそうに口元を歪めながら、彼は言った。

「結構な仕事っぷりだな、兄弟。全くここまで良くぞ来てくれたよ。」

「……シドー。」

　きっとケインは彼を睨み付ける。この男が居なければ、苦も無くここまで来れたろうに。

　その視線を悠然と受け止めつつ、シドーはぐっと体を起こしてからに続けた。

「怖い顔はするなよ。お前のお陰で、喧しい雇い主から解放されたんだからな。」

　それは半分冗談であり、半分本気の口振りだった。実際、この男だったならば、誰かにやって貰うより自ら手を下した方が速かっただろう。それをしなかったのは、そもそもシドーに置いては、ベイツの趣向も恩恵も何もかも、どうでも良かったという事に違いない。

「ま、ともあれ、だ……解ってるよな?次は、どうするか、ってよ。」

　そして、この男に興味があるとすれば、それは戦う事、ただそれだけなのだろう。そうであるからこそ、今ケインは生きていて、そしてまた彼は乗り越えねばならない敵でもある。

　すぅと、白柄の日本刀を鉄の指で撫ぜる仕草を見て取りつつ、ケインは頷いた。漆黒の拳銃を右手に握り締めながら、そっとアリスの方を見る。

　何時かと同じ様な構図に、彼女は不安げな顔をするけれど、彼の口元に浮かぶ優しげな笑みと、その瞳の輝きに、直ぐに表情を変えた。怯えが消え、逆に信頼の念がそこに現れる。

　彼らの様子を見ていたシドーは、嘲る様な笑いを深めつつ、くっと親指を天井に向け、

「嗚呼、別れの挨拶やら何やらの準備は終わったかね、兄弟。だったら早くしよう。尤も、そうでなくては困るが、ね。時間はやって、お前の方から来たんだ。今更そんな諸々を済ませてませんでした、ではそれこそ済まされんぞ。」

「……安心しろシドー。もうそれは良い。だから、」

ケインは彼の指を見、再びアリスを見て互いに頷き合うと、彼女をそっと放して立ち上がった。出来るならば、放したくなど無かったけれど、巻き込む訳にも行かない。

それにまた、再びこの腕の中に抱く事も出来るだろう。

ずっと、その銃口と視線をシドーへ投げ掛けつつ、ケインは言い放った。

「俺はお前を倒す。その減らず口は、一晩だけで充分だ。」

22. バロック線上の決斗

蒸気機関がけたたましく黒い煙を吐き出して鉄と木の塊を進ませる中、その列車の屋根の上、一つの車両の端と端に立つ形で、ケインはシドーと対峙した。

その後方、特別車両の上には、アリスが佇み、黒のドレスをはためかせながら、愛すべき男の姿を見守っている。彼女の格好は、かつて喪服と、自身の死を悔やむ形で着せられたものだが、今は寧ろ喜ばしい。その色が、離れた彼女と彼を繋ぐものであるのだからだ。

これが、その本来の意味合いを持たなければ、と、アリスは黒い背中をじっと見詰める。

彼女の視線を感じて、心強さが沸くケイン。

シドーは彼を見て、にしゃりと笑いながら、ゆっくりと構えた。力が抜かれた全くの自然体の中で、左足を後ろに、右足を前にして、日本刀の白柄に手を添えたその構えは、彼がどれ程その動作に慣れ親しんでいるか、つまりは人を殺して来たかを示すものである。

対するケインは、両足を肩幅程に開くと、レイヴンクロウを握り締める。ただ、それを上げる様な事はせず、銃口は下を向いたままで、彼はシドーの動向を伺っていた。

「どうした、ちゃんと構えてないと、あっと言う間にたたたっ斬るぜ？」

それでもいいがな、と異国の剣士が笑う中、異形の射手は至って真摯に頷く。

以前戦い、負け、そしてここへと来る前に幾度も戦った中で、彼には一つの技法が思い浮かんでいた。それを意識してやるのは、そもそもやる必要が無かった為に始めての事であるけれど、この無駄と思える位に超大な拳銃を手に入れてから常に行ってきたものでもある。今はそれを駆使するだけであり、その為に構えなど要らないのだから、力まず立っているだけでいい。

ただ、ケインには、本当に最後に、聞いておかなくてはならない事があった。

黒の外套を風にはためかせながらに、彼はシドーに尋ねる。

「なぁシドー……一つ、教えてくれ。」

「あ？　何だ、さっさと言ってみろ。」

「あんたには……何か、戦う目的や理由は無いのか？　何故、人を斬るんだ？」

その質問に、白髪を靡かせながら、愉快そうに歯を向き出して、シドーは返した。

「そんなもの端から無ぇな。強いて言えば、あの小っせぇ島国に置いてきちまったよ。」

「……そうか。」

ケインは、瞳を閉じて、少し安心した様に吐息を付くと、きっと睨んで言い放つ。

「ならば、俺とあんたは兄弟では無い。違う、別の生き物だ。」

そう、彼には戦う目的も理由もあった。今まではただ生きるが為に、という漠然としたものだったけれど、今は違う。どうしても、何があっても、護らなくてはならない相手が居る。

その為に戦う。この決闘はその一環であり、同時に宣誓でもあるのだ。

自分ももしかしたら同じになったかもしれない。だが、実際は違う。

ケインはそう、この荒々しい天地に照明してやるつもりでいた。この戦いを通して。

「はん、言うな……だが、どうでもいいぜ、兄弟。」

それを彼らしくも鼻であしらってから、シドーは指に力を込めた。そして、

「俺は、お前と、戦いたい。そして斬って、殺したい。ただ、それだけだっ。」

二人の間を瞬時に埋める踏み込みと共に抜刀、斜め下から一気に

斬り掛かった。
それは最早光としか眼で捉えられない速度を持つ。
ケインはその斬光を避けられず、好き放題に斬り刻まれたのだ。
だが、今回は違う。
シドーが踏み込み刃を抜き放つと共に、彼もまた一歩踏み出し、距離を縮めた。
そして、下方より迫る日本刀目掛け、上方より拳銃を振り下ろした。
強烈な硬音が、辺りに轟く。
後もう少しで刃が体に触れる、という所で止められ、シドーはひゅぅと口笛を吹きながらも押し込もうと右腕に力を込めるけれど、幅厚の銃身、更に刀を受ける反対側に添えられた片腕がそれを拒む。
ケインは、一筋の汗を頬から流しつつも、どうにか退けたのである。

銃撃と斬撃は、点か線かという次元の違いこそあれ、その使い手の同士の腕が強烈な高さへと達している状況、殊、至近距離という場に置いて、等しく同じになる。
撃鉄を上げ、引鉄を引き、弾丸を撃つ行為と。
柄を掴み、鞘から抜いて、刃を振り翳す行為。
高度に洗練された地平では、どちらも変わりは無かった。
つまり、先に撃たれた弾丸に反応し、それを弾く或いは避ける事が可能であるケインならば、回避も防御も不可能と思われたシドーの攻撃に対処する事が出来るのである。しかも既にその動きは一度見ているから、見切ったも同然。後は、実際にやるかどうかだけの問題なのだ。
そしてケインはこの場に置いて、見事それを成して見せた。
だが、彼の目論見はそれだけに留まらない。
「っ、やるじゃないかお前っ。」
言いながら、銃身を弾こうとするシドーと視線を絡ませつつ、ケ

インは呟く。
「……まずは一発目だ。」
その言葉に、あ？　と老剣鬼が訝しがった時、彼は気付いた。
刀身を抑える銃身。
かの先は、果たして何処を向いているのか。
現状を悟った刹那、シドーはばっと後ろへと跳んだ。
殆ど時を同じくしてレイヴンクロウが火を噴く。
放たれた弾丸は、かつて彼の腹部から胸部のあった軌道を辿り、空の彼方へと消えた。
ただほんの少しだけ、シドーの長い白髭を黒く焦がして。
ぎり、っと、始めて彼は笑み以外の表情を、歯噛みした憎悪の表情を浮かべた。
「て……てめぇっ。」
ケインは、もうその時には動いていた。
後方に大きく開いた右腕を、腰を込め、敵の頭部へと振り翳す。
彼が対処出来るならば自身も、と、シドーはまた後方へと脚を動かした。
ギリギリで通り過ぎる黒い銃身が垣間見える。
いや、違う。
通り過ぎる、では無い。通り過ぎようとする、だ。
どれ程の動体視力があれば可能かは解らないが、シドーは確かに見た。
右から左へ抜けようとする銃の口が、自らを向いている。
避けなければならない、だが何処へだ。
下がったばかりだから直ぐに後ろへは飛べず、横に行く事は死へのダイブそのものだ。
故に彼は、ぐんと背を強引に、後頭部が一気に床に付く程強引に反らした。
その頭上を、弾き出された弾丸が彼方に向けて抜けて行く。
そこから体勢を整えるより早くに、シドーは脚払いを受けた。

ばんと尻を突いて倒れる中で、顔面へと黒い塊が落ちて来る。
彼は舌打ちと共に、刀身を左手で支えると、どうにか両手で銃身を受け止めた。
交戦の始めとは逆の構図が出来る。
だが、今は拮抗状態で無い。
明らかに押しているのはケインの方だった。
彼は歯を噛み締めながら、刀を折らんばかりに力を込めて押した。
シドーは、腕を震わせながらに、どうにかその進行を食い止める。
そして叫んだ。目の前の黒い男へと、その黄金の瞳を黒い眼で睨み付けて。
「す、げぇじゃないか兄弟、まさかこの俺にチャンバラを挑むとは、なっ。」

ケインは、このレイヴンクロウを、何回も鈍器として扱ってきた。
何回も、そう何回もだ。
弾丸を発射する装置としてでは無い、文字通り人を殴り付ける単純な道具として。
大型の弾丸を撃つ為の措置の副次的効果を、彼は積極的に使って来た。
それはある意味銃への冒涜とも言えるだろうが、今の本人には全く持って関係無い。
相手が弾を避けるというならば、銃そのもので叩くのみである。
そうして生まれた隙を利用し、改めて必殺の一撃を撃ち込んでやればいいのだ。
打ってから撃つ。
この拳銃の特殊な形状があるからこそ出来る、異例の戦い方。
強いて呼称するならば一撃追撃戦法（ヒット・アンド・シュート）とでも言う所であろうか。
ケインは今、百戦錬磨の剣の達人を前に、その術を開眼し、会得した。
長年共に合った射手と銃は、ここで真に一体となったのである。

がっと、硬いブーツの底で、ケインはシドーを蹴り込んだ。
体勢を崩しながら、彼は列車の上を後転して行く。
移動先とは反対へ行くだけに、その速度は速かった。
彼我の差が遠のく前に、ケインは転がり行くシドーを追って奔る。
と、彼は、後転の力を利用して立ち上がると、そのままケイン目掛けて突きを放つ。
体と刃、どちらも進み行くもの同士だ。
勢いは止めようも無く、日本刀はケインの外套を突いて、後ろへと飛び出した。
ぁ、と、背中から輝く刃に、アリスが息を呑む。
「はんっ、銃遣いが剣士に白兵戦なんて、」
シドーはそう笑いながら言おうとし、妙に手応えの無い感触へ直ぐに気付いた。
刃はケインの体を貫いていない。腋を通っていたのだ。
シドーは咄嗟に日本刀を抜こうとするが、腕と腋に挟まれ、びくともしない。
歯噛みする彼に、文字通りの零距離で、レイヴンクロウが狙いを定めた。
ケインがその引鉄を引いて轟音が上がる刹那、シドーは左手でその銃身を払う。
直前で下へと傾いたそれは、敵の代わりに屋根の縁を砕いた。
反動にケインの体が揺らめき、僅かに拘束が緩んだ所で、シドーは抜くで無く、押した。
予想だにしない力に彼は後ろに下がり、相手もまた退く。
けれども、そこで終わりでは無い。
直ぐに踵を付けたケインは、踏み込みと共に横合いから大降りの一撃を放った。
こめかみを狙ってのそれは、瞬時に膝を曲げたシドーの前に空を切る。

だが彼は止まる事無く、ぐるんと回ると、同じ方向から脚部目掛けて、銃を振るった。
今度のシドーは、その膝を曲げた姿勢から一気に後方へ高々と跳ぶ。
どちらも銃口が向いていないから、弾丸は放てなかった。
二回連続の攻撃は外れてしまったのである。
だが、何も問題は無かった。元々外れると踏んでいたのだから。
本命は、次の一発。
再び回りつつ、ケインは狙いを定めた。
今正に着地しようとしている、しかしぎりぎりでしていないシドーの、その無防備な胸へ。
銃身の上に左腕を添えて、彼は引鉄を引いた。
跳ね上がりを抑えられ、真っ直ぐに銃口を向けたまま、レイヴンクロウの弾丸が放たれる。
今度は流石に避けられない。
そう判断してからのシドーの動きは速かった。
ぱっと正面垂直に日本刀を構えると、彼は片手を刀身に添えた。
弾の軌道は丁度中央にその刃が来る様に向かっている。
十分な速度は相手の方が持っている以上、シドーはただ待っているだけで良かった。
刀身にぶつかった弾丸は、強い衝撃を彼に伝えつつ、真っ二つに割れた。
シドーは屋根の上を滑り、少し行って漸くに立ち止まる。
そして、前に脚を入れた。
半身を横にし、シドーは刃でその突きを受け流す。
抑えていた左腕の下より、顔面目指して突き込まれている銃身より逃れる為に。
両者の間に、高速の金属が擦れ合って出来る火花が飛んだ。
どんと、その担い手同士も体を密着させる。
「やる、な。本当に、やるっ。」

殆ど触れてしまいそうな距離までケインの顔に自身のそれを近づけて、シドーが言った。
その口元は笑みを称えているけれど、目尻は笑っていない。
「降参する、なら飲む、ぞ、俺はっ。」
彼の視線を真っ向から受け止めつつに、ケインはそう言い放った。それは半ば本気で言っているけれど、また同時に、この男がそんなもの受け入れない事は良く解っている。
「冗談、言うんじゃねぇ、まだまだこれから、だっ」
案の定、シドーは言うと、ケインの体を突き飛ばして、再び斬り掛かった。
わざと後ろへ跳んで衝撃を逃した彼は、その刃を銃身で持って受け流す。
火花と共に硬音が、その接触地点より上がった。

戦況は、どう見てもケインが有利だった。
昨夜とはまるで覇気が違う相手を、シドーは喜ばしく感じると共に鬱陶しく感じた。
銃と違い、刀は、近距離でこそ、真に効力を発揮するものである。
だが、ケインの使うレイヴンクロウは、そのどちらも行けるという出鱈目具合だ。
しかも彼は、それを完全に考慮して戦っているのだから、より性質が悪い。
もし唯一隙があるとすれば、それはやはり弾丸だろう。
撃ち続けるならば何時か新たな弾を装填しなければならない。
それが銃である以上、必ず通らなくてはならない道だ。
シドーはそれを待った。待って、刀を振るい、銃身を避け、弾丸を受けた。
そうして、遂に訪れた再装填の時を、彼は見逃さなかった。
下がりながら、銃身を二つに折って、排莢と共に弾を込めようとするケインへ。

我が意を得たとばかりに、シドーは懇親の突きを放った。
だが、それは彼の外套を、ほんの少しだけ千切るだけである。
身を反らして避けたケインは、反撃の為の初動作を行った。
膝を上げ、靴の裏を見せる様に、重心をずらす。
一瞬の後に放たれた蹴り込みは、最初から最後まで正に弾丸である。
その強烈な打撃を直撃したシドーは、後ろに下がらざるを得なかった。
隙を突いたつもりが攻撃の隙をケインは突いたのだ。
そうして手早く、片手で弾倉に新弾を押し込むと、再び銃身を振るって、撃って掛かった。
シドーは、そんな彼の様子を見ながら、内心で舌を巻く。
一体、昨夜のこの男と、今のこの男とは、同じ人間なのだろうか。
先の戦いの時は、これ程まで苦戦する相手では無かった筈だ。
手を抜いていたのだろうか？　いや、それは違う。勿論連戦の疲労もあって全力は出せなかったかもしれないが、それを言えば今だって、シドー自身が好き勝手に刻んだ傷など癒えていないのである。
その事は、外套の下の素肌に巻かれた包帯で嫌という程解っていた。
だから手抜きでも何でも無い。
ただ単に、ケインが変化した。成長した。強くなったのである。
ならばその原因は果たして何か？
それこそ決まっている。
あのアリスとかいう人形だ。
その関係を茶番と笑い、唯の人質として連れ去った、アレの所為に違いないのだ。確かに、それを狙って行った行為だが、しかしこれは流石に度を越え過ぎている。想像以上だ。
シドーは、何よりもその事実にこそ驚いていた。
唯一無二の強さを、それが齎す戦いの愉悦そのものを求めて、彼はこれまで戦い、そしてその度に確かな、見紛う事無き歓喜を得てきたのだ。その自負は、経験と修練という形で、数少ない生身の部

分である脳髄に刻み込まれており、それは鋼鉄の重々しい義体を、換装以前よりも速く、正確に、また力強く動かす精神的原動力足らしめているのである。
だからこそ、理解し難かったのだ。
現在のシドーを形作ると言って過言ではないそれらを易々と凌駕するものを。
二人の間に結ばれている、彼がその縁を断ち切ったある感情を。人はそれをこう呼んでいる。
即ち、愛、と。
銃身と刀身の何度目かの衝突の後の接合、一種の鍔迫り合いをしながら、彼は歯噛みした。
自分は、弱者の麻薬たる宗教が産んだ、下らない概念に塗れた者にこそ負ける。
無論、概念など解らないというだけだからどうでもいい。負けるという事に関してもだ。
ただ、シドーは、このまま簡単に負けてしまう事が嫌だったのだ。
彼はこんな所で終われなかった。終わりたくなかった。
もっと、もっと欲しい。これでは足りない、足りなさ過ぎるっ。
その頭の中で、戦闘狂に対する祝福の声が木霊する。
さながらそれは祈願の様でもあった。

だからだろうか。
ケインでは無く、シドーに、その運気が向いたのは。
鍔迫り合いの状態のまま、至近で睨みを利かしていたケインは、はっきりと見た。
相手の顔に浮かぶほんの少しの驚きと、それを上回る喜びを。
まるで小さな子供が、無くした物を見つけた様なそれは、発見の喜悦だった。
何だっ。こいつは今、何を得たんだっ。
訝しがってケインがそう思うより早くに、それは訪れる。

常人を越える身体能力を持って殆ど攻め続けていた彼は、完全に失念していた。
この決闘場が、今正に動いている蒸気機関車の屋根であり、更にその列車が走る線路は常に真っ直ぐ走っている訳で無く、突如塞がる事もあれば、また曲がる事もあるのだ。
急激なカーブが訪れた。
予期せぬ振動と衝撃に、体勢を崩したケインに、逆転の一刀が放たれる。
反射的に後方へと跳ぶも、返しの刃が飛んで来た。どうにか身を捩り、更に致命傷とならぬ様に銃身でその刃を受け止めた彼は、突如体が軽くなるのを感じた。
最初気の所為かと思ったそれは、直ぐに違うと解る。
ガンベルトだ。
瞬間的に斬られたそれは、重みに耐え切れず、彼の体から離れて行く。
今だ何十発もある弾丸を込めたままに、そのベルトは砂の海へと落ちた。
つい先に装填を済ませて弾数は十分とは言え、それは間違いなく致命傷だった。
これでもう弾の補充は出来ない。折角の銃職人ジョンの努力も無碍となったのだ。
もう不用意に撃てぬ事に愕然とするケインへ、シドーは満面の笑みを浮かべながら叫ぶ。
「本当同情するぜ兄弟っ。銃遣いってのは、実に不便だってなぁ。」
「くっ。」
そうして彼は、歓喜を込めて機械の体を動かすと、一気に形成を逆転すべく踏み込んだ。

２３．許されし者

アリスはケインとシドーの攻防から片時も眼を背ける事無く見つめていた。

横から殴りつけられる様な衝撃に屋根にしがみ付き、それを切っ掛けに彼が押し返されようとしているその時も、彼女は真っ直ぐにその黒く大きな瞳を向けていたのである。

アリスは、一度でも視線を逸らしては駄目だと考えていた。だってケインは、私の為に戦っているのだから。

はためく髪の毛を押さえつつ、ひしと屋根にしがみ付きながら、彼女はそう思う。

と、同時に、それだけでしかない自分が嫌になった。

それは幾度も思った事で、前見たくも数えたくも無いものだったが、兎角嫌だった。

こうして見守る事しか出来ないだなんて。

けれども、今のアリスに他の何が出来るかと言えば、何も無かった。

彼女は弱い。一度故・ベイツを殴り飛ばせたのは、それが不意を付いたものだったからだ。現に、正面から迫った時は呆気無く倒されてしまった。その事実を、右手の甲に付いた皹が、何も護るものが無い片方の顔が雄弁に物語っている。

それでも、アリスは想い、考えた。

何か、本当に些細な事でいい。

彼の役に立てる事は、彼の想いに応えるだけの行為は無いのだろうか。

自身が抱く、この想いを、彼へと伝えるだけの行為は無いのだろうか、と。

そう考え、考えて、そして思い至った。

今あの人は、自分から離れて戦っている。背も向けているから見

えていまい。
「……ケイン……。」
だからこそ、彼女は呼んだのだ。
彼の名前、二つ名でも異名でも家族名でも無い、彼一人を指す真の名前を。
アリスの想いを乗せ、震える喉から放たれたそれは、しかし風の中へ消えて行く。
これでは駄目だ、小さ過ぎる。
「……ケイン……っ。」
再び彼女は言った。今度はもっと大きく、より意識を込めて。
それでも、まだ彼の耳に届くには小さい。
アリスはぐっと唇を噛んで悔しがったが、止めようとは考えなかった。
「……ケインっ……ケインっ……。」
三度、四度、いやそれ以上に、彼の名前を呼び続ける。
貴方を愛する者はここに居て、彼を想っているのだと、そう伝えるが為に。
戦いの中、今にもこの列車より落とされそうな、危うい男への、小さな支えになるが為に。
一つ声を上げると共に、それはより強まった。
思いが唇から自身の耳へと放たれ、脳を震わす。
そして、ぐっとその首を掴みながらに、アリスは遂に叫んだ。
恐らくは機能の限界で、もしかしたら壊れてしまうかもしれない、だがそんな事構わないという意思と共に、その名は高々と、この西部の抜ける様な青空の下に轟いた。
「ケインっ。」
その声は、この機関車に乗っている者全てに届く。
銃声と剣音が気合と時折の怒声と共に頭上から聞こえてきて、何か良く解らないけれど、危

険な連中が戦っている事だけは……それも一人はあの大鴉（ネバーモア）なのだ……解っていた彼らは、身を伏せてガクガクと震えていたけれど、突如聞こえた名前にぴたりとその震えを止めた。
子供であれ大人であれ男性であれ女性であれ若者であれ老人であれペットであれ。
その全てがふと我を取り戻して、一心にある事を考えていたのである。
はて、今の声は何なのか、と。
ただ考えても良く解らない。大鴉の本名がケインと呼ぶと知っている者は居たが、もうそんな事、本人を目撃した瞬間にすっかり忘れていたから、関連付けられもしなかった
確かにその名を告げた、少女の凛とした声。
それは不思議だったが、しかし不快ではなかった。
そこには、どうしようも無く魂を震わす、真摯な想いが込められていたからである。

そしてその声は、他ならぬ名前の持ち主へも届いており、それが、それこそが引鉄だった。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ。」
「っ、く、こいつっ。」
怒号と呼ぶべき単音のみの咆哮を上げて、正しく怒涛の如く襲い掛かるケインに、シドーは、惑星の様に巨大で、熾烈な凄味を感じてしまい、思わずたじろいだ。
何だこいつのこの圧倒的なスケールの違いはっ。
一度は持ち直したシドーだったが、しかし彼の猛攻に再び押され始める。
振り込まれる銃身が暴風ならば、撃ち放たれる弾丸は豪雷である。

嵐そのものを相手取っている様な気分で、どうにか避け、防ぐシドーの頭は疑問詞で一杯だ。

何が、何だというんだっ。

ほんの数秒、その僅かの間に、この男はまた強く生まれ変わったっ。

ただ名前を呼ばれただけ、たったそれだけの事で何故こうまでっ。

彼には理解不能だった。ケインの全てが、悉くその範疇を超えていた。

尤も、それも仕方あるまい。本当の意味で孤高を誇りに生きて来た男に、孤独の中で生きざるを得なかった男の苦悩と、名前を呼ばれるというその本当の意味など解る訳が無いのだ。

シドーは、しかしその思考を停止させた。

解らなければ、仕方が無いっ。

そんなものは無視して、ただ斬り伏せればいいだけだっ。

前にもして、次もするだろう事を、彼は今もする事にしたのである。

幸いにも、こうして拮抗状態に戻されて尚、彼には依然装填不能という不利がある。

弾丸が無限でない様に、体力もまたそうである事は、一度は勝利したから解っていた。

倒せない不死の化け物では無いのだ、こいつはっ。

そうやって、何時かは倒す事が出来る。何時か、何時かはっ。

自身へそう言い聞かせながら、シドーは必死の思いで刀を振るっていた。もう彼には笑みを造っている余裕なんて無く、その意味では真に闘争へと集中していたと言えよう。

だが、そんな受身になった時点で、彼の敗北は決した。

幾度目かの衝突が起こった。

手首のスナップを利かせて放たれる銃身に、受けんと動く刀身。

同じ場所より舞い降りた両者が接触した、その刹那。

銃口より轟音と閃光が迸り、衝撃に気付いた時には、既にシドー

は無刀になっていた。
視線の隅を日本刀が、あの世界最強の刀剣が音を立てて転がり、落ちて行く。
もう手の届く事の無い、遥か彼方の荒野の何処かへと。
今までと同じく、横から銃身を振り払ったケインは、だが一つだけ今までと違う事をした。
それは、刀身が触れたその瞬間に引鉄を引いた事である。
彼の頭脳は長期戦になる事の不利を理解し、彼の体はその為に最適な動作を行った。
銃弾を放つ時、そこには反動が生まれる。
弾が大きければ大きい程、火薬の量が多ければ多い程、より反動は強くなる。
それは　レイヴンクロウが持つ必要悪であった。
通常の拳銃弾より遥かに巨大で、火薬量も多いその銃が持つ反動は、かなりの強さだろう。
何度も打ち合っていて、眼に見えぬ疲労が蓄積されたシドーの腕から刀を弾く程には。
ケインは、殆ど無意識の内にそれを利用した。
必要無いもの。邪魔なもの。無ければ無いに越した事が無いもの。
そんな反動を用いて、彼はシドーの魔剣を遂に退けたのである。
既にその弾倉には、残り一発の弾丸しか残っていない。
けれどもその一発は、されどの一発なのである。
日本刀を弾き飛ばした衝撃のままに、ケインはぐるりと回転した。
そうして再び正面を向くと共に、彼のレイヴンクロウはシドーへと狙いを定める。
引鉄が引かれると共に、撃鉄が起き、最後の弾丸が放たれた。
だが、戦闘において、最適な動作をしたのは、何もケインの体だけでは無かった。
「まだだ、まだ、」
ダンと、列車そのものが揺れる程の脚力を持って、シドーは後方

へと跳ぶと、
「まだ、俺は終わらんっ。」
素手となったその両手を、胸の前で合わせたのである。
今、その瞬間にも、心臓を抉らんとする弾丸を押し止めるべく。
日本(ニホン)の剣術に、真剣白刃取りというものがある。互いに日本刀で戦い合うが為に生まれたそれは、放たれた刃を掌にて挟み、受け止めるという技で、それ自体かなりの技術が要るものだ。
だが、面積という意味で刃を越える弾丸を受け止めるよりかは、余程楽に違いなく。
それを現に行えたのは、シドーの卓越した力量と義体の性能、そして執念に他なるまい。
ぐおぉ、と悲鳴を上げながら、衝撃を受けてシドーは列車の屋根を滑り下がって行く。
その手からは、打ち合った時は比べようも無い程の火花が迸る。
まだ弾丸は飛んでいる真っ最中で、命中率向上の為に刻まれたライフリングによる回転が生きているからだ。
それも、このまま抑えられていては、いづれ止まってしまうだろう。
シドーは、吹き飛ばされながらも安堵する。
勝利だ。
これを止めれば、相手もまた弾は無い。
ならば、もう、何も恐れる事無く、殴り勝てば良いというものだ。
そうして彼が笑みを浮かべる中で、その黒い瞳は見た。
あの男が、こちらに向けて駆け寄って来る姿を。

ケインは駆けた。駆け寄った。
彼は、これが最後である事を良く理解していた。
この一発を止められれば、もう後は無いのだという事を。
故に、これで止めにしなくてはならないのだという事も。

だからこそ、彼は屋根の上を疾走する。

その為の枷となるもの悉くを、自らの身より離しながら。

帽子を飛ばし、外套（マント）を脱ぎ、躊躇無くレイヴンクロウを放り捨てた。

全ては風に流され、砂漠へと、呆気無い程簡単に消えて行く。

傷付いた体を白日の下にしながら、彼は軽やかに脚を動かし続けた。

そして飛ぶ。

跳ぶ、などでは断じて無い。

間違いなく、彼は飛んだ。

頭上に輝ける太陽目指して、青く澄んだ空へと落ちる様に。

そのケインの脳裏に、数多の記憶が呼び出されて行く。

逝ってしまった人が居た。去ってしまった人が居た。

彼を無視した者達。彼を害した者達。

敵として出会い、殺し合った末に死なせてしまった奴ら。

心は許せた、だが魂まではそう出来なかった人々。

遠くもあり、近くもある、けれど過去と記憶になってしまった存在。

彼らの全てが、淡い水彩画の如く視界をはためいて、雲となり、青空の彼方へ。

そして、跳躍が最頂点に達した時、彼は反転する。

その逆様の世界で、こちらをじっと見守る少女を見た。

彼女こそ、願い、望んでいた者である。

自らを受け入れ、許し、そして愛してくれる者。

護らなければならない者であり、その想いに応えねばならない者。

愛しい者だ。

頭が完全に下を向き、やがて視界が元に戻って行く。
そんな時に、彼は彼女の側に立つ者も見た。

在りし日の、己自身の姿がそこに居た。
彼は、自身と同じく空に脚を向けた姿勢で、手を伸ばしこう言う。
もう、失っちゃ駄目だよ、と。
それは音として聞こえるので無く、魂に直接響いてくる言葉だった。

何故ならば、それは紛れも無い自分自身だから。
今まで蔑ろにされ、自らしてきた、魂のもう一つの片割れ。

俺は、そうだ、僕にもまた応えねばならないのだ。

彼はぐっと視線を向けると、少年の自分へ深く頷いた。
あの敵目掛けて。倒すべき異国からの剣士目指して。
そうして完全に姿勢が元に戻れば、後はもう堕ちるだけである。
彼と自分が、違うのだと証明する為に。
そして、彼女と生きる為に。生き続ける為に。

歯を噛み締めながら、ケインは両脚を曲げた。
その体は、地球の重力に引かれて下へと向かい、蒸気機関の加速で、シドーへと近付く。
二人の視線が交差し、体同士が触れ合う。
その瞬間に、ケインは片脚を突き出した。
全身全霊を込めた、渾身の、一世一代の飛び蹴りは、シドーの合掌へと吸い込まれ。
貫通する様な鋭利な衝撃にその手が緩み、依然猛り狂う弾丸は解き放たれ。

シドーの胸部へ猛然と飛来し、内部を駆け抜け、背中から飛び出した。
がはっ、という呼気が、その老いた口元から放たれる。
同時に、ぽっかりと開いた大穴から、無数の歯車や螺子などが弾け飛んだ。
そのまま後ろへと吹っ飛び、何度も後転した果てに、シドーは列車にしがみ付いて止まる。
ひゅぅひゅぅと、胸の風穴から呼吸されてきた空気が漏れていた。
けれどそれをどうにかする心肺は塵と消えている。
たんと、屋根に舞い戻ったケインは、片膝を付いてシドーを見た。
彼はすっかり何も無くなった胸に手を当て、最初は憮然と、次には笑みを浮かべてから、皮肉げに言う。
「やぁ、れやれ……もう終わりか……もっと、愉しみたかった、んだがなぁ。」
そんな風に弱々しく呟いてから、シドーはケインの方を見て、訝しそうに続ける。
「……お前は本当に解らん、ぞ兄弟……何故、涙を流すのだお前が。」
「……え？」
言われてから、はっと彼は自身が泣いている事に気が付いた。
音も無く、つぅと垂れて行くそれを擦っても、しかし後から後から流れて来る。
彼は自身が、何故泣いているのか解らなかった。
仕方が無く流すに任せながら、ケインはそのままで応えた。
「さぁ……何故だろう、な。」
シドーは、やはり疑い深そうな表情をしてから、馬鹿め、と口にし、
「馬鹿、めが……勝った者が泣く、な……そこは、」
高らかに笑う所だ、と、言おうとして、彼はゆっくりと仰向きに倒れて行く。

支える力も者も無く、その体は列車から転がり落ち、やがて見えなくなった。
存在そのものが騒々しかった男の静かな幕切れを、ケインはじっと見つめている。
もしかしたら同じであったかもしれない、だが決定的に違った男の死を。
そして、今だ垂れ続ける涙を風に流し続けながらに、彼はゆっくりと振り向いた。
そこには、アリスが居て、こちらに微笑み掛けている。完璧な三日月の形をしたそれは、美しい彫刻の様で、天使の様で、いや、この世の何より変え難いものだった。
嗚呼、終わったのか。
ケインは改めてそう思った。
これで、戦いは終わったのだな、と。
彼はすっくと立ち上がった。
もう敵は居ない。その代わり、もっと素晴らしき者が目の前に居るのだ。
これの、何という幸福な事か。
自らの心が感じている以上のものを、彼は今までの人生の中で始めて感じた。
側へ寄ろうとした時、馬の嘶きが聞こえた。
声の方に視線を向ければ、セレーネが居た。必死の形相で列車まで追い付いたという事など何処吹く風という様子で、こちらへと奔り寄って来る。
元気な馬だな、とケインは苦笑いと共に肩をすくめた。
そうして、満ち足りた気分のままに、彼は彼女の元へと歩み寄ったのである。

24・最早二度と

列車が赤の他人同士の客を乗せ、次なる駅目指し線路の上を進んで行く様に、時が過ぎた。

時が過ぎれば人は変わる。それこそ、新たな地へと到達した様に。

故エドワード・ベイツは、その変化が顕著に現れた人物である。

列車の中と外で繰り広げられていた全ての騒動が、複数頭分に感じられる蹄の音と、馬の嘶きと共に静寂へと陥っていった後、乗務員及び乗客の一同は何があったのかと前に、前にと押し寄せ、そこで彼の大富豪、金鉱主の変わり果てた姿を発見したのである。

状況から考えるに、これはあの大鴉（ネバーモア）がやったのだという事で、多くの者がそうである様に

賞金稼ぎから一転賞金首として手配書が配られたが、それは一時の事だった。

　ベイツの死後、彼が行ってきた様々な悪事が、南部の忌まわしき習慣よりも更に忌まわしき悪事が、職を失った配下達の口より語られ、噂として広まったのである。

　またベイツと共に一人の薄幸そうな、色白の可愛らしい少女が乗っている所を多数の人間が目撃していた。そんな彼女が列車から忽然と消えている所を見ると、彼は何らかの英雄的行為を行ったのでは、という話が言われ、死の恐怖の象徴とまでされた大鴉は卑劣な悪漢から乙女を救い出した勇者と称えられ、手配書も風と共に消えた。民衆とは得てして勝手なものである。自分達の都合の良い方に物事を考え、動き、何よりもその責任を別の、突出した人間に押し付けるのだから。尚、今回彼らを大鴉向きにさせたのは、外見をして殆ど同じ形容詞を持って語られたある一人の少女にあるのは間違いあるまい。

　ともあれ、こうして命どころか、死後の名誉すら失ったベイツだ

が、もしこの事件が無くても、また市民達の精神が別のものであったとしても……それは百年やそこらで変わる様な代物では無いと思うが……結果は変わらなかったかもしれない。何故ならば、この事件から半年後より鉱山から金が取れなくなり、金鉱で持っていたベイツタウンも徐々に寂れ、遂には廃鉱、ゴーストタウンとなってしまったからである。ベイツが絶対のものと考えていた金はその実こうも容易く消え失せてしまうものだという事実は、正に皮肉と呼ぶべきだろう。

街の住人達を構成する炭鉱夫や山師、そして職業を明記出来ない様な者達は、さっさと次の鉱山へと行ってしまったが、そうでない者も居た。

洋服屋を営んでいだ『金メッキの』ステファニーは、出身地である東部の街に夫共々戻って行った。怪馬の姿に寝込み、起きてから彼女の性格は一変。メッキは剥がれ、新たに始めた洋服屋では、謙虚且つ温和な奥様としてなかなかの評判である。ただ、派手な服飾センスは相変わらずであり、また馬を怖がって馬車にも乗る事が出来なくなってしまったが。

彼女とは別に、あの『負け犬達の巣窟（レザボア・ドッグス）』がマスターも、新しい街で同じ仕事に付き、成功した一人である。元々話芸に秀でていた彼は、ベイツタウンの大鴉騒動を間近に見た人間として、後の噂や想像を絡めて大胆に脚色を加えながら、店に来る客に話したのだ。浪漫溢れる冒険活劇となったその話は好評を得、店は繁盛したという。

尚その店『一夜を掛けた馬鹿騒ぎ（フロム・ダスク・ティル・ドーン）』では、大抵の阿真利火（アメリカ）人だったなら吐き出してしまいそうな程に濃い珈琲をそのまま一気に呑むのが通なのだとか。

それから、忘れてはいけないのが、あのローラである。

彼女は、暫くの間、カーシィ・キャルビンと共に森の中で暮らしていた。

それは共に愛すべき者が消えた中で、父と娘、或いは兄と妹の様に、そこそこ上手くやっていた様だが、しかしそれは残念な事に長

続きしなかった。老人に憑いていた病魔が、遂に彼の寿命まで到達したのである。ローラは、病気の割りには穏やかな死に様を最期まで看取ると、カーシィの為に小さな墓を作って、そのまま森を出て行った。ベイツタウンが完全に崩壊する数ヶ月前ではあったが街には戻らず、そのまま新たな恋を求めての旅へと出たのだ。

その旅の道連れには、あの両角を失くした男が伴われていたという。

彼らの旅についてもまた語りたい所ではあるが、それはまた次の機会に回すとして、最後になったけれど、この物語の中で最も重要なあの二人について記しておくとしよう。

あの後、ケインとアリスは――

ふと瞳を開けると、太陽は天地の全てを朱く染めながら、西の地平に沈もうとしている。

小さなテラスにあるデッキ椅子に座り、暫くの間呆然としていた私は、自分が洗濯物を取り込もうとして眠ってしまっていた事に気が付いた。

耳元を流れてゆく穏やかな風に、雲ひとつ無い空の彼方から届く日の光の心地良さについ感じ入って物思いに耽った結果だとは思うけれど、迂闊と言えば余りに迂闊だ。

まだ何も片付けていないというのに、もう直ぐあの人が帰って来てしまう。

私は慌てて立ち上がろうとした、が余りの夕日の美しさを見て、それを止めにした。

この、決して大きくも無ければ美しくも無い、けれども確かな造りをした小屋の前から見える黄昏の中の黄金の光景が、私は一番好きだった。彼と私、と言っても実際に作業したのはあの人の方だけれど、その力で育て上げた、小麦畑。

彼と共にここに来たのは、僅か数週間前の事だ。

奇怪な東洋人を倒してから、私達は色々な所を回った。元の場所

に戻るには、二人とも複雑な想いを抱く相手が居るし、それにあの人はベイツを殺した罪で追われる身だったのだ。
街から街へ、州から州へと渡り歩き、やがて彼の罪が晴れたその一ヵ月後、あの人は辿り付いたこの地（何処か言わないのは、一応の用心の為だ）を手持ちの全財産掛けて買い取った。
最初に雑草以外何も無かったこの場所を示しながら、彼はここで暮らそうと言い、私が当然の様に快諾すると、あの人はさも嬉しそうな、無邪気な子供の様に笑った。
その笑顔を見るのは、彼が喜ぶのは、私も嬉しいから、私も笑ったものだ。ベイツとやりあって付いた怪我二つはそのままで顔の半分は包帯が巻かれており、笑うと自分でも少し気になったが、彼が構わないというのだから、構わないのだろう。
しかし、それにしたって、「君は君だからこそ美しいのだから、外見の損傷の一つや二つどうって事は無い。」だなんて言うのは、ちょっと恥ずかし過ぎるのではあるまいか。私が、思考や感情を肌の色艶に反映させる事が出来ないから良かったものの、もしそうだったなら、きっとあの時の私は人参の様に顔を真っ赤にさせたに違いない。今こうやって思い出しても、随分とそれは恥ずかしいものなのだから、直接言われた時の動揺と言ったら無かったものだ。
本を余り読んでない癖にそんな言葉がぽんと出るのには困ったものね、と、私がそうくすくす笑っていると、麦畑の向こうからセレーネの活き活きとした蹄が聞こえて来た。
同じく、僅かに乱れた呼吸がここまで届き、私は今度こそ椅子から立ち上がる。
更に、意識を機構の細部にまで行かせるべくぐっと伸びをしてから、テラスを降りた。
さぁ愛しい人が畑仕事に精を出してお帰りだ。さっさと洗濯物を取り込んで、食事の準備に取り掛からなくちゃ。私は食べないし、あの人も余り食べないけれど、彼の場合はそれでもやはり食べないといけないし、作るのは愉しいし、今ならお腹も空いている筈だ。

それに本だ。今まで読んでいなかった分からか、毎夜毎夜読み聞かせてくれと頼んでくるそれだが、今夜は何を読もうか。勿論彼自身、多少なりとは読めるけれど、それでも読めるものは限られるし、それに私の口から聞きたいのだという。本の虫、というか、本そのものの様な私にはそれは苦でも何でも無いが、けれどあんまり恥ずかしい言葉がぽんぽん出て来る風になるとそれはそれで困りものだから、物語は慎重に選ばなくちゃ。とりあえずはまだ終わっていない千夜一夜物語（アラビアンナイト）を聞かせるとして、次はどうしよう。嗚呼、まだ聞いていないけれど、あの物語はどうだろうか。私と同じ名前を持った、あの少女の物語だ。今から考えると、私達はあの娘と同じ位の事態に遭遇した気がするから、もしかしたら彼にはつまらないかもしれないが、物は試しだ。現実とは全く違う不可思議さを気に入るかもしれない。彼、結構浪漫趣向者（ロマンティスト）だし。

　ともあれまずはお出迎え。無数の思考を無数の歯車に乗せて考えながら、最後にそう締めた私は、けれどもやはり急ぐ事無く、ゆっくりとした調子で麦畑の間に出来た道を歩いて行く。

　もう前の様に走る必要は無い。それはそれで愉しいが、今は要らないのだ。彼とその愛馬はもう目の前に居て、この間を邪魔する者は誰も何もないのだから。

　だから、私は歩いた。静かに、焦らず、のんびりと。

　やがて近付いた彼は、セレーネから降りるとこの体をひょいと抱き上げてくれた。腕で抱いて、顔を胸に当てさせてくれた。熱い血潮が流れる確かな音を私に感じさせてくれた。

　そして笑みと共に言ってくれた。口にするのは毎日毎日同じ文句で、けれどそうだからこそ素敵な言葉であり、私も笑顔を作りながら、普段と変わらぬ台詞で返す。

　それは、ほら、こんな感じで。

「ただいまアリス。」

「お帰り、ケイン。」

互いに黒い髪と、白い服を微風に靡かせながら、抱き合った二人の影が金色の大地に差す。

その様子は果て無き平穏を思わせ、更にはある事実を白日の下に証明するものであろう。

つまりこの青年と少女が、最早二度と、その身も心も、魂すら別れる事が無いという事だ。

そう、正しくは最早二度と。そして永遠に。

ＦＩＮ

２４．最早二度と（後書き）

という訳で『Ｂｅａｕｔｙ　Ａｎｄ　Ｔｈｅ　Ｂｅａｓｔ』で御座いました。
まずはここまでお読み頂きまして、ありがとう御座います。
今作は、某新人賞に投稿するも一次選考落ちしたものなのですが、埃を被らせて置くのも何なので、ここに上げる事としました。
自分なりの精一杯を尽くして書いてみたのですが、如何だったでしょうか。
もし宜しければ感想（特に駄目出し）を頂ければありがたいです。
ともあれ、改めて、ありがとうございましたっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7547f/

Beauty And The Beast

2010年10月8日12時47分発行